

塔平遺跡 2

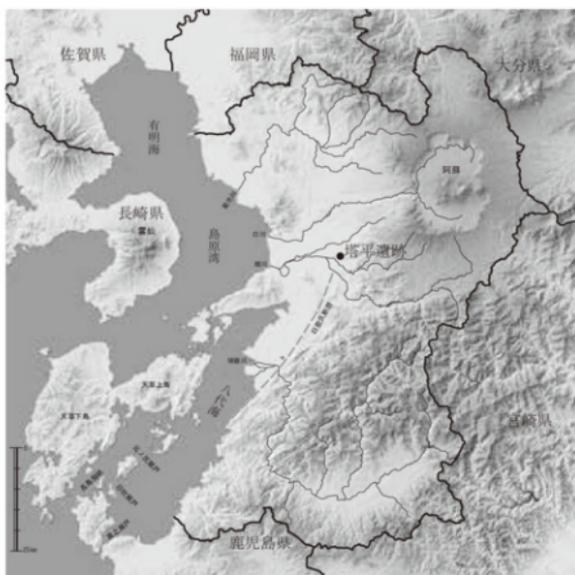
—九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

熊本県教育委員会

2014.3

塔平遺跡 2

—九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—



熊本県教育委員会

2014.3



塔平遺跡遠景（東から）



S I 63 出土土器



S I 71 出土土器

序 文

熊本県教育委員会では、平成 20 年度から 22 年度にかけて九州縦貫自動車道嘉島 J C T (仮称) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、上益城郡益城町大字小池字塔平、大字島田字小迫原所在の塔平遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器、縄文時代から鎌倉・室町時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが見つかりました。特に重複した弥生時代後期の竪穴建物跡や建物内から出土した多量の土器などは、当時の生活の様子を詳しく知ることのできる良好な資料となりました。

今回まとめました本報告書が県民の皆様を始め、多くの方々の手に取られ、文化財の保存と活用、ひいては地域の歴史に対する関心と理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導・助言をいただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

熊本県教育長 田崎 龍一

例 言

- 1 本書は、熊本県上益城郡益城町大字小池字塔平、大字島田字小迫原に所在する塔平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所の依頼を受け、九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）建設工事に伴う記録保存のための発掘調査として、平成20年度から22年度にかけて熊本県教育委員会が実施した。
- 3 現地での発掘調査は、第1章第2節に記す調査担当者が担当し、現地での遺構実測及び写真撮影も各調査担当者が主に行った。
- 4 現地での4級基準点及びメッシュ杭設置業務は株式会社十八測量設計、航空写真撮影は九州航空株式会社熊本営業所にそれぞれ委託した。
- 5 遺物の実測及び製図は坂井田亜耶、中村光子、金川希が行い、一部を株式会社九州文化財研究所、株式会社有明測量開発社、株式会社イビソクに委託した。
- 6 遺物の自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。
- 7 鉄製品の処理は、今田里枝、大塚トシ子、小野美香、花田美佳が行った。
- 8 遺物写真撮影は、村田百合子、松本智子、蓮池千恵が行った。
- 9 本文の執筆は、佐藤哲朗、第4章第1節、第6章第1節を坂井田端志郎、第1章～第3章、第4章第2節、第6章第2節を水上公誠が行った。
- 10 本書は、章、節、項で構成しており、各節の直接的な引用・参考文献については、各節末尾に記載した。本書全体に係る主要参考文献については、本文（第6章）末尾に一括記載した。
- 11 発掘資料の整理は、第1章第2節に記す整理担当者が熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目1667）において行い、記録及び遺物の保管も同所で行っている。
- 12 本書の編集は、熊本県教育庁教育総務局文化課で行い、佐藤哲朗、坂井田端志郎、水上公誠、坂井田亜耶が行った。

凡 例

- 1 調査区座標は、6区は日本測地系を使用し、4・5区は当初日本測地系であったものを現地調査時に世界測地系（日本測地系2000）に変換したものである。
- 2 本書に記した方位は、方眼北を示す。
- 3 遺構実測図は、現地において遺構配置図1/100、個別遺構図1/10、1/20で作成しているが、本書に掲載した地図、遺構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。
- 4 遺物の実測は原寸で行っているが、本書に掲載した遺物実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。
- 5 土色は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所 色標監修）による。
- 6 発掘遺構は、遺構の種類を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。
SI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SY（集石）、SD（溝）、SX（不明遺構）、Pit（小穴）
- 7 出土遺物の実測図において、須恵器については断面を黒で塗色した。土師器裏等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した。
- 8 調査の過程において、遺構番号が重複するものもある。また、整理作業の過程において遺構と認められないと判断した番号については空き番としているため、各遺構番号の最後の番号が、本報告書における遺構の検出数とは限らない。

本文目次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第1章 序章

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業等の体制	1
第3節 発掘作業の経過	4

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	15
第2節 歴史的環境	15

第3章 調査の方法

第1節 調査方法	23
第2節 層序	25

第4章 調査の成果

第1節 調査4区・5区	27
第2節 調査6区	131
第3節 遺物観察表	176

第5章 自然科学分析（バリノ・サーヴェイ株式会社）

自然科学分析	196
--------	-----

第6章 総括

第1節 調査4区・5区	199
第2節 調査6区	206

写真図版

あとがき

報告書抄録

挿図目次

第1図	塔平遺跡と周辺の遺跡 (1/50000)・・・・・・・・・・	18	第34図	S I 28 遺構実測図・・・・・・・・・・	62
第2図	塔平遺跡試掘・確認調査位置図及びトレンチ 土層断面図(1/3000・1/60)・・・・・・・・	22	第35図	S I 2 遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・	63
第3図	調査区グリッド設定図(1/700)・・・・・・・・	24	第36図	S I 7 遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・	64
第4図	塔平遺跡(4・5区)基本土層柱状図・・	25	第37図	S I 18 遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・	65
第5図	塔平遺跡(6区)基本土層柱状図・・・・・・・・	26	第38図	S I 19 遺構・出土遺物実測図1・・	66
	(調査4・5区)		第39図	S I 19 出土遺物実測図2・・	67
第6図	4・5区遺構配置図・・・・・・・・・・	27	第40図	S I 20・60 遺構・出土遺物実測図・・	68
第7図	4・5区遺構配置図(縄文時代)・・・・・・・・	28	第41図	S I 38 遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・	70
第8図	S K 32 遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・	30	第42図	S I 5・10 遺構・出土遺物実測図・・	72
第9図	S K 27 遺構実測図・・・・・・・・・・	31	第43図	S I 10 遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・	73
第10図	S K 29・33 遺構・出土遺物実測図・・	32	第44図	S I 6 遺構・出土遺物実測図・・・・・・・・	74
第11図	S K 34・35 遺構実測図・・・・・・・・・・	33	第45図	S I 12～14・21・22・26 相関図・・	75
第12図	S K 123・124 遺構実測図・・・・・・・・	34	第46図	S I 12 遺構実測図・・・・・・・・・・	77
第13図	S Y 1～4 遺構実測図・・・・・・・・・・	35	第47図	S I 12 出土遺物実測図1・・	78
第14図	S I 24 遺構・出土遺物実測図・・	38	第48図	S I 12 出土遺物実測図2・・	79
第15図	S I 25 遺構・出土遺物実測図1・・	39	第49図	S I 12 出土遺物実測図3・・	80
第16図	S I 25 出土遺物実測図2・・	40	第50図	S I 12 出土遺物実測図4・・	81
第17図	S I 31・41 遺構・出土遺物実測図・・	41	第51図	S I 12 出土遺物実測図5・・	82
第18図	S I 42 遺構・出土遺物実測図・・	42	第52図	S I 13・70 遺構・出土遺物 実測図1・・・・・・・・・・	83
第19図	S I 32 遺構・出土遺物実測図・・	43	第53図	S I 13・70 出土遺物実測図2・・	84
第20図	S I 34 遺構・出土遺物実測図・・	44	第54図	S I 14・21 遺構・出土遺物実測図・・	85
第21図	S I 40・52 遺構・出土遺物実測図・・	45	第55図	S I 22・26・62 遺構・出土遺物 実測図・・・・・・・・・・	86
第22図	S I 43 遺構・出土遺物実測図・・	46	第56図	S I 4 遺構・出土遺物実測図1・・	87
第23図	S I 44 遺構・出土遺物実測図1・・	48	第57図	S I 4 出土遺物実測図2・・	88
第24図	S I 44・45 遺構・出土遺物実測図・・	49	第58図	S I 37 遺構・出土遺物実測図1・・	89
第25図	S I 47・57 遺構・出土遺物実測図・・	50	第59図	S I 37 出土遺物実測図2・・	90
第26図	S K 22(埋設土器)出土状況・遺物 実測図・・・・・・・・・・	51	第60図	S I 63 遺構・出土遺物実測図1・・	91
第27図	S X 4・35 遺構・出土遺物実測図・・	52	第61図	S I 63 出土遺物実測図2・・	92
第28図	4・5区遺構配置図(弥生時代)・・・・・・・・	54	第62図	S I 63 出土遺物実測図3・・	93
第29図	S I 1・9 遺構・出土遺物実測図・・	56	第63図	S I 64 遺構実測図・・・・・・・・・・	94
第30図	S I 15 遺構・出土遺物実測図・・	57	第64図	S I 65 遺構・出土遺物実測図1・・	95
第31図	S I 8 遺構・出土遺物実測図1・・	58	第65図	S I 65 出土遺物実測図2・・	96
第32図	S I 8 出土遺物実測図2・・	59	第66図	S I 65 出土遺物実測図3・・	97
第33図	S I 16・61 遺構・出土遺物実測図・・	61	第67図	S I 66 遺構・出土遺物実測図・・	98
			第68図	S I 67 遺構実測図・・・・・・・・・・	99

第69図	S I 71 遺構・出土遺物実測図1	100	第97図	6区遺構配置図(縄文後晩期)	136
第70図	S I 71 出土遺物実測図2	101	第98図	S I 1~3 遺構・出土遺物実測図	139
第71図	S I 72・73 遺構・出土遺物 実測図1	102	第99図	S I 4 遺構・出土遺物実測図	140
第72図	S I 72・73 出土遺物実測図2	103	第100図	S I 5 遺構・出土遺物実測図	141
第73図	S K 24 遺構・出土遺物実測図	105	第101図	S I 6 遺構・出土遺物実測図	142
第74図	4・5区遺構配置図(古代以降)	106	第102図	S K 29・34 遺構・出土遺物 実測図	144
第75図	S I 3 遺構・出土遺物実測図	108	第103図	S K 8・13・15~18 遺構実測図	145
第76図	S B 1・3 遺構実測図	109	第104図	S K 19~24 遺構実測図	146
第77図	S D・S X 遺構実測図	110~111	第105図	S K 26~28・33・35・37 遺構 実測図	148
第78図	S D・S X 遺構・出土遺物 実測図1	112	第106図	6区遺構配置図(古代・中世)	150
第79図	S D・S X 出土遺物実測図2	113	第107図	S B 1・2 遺構・出土遺物実測図	152
第80図	S K 14・15・121・28 遺構実測図	117	第108図	S B 3 遺構実測図	153
第81図	4・5区 P i t 配置図	118	第109図	S K 1・2・7・25・S D 8 竝状 遺構・出土遺物実測図	154
第82図	P i t 出土遺物実測図	119	第110図	S D 遺構実測図	158~159
第83図	遺構外出土遺物実測図1	120	第111図	S D 9 遺構実測図	160
第84図	遺構外出土遺物実測図2	121	第112図	S D 7 遺構実測図	161
第85図	遺構外出土遺物実測図3	122	第113図	S D 出土遺物実測図1	162
第86図	遺構外出土遺物実測図4	123	第114図	S D 出土遺物実測図2	163
第87図	遺構外出土遺物実測図5	124	第115図	遺構外出土遺物実測図1	166
第88図	遺構外出土遺物実測図6	125	第116図	遺構外出土遺物実測図2	167
第89図	遺構外出土遺物実測図7	126	第117図	遺構外出土遺物実測図3	168
第90図	遺構外出土遺物実測図8	127	第118図	遺構外出土遺物実測図4	169
第91図	遺構外出土遺物実測図9	128	第119図	遺構外出土遺物実測図5	170
(調査6区)			第120図	遺構外出土遺物実測図6	171
第92図	6区遺構配置図	130	第121図	遺構外出土遺物実測図7	172
第93図	6区遺物実測図(三稜尖頭器)	131	第122図	遺構外出土遺物実測図8	173
第94図	6区6a層検出遺構配置図・遺物 出土状況	132	(総括)		
第95図	6区5層検出遺構配置図・遺物 出土状況	133	第123図	弥生土器変遷案	203
第96図	S K 36・38・S Y 1 遺構実測図	135	第124図	古代の遺構変遷案	204

表目次

- 第1表 塔平遺跡周辺遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19～21
第2表 遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176～195

巻頭目次

- 1 塔平遺跡遠景（東から）
- 2 S I 63 出土土器
- 3 S I 71 出土土器

写真目次

- | | | | |
|-----|------------------|---------------|--------------------------|
| 図版1 | 4区3層完掘状況 | 4区S I 20 完掘状況 | |
| | 4区4層完掘状況 | 4区S I 38 完掘状況 | |
| | 5区S K 27 完掘状況 | 図版5 | 4区S I 5 完掘状況 |
| | 5区S K 29 完掘状況 | | 4区S I 10 完掘状況 |
| | 5区S K 33 完掘状況 | | 4区S I 6 完掘状況 |
| | 5区S K 34 完掘状況 | | 4区S I 12 遺物出土状況 |
| | 5区S K 35 完掘状況 | | 5区S I 70（4区S I 13）遺物出土状況 |
| | 5区S K 124 完掘状況 | | 4区S I 14 遺物出土状況 |
| 図版2 | 4区S Y 1 検出状況 | | 5区S I 65 遺物出土状況 |
| | 4区S Y 2 検出状況 | | 5区S I 65 完掘状況 |
| | 5区S Y 3 検出状況 | 図版6 | 5区S I 66 遺物出土状況 |
| | 5区S Y 4 検出状況 | | 5区S I 66 完掘状況 |
| | 4区S I 24 完掘状況 | | 5区S I 71 遺物出土状況 |
| | 4区S I 25 完掘状況 | | 5区S I 71 完掘状況 |
| | 4区S I 32 遺物出土状況 | | 5区S I 72 遺物出土状況 |
| | 4区S I 34 完掘状況 | | 5区S I 72 完掘状況 |
| 図版3 | 4区S I 40・52 完掘状況 | | 5区S I 73 遺物出土状況 |
| | 4区S I 43 完掘状況 | | 5区S I 3 完掘状況 |
| | 4区S I 44 完掘状況 | 図版7 | 6区土層断面A-A' |
| | 4区S I 45 完掘状況 | | 6区土層断面B-B' |
| | 4区S I 47 完掘状況 | | 6区土層断面C-C' |
| | 4区S I 1 完掘状況 | | 6区5層下 三稜尖頭器出土状況 |
| | 4区S I 9 遺物出土状況 | | 6区5層下 石核出土状況 |
| | 4区S I 15 完掘状況 | | 6区6a～5層遺物出土層位確認状況 |
| 図版4 | 4区S I 8 完掘状況 | | 6区5層下 スクレイバー出土状況 |
| | 4区S I 16・28 完掘状況 | | 6区5層下 石核出土状況 |
| | 4区S I 2 完掘状況 | 図版8 | 6区S Y 1 土層断面状況 |
| | 4区S I 7 完掘状況 | | 6区S Y 1 検出状況 |
| | 4区S I 18 完掘状況 | | 6区S K 36 土層断面状況 |
| | 4区S I 19 完掘状況 | | 6区S K 36 完掘状況 |

	6区SK 38 土層断面状況	6区完掘状況2 (南→)
	6区SK 38 完掘状況	6区完掘状況3 (南東→)
	6区S I 1・2・3完掘状況1 (南西→)	6区完掘状況4 (北西→)
	6区S I 1・2・3完掘状況2 (西→)	図版1 4 4区S I 25 出土土器
図版9	6区S I 4・5・6完掘状況	4区S I 25 出土土器
	6区SK 8完掘状況	4区SK 22 埋設土器
	6区SK 13完掘状況	4区SX 4出土土器
	6区SK 15完掘状況	4・5区出土 縄文土器 (早期)
	6区SK 16完掘状況	図版1 5 4区出土 縄文土器 方形浅鉢 (外)
	6区SK 17・18完掘状況	4区出土 縄文土器 方形浅鉢 (内)
	6区SK 19完掘状況	4・5区出土 縄文土器 浅鉢
	6区SK 20完掘状況	4・5区出土 縄文土器 深鉢
図版1 0	6区SK 21・22・23完掘状況	4・5区出土 縄文土器 深鉢
	6区SK 24完掘状況	図版1 6 4・5区出土 縄文土器 組織痕
	6区SK 26完掘状況	4・5・6区出土 縄文土器 モデリング
	6区SK 27完掘状況	図版1 7 4区S I 15 出土土器
	6区SK 28 土層断面状況	4区S I 8 出土土器
	6区SK 29 炭化物検出状況	4区S I 8 出土土器
	6区SK 29完掘状況	4区S I 18 出土土器
	6区SK 33完掘状況	4区S I 19 出土土器
図版1 1	6区SK 34 遺物出土状況	図版1 8 4区S I 19 出土土器
	6区SK 34完掘状況	4区S I 10 出土土器
	6区SK 35完掘状況	4区S I 6 出土土器
	6区SK 37完掘状況	4区S I 6 出土土器
	6区SB 1完掘状況	4区S I 12 出土土器 甕
	6区SB 2完掘状況	図版1 9 4区S I 12 出土土器 鉢
	6区SB 3ピット半截状況	4区S I 12 出土土器 壺
	6区掘立柱建物跡配置状況 (東→)	図版2 0 4区S I 12 出土土器 壺
図版1 2	6区SK 1完掘状況	4区S I 12 出土土器 高坏
	6区SK 2完掘状況	図版2 1 4区S I 12 出土土器
	6区SK 7完掘状況	4区S I 12 出土土器
	6区SK 25完掘状況	4区S I 14 出土土器
	6区SD 8完掘状況	4区S I 14 出土土器
	6区畝状遺構完掘状況	4・5区S I 13・70 出土土器
	6区SD 1完掘状況	図版2 2 4・5区S I 37 出土土器
	6区SD 2完掘状況	4・5区S I 37 出土土器
図版1 3	6区SD 3完掘状況	4・5区S I 37 出土土器
	6区SD 4・5・6完掘状況	4区S I 4 出土土器
	6区SD 7完掘状況	4区S I 4 出土土器
	6区SD 9完掘状況	図版2 3 5区S I 65 出土土器
	6区完掘状況1 (南→)	5区S I 65 出土土器

- 5区S I 65 出土土器
 5区S I 65 出土土器
 5区S I 65 出土土器
 5区S I 71 出土土器
 5区S I 71 出土土器
 5区S I 71 出土土器
 図版2 4 5区S I 71 出土土器
 5区S I 72・73 出土土器
 図版2 5 5区S I 72 出土土器
 5区S I 72・73 出土土器
 5区S K 24 出土土器
 4・5区P i t 出土土器
 4・5区出土土器
 4・5区出土 須恵器
 4区出土 土師器 把手
 4区出土 須恵器 (溶着)
 図版2 6 4・5区S I 出土土器 石鏃など
 4・5区S D・P i t 出土土器 石鏃
 4・5区遺構外出土土器 異形石器など
 4・5区出土土器 石鏃1
 4・5区出土土器 石鏃2
 4区S I 出土土器 打製石斧
 4・5区S I 出土土器 打製石斧
 4区S I 出土土器 磨製石斧
 4・5区S I 出土土器 磨製石斧
 図版2 7 4・5区S D・P i t 出土土器 石斧
 4・5区出土土器 打製石斧1
 4・5区出土土器 打製石斧2
 4・5区出土土器 磨製石斧
 4・5区出土土器 スクレイパー
 4・5区出土土器 石庖丁
 4・5区出土 玉類
 4区出土 耳環
 図版2 8 6区S I 1・4・5 出土土器
 磨・敲石、砥石
 6区S I 6 出土土器 石斧
 6区S K 34 出土 縄文土器 深鉢
 6区S B 2- P 4 出土 黒色土器 椀
 6区S X 4 出土 土師器 坏
 6区畝状遺構出土 中世須恵器 控鉢
 6区出土 縄文土器 阿高式
 6区出土 縄文土器 深鉢
 図版2 9 6区出土 縄文土器 浅鉢
 6区出土 縄文土器 組織痕
 6区S D 1 出土 土師器 把手
 6区出土 須恵器 椀
 6区S D 9 出土 須恵器 (溶着)
 6区S D 9 出土 須恵器 (溶着)
 6区S D 4・7 出土 須恵器
 6区出土 青磁 碗
 図版3 0 6区S D 1 出土 青磁 碗
 6区出土 青磁 碗
 6区S D 9 出土 中世須恵器 甕
 6区出土 白磁
 6区S D 1・9 出土 陶器 皿
 6区S D 1 出土 染付 皿
 6区S D 1 出土 染付 皿
 6区S D 1 出土 染付 碗
 図版3 1 6区出土 染付 碗 (筒形)
 6区S D 1 出土 陶器 碗
 6区5層下出土土器 三稜尖頭器
 6区出土 使用痕をもつ刮片
 6区5層下出土土器 スクレイパー
 6区5層出土土器
 6区6a層出土 石核
 6区5層下出土 石核
 図版3 2 6区出土土器 石鏃
 6区出土土器 石斧
 図版3 3 6区S D 1 出土土器 打製石斧
 6区5層出土土器 石鏃
 6区出土土器 石匙
 6区S D 1 出土土器 砥石
 6区S D 2 出土 礎
 6区出土 碁石
 4・5・6区出土 土鍾 (写真のみ)
 6区出土 土製品 (写真のみ)
 図版3 4 4・5・6区出土鉄器
 鉄鏃・刀子・棒状鉄器
 3区出土鉄器 袋状鉄斧 (表)
 3区出土鉄器 袋状鉄斧 (裏)

第1章 序章

第1節 調査に至る経緯

熊本県教育委員会は、九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）建設工事に伴い「埋蔵文化財の予備調査について（依頼）」の提出を受け、平成19年12月12日から17日、及び平成20年11月28日に塔平遺跡とその周辺で埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施した。

試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所長に対して、調査成果と発掘調査の必要性を通知した。

その後、九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）建設予定地について、平成20年8月4日付け九熊高第5524号で文化財保護法第94条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」が西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所長から益城町教育委員会を經由して熊本県教育委員会に通知された。

平成20年度調査分（4区）は平成20年9月22日付け九熊高第626号、平成21年度調査分（5区）は平成21年3月17日付け九熊高第957号及び平成21年6月25日付け九熊高第168号、平成22年度調査分（6区）は平成22年3月26日付け九熊高第1113号で、「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」を西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所長から発掘調査の依頼と承諾書の提出を受けた。それぞれ平成20年10月14日付け教文第1636号、平成21年4月14日付け教文第25号、平成21年7月6日付け教文第968号、平成22年4月7日付け教文第66号で文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出し、発掘調査を開始することとした。

記録保存のための発掘調査は、4区は平成20年10月27日から平成21年5月21日、5区は平成21年4月22日から平成21年8月27日、6区は平成22年4月28日から9月30日の期間で行った。

整理・報告書作成業務は、平成23年4月1日から開始し、平成26年3月31日に終了した。

第2節 発掘調査と整理作業等の体制

1 発掘調査及び整理作業等の体制

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となって実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。（役職は当時）

（1）予備調査（平成19年度）

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	梶野 英二（文化課長）
調査総括	江本 直（課長補佐） 高木 正文（課長補佐・文化財調査第一係担当）
調査事務局	宗村 士郎（教育審議員兼課長補佐） 高宮 優美（主幹兼総務係長）、塚原 健一（参事）、高松 克行（主任主事）
調査担当	坂口 圭太郎（参事） 水上 正孝（文化財保護主事） 遠山 宏（非常勤職員） 横田 光智（非常勤職員）

(2) 本調査(平成20年度)

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 米岡 正治(文化課長)
調査総括 江本 直(課長補佐)
高木 正文(課長補佐・文化財調査第一係担当)
調査事務局 宗村 士郎(教育審議員兼課長補佐)
川上 勝美(主幹兼総務係長)、山田 京子(参事)、高松 克行(主任主事)
調査担当 坂井田 端志郎(主任学芸員)
坂本 亜矢子(非常勤職員)
島浦 健生(非常勤職員)

(3) 本調査(平成21年度)

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 米岡 正治(文化課長)
調査総括 木崎 康弘(課長補佐)
村崎 孝宏(文化財調査第一係長)
調査事務局 宗村 士郎(教育審議員兼課長補佐)
辛川 雅弘(主幹兼総務係長)、山田 京子(参事)
調査担当 坂井田 端志郎(主任学芸員)
水上 公誠(文化財保護主事)
木下 勇(非常勤職員)
島浦 健生(非常勤職員)
吉留 広(非常勤職員)

(4) 本調査(平成22年度)

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 小田 信也(文化課長)
調査総括 木崎 康弘(課長補佐)
村崎 孝宏(文化財調査第一係長)
坂田 和弘(参事・文化財資料室長)
調査事務局 宗村 士郎(教育審議員兼課長補佐)
元嶋 茂(課長補佐・総務係担当)、山田 京子(参事)、松島 英樹(主任主事)
調査担当 水上 公誠(文化財保護主事)
木下 勇(非常勤職員)
遠山 宏(非常勤職員)
横矢 晋二郎(非常勤職員)
吉留 広(非常勤職員)

(5) 整理事業（平成23年度）

整理主体	熊本県教育委員会
整理責任者	小田 信也（文化課長）
整理総括	村崎 孝宏（文化財調査第一係長） 坂田 和弘（参事・文化財資料室長）
整理事務局	川上 勝美（課長補佐） 水元 敬浩（主幹兼総務係長）、山田 京子（参事）、松島 英樹（主任主事）
整理担当	水上 公誠（文化財保護主事） 梅田 亜耶（非常勤職員）

(6) 整理事業（平成24年度）

整理主体	熊本県教育委員会
整理責任者	小田 信也（文化課長）
整理総括	西住 欣一郎（課長補佐） 村崎 孝宏（文化財調査第一係長） 後藤 克博（文化財資料室長）
整理事務局	川上 勝美（課長補佐） 中津 幸三（課長補佐・総務・助成担当）、稲本 尚子（参事）、天草 英子（主任主事）
整理担当	佐藤 哲朗（文化財保護主事） 坂井田 亜耶（非常勤職員）

(7) 整理事業（平成25年度）

整理主体	熊本県教育委員会
整理責任者	小田 信也（文化課長）
整理総括	西住 欣一郎（課長補佐） 村崎 孝宏（主幹兼文化財調査第一係長） 後藤 克博（参事・文化財資料室長）
整理事務局	馬場 一也（課長補佐） 廣石 啓哉（主幹兼総務・文化係長）、有馬 綾子（参事）、天草 英子（主任主事）
整理担当	佐藤 哲朗（文化財保護主事） 水上 公誠（文化財保護主事） 坂井田 亜耶（非常勤職員）

2 謝辞

現地での発掘調査及び整理事業においては、下記の機関及び多くの方々から御指導御協力をいただきました。ここにその御芳名を記して深く感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

地元の方々、七滝中央小学校児童と先生方、木崎康弘・坂口圭太郎・池田朋生（熊本県立装飾古墳館）、美濃口雅朗（熊本市文化振興課）、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、益城町教育委員会、御船町教育委員会、嘉島町教育委員会、阿蘇市教育委員会、御船警察署

第3節 発掘作業の経過

1 調査4区

平成20年9月から発掘調査のための資料収集、調査事務所の準備、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所と協議を重ねるなど、事前準備作業を行い、10月より調査4区の発掘調査を開始した。

調査対象地の除草終了後、重機（バックホー）を用いて1層～2層（表土層）を除去し、調査区内に5m×5mのグリッドを設定した。その後、人力により3層（黒褐色土層）以下、最も深いところで5層（褐色土層）途中まで順次掘り下げた。人力による掘削作業は、遺物包含層の掘削後、当時の生活痕跡である遺構の検出作業を行った。次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。調査区全体を含む高所からの各層での遺構完掘状況及び遺跡周辺地形の写真撮影作業は、高所作業車やセスナ機を用い実施した。平成21年5月に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、世界測地系を使用している。

2 調査5区

調査5区の発掘調査は、まず重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に5m×5mのグリッドを設定した。その後、人力により6層（暗褐色土層）以下、最も深いところで8層（黄褐色ローム層）まで順次掘り下げた。遺物包含層の残りが非常に悪く、6層（暗褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーによる耕作痕も多数確認された。したがって、主に基本土層6層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成21年8月末に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、4区同様世界測地系を使用している。

3 調査6区

調査6区の発掘調査は平成22年4月から開始し、5日間かけ、重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に5m×5mのグリッドを設定した。その後、人力により3層（黒褐色土層）以下、最も深いところで8層（黄褐色土層・ローム層）を順次掘り下げた。遺物包含層の残りは西側が非常に悪く、8層（黄褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーやいも穴、区画溝による耕作痕も多数確認された。主に基本土層4層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成22年9月末に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、日本測地系を使用している。

調査の経過は次の通りである（調査日誌より抜粋）。

調査日誌抄

塔平遺跡4区 2008年(平成20年度)

10月27日 表土剥ぎ1日目。調査区南西より剥ぎ始め、試掘結果どおり、耕作土直下に褐色土層を確認する。東側は褐色土層から暗褐色土層となる。調査区全域から縄文土器(後・晩期)、弥生土器(後期か)、土師器(古代)、須恵器が出土した。西側は1面、東側は2面、全体的に3時期の調査となりそうである。様相を全体的に重機で表土掘削を行う。調査区の北側と、南側の表土を掘削。

10月28日 表土掘削2日目。黒みの強い暗褐色土(黒褐色か)の層で止める。壁際に東西トレンチ、南北トレンチを入れる必要がありそうである。西日本高速道路株式会社の岡藤工事が来跡された。

10月29日 表土剥ぎ3日目。調査区のほぼ全域に黒褐色土が広がる。南西部のみ褐色土(暗褐色土)である。坂口参事が来跡された。

10月30日 西側の壁切りを行う。その後、調査区東壁、南壁、西壁で土層の検討を行った。

11月4日 調査を本格的に開始。前面の表土の剥ぎ残しを除去。南壁に幅60cmのトレンチを設定し、5cmずつ掘削。十八測量設計による基準点測量が行われた。坂口参事、木村参事が来跡された。

11月5日 昨日に続きトレンチの掘削。遺物は3層、4層からの出土を確認。5層、6層からはほとんど確認できない。周辺が暗褐色土層に対して、黒く残る箇所がある。遺構の可能性はある。十八測量設計による基準杭の打設が行われた。

11月6日 引き続きトレンチの掘削。4層中に集石を確認する。西日本高速道路株式会社の坂口副所長、岡藤工事が来跡された。

11月7日 雨天。ローム層を確認している箇所以外、全てを5層の暗褐色土層を5cm掘り下げた深度で揃えることとした。能登原学芸員、牛島調査員が来跡。

11月10日 壁際のサブトレンチの掘削を行う。調査区全体の凹凸を掘削した。

11月11日 3層の黒褐色土層の凹凸を掘削。宮崎参事が来跡。

11月12日 調査区西側から黒褐色土を5cmずつ掘削する。西日本高速道路株式会社の坂口副所長が来跡。

11月13日 グリッドごとに黒褐色土層の5cm掘削を行う。3層と4層との間に漸移層を設定する。黒褐色土と褐色土がマーブル状に混じっている層である。宮崎参事が来跡。

11月14日 グリッドごとに黒褐色土層の5cm掘削を行う。調査区南壁のトレンチ内で縄文早期押型土器が出土。今後の調査で早期の遺構、遺物を確認する必要がある。

11月17日 引き続きグリッドごとに黒褐色土層の5cm掘削を行う。埋土が黒色土の溝状遺構を2条確認。他にも焼土の混じる埋土をもつ遺構らしき箇所を確認。

11月18日 調査区南東コーナー、北東コーナーのトレンチ掘削と分層を行う。

11月19日 雨天。文化財資料室から機材の搬入を行う。

11月20日 調査区東側の精査を実施。SD1・2は明確に検出。炭化物、焼土の混じる黒褐色土のビット、茶色みがあったビットを確認。SD2は緩やかに北東へ傾斜している。

11月21日 西側の精査を実施。SX1の東側にも溝を検出。SD1と同一のもので、L字形になる。SD2はベルトの分層を終え、ほぼ掘削を終える。

11月25日 SD1の掘削調査。南側に段をもつ。SD2、SX1の実測。

11月26日 SD1の掘削調査。SD1の南側の段は別の溝と捉え、SD3とする。SD1・2の実測。西日本高速道路の岡藤工事が来跡。

11月27日 雨天。事務所内に実測図の整理。

11月28日 SD1・3は完掘する。SD1の下に別の溝状遺構が存在する可能性がある。

12月1日 SX1、SD4の掘削調査。SD1・3の完掘平面図の実測。SD4は南側が細くなるようだ。

12月2日 SD4・9・10・11、SX1の掘削調査。SX1は南側で深くなる。西日本高速道路株式会社より4名来跡。

12月3日 SD3・4・12の掘削調査。SD4の底面に長楕円形の遺構を検出。SD4と同時にかつ一連の遺構と考えられる。坂口参事が来跡。

12月4日 昨日に引き続きSDの掘削調査。SD4

- の深く落ち込む箇所は2箇所であることが確認できた。溝周辺に遺構らしきプランが見えている。縄文時代の石器がまともに出土する箇所も確認できた。
- 12月10日 S Dの掘削調査に加え、調査区全景の写真前清掃も行う。益城町教育委員会の堤氏が来跡。
- 12月11日 S D4の完掘。溝の写真撮影を行う。
- 12月12日 S D5～11(竈跡)、S D4の実測を行う。また、土層断面の写真撮影を行う。坂口参事が来跡。
- 12月15日 調査区東側より、基本層3層(黒褐色土)の掘削を開始。竪穴建物跡、ピット、方形の柱穴らしきものが見え始めている。宮崎参事が来跡。
- 12月16日 基本層3、4層の掘削を開始。西側は縄文土器が集中している。晩期古閑式と思われる。貝殻による条痕が目立つ。調査区中央は弥生後期の土器片が多く、北東側ではカマドをもつ竪穴建物跡らしきものも確認した。高木補佐が来跡。
- 12月17日 基本層4層の掘削調査。西側は縄文晩期の土器が多量に出土。破片も大きい。竪穴建物跡が検出される可能性が高い。
- 12月18日 基本層4層の掘削調査。埋土が黒褐色で方形カマド付きの竪穴建物跡、やや淡い暗褐色の方形竪穴建物跡がある。古代、弥生ものと考えられる。遺構の数は多いようである。
- 12月22日 精査を行うが、再掘削の必要があった。S Dの実測も進んでいる。
- 12月24日 精査と掘削を行う。塔平遺跡では縄文後晩期、弥生後期、古代の3時期が多い。
- 12月25日 調査区中央の精査後、遺構の確認を行う。1/100の略測図の実測を開始する。
- 12月26日 図面の整理、チェックを行う。
- 1月6日 調査区東側の再精査を行う。竪穴建物跡の切り合いが多い。
- 1月7日 調査区西側、中央の精査を行う。弥生後期の竪穴建物跡は検出プランが長方形と考えられる。
- 1月8日 掘立柱建物跡、竪穴建物跡の検討を行う。S I 3はサブトレンチ内で硬化面を検出。カマド粘土が遺構中央にもあるため、切り合いの関係を考える必要がある。坂口参事、益城町議会の石田議員が来跡。
- 1月13日 S I 1～5、S B 1の調査を行う。S I 1にてピットを4基検出。S I 2は北側にベッド状遺構の可能性のある箇所を確認。S I 5の床面と思われる箇所を確認。大きい炭化材を検出した。
- 1月14日 竪穴建物跡の調査とS B 1の完掘及び完掘平面図の実測を行う。
- 1月15日 昨日までの調査に加え、S I 6の調査も開始した。
- 1月16日 S I 4の土器集中部の遺物は弥生後期の土器片と思われる。内外面ともハケ目調整である。タタキは見られない。
- 1月19日 引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を行う。
- 1月20日 引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を行う。S I 2・5・7周辺の切り合いがはげしい。
- 1月21日 引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を行う。S Kの調査も本格的に開始する。
- 1月22日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 1月23日 竪穴建物跡及び土坑の掘削調査及び実測を行う。S I 3は遺物の取り上げのみとなった。
- 1月26日 雨天。事務所内にて図面の整理を行う。
- 1月27日 竪穴建物跡及び土坑の掘削調査及び実測を行う。S I 4出土土器を来跡した木村主任学芸員に見ていただく。弥生終末期ではないかとの所見を得る。
- 1月28日 西側の竪穴建物跡の調査に着手する。S X 1に近いS I 11にて多量の弥生土器が出土する。複数個体がまともになっている。
- 1月29日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 1月30日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 2月2日 竪穴建物跡及び土坑の掘削調査及び実測を行うが、ベースが遅れているようである。明日以降、縄文期の竪穴建物跡の調査に着手する必要がある。遺物出土状況を撮影したS I 9だが、出土土器は弥生後期の裏であった。ハケ目調整が顕著である。方形竪穴建物跡の主柱穴は4本がほとんどである。
- 2月3日 雨天。図面整理に加え、今後の調査に向け

- で打ち合わせを行う。坂口参事が来跡。
- 2月4日 一部精査を行い遺構を検出するも、シミ状のものを遺構と誤認している可能性もある。S I 11は欠番とし、S K 9とする。
- 2月5日 S I 10・12～20の調査を中心にを行う。S I 15は西側にてベッド状遺構を確認する。西日本高速道路株式会社岡藤工事長、高木補佐、坂口参事が来跡。
- 2月9日 図面のチェック、整理と今後の調査に向けて打ち合わせを行う。
- 2月10日 S I 21～25の掘削調査を開始。S I 17は遺構ではないことを確認し、欠番とする。S I 15にて重弧文「免田式土器」の頸部と思われる部分が出土。遺構中央部に杯を確認する。
- 2月12日 竪穴建物跡の掘削調査及び実測を中心に進める。S I 24・25の縄文期竪穴建物跡ととらえている遺構は、サブトレンチを設定して確認するも埋土か否かの判別が難しい。S I 14の遺物集中部は、埋土3層中に収まることを確認する。
- 2月16日 竪穴建物跡の掘削調査及び実測を中心に進める。S I 24・25周辺を再精査し、新たな竪穴建物跡を確認する。プランの再検討が必要である。木村参事、布田文化財保護主事が来跡。
- 2月17日 昨日に引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を中心に進める。S I 15は完掘状況を撮影する。
- 2月18日 S I 13・18～20の完掘状況を撮影する。S I 14の遺物出土状況の実測に入る。
- 2月19日 縄文期竪穴建物跡の調査を進める。S I 24・25・29・30は、いずれも埋土が浅い。床面も軟弱で杯跡も確認できない。
- 2月23日 西側に検出した縄文期竪穴建物跡のトレンチ掘削、及び調査を行う。木村参事、馬場、布田文化財保護主事が来跡。
- 2月24日 縄文期竪穴建物跡の調査を進める。S I 24・25・29・30は完掘し実測に入る。益城町教育委員会の堤氏が来跡する。
- 2月25日 縄文期竪穴建物跡の調査を進めるも、断続的な降雨により、なかなか調査が進まなかった。
- 2月26日 竪穴建物跡の調査を中心に進める。S D 4の北側にて新たな弥生後期と思われる竪穴建物跡を検出する。
- 2月27日 引き続き竪穴建物跡の調査を中心に進める。S I 12の遺物出土状況実測をほぼ終える。
- 3月2日 調査区中央の縄文期の竪穴建物跡の調査を開始。埋土は浅い。S I の番号も40番台になった。
- 3月3日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 3月4日 弥生、縄文期の竪穴建物跡の調査を進める。縄文期のものは埋土の深度が約10cmで、杯跡も確認できていない。竪穴状遺構である。
- 3月5日 縄文期の竪穴建物跡はいずれも浅く、杯跡やピットが確認できない。
- 3月9日 竪穴建物跡の調査を中心に進める。調査区中央は見通しがついてきた。S I の番号も50番台を付す。
- 3月10日 縄文期の竪穴建物跡に、柱穴が円形に配置する遺構を確認する。しかし、杯跡は確認できない。高木補佐、益城町教育委員会の堤氏、保護審議委員の5名が来跡された。
- 3月11日 S I 12の出土遺物取り上げが終了。同一個体の遺物がまとめて出土していることから、廃棄よりも祭祀の可能性を考えたい。
- 3月12日 調査区中央の遺構調査を終える。東側で新たに2基の遺構を確認する。S I 56・57とした。
- 3月16日 S I 56・57の調査に加え、明日の完掘写真撮影に向けて、調査区外周の整理を行う。
- 3月18日 高所作業車を賃貸借し、完掘写真の撮影を行う。
- 3月23日 基本層4層、5層の掘削を開始。集石を1基確認する。また押型文土器、4層中より勾玉が出土する。高木補佐、島津津幹が来跡。
- 3月24日 基本層4層、5層の掘削。5層中から出土の主は縄文晩期の土器片である。
- 3月25日 1/100の遺構配置図の実測を行う。坂口参事が来跡。
- 3月26日 今年度最終日。竪穴建物跡の平面図の実測を行う。残りの調査は次年度へ持ち越すこととした。

2009年(平成21年度)

- 4月15日 新年度の調査を開始する。基本層5層の掘削を行う。東側トレンチで確認した集石のレベルまで下げることにした。南東コーナーの落ち込みは竪穴建物跡の可能性がある。
- 4月16日 引き続き5層の掘削を行う。集石に広がり確認できない。
- 4月17日 南東部、中央部の5層掘削を行う。遺物は南東部に偏る。S I 9、S I 16に切られた新たな竪穴建物跡を検出する。立ち上がり確認できた。
- 4月20日 雨天。事務所内に遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 4月21日 南東部の掘削を終了する。再精査を行い、調査区中央の5層掘削へ移行した。
- 4月23日 調査区中央部の5層掘削。6層上面より10cm程度厚さを残して精査する。遺構は検出されない。
- 4月27日 調査区中央部、西側の5層の掘削を行う。合わせて調査区南壁の土層断面の実測を行う。
- 4月28日 中央部の精査を行う。竪穴建物跡を2軒、ピットを数基確認する。S Y 1・2の平面図の実測を行う。坂田文化財資料室長が来跡。
- 4月30日 西側の5層の掘削を行う。
- 5月1日 引き続き西側の5層を掘削する。また、調査区周りの土層断面、1/100の遺構配置図の実測を行う。
- 5月7日 西側の精査を行い、サブトレンチで確認した結果、1軒の竪穴建物跡を確認する。S I 62とする。
- 5月8日 検出したS I 62、単独ピットの掘削調査を行う。また、1/100の遺構配置図の実測を行う。
- 5月13日 S I 63・64の掘削調査。西側の取り残しの遺物をグリッド別、層位別に取り上げる。
- 5月14日 引き続きS I 63・64の掘削調査を行う。
- 5月15日 S K 23の完掘平面図の作成を終える。ピットの掘削調査も終え、残すはS I 63・64のみである。
- 5月18日 S I 63の実測、遺物の取り上げを行う。床面にが跡を確認する。やや壁側に寄っている。
- 5月19日 S I 63・64の掘削調査及び実測を行う。ピットは検出されなかった。S X 4は台石が出土する。
- 5月21日 取り残しの遺物をグリッド別、層位別に取り上げる。4区の調査を終了する。

塔平遺跡5区 2009年(平成21年度)

- 4月22日 表土剥ぎに備え、草刈り、排土置場の設定を行う。
- 4月23日 重機による表土剥ぎ1日目。
- 4月24日 表土剥ぎ2日目。
- 4月27日 表土剥ぎ3日目。作業員は剥ぎ残し箇所を掘削。
- 4月28日 表土剥ぎ4日目。トレンチャーによる掘削はげしい。坂田文化財資料室長が来跡。
- 4月29日 表土剥ぎ5日目。
- 4月30日 表土剥ぎ6日目。事務所側は圃場整備による削平がげしい。ローム上面まで削られている。北及び東側にトレンチを設定し掘削する。
- 5月1日 重機による表土剥ぎの最終日である7日目。壁切り、トレンチ掘削、剥ぎ残し箇所の掘削を行う。北側の削平は想像以上で、基本層7層まで削られている状況である。
- 5月7日 調査区南及び北側の剥ぎ残し、凹凸を削る。
- 5月8日 精査した結果、南側は遺構を残していることを確認。
- 5月13日 株式会社十八測量設計によるメッシュ杭の打設を開始。剥ぎ残し、凹凸の削りを進める。
- 5月14日 南側の精査、北側の掘削を行う。また1/100の下図作成も行った。
- 5月15日 段落ち部の掘削を行い、精査をかける。メッシュ杭の打設が終了したため、杭へのナンバリング、略測図の作成を行う。
- 5月18日 表土の剥ぎ残しを掘削。検出した遺構の略測図を作成する。
- 5月19日 S I 65～67の掘削調査を開始する。
- 5月21日 S I 65～67の掘削調査を進める。S I 67は埋土が若干残っている程度だが遺物も含まれている。作業員を大きく3班に分けて調査を進めた。
- 5月22日 S I 65・66、S D 13・14の掘削調査を進める。S I 66は焼土、炭化材が多い。溝は近世のものと思われる。4区から続くS D 4はS X 1と遺構名を変え、検出を進めた。
- 5月25日 S I 70～72、S D 13・14、S X 1の掘削調査。5区で検出された竪穴建物跡は、今のところ全て弥生時代後期のものと考えられる。

- 5月26日 昨日に引き続き掘削調査を進める。S I 65・66 は遺物出土状況の実測を始めた。
- 5月27日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 6月1日 弥生後期竪穴建物跡を調査。また、調査区西側で検出した集石の調査も行った。拳大の焼け石が2箇所に15～20点程度まとまっている。検出面は基本層5層の下層、6層上面に近い。
- 6月2日 昨日に引き続き弥生後期竪穴建物跡を中心に調査。実測と遺物の取り上げも行った。
- 6月3日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 6月4日 S I 65・70の遺物の取り上げを終了させる。S I 65・66・70は中央に枒をもつことを確認する。
- 6月8日 国土交通省熊本河川国道事務所、西日本高速道路株式会社との協議。次年度の調査予定地について確認した。
- 6月9日 竪穴建物跡、溝の調査を進める。S D 15は造成時の土が混入しているようで、締まりがあまり無い。当初の広いプランとは別に、狭くてより深い溝があることを確認。
- 6月10日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 6月11日 S X 6・7は現代の攪乱であることを確認した。S X 1を1/100の完掘平面図として実測を開始。
- 6月12日 竪穴建物跡、溝の調査を進める。調査区東側はほぼ調査が終了した。坂口学芸課長が来跡。
- 6月15日 竪穴建物跡、溝の調査を進める。調査区北側の再精査を行う。西日本高速道路株式会社松繁工事長、伴氏が来跡。
- 6月16日 気温が30℃を超える。S I 37は遺物を取り上げ、削平により南側のみ遺物が残っていないことを確認した。柱穴、枒跡は確認できなかった。S D 17は北へ傾斜していることを確認する。排水に伴う遺構とも考えられる。
- 6月18日 盛暑。休憩をこまめにとりながらの作業となる。竪穴建物跡、土坑、集石、溝の調査は順調に進んでいる。S D 17はほぼ完掘した。
- 6月19日 住居跡の調査は終了に近い。S D 16・18としている遺構は焼土面を確認しており、焼土坑と考えられる。連結土坑の可能性を考え、長軸方向へのトレンチ、断面確認を行う必要がある。
- 6月22日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 6月23日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。剥がれたブルーシートの養生も行った。
- 6月26日 北側の表土の残っていた箇所の掘削を終了した。東部はローム層まで削平されていた。S I 65・66は掘り下げを進め、S I 65下層にて枒跡のような焼土の広がりが部分を確認した。丁寧な検出が必要となる。S I 71の壁際の土器は、弥生後期の台付甕であろう。高木前課長補佐、村崎係長、長谷部参事、宮崎参事、西日本高速道路株式会社担当者来跡。
- 6月29日 雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。
- 6月30日 雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。
- 7月1日 雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。
- 7月2日 南側の遺構検出を再度行う。S Y 3・4については検出状況の撮影を行う。
- 7月3日 雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。
- 7月7日 S I 72の掘削を開始する。S I 71は遺物出土状況の実測を行う。
- 7月8日 雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。
- 7月9日 S Dの掘削調査を中心に進める。
- 7月10日 雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。
- 7月13日 S I 71～73の掘削調査を進める。S I 71は遺物出土状況の実測後、取り上げを行う。S I 72は完掘写真の撮影を行った。
- 7月14日 遺構に加え、調査区を東西に走るトレンチ（攪乱）の掘削を行う。S I 71・73の完掘状況の撮影を行った。

7月15日 掘り残しがないかの確認と同時に、S D 22も掘削する。実測は、S I 73の遺物出土状況を終え、取り上げも行った。S I 72内土坑はS K 29とした。隣接区の調査3区は表土剥ぎが始まる。

7月17日 S I 72内土坑のS K 29の掘削調査、調査区中段部分の掘削を進める。実測は、S D 22、S K 27の完掘平面図を実測する。

7月23日 写真前清掃を行う。

7月24日 雨天。空撮は30日に延期となる。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。

7月27日 交通くらし安全課主催熊本県ジュニアドリム事業で発掘体験。100人以上が参加された。

7月30日 写真前清掃を行う。

7月31日 空撮写真撮影。

8月4日 S I 71の硬化範囲、S K 28の追加断面を実測する。

8月5日 S D 22の完掘写真撮影を行う。また、1/100スケールの遺構配置図を実測する。

8月6日 S D 22の完掘状況図の修正に加え、S D 23の断面図を再度実測する。

8月7日 昨日に引き続き、S D 22・23の実測を行う。

8月10日 け穴の完掘写真撮影及び完掘状況の実測を行う。

8月17日 1/100スケールの遺構配置図を実測する。S I 71の追加した硬化範囲を実測する。

8月18日 S K 29・33・34の掘削調査、S I 71の床面調査を行う。S K 34はサブトレンチを掘削し調査を行う。東西に伸びるS K 33は南北に伸びるS K 34を切っているようである。

8月19日 昨日に引き続き、S K 33、S I 71、S D 26・27・29の掘削調査を進める。S I 71はピットを2基検出する。S K 33は4分割して断面の確認、実測を行った。

8月24日 昨日に引き続き、S K 33・34、S D 27の掘削調査を進める。S K 33は焼土範囲を追加して、断面図の実測を行う。

8月25日 S K 33を完掘し、完掘状況の撮影を行う。S K 34の土層断面の実測も行う。調査区内に残る、S Dのベルトを掘削した。

8月26日 S K 34を完掘し、完掘状況の撮影と完掘状況の実測を行う。S K 35は焼土範囲の図化まで終了する。

8月27日 S K 35を完掘し、完掘状況の撮影と完掘状況の実測を行う。5区の調査を終了する。

塔平遺跡6区 2009年(平成21年度)

3月2日～3月12日

塔平遺跡6区の西側約1,800㎡分のトレンチ調査を実施し、遺構が検出されなかったことから、2010年度からの調査箇所を東側の約2,300㎡に絞り込む。

2010年(平成22年度)

4月28日 表土剥ぎ1日目。調査区東端より開始。東側は予想どおり削がが激しく、表土下40cm～50cmでローム層を確認する。村崎係長、長谷部参事、亀田主任学芸員が来跡。

4月30日 表土剥ぎ2日目。段をつけて落ち始める。溝を検出する。表土1m近く掘り下げてようやくアカホヤ2次層を確認する。しかし薄い。

5月6日 表土剥ぎ3日目。南北に伸びる溝を確認する。表土の深度が深くなってきており、ベースが落ち始める。

5月11日 表土剥ぎ4日目。調査区西端の表土を剥ぐ。

5月12日 表土剥ぎ5日目。排土の成形を行い、終える。全体的に東から西に段をつけながら落ち込んでいる。段下がりには溝を持つことから、旧耕作地時代の水捌け用もしくは区画溝と考えられる。

5月13日 作業員が集めた。土嚢を作り、調査区囲み作業、壁切作業を行った。株式会社十八測量設計による4級基準点測量及びメッシュ杭設置を開始する。宮崎参事が来跡する。

5月14日 北側壁のトレンチを掘削し、分層作業を行う。昨日に引き続き、株式会社十八測量設計による4級基準点測量及びメッシュ杭設置が行われる。

5月17日 調査区東側の攪乱範囲を確認し、掘削。近世の溝と思われた箇所の壁トレンチ下層より、昭和15年銘の古銭が出土する。

5月20日 東側上段部の表土、攪乱の掘削を行う。南北に走る溝は壁トレンチにより、北側が深く、南が浅いことを確認。

- 5月21日 昨日に引き続き東側上段部の表土、攪乱の掘削を行う。薄いが西に向かうにつれ基本層3層(黒褐色土)の遺物包含層が残っている。
- 5月26日 上段部の調査、中央部段下の溝の調査を行う。溝には並行して走る新しい溝があることを確認する。
- 5月27日 調査区中央部の溝を検出する。南北、東西に走る溝が交差しそうである。旧耕作地時代の排水、あるいは区画のための溝であろう。攪乱(いも穴)も溝に沿って多数確認した。
- 5月28日 上段部の基本層3層の掘削調査を行う。遺物は縄文後・晩期、土師器とこれまでの塔平遺跡で確認しているものと変わらないが、遺物量はかなり少ない。4層上面では、ビット、土坑となりそうな遺構のみで、竪穴建物跡などは確認できない。
- 5月31日 調査区西側下段部の表土残土および、3層の掘削を開始する。
- 6月1日 調査区内3層の掘削。上段部の検出作業を試みるも、乾燥が激しく不可能であった。散水し、検出作業は翌日に持ち越すこととした。
- 6月2日 調査区東半分(上段部)の遺構検出、検出状況の撮影を行う。東西に走る大きな溝をSD1として掘削を開始した。
- 6月3日 南北に走る溝をSD2・3とし、掘削を開始する。攪乱(いも穴)が、溝の切り合いを見えにくくしている。
- 6月4日 SD1・2・3の掘削調査。溝内からの遺物は瓦が多い。SD1とSD2は切り合わないことを確認する。
- 6月8日 東西に平行するSD4・5・6の掘削調査を行う。全て浅く、深度は10～30cmくらいか。東側の溝をSD7とし掘削を開始。数回掘り直しをしていることを確認する。最下層はローム層まで達する深度である。
- 6月9日 引き続きSD1・7の掘削を行う。SD7からは礫、近世陶磁器片が多い。
- 6月10日 SD1の掘削は下段(西側)へと移る。溝に沿うように攪乱(いも穴)が並ぶ。SD7は最終使用期の実測を開始する。
- 6月11日 昨日に引き続きSD1・7の掘削調査。SD7は使用2期の掘削を行う。SD1の深度確認のために壁際のトレンチを階段状に下げる。ローム層まで掘り込まれている。
- 6月16日 SD7は使用2期の壁際を掘削。SD1は壁トレンチで確認したところ予想どおり北東から南西へと落ち込んでいることが分かった。溝幅も少しずつ広がっている。調査区中央北寄りの箇所に掘立柱建物跡を1棟確認する。長軸がやや西に振れるところを見るに、これまでの塔平遺跡の調査で検出したものと同時期のものか。
- 6月17日 これまでビットかと思われていたものを皿状に落とす確認するが、そのほとんどが樹痕であった。明日以降は調査区中央に広がる方形の不明遺構の確認も進めていくこととする。
- 6月21日 調査途中で雨天となる。これまでの遺物の整理と図面のチェックを行う。
- 6月24日 SD1の掘削を進める。攪乱(いも穴)も掘削する。SD7は使用2期の実測も行う。
- 6月25日 雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。
- 6月28日 SD1・7の掘削。SD7は使用3期の掘削である。水上文化財保護主事が来跡。
- 6月29日 雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。
- 6月30日 雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。
- 7月1日 SD1・7を掘削し、SD7は完掘後、完掘状況及び土層断面写真の撮影を行う。
- 7月2日 先日検出したSB1付近に残る遺構をSD8として検出、掘削を開始した。埋土の色調が濃く、古代～中世のものと考えられる。
- 7月5日 調査区西側、下段を掘削。ビット配列の確認で掘立柱建物跡を1棟検出する。調査区中央に広がる方形の不明遺構は樹痕と考えられる。深度に大きい差が見られ、下端の凹凸が激しい。SD8の土層断面を撮影。
- 7月6日 SD8を完掘し、完掘状況写真の撮影を行い、実測を開始した。中央に向かい階段状に窪んでいくので、エレベーション図を追加することとした。
- 7月7日 SD1を完掘した。西端の掘削を開始し、段下部に大きくカーブする新たな溝を検出する。
- 7月8日 昨日検出した溝をSD9とし、掘削を開始。SD2付近で検出した掘立柱建物跡をSB2とし調

- 査を開始する。SD7付近で検出した焼土、炭化物を含むピットを挟むようにピットを2基検出。周辺の削平の状況から2本柱の竪穴建物跡の痕跡とも考えられる。
- 7月9日 SD9の掘削を中心に進める。南部と東西部では断面が異なる。時期差があったものをつなげた可能性もあるが確認ができない。SD9北側より須臾器が4～5片磁着した遺物が出土する。
- 7月13日 雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。
- 7月14日 雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。
- 7月15日 雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。
- 7月20日 ピット、SD9の掘削を進める。下段の遺構検出を行うも、遺構密度は低いようである。
- 7月21日 調査区中央スロープ付近の遺構検出を行い数基の土坑、ピットを検出する。また、方形の不明遺構の半裁等で確認を進めそのほとんどが樹痕であることが分かった。検出作業を行った箇所遺構検出状況写真に加え、SD4・5・6の土層断面写真の撮影を行う。
- 7月22日 昨日に引き続き、検出した遺構の半裁、確認を進め、やはりそのほとんどが樹痕であることが分かる。SB1・2については4隅の柱穴はしっかりと残っているが、その間のピットが浅かったり締まりが無かったりとしっくりこないものが多い。1/100の遺構配置図の実測を開始する。木崎課長補佐が来跡。
- 7月23日 検出できたSK1～13までの断面写真撮影と実測を行う。
- 7月26日 昨日撮影できなかった土坑の断面写真の撮影と実測を行う。西側に検出したピット配列だが、当初は掘立柱建物跡として考えてはいたが、ピットの締まりが無かったり、樹痕であったりと、厳しい結果であった。
- 7月27日 ピット、土坑の調査を進める。昨日に引き続き掘立柱建物跡として考えていた箇所の検討を行ったが樹痕が多く厳しい。
- 7月28日 西側の遺構配置図の実測とSK12・14の土層断面図の実測を行う。
- 7月30日 SB1・2の土層断面、及び完掘平面図の実測を行う。翌日の現場公開に向けて調査区周辺
- の掃除を行う。
- 7月31日 発掘体験・遺跡見学会を実施。59名の方が来跡された。SD2・3の完掘状況の写真撮影も行う。
- 8月3日 SB1・2を完掘させ、完掘状況の写真撮影を行う。SB2周辺にもSB1同様、樹痕が広がる。掘立柱建物と樹痕の位置関係が気になる。垣根の可能性を考える。最下段に新たな掘立柱建物跡を検出する。
- 8月4日 昨日検出した遺構をSB3・4とし、掘削調査を行う。また、調査区北西側に検出した畝状遺構の調査を進める。
- 8月6日 SD9の北壁の断面状況から再検討を行い、再掘削を行う。調査を終えていたSD5の名残を下段で検出したため、撮影のし直しを行う。
- 8月10日 SD9の調査、意図的な配置をみる樹痕をSX1～9と付し掘削。SB3・4の完掘写真の撮影も行う。SI1～3を北側トレンチ付近で検出。SI4～6は西端付近で検出。後者は埋土がほとんど無く、遺構想定プラン中央付近に柱跡と思われる。
- 8月11日 雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。
- 8月12日 SI1～6の掘削調査を進める。土坑やSD9の実測も行う。
- 8月17日 SI4～6内のピットを実測。翌日の空中写真撮影に向けて、調査区内の掃除を行い、全体の3/5ほどを終了する。
- 8月18日 九州航空株式会社による空中写真撮影を行う。その後、SD1、SI4～6、遺構配置の写真撮影を行う。
- 8月19日 SI1～6、SD9の掘削を行い、完掘する。調査区東側より、等高線実測を開始する。柱跡と思われるピットとそれを挟むように位置していたピットの箇所をSI7とし、検出状況の撮影も行う。
- 8月20日 SI4～6の完掘平面と調査区の等高線実測を行う。
- 8月23日 SI7・8の掘削を行う。ピット2基に柱跡と思われる遺構、という不明な点が多いが、SIとしている。等高線実測は終了する。
- 8月24日 基本層5層の掘削を開始する。SI5・

- 6の土層断面、土坑の完掘状況の実測を進める。
- 8月25日 基本層5、6層の掘削を進める。数点の礫の出土が確認された。S14～6の遺物の取り上げ記録は、ナンバリングを行い図面に記録していくこととした。
- 8月26日 昨日に引き続き基本層5、6層の掘削を進める。SK29は炭化物、材の検出があったため、出土状況の実測を行う。埋土は2層に分かれ、出土遺物は埋土1層からのものである。
- 8月27日 基本層5、6層の掘削を進める。S19を検出するも、S17・8と同様、ビット2基に奸跡と思われる遺構、という不明瞭なものである。
- 8月30日 S11～3の完掘写真を撮影する。遺構本体の埋土はほとんど無いため、想定プランを破綻で結んだ。
- 9月1日 基本層5、6層の層界付近にて、三稜尖頭器が出土する。樹痕の多かった範囲で出土するものは、ほとんどが縄文後・晩期の土器である。
- 9月2日 昨日の層界で石器が出土したこと、6層上面に隆起している箇所があることなどから、6層を3cm程度掘り下げ、他に石器の広がりがないか、確認作業を開始する。
- 9月3日 焼土粒子が散る土坑を検出。SK36とするが、平面径はビットサイズである。村崎係長が来跡され、先日出土した石器についての所見、掘削指導を受ける。坂口装飾古墳館学芸課長も来跡。
- 9月7日 台風接近のため、現場を中止する。事務所内で図面チェックを行う。
- 9月8日 土坑の掘削調査、実測を中心に進める。SK36は6層から掘り込まれており、下層はローム層まで達する。全体的に焼土粒子、最下層には20mm程度の焼土ブロックが混入する。周辺にトレンチを設定し、確認するも、連結土坑になる要素は見つからない。
- 9月9日 SK36のやや南側にSK37を検出。焼土粒子の散る遺構であるが、平面径も大きく、浅い。下段のトレンチ内より、縄文早期の土器が出土する。益城町教育委員会の堤氏が来跡。
- 9月10日 SK36を完掘。焼土ブロックをサンプリングする。下段は10m×10mのベルトを設定し、掘削を開始する。
- 9月13日 下段の基本層5層を掘削する。縄文早期の押型文が出土する。また、礫の散見が見られる。
- 9月15日 最下段のSD9の掘削を行う。5層中に輝緑凝灰岩のものと思われる石核、調査区西端より調整痕を残す石器が出土する。
- 9月16日 遺物の点上げを開始する。また、上段部の5層完掘状況を撮影する。
- 9月17日 下段の5、6層遺物出土状況を撮影。また、上段部の等高線を実測する。
- 9月21日 上段部のトレンチ調査、下段部の遺物取り上げ、実測を行う。
- 9月22日 雨天。職員で、昨日清掃を終えた上段部の完掘写真を撮影する。
- 9月24日 SK38を完掘。下段の清掃後、完掘写真の撮影を行う。
- 9月27日 下段部の基本層6層を掘削する。E4グリッドにて集石を確認する。
- 9月28日 下段のトレンチ、及び6層の掘削。昨日検出した集石をSY1とし調査する。掘り下げ途中で土器片も出土。後・晩期の遺構か。調査区全体で落ち込みの激しい3箇所を断面を実測する。西日本高速道路株式会社より松繁工事が来跡する。
- 9月29日 実測を中心に行う。大方の調査を終了したため、ベルトの掘削も開始する。宮崎参事が来跡。
- 9月30日 ベルトを掘削し、遺物を取り上げる。調査で使用した機材を資料室へ搬出し、調査を終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

塔平遺跡が所在する熊本県益城町は、北緯32度47分、東経130度50分に位置する。東西約11km、南北約13km、面積は65.64km²を測り、熊本県のほぼ中央に位置する。行政域としては上益城郡に属し、その北部に位置する。西は上益城郡嘉島町、西から北西に熊本市、東は阿蘇郡西原村、南は上益城郡御船町と接している。東部・南部は九州山地から続く、城山(480.4m)、朝来山(469.5m)、船野山(307.8m)、飯田山(481.2m)などが山塊を形作る。北部は広大な益城台地が広がり、西部は熊本平野に連なり、その東域をなす。

本遺跡の東側には、益城町から八代郡水川町へと至る国道443号線が継走しており、交通の要衝となっている。熊本県庁にも程近く、熊本県の玄関口である阿蘇くまもと空港、九州縦貫自動車道、益城熊本空港インターチェンジ等を有し、交通網や立地条件の良さから、近年は著しく人口が増加するとともに、九州横断自動車道延岡線などの開発工事も進んでいる。

益城町には、益城町津森の金山川沿い及び木山川沿いに巨礫層「下陣礫層」、金山川沿いに泥層「津森層」が分布する。益城台地の標準的な土層は、表土以下、黒色土(クロボク)、暗褐色土(アカホヤ)、ブロック状の土(ニガ土)、黄褐色土(ローム層)が堆積している。

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器時代

益城町では、旧石器を調査目的とした発掘調査による遺跡は確認されていない。しかし、本遺跡では、かつて細石器・スクレーパー・剥片・礫器が表面採集されており、平成21年度の発掘調査でも三稜尖頭器・ナイフ形石器が出土している。また、大辻遺跡(大字馬水・大辻)では、黒曜石製の細石刃が確認されている。益城町東部に位置する阿蘇郡西原村の河原第3遺跡・西原第14遺跡においては、6つの旧石器時代に属する文化層が確認されており、始良丹沢火山灰を包含する層の下位まで石器が確認されている。また、同郡山都町の北中島西原遺跡では、本調査において三稜尖頭器・ナイフ形石器の出土、石器製作時のブロックが確認されている。今後益城町においても、新たな遺跡発見の可能性があると考えられる。

(2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで数多く存在している。本遺跡でも平成21年度の調査では早期の穴、集石を検出したほか、後期から晩期の竪穴建物跡13軒、埋設土器を4基検出しており、集落が形成された時期であることが分かっている。柳島遺跡は、昭和47～48年に九州縦貫自動車道建設に伴い発掘調査され、早期押型土器や塞ノ神土器のほか、石槍・石斧なども出土している。石蒸し料理をした跡と考えられる集石遺構や長楕円形の舟跡がヒトデの様な形で重なって検出されている。また、古閑遺跡・古閑北遺跡では、後期後半～晩期の黒色磨研土器が多量に出土しており、「古閑式土器」として標識土器となっている。大辻遺跡では縄文後期から晩期の円形周溝遺構8基が検出されている。御船町の辺田見中道遺跡では後期の阿高式、北久根山式を中心とした土器のほか石鏝、石銚などの漁用具などが出土している。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は、当遺跡が所在する小池に集中している。特に、八反田遺跡(大字砥川)から出土した

喪棺は、弥生前期の板付式土器と縄文的採色の強い夜臼式土器が使用されており、当時の縄文時代から弥生時代への移行期の時代相を反映したものとみられる。

塔平遺跡では後期の竪穴建物跡が27軒検出されており、中には遺物がまとまって出土している遺構もあり、当時の生活用具を考察する良好な資料が確認されている。

秋永遺跡（大字小池）では弥生時代の竪穴住居跡と思われるものが検出され、免田式土器を含む弥生時代後期の土器が多量に出土している。また、弥生時代中期と思われる喪棺墓も検出されている。その他にも、環濠の一部と思われるV字形の溝や、弥生時代後期の水田遺構も検出されている。

平田遺跡（大字平田）では、弥生時代後期の甕形土器がほぼ完全な形で出土している。宮園遺跡（大字木山）では、大型喪棺（須玖式）や黒髪式などの小型の喪棺も出土している。また、東無田遺跡（大字島田）や下原遺跡（大字島田）では、弥生時代中期の喪棺が出土している。

当遺跡に近い二子塚遺跡（嘉島町）では、中期の喪棺墓6基、後期中葉から終末期にかけての環濠集落跡として竪穴建物267軒、円形周溝2基が検出されており、後期後葉に最盛期を迎えている。集落縁辺には4軒の鍛冶工房が検出されている。また、船載鏡2面を含む4面の青銅鏡が出土している。

（4）古墳時代

益城町には畿内政權と深く関わりのある人物の墳墓と考えられるものは存在しない。しかし、木山川沿いの湿地帯の開田による水稲耕作と、台地上の畑作物を生産基盤とした在地の大小の支配者階層の人々の墳墓が見られる。

前期から中期にかけての墳墓としては、大字小池の台地上、大字広崎から大字寺迫に至る台地の縁辺部、大字福原、大字上棟台地上などに分布している。このうち発掘調査されたものは少ないが、昭和47年に養豚場地肥置場の造成の際に発見された塔の平石棺がある。調査されていないため詳細は不明だが、前期の石棺と考えられている。他にも、鏡を副葬していた寺迫の城の本古墳をはじめとする円墳、大字小池の秋水遺跡にみられる方形周溝墓などがある。

中期の後半には、装飾壁画のある井寺古墳（円墳・横穴式石室）が、隣接する嘉島町に造られている。大字宮園にある小柳遺跡では、古墳時代前期から中期頃を中心とした集落跡が検出されている。

後期になると熊本平野東部の勢力の中心は、隣接する御船町の台地上へ移行したとみられ、そこには装飾壁画をもつ今城大塚古墳（前方後円墳・横穴式石室）が造られている。近年の調査では同町の滝川石田遺跡の調査で竪穴建物跡が検出されている。益城町大字小池の鬼塚古墳、大字井寺の遠見塚古墳、大字福原の鬼ノ窟古墳（いずれも円墳で横穴式石室）は、その勢力下にある各地域豪族の墳墓と考えられる。また、県道熊本・高森線に沿った大字寺迫から大字田原にかけての崖面と、大字福原地区には、後期の横穴墓群もみられ、嘉島町の二子塚遺跡では6世紀代の円墳4基が検出されている。

（5）歴史時代

奈良時代・平安時代になると、律令制度の導入に伴い、益城町の多くは益城郡に属し、条里は大きな河川を中心とした自然条件に作用されている。御船川・緑川・木山川（赤井川）の3流域にみられ、益城町の条里遺構は木山川を中心にして、北は益城台地縁辺部から、南は船野・飯田両山麓まで、流れに沿って東西に展開している。

当遺跡の東側に位置する飯田山上には、飯田山常楽寺がある。天台宗の末寺で、益城・御船地域の名刹である。諸説あるが、『元亨釈書』には「飯田の真俊」の名があり、平安時代末期、真俊により開基されたと一般的に言われている。常楽寺は天台宗・真言宗・浄土宗に禪宗を加えた四宗の学問と修行道場としての性

格をもつ寺院であったと考えられ、後に天皇家の菩提寺となる京都泉涌寺を開基した僧である月輪大師・俊蒨（がちりんだいし・しゅんじょう）を輩出している。奈良時代の近年の調査成果としては御船町が調査した辺田見中道遺跡で、検出された奈良時代末の群状遺構・溝から多量の木材が出土し、水田関連施設の存在が明らかになっている。塔平遺跡の調査では9世紀初頭から9世紀中頃のカマドをもつ竪穴建物跡3軒、掘立柱建物6軒、近接する嘉島町の二子塚遺跡でも9世紀の掘立柱建物18軒、柵列3条、御船町の秋只山下遺跡では9世紀代の土器が検出されている。大辻遺跡では、平安時代の竪穴建物跡13軒、掘立柱建物跡11棟、鍛冶関連遺構・遺物が確認されており、古代・中世の製鉄遺跡「馬水製鉄所跡」、砂鉄採集が行われていた木山川支流の「鉄砂川」の存在から、鍛冶工房及び鍛冶集団の存在を考察している。また、識字層を示す墨書土器、官人層の有する刀子、石製丸軀、銅製丸軀の出土から、行政機関と関係する施設の存在を考察している。

益城町では中世の集落跡等が検出された調査はあまり行われていないが、御船町高木にある山下遺跡では、掘立柱建物、柵列などの遺構、土師器・須恵器・龍泉窯系青磁碗の破片等が出土している。また、小池遺跡では中世から近世にかけての無縫塔、石列、五輪塔や宝塔などが見つかっている。

戦国時代には肥後進出を図る勢力にとっては政局を左右する要衝として、多くの城が築城された。赤井城・砥川城・飯田城（田口平城）・津森城・木山城などがそれにあたる。

近世では、益城町は加藤氏、細川氏の支配に属し、両家の御用瓦を造った土山地区の土山瓦がある。

【引用・参考文献】

益城町 1990 『益城町史 通史編』

堤英介・上高原聡編 2010 『小柳遺跡』益城町文化財調査報告第21集 益城町教育委員会

堤英介編 2013 『大辻遺跡』益城町文化財調査報告第22集 益城町教育委員会

橋口剛士編 2010 『秋只山下遺跡』御船町文化財調査報告第1集 御船町教育委員会

橋口剛士編 2012 『辺田見中道遺跡』御船町文化財調査報告第2集 御船町教育委員会

橋口剛士編 2013 『辺田見中道遺跡2』御船町文化財調査報告第3集 御船町教育委員会

芝康次郎・小畑弘己編 2007 『阿蘇における旧石器文化の研究』熊本大学文学部考古学研究室研究報告第2集 熊本大学文学部考古学研究室

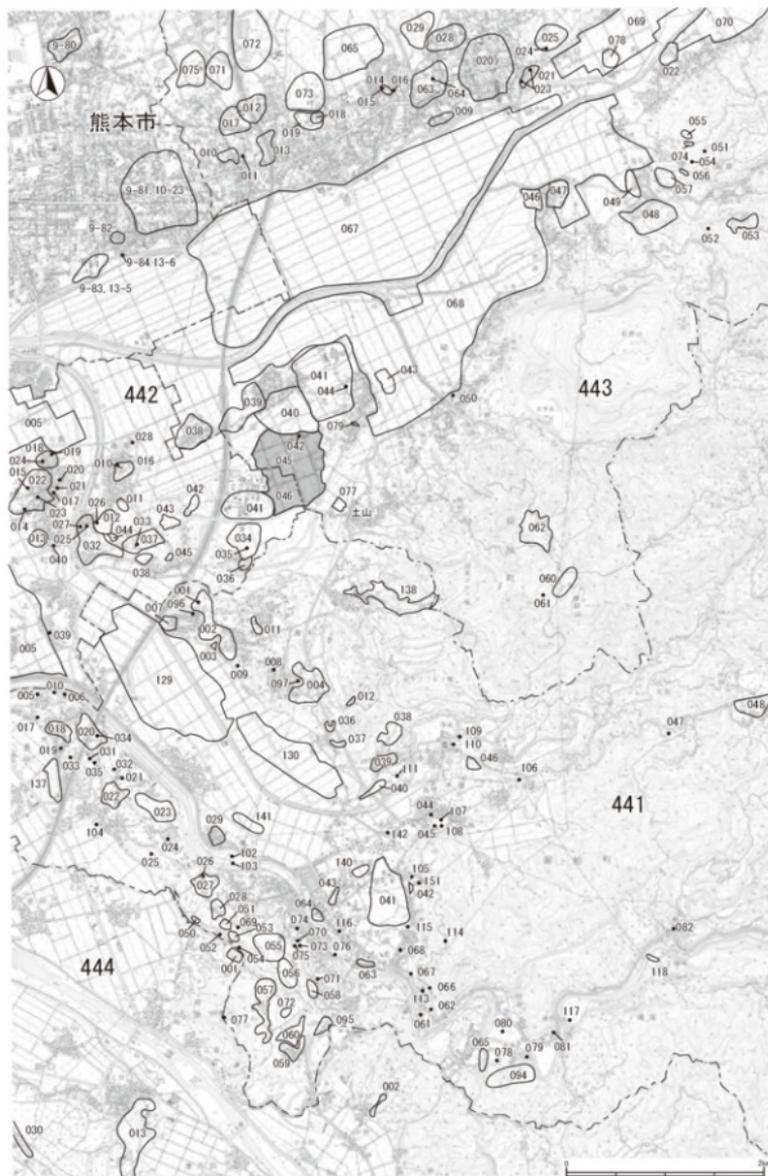
島津義昭ほか編 1992 『二子塚』熊本県文化財調査報告第117集 熊本県教育委員会

野田恒規・濱田彰久編 1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第184集 熊本県教育委員会

野田恒規・濱田彰久編 1999 『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告175集 熊本県教育委員会

坂井田端志郎ほか編 2010 『山下遺跡』熊本県文化財調査報告第260集 熊本県教育委員会

水上公誠ほか編 2013 『塔平遺跡1』熊本県文化財調査報告第285集 熊本県教育委員会



第1図 塔平遺跡と周辺の遺跡 (1/50000)

第2章 遺跡の位置と環境

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
442-020	内原野遺跡	下内原 西ノ寺	古墳	墳墓		
442-021	藤原野古墳(築城跡)	下内原 西ノ寺	古墳	墳墓		
442-022	下内原遺跡	下内原	弥生～古墳	古墳地		
442-023	内原野古墳群	下内原 宮ノ森	古墳	古墳地		
442-024	下内原の古墳群	下内原	古墳	古墳地		
442-025	藤原野古墳	下内原 藤原野	古墳	古墳地		
442-026	初野古墳	高野木 初野	古墳	古墳		
442-027	初野遺跡	高野木 初野	古墳	墳墓		
442-029	早木跡	野 早木	古墳	古墳地		
442-032	高野遺跡	高野木 高野原	縄文・古墳	墳墓	縄文層・古墳層・古墳地	
442-033	初野古墳	高野木 初野	古墳	古墳		
442-034	二子塚遺跡	高野木 二子塚山	古墳・古墳	古墳地	埋葬施設	
442-035	二子塚古墳	高野木 二子塚山	古墳	古墳		
442-036	下内原遺跡	下内原	縄文	古墳地	縄文土層・土葬層	
442-037	堀ノ木遺跡	高野木 堀ノ木	縄文～古墳	古墳地		
442-038	小田遺跡	井野 小田	縄文	古墳地	縄文前期土層	
442-039	高野寺跡	上ノ高 高野寺	古墳	寺址		
442-040	西ノ寺跡	上ノ高 中野	古墳	寺址		
442-041	大塚遺跡	上ノ高 中野	古墳	古墳地		
442-042	内野遺跡	井野 内野	縄文・古墳	古墳地		
442-043	初野遺跡	井野 初野	縄文・古墳	古墳地		
442-044	藤原野遺跡	井野 上野原	縄文・古墳	古墳地	縄文土層・古墳土層・古墳	
442-045	高野遺跡	高野木 高野	縄文・古墳	古墳地	縄文土層・古墳土層	
442-046	初野遺跡	井野 上野原・小田	縄文・古墳・古墳	古墳地		

上内原野遺跡群(442)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
441-002	宮本古墳	宮本 日本	古墳	古墳		縄文層古墳
441-003	宮本遺跡	宮本 日本	古墳	古墳地		縄文中期土層・土葬層・古墳層
441-004	宮本古墳群	宮本 高野野・西原	古墳	古墳地		古墳・土葬層・古墳層
441-006	高野寺遺跡	宮本 高上	古墳	古墳地		古墳・土葬層・古墳層
441-007	初野古墳	野 初野	古墳	古墳		
441-008	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-009	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-010	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-011	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-012	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-013	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-014	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-015	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-016	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-017	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-018	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-019	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-020	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-021	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-022	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-023	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-024	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-025	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-026	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-027	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-028	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-029	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-030	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-031	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-032	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-033	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-034	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-035	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-036	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-037	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-038	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-039	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-040	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-041	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-042	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-043	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-044	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-045	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-046	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-047	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-048	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-049	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-050	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-051	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-052	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-053	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-054	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳
441-055	高野古墳	野 高上	古墳	古墳		古墳層古墳

遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	種別	指定	備 考
441-056	岩屋遺跡	磐船 上野原	縄文・弥生	住居跡		縄文前期土器・弥生前期土器
441-057	下山遺跡	磐船 下山	古墳・古代	住居跡		
441-058	中山遺跡	磐船 中山	縄文	住居跡		縄文前期土器・土師
441-059	上山遺跡	磐船 上山	縄文	住居跡		縄文前期土器・土師器・弥生前期
441-060	上山遺跡	磐船 上山	弥生	住居跡		弥生前期土器
441-061	草野中野2号古墳	辺茂見 草野中	古墳	古墳		
441-062	草野中野1号古墳	辺茂見 草野中	古墳	古墳		古墳群、古墳
441-063	辺茂見遺跡	辺茂見 下郷	縄文	古墳		縄文中層群1層
441-064	六丁石墓群	磐船 町屋（六丁区）	弥生	石造		弥生土器
441-065	五輪野遺跡	滝尾 五輪	中世	集落		
441-066	阿波赤石遺跡	辺茂見	近世	集落		
441-067	大寺平原の遺跡	辺茂見 平塚山	古代	集		
441-068	大寺平原古墳群	辺茂見 山下	近世	古墳群		群集（近古墳群内）
441-069	阿波赤	滝丁 阿波	中世	集落		
441-070	新本陣土の壘	磐船 町屋	古代	集	町	17世紀末の壘
441-071	新本陣築城時の地層	辺茂見 大塚	古代	石造跡		
441-072	波入嶽山遺跡	辺茂見	縄文〜中世	住居跡		
441-073	新波遺跡	磐船 町屋（3丁区）	近世	住居跡		穴山
441-074	新波遺跡分室	磐船 5丁区	古代	住居跡		保存室
441-075	野塚等古墳群分室跡	磐船（2層区 波見区）	近世	古墳		
441-076	新郷1号墳群跡	磐船 町屋（3丁区）	近世	住居跡	集	遺失写真（1948）磐船北江の史跡、新野、又八によって調査された古墳の中心に調査報告がある。昭和61年3月3日発表。調査報告を刊行。石野等遺。昭和61年10月13日指定
441-077	白旗山遺跡跡	磐船 上山	古代	集跡		
441-078	五輪の古墳群群	滝尾 五輪	中世	石造跡	町	各塚は古墳群1号2号3号に分けられ（調査報告）指定、五輪の群集
441-079	五輪野遺跡	滝尾 五輪	中世	集跡		
441-080	五輪の遺跡	滝尾	中世	石造跡		
441-081	新郷分室跡五輪	滝尾 新郷	中世	石造跡	町	古墳群内（調査4号）
441-082	下郷野遺跡	滝尾 下郷	近世	住居跡	町	
441-099	五輪野遺跡	五輪	古墳〜古代	古墳群		
441-095	新波赤遺跡	辺茂見 下田原	古墳〜古代	古墳群		
441-096	新本陣築城時の地層	志本 新本	中世	石造跡		新本陣築城跡
441-097	足塚神社の地層	志本 北上	中世	石造跡		新本陣築城跡
441-102	志本の石造跡	滝丁 新郷	近世	石造跡		享保2年
441-103	新本陣の石造跡	滝丁 新郷	中世	石造跡		種子塚「フーン」
441-104	志本寺の石造跡	新 新郷	中世	石造跡		種子塚
441-105	新本陣の石造跡	志本 新郷	中世	石造跡		天正8年焼、焼ノ遺跡
441-106	三心寺の石造跡	志本 三心寺	中世	石造跡		新郷遺跡
441-107	志本寺の石造跡・石塔	志本 新郷	中世	石造跡	町	新郷、新郷1層、新郷分室跡（調査報告）指定、新郷分室の石塔
441-108	志本寺門前の石造跡	志本 新郷	中世	石造跡		新郷分室跡
441-109	志本寺の石造跡	志本 志本寺	中世	石造跡		享保3年・享保7年（調査10号）
441-110	志本寺跡	志本 志本寺	中世	遺跡		
441-111	志本寺の石造跡	志本 志本	中世	石造跡		新郷分室跡、天正8年跡
441-115	草野中木造新郷三層墓	辺茂見 草野中	中世	石造跡	新	草野新郷三層墓（調査報告）指定、草野新郷木造新郷の石造跡、六層新郷新郷
441-114	上野原の石造跡	辺茂見 山下	中世	石造跡		享保2年・天正17年
441-115	中野遺	辺茂見 山下	近世	住居跡		享保2年跡
441-116	大寺平の遺	辺茂見 町屋	近世	住居跡		新郷上野原シンクワット
441-117	新上野の石造跡	滝尾 新上野	中世	石造跡		天正8年跡
441-118	下郷木造の遺跡	滝尾 上郷	中世	石造跡		享保3年
441-120	高野遺	小泉、志本	古代・中世	古墳		
441-130	高野遺	赤野	古代・中世	古墳		
441-137	新下山遺跡	磐船 新山	弥生〜中世	集跡		
441-138	山下遺跡	志本、下野原、山下、轟山	縄文・中世	住居跡		
441-140	辺茂見の遺跡	志本〜辺茂見 辺	縄文	住居跡		縄文土器、石器
441-141	轟山古墳群跡	轟山	縄文	古墳群		縄文土器、須石器、土師器
441-142	阿波赤遺	赤野	近世	住居跡	町	天正8年跡
441-151	本郷古墳群	赤野 宮	古墳・古代	古墳群		古墳群跡、新本陣より古墳群

上野原野原野原

遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	種別	指定	備 考
444-001	草野赤遺跡	辺茂見 草野	弥生	住居跡		弥生中期土器、石器丁、石斧
444-002	北原1号古墳	辺茂見 北原1	古墳	古墳		
444-013	新本陣築城跡	新山 新郷	縄文	住居跡		縄文土器・須石器、土師器
444-030	中山遺跡1遺跡	中山 新山	弥生・古代	集跡		土師器、須石器、弥生土器

赤野赤野赤野

遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	種別	指定	備 考
9-00	新上野遺跡	新本陣赤野新郷町1層	縄文〜中世	住居跡		
9-03-10-21	山下遺跡	新本陣赤野新郷町1層	古代〜中世	住居跡		
9-02	下野村古墳群	新本陣赤野新郷町1層	縄文〜中世	古墳群		
9-03-11-5	山下遺跡	新本陣赤野新郷町1層 山下遺跡	縄文	集跡		縄文中層、後編
9-04-1-6	白旗山遺跡1号墳群跡	新本陣赤野新郷町1層 轟山	近世	住居跡	市	新本陣築城跡分室跡



第2図 塔平遺跡試掘・確認調査位置図及びトレンチ土層断面図 (1/3000・1/60)

第3章 調査の方法

第1節 調査方法

発掘調査区は、試掘・確認調査で遺構・遺物が確認された敷地内に設定し、4区・5区・6区とした。調査面積は1,095㎡（4区）、2,925㎡（5区）、4,150㎡（6区）である。

（1）調査4区

平成20年9月から発掘調査のための資料収集、調査事務所の準備、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所と協議を重ねるなど、事前準備作業を行い、10月より調査4区の発掘調査を開始した。

調査対象地の除草終了後、重機（バックホー）を用いて1層～2層（表土層）を除去し、調査区内に5m×5mのグリッドを設定した。その後、人力により3層（黒褐色土層）以下、最も深いところで5層（褐色土層）途中まで順次掘り下げた。人力による掘削作業は、遺物包含層の掘削後、当時の生活痕跡である遺構の検出作業を行った。次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。調査区全体を含む高所からの各層での遺構完掘状況及び遺跡周辺地形の写真撮影作業は、高所作業車やセスナ機を用い実施した。平成21年5月に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、世界測地系を使用した。調査区グリッド設定図は第3図に示す。

（2）調査5区

調査5区の発掘調査は、まず重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に5m×5mのグリッドを設定した。その後、人力により6層（暗褐色土層）以下、最も深いところで8層（黄褐色ローム層）まで順次掘り下げた。遺物包含層の残りが非常に悪く、6層（暗褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーによる耕作痕も多数確認された。したがって、主に基本土層6層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

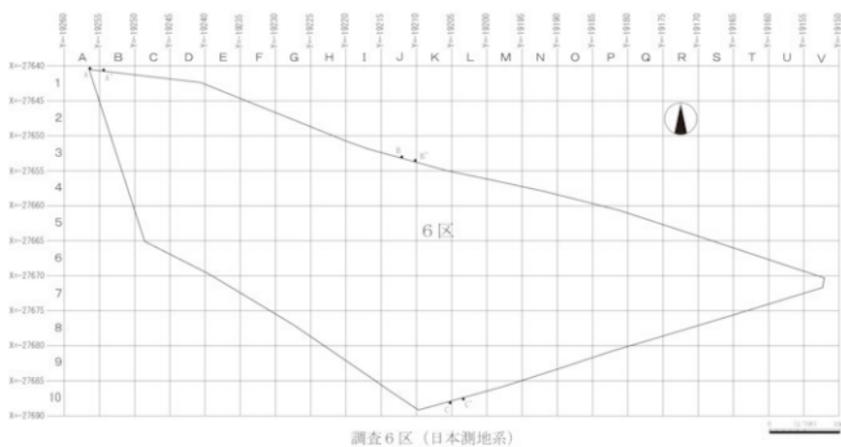
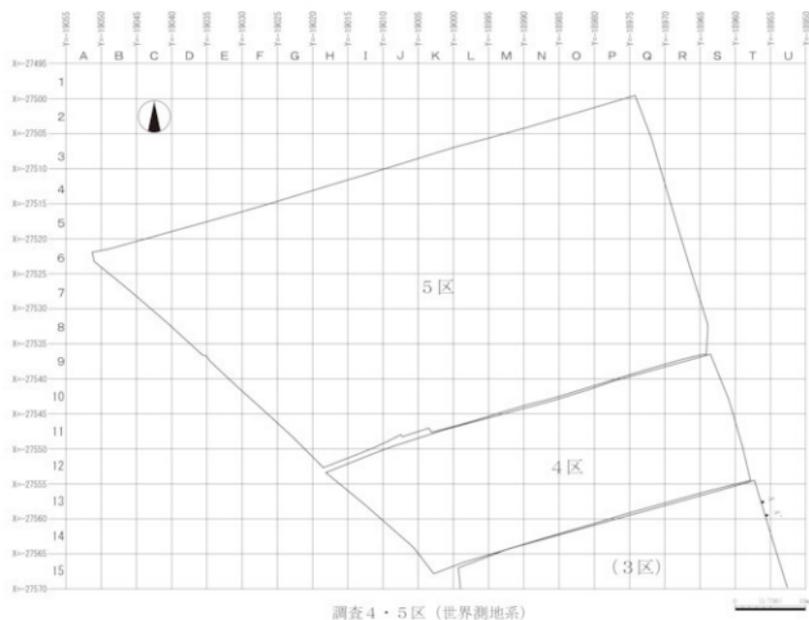
次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成21年8月末に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、4区同様世界測地系を使用した。調査区グリッド設定図は第3図に示す。

（3）調査6区

調査6区の発掘調査は前年度3月に行ったトレンチ調査の結果をもとに絞り込みを行い、平成21年4月から開始し、5日間かけ、重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に5m×5mのグリッドを設定した。その後、人力により3層（黒褐色土層）以下、最も深いところで8層（黄褐色土層・ローム層）を順次掘り下げた。遺物包含層の残りは西側が非常に悪く、8層（黄褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーやいも穴、区画溝による耕作痕も多数確認された。主に基本土層4層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成



第3図 調査区グリッド設定図 (1/700)

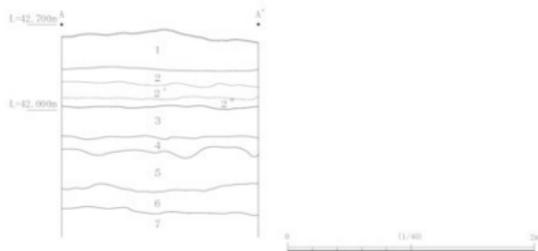
作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成22年9月末に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、日本測地系を使用した。調査区グリッド設定図は第3図に示す。

第2節 層序

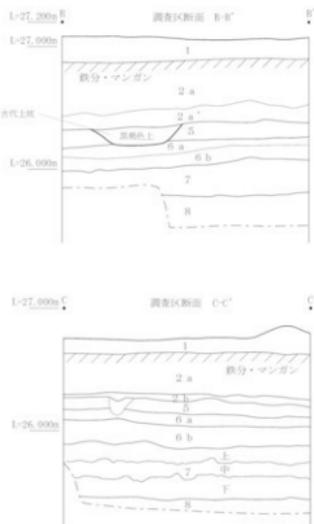
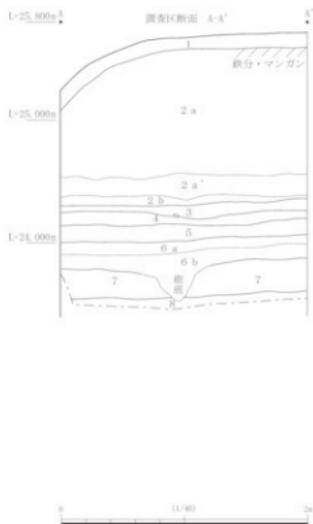
本遺跡の層序は以下のとおりである。

- 1層：表土（耕作土）
 - 2層：圃場整備の整地層
 - 2'層：同上
 - 2''層：同上 2''層は3層と混じる。焼土粒・ローム粒子を多量に含む
焼土ブロックを多く含む
 - 3層：黒褐色土層（略黒ボク）
10YR2/2 黒褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い
粒径1mmの焼土粒を少量含む
古代の遺物を多く含む
 - 4層：暗褐色土層（略漸移層）
7.5YR3/3 暗褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い
層は薄い 粒径1mmの焼土粒を少量含む 3層に比べ色調は淡い
 - 5層：暗褐色土層（略アカホヤ2次）調査時に「褐色土層」と呼称していたもの
10YR3/3 暗褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い
粒径1mmの焼土粒を微量含む
3層や4層に比べ色調は淡くややみだら
- ※4・5層は、古代・弥生・縄文の検出層（5層を2～3cmを下げた面で検出）
- 6層：黒褐色土層（略クロニガ）調査時に「暗褐色土層」と呼称していたもの
10YR2/2 黒褐色土 締まり強い 粘性強い
7層と比べ黒味の強い土層である
 - 7層：暗褐色土層（略シロニガ・ニガシロ）
10YR3/4 暗褐色土 締まり強い 粘性強い
無遺物層 縄文時代早期の炉穴はこの上面で検出が可能となる



第4図 塔平遺跡（4・5区）基本土層柱状図

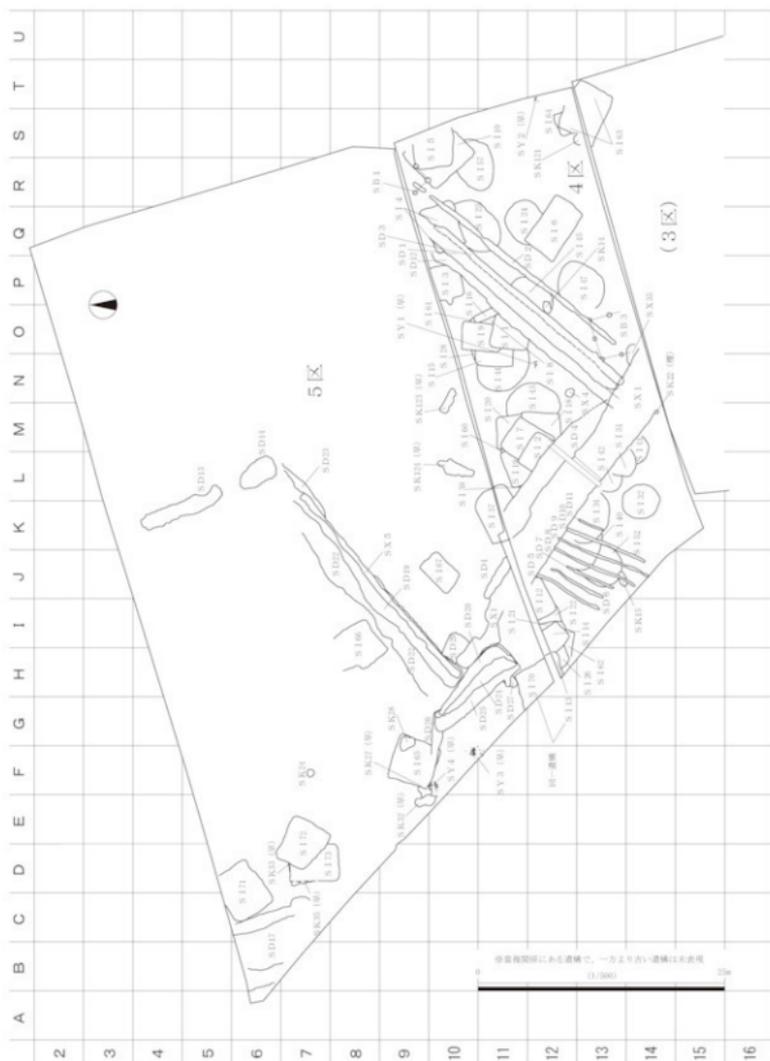
- 1層：耕作土
 2層：園場整備の土
 2 a層：10YR4/3 に近い黄褐色土 8～2 a' 層ブロックの混合した土 園場整備の土
 2 a' 層：10YR6/2 灰黄褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 2mm大の炭化物・橙色粒子（焼土粒子？）多く混じる 2mm大レキ多い
 2 b層：2.5Y3/2 黒褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 2mm大の炭化物・橙色粒子（焼土粒子？）多く混じる 2mm大レキ多い
 3層：黒褐色土
 10YR3/2 黒褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 2mm大の炭化物・橙色粒子やや多い
 4層：暗褐色土（漸移層）
 10YR3/3 暗褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 縄文中期・早期の土器・石器出土
 5層：褐色土層（略アカホヤ2次）
 10YR4/6 褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 含アカホヤ火山灰 縄文中期・早期の土器・石器出土
 6層：暗褐色土層（略クロニガ）
 6 a層：10YR3/4 暗褐色土 締まり強い 粘性やや強い 石器（旧石器？）2点出土
 6 b層：10YR2/3 黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い
 7層：褐色土層（略シロニガ） 10YR4/4 褐色土（全体的に見ると）締まり強い 粘性やや強い
 7層上：4/4 褐色土 締まり強い 粘性やや強い ニガ化したブロックやや多い
 7層中：4/6 褐色土 締まり強い 粘性やや強い ニガ化したブロックが非常に多い
 7層下：3/3 暗褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い ニガ化したブロック少ない
 上・中層に比べ黒みがある
 8層：黄褐色土層（ローム層）
 10YR5/6 黄褐 締まり強い 粘性強い 上層10cm程度 7との漸移層



第5図 塔平遺跡（6区）基本土層柱状図

第4章 調査の成果

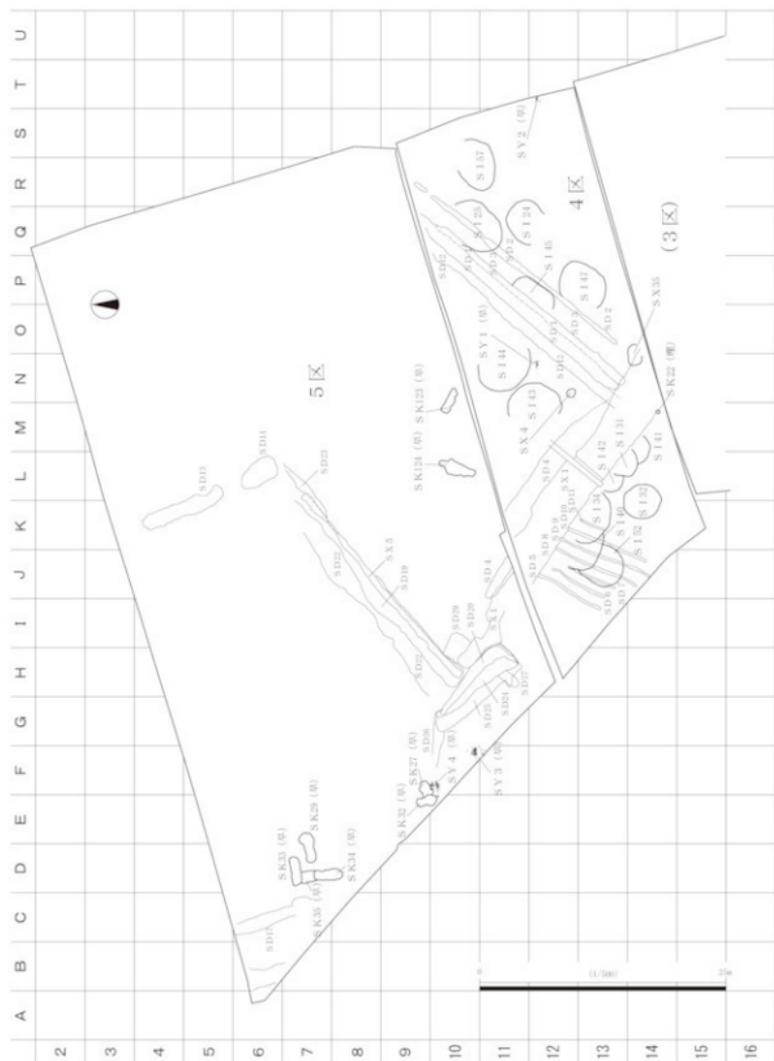
第1節 調査4区・5区



第6図 4・5区遺情配置図

(1) 縄文時代の遺構・遺物 (第7図～第27図)

調査4区・5区における縄文時代の主要な検出遺構は、土器埋設遺構1基、集石遺構4基、竪穴8基、竪穴建物14軒である。すべての遺構に共通するが、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っている。したがって、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。また、調査5区は開田事業により大きく削平されており、検出した遺構はももとの掘り込みが深かったものと思われる。



第7図 4・5区遺構配置図(縄文時代)

調査4区に竪穴建物、調査5区に竪穴が集中しているのは調査方法や開田事業等による削平に起因しており、本来の遺跡の状況を表しているとは思われない。

①竪穴

S K 32 (第8図)

S K 32はE 9・10に位置する。遺構規模は長軸約2.06 m、短軸約1.16 m、検出面からの深さ0.56 mを測り、平面形態はややいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向であり、S K 27と重複している。覆土は23層に分けることができた。底面中央に炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もS K 29同様に開田事業により大きく削平されている調査5区に位置しているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

遺物は覆土上層から出土しており、縄文時代早期の遺構と推定している。1は口縁部に貝殻条痕文を施し、焼成後に孔を穿った土器片である。2は深鉢の底部破片である。3・4は磨石類である。敲打痕が認められる。

S K 27 (第9図)

S K 27はE 9・10、F 9・10に位置する。遺構規模は長軸約1.8 m、短軸約1.12 m、検出面からの深さ0.72 mを測り、平面形態はややいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向であり、S K 32と重複している。先後関係はS K 27→S K 32である。S K 32との先後関係を把握するために設定した土層断面と燃焼部に設定した土層断面でズレが生じてしまった。覆土は13層に分けることができた。底面中央に炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もS K 32同様に開田事業により大きく削平されている調査5区に位置しているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

実測可能な遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

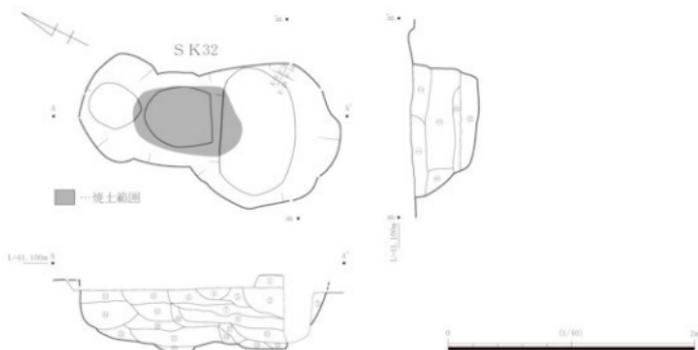
S K 29 (第10図)

S K 29はD 7、E 7に位置する。上面はS I 72により削平されている。遺構規模は長軸約3.12 m、短軸約1.32 m、検出面からの深さ0.28 mを測り、平面形態はややいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は4層に分けることができた。底面中央やや東寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構は開田事業により大きく削平されている調査5区に位置し、かつS I 72により削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

出土遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

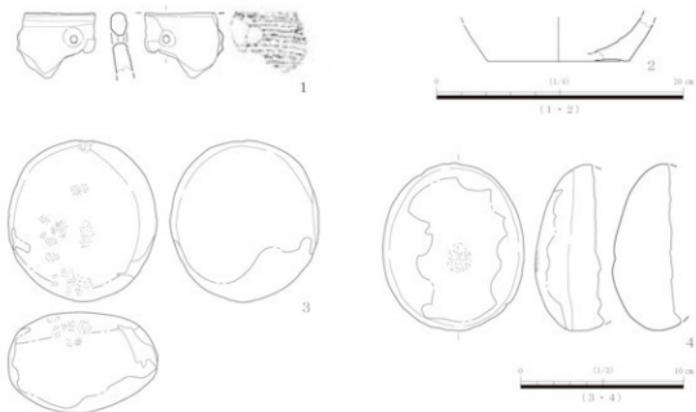
S K 33 (第10図)

S K 33はD 7に位置する。上面はS I 72により削平されている。遺構規模は長軸約2.80 m、短軸約0.94 m、検出面からの深さ0.44 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向であり、S K 29と並んだように位置している。覆土は9層に分けることができた。底面中央やや東寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もS K 29同様に開田事業により大きく削平されている調査5区に位置し、かつS I 72により削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。



〈土層注記〉S K32

- ①層：103K/2階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒を少量含む
- ②層：103K/3階褐色土 締まりやや弱い 粘性やや弱い 焼土粒と炭化物を少量含む
- ③層：103K/4階褐色土 締まりやや弱い 粘性強い 焼土粒をやや多く含む 炭化物を少量含む
- ④層：584/8赤褐色土 締まり弱い 粘性やや弱い 焼土粒をやや多く含む
- ⑤層：103K/3階褐色土 締まり弱い 粘性やや弱い 焼土粒をやや多く含む
- ⑥層：103K/2階褐色土 締まりやや弱い 粘性やや弱い 焼土粒を少量含む ニガ土を含む
- ⑦層：103K/2階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒を少量含む
- ⑧層：103K/3階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒を含む
- ⑨層：103K/3階褐色土 締まりやや弱い 粘性やや強い 焼土粒をやや多く含む
- ⑩層：7.53K/2階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い ロームに焼土混ざる
- ⑪層：103K/2階褐色土 締まりやや弱い 粘性やや強い ローム黒褐色混じり 焼土ブロック(2cm程度)を少量含む
- ⑫層：103K/2階褐色土 締まりやや弱い 粘性やや強い ローム混じり 焼土粒を少量含む
- ⑬層：103K/2階褐色土 締まりやや弱い 粘性やや強い ローム、ニガ土混じる
- ⑭層：103K/3階褐色土 締まりやや弱い 粘性やや強い 焼土粒を少量含む
- ⑮層：103K/2階褐色土 締まり強い 粘性やや強い 焼土を多く含む
- ⑯層：103K/3階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒と炭化物を多く含む
- ⑰層：103K/3階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒・ローム粒(1?)を含む
- ⑱層：103K/2階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒を少量含む
- ⑲層：103K/2階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い ローム粒・焼土粒と炭化物を多く含む
- ⑳層：103K/2階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒を含む
- ㉑層：103K/3階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土と炭化物を多く含む
- ㉒層：103K/3階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土と炭化物、ニガ土を含む
- ㉓層：103K/2階褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い 焼土粒と炭化物を少量含む



第8図 S K32 遺構・出土遺物実測図

遺物は覆土層から出土しており、縄文時代早期の遺構と推定している。5は口縁部外面に貝殻条痕文を施している。内面には横ナデが施されている。

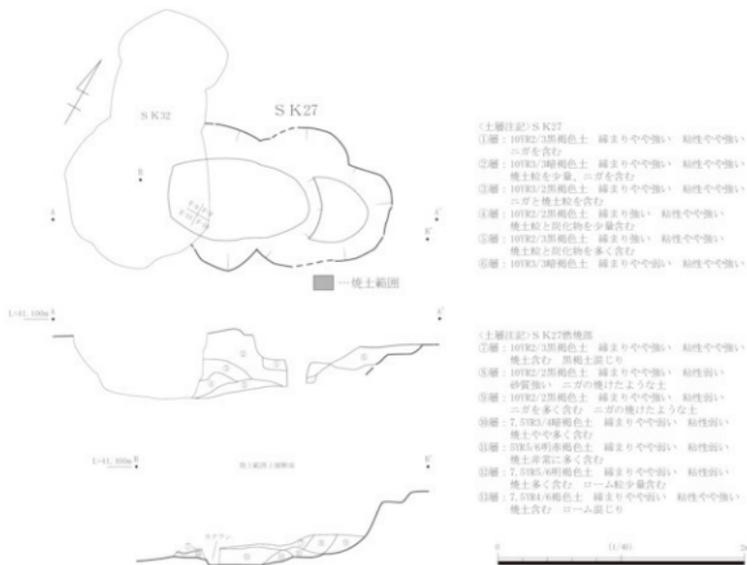
S K 34 (第11図)

S K 34はD7・8に位置する。上面はS I 73により削平されている。S K 35と重複しており、先後関係はS K 35→S K 33又はS K 34である。遺構規模は長軸約3.08 m、短軸約1.16 m、検出面からの深さ0.66 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は11層に分けることができた。底面中央やや南寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もS K 29同様に開田事業により大きく削平されている調査5区に位置し、かつS I 73により削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

実測可能な遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類別等から縄文時代早期の遺構と推定している。

S K 35 (第11図)

S K 35はD7・8に位置する。上面はS I 73により削平されている。S K 33・35と重複しており、先後関係はS K 35→S K 33又はS K 34である。遺構規模は底面の残存部分からの推定で長軸約2.60 m、短軸約1.24 m、検出面からの深さ0.54 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は6層に分けることができた。底面中央やや南寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広が



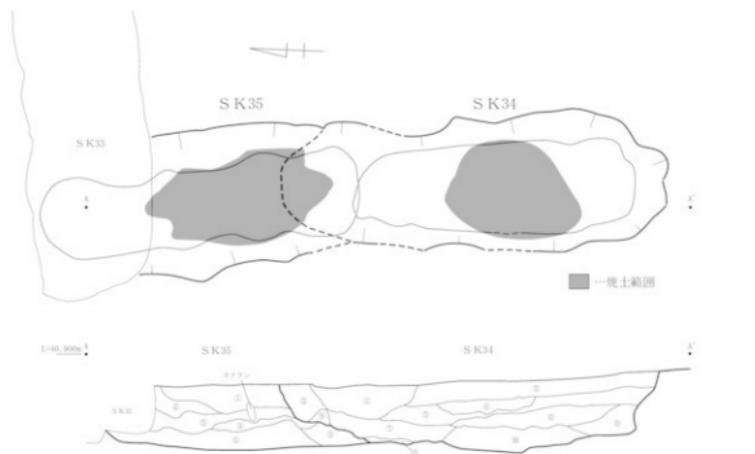
第9図 S K 27 遺構実測図

っている。本遺構もS K 29 同様に開田事業により大きく削平されている調査5区に位置し、かつS 1 73 に
より削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施
設があったのかどうか解らない。

出土物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類別等から縄文時代早期の遺構
と推定している。

S K 123 (第12図)

S K 123 はM 10、N 10 に位置する。上面は開田事業により削平されている。遺構規模は長軸約2.62 m、
短軸約0.84 m、検出面からの深さ0.36 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほ
ぼ東西方向である。覆土は10層に分けることができた。底面中央やや北西寄りに部と推定される厚い焼土
面が広がっている。本遺構も他の炉穴同様に大きく削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検
出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。なお、平面プランの確認が上



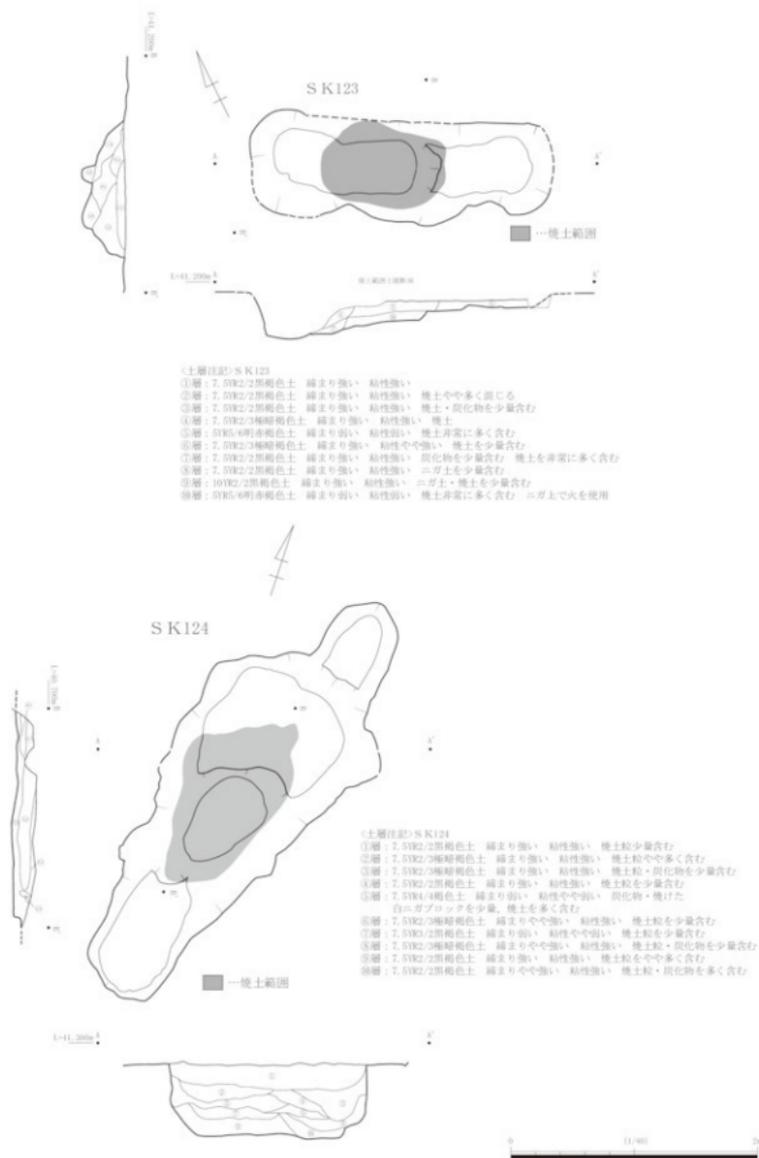
(土層注記) SK34

- ①層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~10mmの焼土粒・ロームブロックを多量に含む ジャリジャリ
 ②層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~2mmの焼土粒を少量含む ③層に比べて混入物少量
 ③層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~2mmの焼土粒をやや多く含む
 ④層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~2mmの焼土粒を少量含む 白ニガブロックを含む ⑤層に比べてキレイ
 ⑤層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~10mmの焼土粒をやや多く含む
 ⑥層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~20mmの焼土ブロックを多く含む 白ニガブロックを多く含む 南側から流れ込みか 土器片・石を含む
 ⑦層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~20mmの焼土ブロックを多く含む 白ニガブロックを多く含む 北側から流れ込みか ガチャガチャしている
 ⑧層に似ている
 ⑨層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い ローム粒を少量含む ⑩層に似ている
 ⑩層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~10mmの焼土ブロックを多く含む 白ニガブロックを多く含む 築造している
 ⑪層: 7.5YR4/4褐色土 熱線部 ガチャガチャの焼土の塊 北側5%未満は強い
 ⑫層: 10YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性強い

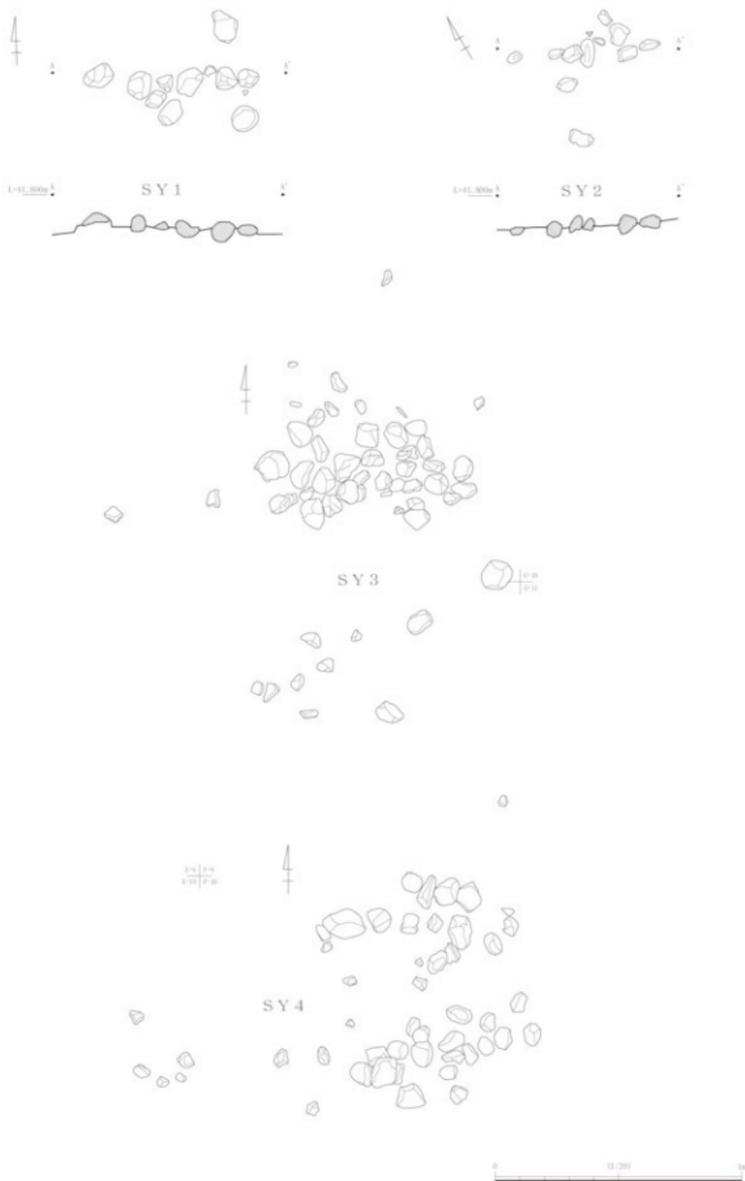
(土層注記) SK35

- ①層: 7.5YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性強い 0.1~2mmの焼土粒をやや多く含む ②層に似るが白ニガブロックが少ない
 ②層: 7.5YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性強い 0.1~2mmの焼土粒を少量含む
 ③層: 7.5YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性強い 0.1~2mmの焼土粒をやや多く含む 白ニガブロックを少量含む やや硬く感じる
 ④層: 7.5YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性やや強い 0.1~2mmの焼土粒を多量含む 粉っぽい ⑤層との混じり
 ⑤層: 7.5YR2/2黒褐色土 締まり強い 粘性強い 焼土の塊を多量含む SK34によって焼かれているので黒色土もカチカチ 白ニガが築造している
 ⑥層: 7.5YR4/4褐色土 熱線部 ガチャガチャの焼土の塊

第11図 SK34・35 遺構実測図



第12図 S K123・124 遺構実測図



第13図 SY1～4遺構実測図

手くいかなかったため、土層観察用のベルトがズレてしまっている。

出土遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

S K 124 (第12図)

S K 124 は L 10 に位置する。上面は開田事業により削平されている。遺構規模は長軸約 3.74 m、短軸約 1.68 m、検出面からの深さ 0.68 m を測り、平面形態はいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は 10 層に分けることができた。底面ほぼ中央に坑部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構も他の坑と同様に大きく削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

当初は削平された溝状遺構の一部と考え調査を行っていた。厚い焼土面を確認し、ようやく坑穴ではないかと考えを修正して調査を進めた経緯がある。なお、S K 123 同様に、平面プランの確認が上手くいかなかったため、土層観察用のベルトがズレてしまっている。

実測可能遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

②集石遺構

S Y 1 (第13図)

S Y 1 は N 12 に位置する。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 0.8 m × 約 0.6 m の範囲に集中している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

S Y 2 (第13図)

S Y 2 は T 12 に位置する。調査 4 区の外周に設定した土層観察用のトレンチ内で検出した。したがって、東側は調査区外に広がるものと推定される。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 0.7 m × 約 0.6 m の範囲に集中している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

S Y 3 (第13図)

S Y 3 は F 10 に位置する。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 1.8 m × 約 1.7 m の範囲に散乱しており、中央に礫の集中部がみられる。S Y 4 と隣接している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

S Y 4 (第13図)

S Y 4 は F 10 に位置する。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 2.0 m × 約 1.8 m の範囲に散乱しており、東寄りに礫の集中部がみられる。S Y 3 と隣接している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

いずれの集石遺構からも出土遺物はなかった。既報告（水上 2013）の調査 3 区では縄文時代早期の土器片を伴っており、ここでも当該期の可能性があると考えている。

③竪穴建物

S I 24 (第14図)

S I 24はQ 11・12、R 11・12に位置する。建物南側が弥生時代後期に比定されるS I 6と重複している。先後関係はS I 24→S I 6である。遺構規模は長軸推定4.50 m、短軸約3.70 m、検出面からの深さ0.18 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、灰跡等は検出できなかった。

遺物は覆土上層と本遺構の位置するグリッドより上の包含層から出土している。6は安山岩製の打製石斧で製作途中で破損した未製品と思われる。

S I 25 (第15図・第16図)

S I 25はQ 10・11、R 10・11に位置する。建物北側が弥生時代後期に比定されるS I 4と重複している。先後関係はS I 25→S I 4である。遺構規模は長軸約6.08 m、短軸約4.40 m、検出面からの深さ0.18 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、灰跡等は検出できなかった。

遺物は覆土と本遺構の位置するグリッドより上の包含層から出土している。7は口縁部にリボン状の突起をもち、内外面ともに二枚貝条痕調整が施されている。8は内面に横方向のミガキが施されている。9は内外面ともに二枚貝条痕調整が施されている深鉢と思われる。10は内面にミガキが施されている浅鉢である。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。11は安山岩製の打製石斧、12は砂岩製の打製石斧である。13は安山岩製の円盤形石器である。14は磨石類である。敲打痕が認められる。

S I 31 (第17図)

S I 31はL 13・14、M 14に位置する。建物北側がS X 1と重複している。先後関係はS I 31→S X 1である。遺構規模は長軸約3.00 m、検出面からの深さ0.40 mを測り、平面形態は円形を呈するものと推定される。本遺跡での当該期に比定される竪穴建物の中でも後述するS I 41・42同様に小形である。建物覆土は3層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、灰跡等は検出できなかった。

遺物は覆土と本遺構の位置するグリッドより上の包含層から出土している。15は口縁部でやや内湾ぎみに立ち上がる。外面に二枚貝条痕調整が施されている。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

S I 41 (第17図)

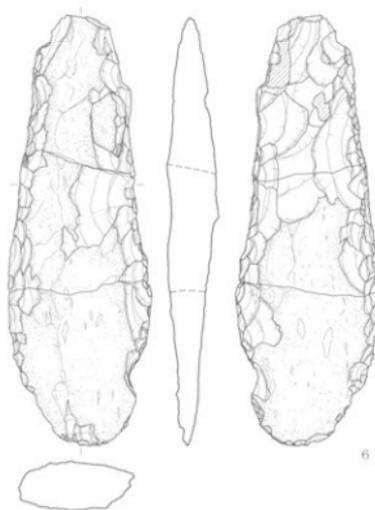
S I 41はL 14、M 14に位置する。建物北側がS I 31・S X 1と重複している。先後関係はS I 41→S I 31→S X 1である。遺構規模は長軸約1.76 m、検出面からの深さ0.10 mを測り、平面形態は円形を呈するものと推定される。前述のとおりS I 31・42同様に小形である。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、灰跡等は検出できなかった。

16の大型打刃石斧が出土しているが、S I 31との重複関係、覆土の色調、類別等から縄文時代後期後半から晩期前半の遺構と推定している。16は流れ込みによるものと考えている。



(土層注記) S124

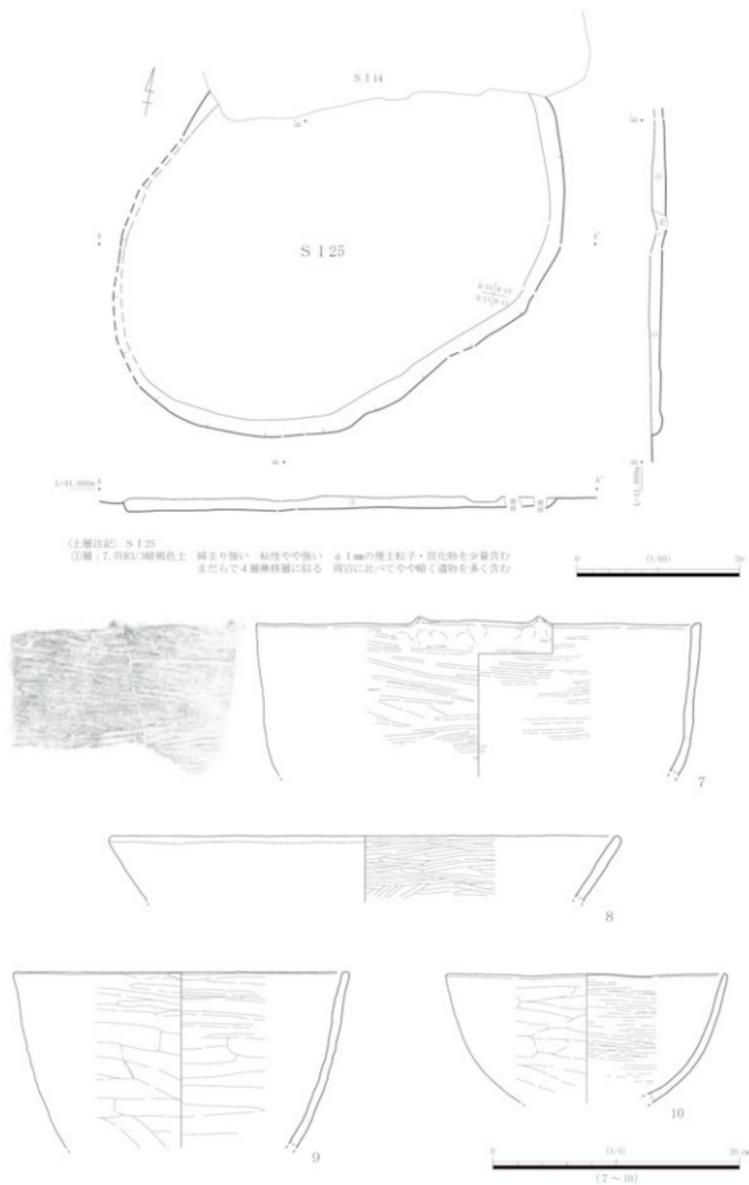
①層：7.07% (4層褐色土 粘り強い、粘性強い) ・ 1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む 4層礫層に比し、やや細かい



6



第14図 S124遺構・出土遺物実測図



第15図 S125遺構・出土遺物実測図1

S I 42 (第18図)

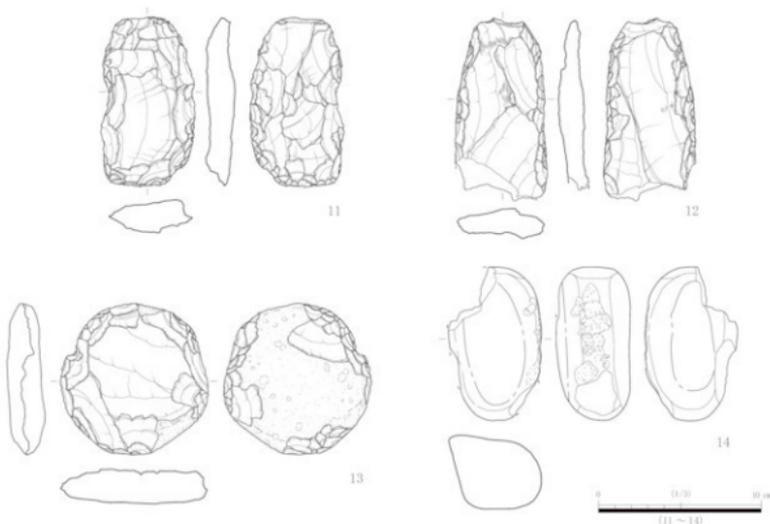
S I 42はL 13に位置する。建物北側がS X 1、東側がS I 31と重複している。先後関係はS I 42→S I 31→S X 1である。遺構規模は長軸約1.32 m、検出面からの深さ0.08 mを測り、平面形態は円形を呈するものと推定される。前述のとおりS I 31・41同様に小形である。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、灰跡等は検出できなかった。

遺物は覆土から点在して出土している。17は二等辺三角形をしている平基式の黒曜石製の石鐮である。18～20はいずれも安山岩製の打製石斧である。

S I 32 (第19図)

S I 32はK 13・14、L 13・14に位置する。遺構規模は長軸約3.74 m、短軸約3.50 m、検出面からの深さ0.14 mを測り、平面形態は円形を呈する。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を5基検出した。深さは約18～26cmを測る。P 1～P 4は竪穴の壁際に配置されていた。

遺物は覆土から石器3点が出土している。21は黒曜石製の使用痕のある剥片である。22は砂岩製の磨製石斧である。23は磨石類である。敲打痕が認められる。

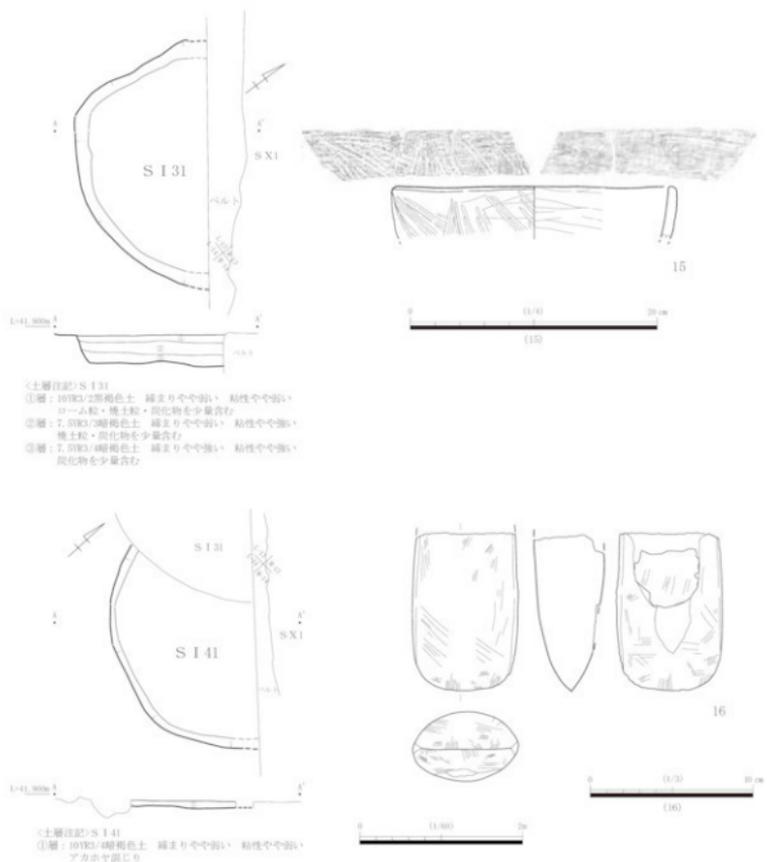


第16図 S I 25 出土遺物実測図2

S I 34 (第20図)

S I 34はK 12・13に位置する。建物北東側がS X 1と重複している。先後関係はS I 34→S X 1である。遺構規模は長軸約5.46 m、検出面からの深さ0.06 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、枌跡等は検出できなかった。

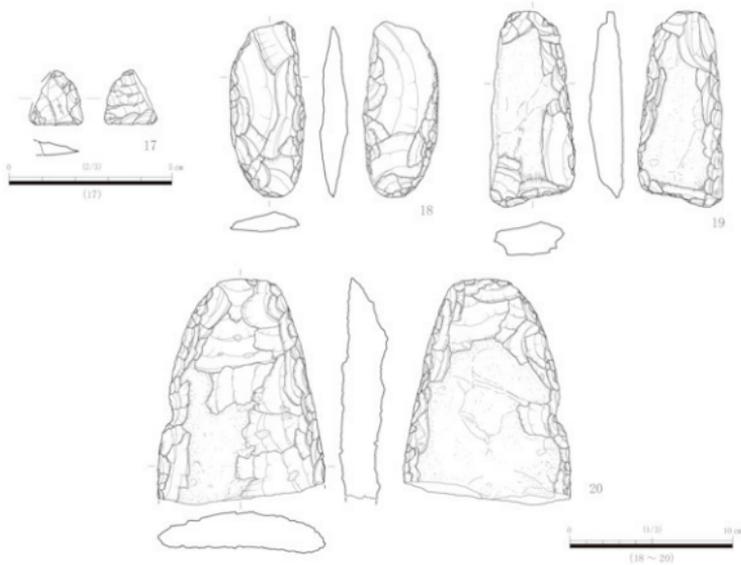
遺物は建物南東側の覆土から点在して出土している。24は内面に横方向のミガキが施された浅鉢である。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。25は焼成粘土塊である。26は安山岩製の打製石斧である。27は磨石類である。敲打痕が認められる。



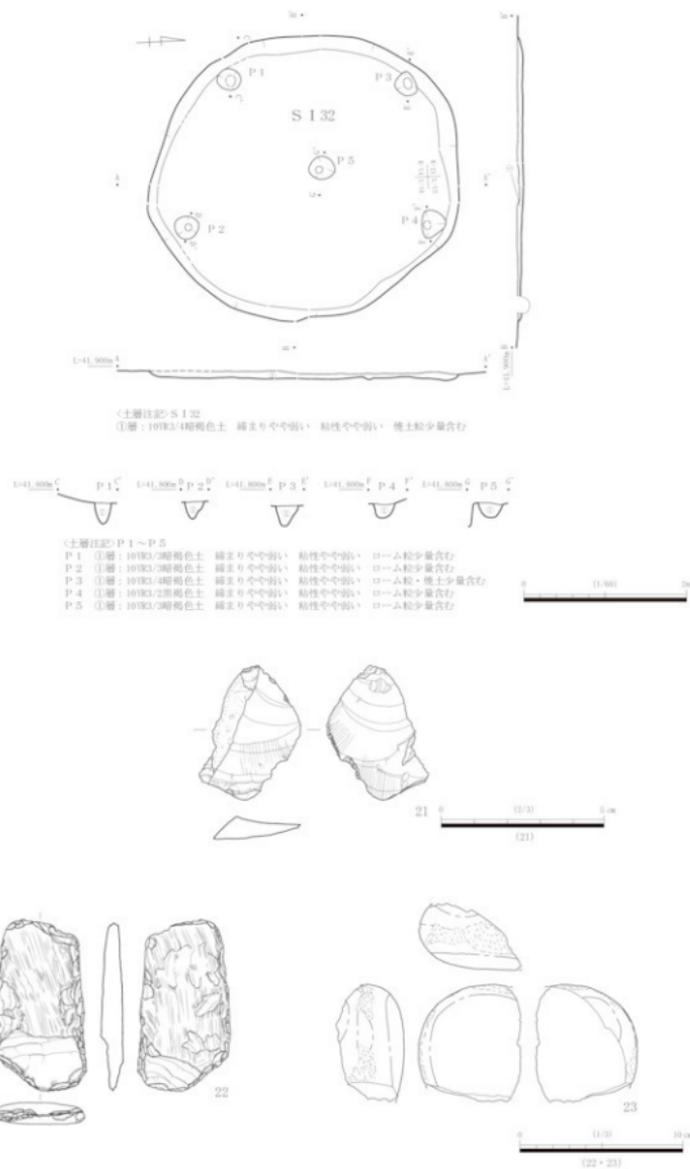
第17図 S I 31・41 遺構・出土遺物実測図



〈土層記号〉S I 42
 (土層：10YR5/3暗褐色土 粘りややぬい、粘性やや弱い、ブロック(1～3mm)を少量含む)



第18図 S I 42 遺構・出土遺物実測図

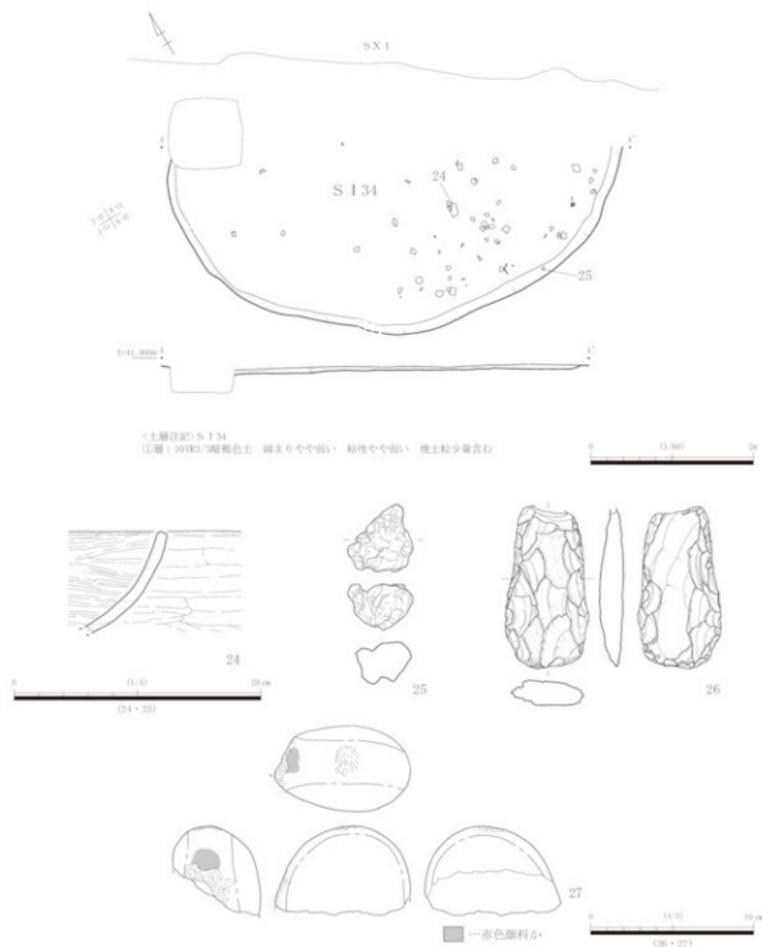


第19図 S 132 遺構・出土遺物実測図

S I 40 (第21図)

S I 40はJ 12・13、K 12・13に位置する。建物北側がS I 34及びS X 1と重複している。先後関係はS I 40→S I 34→S X 1である。遺構規模は長軸約4.92m、検出面からの深さ0.08mを測り、平面形態は楕円形を呈するものと思われる。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を2基検出した。深さは約28～32cmを測り、P 1～P 2は建物壁際に配置されている。

遺物は覆土から石器が1点出土している。28は緑色片岩製の打製石斧である。

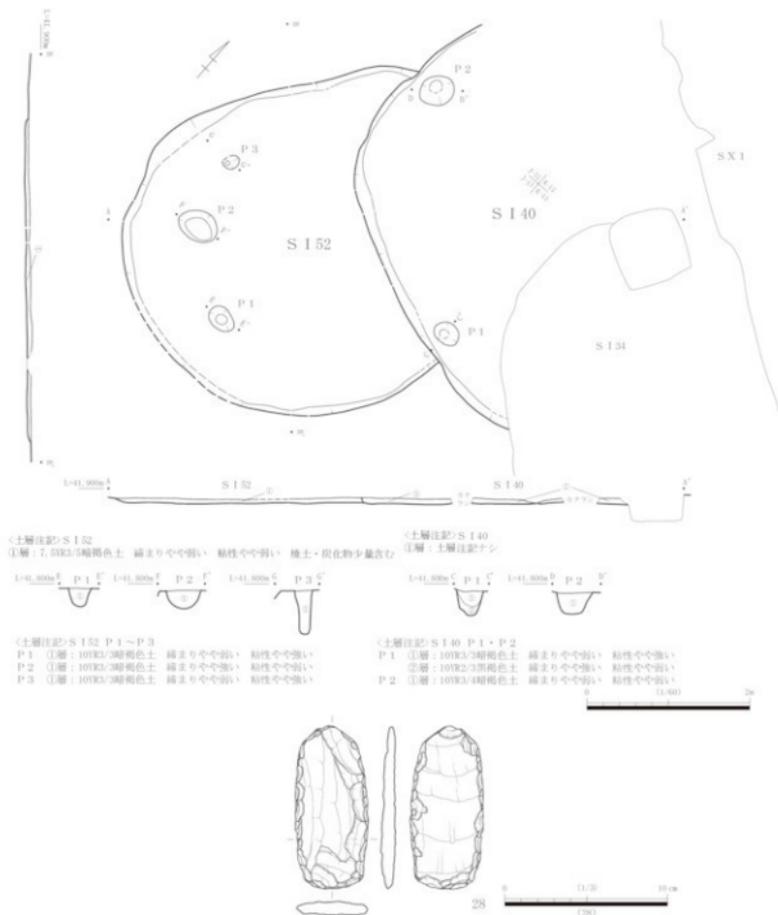


第20図 S I 34 遺構・出土遺物実測図

S I 52 (第21図)

S I 52 は J 13、K 13 に位置する。建物北東側が S I 40 と重複している。先後関係は S I 52 → S I 40 である。遺構規模は長軸推定 4.74 m、短軸約 4.08 m 検出面からの深さ 0.08 m を測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は 1 層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を 3 基検出した。深さは約 22 ~ 54 cm を測り、P 1 ~ P 3 は建物壁側に配置されている。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の遺構と推定している。



第21図 S I 40・52 遺構・出土遺物実測図

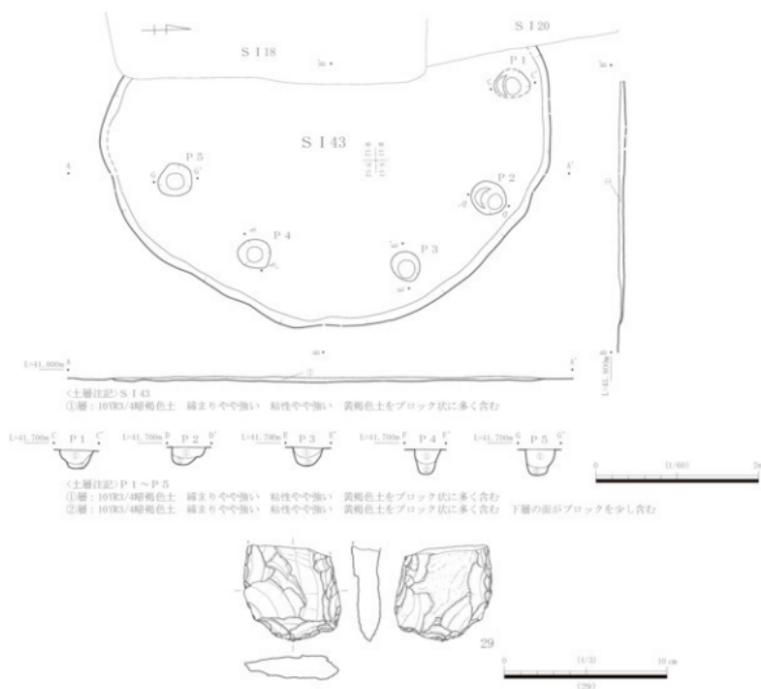
S I 43 (第22図)

S I 43はM 11・12、N 11・12に位置する。建物西側がS I 18及びS I 20と重複している。先後関係はS I 43→S I 20→S I 18である。遺構規模は長軸約5.34 m、検出面からの深さ0.06 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を5基検出した。深さは約21～30cmを測り、いずれも建物壁際に配置されている。

遺物は覆土から石器が1点出土している。29は安山岩製の打製石斧である。

S I 44 (第23図・第24図)

S I 44はN 11・12、O 11・12に位置する。建物東側がS I 15及びS I 11と重複している。先後関係はS I 44→S I 15→S I 11である。遺構規模は長軸約5.86 m、短軸推定4.86 m、検出面からの深さ0.06 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として土坑1基、柱穴を4基検出した。柱穴は深さ約28～40cmを測り、いずれも建物壁際に配置されている。



第22図 S I 43遺構・出土遺物実測図

遺物は覆土から点在して出土している。ここでは土器3点、石器3点を図示した。なお、P2から貝殻条痕文系の土器片が1点出土しているが、他の遺構や遺物の状況から縄文時代後期後半から晩期前半の遺構と考えられている。30は頸部と口縁部が一体化し短くなっている浅鉢である。内外面ともに横方向のミガキが施されている。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。31は深鉢の胴部から底部である。外面は粗い横方向のケズリが施されているが底部に組織痕が残っている。縄文時代晩期前半以降と思われる。32は口縁部外面に横方向の貝殻条痕文、内面に縦方向のミガキが施されている。縄文時代早期のものと思われる。33は黒曜石製の石核である。34はチャート製の磨製石斧である。35は磨石類である。敲打痕が認められる。

S I 45 (第24図)

S I 45はO 12、P 11・12に位置する。建物西側がS D 1と重複している。先後関係はS I 45→S D 1である。遺構規模は長軸約4.92m、検出面からの深さ0.14mを測り、平面形態は楕円形を呈するものと推定される。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、舟跡等は検出できなかった。

遺物は覆土から点在して出土している。ここでは土器4点、石器1点を図示した。36は頸部と口縁部が一体化し短くなっている浅鉢である。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。37は深鉢である。口縁部に7～8条の沈線がめぐる。胴部内面での頸部と胴部の境はない。38・39は深鉢の底部と思われる。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。40は黒曜石製の使用痕のある剥片である。

S I 47 (第25図)

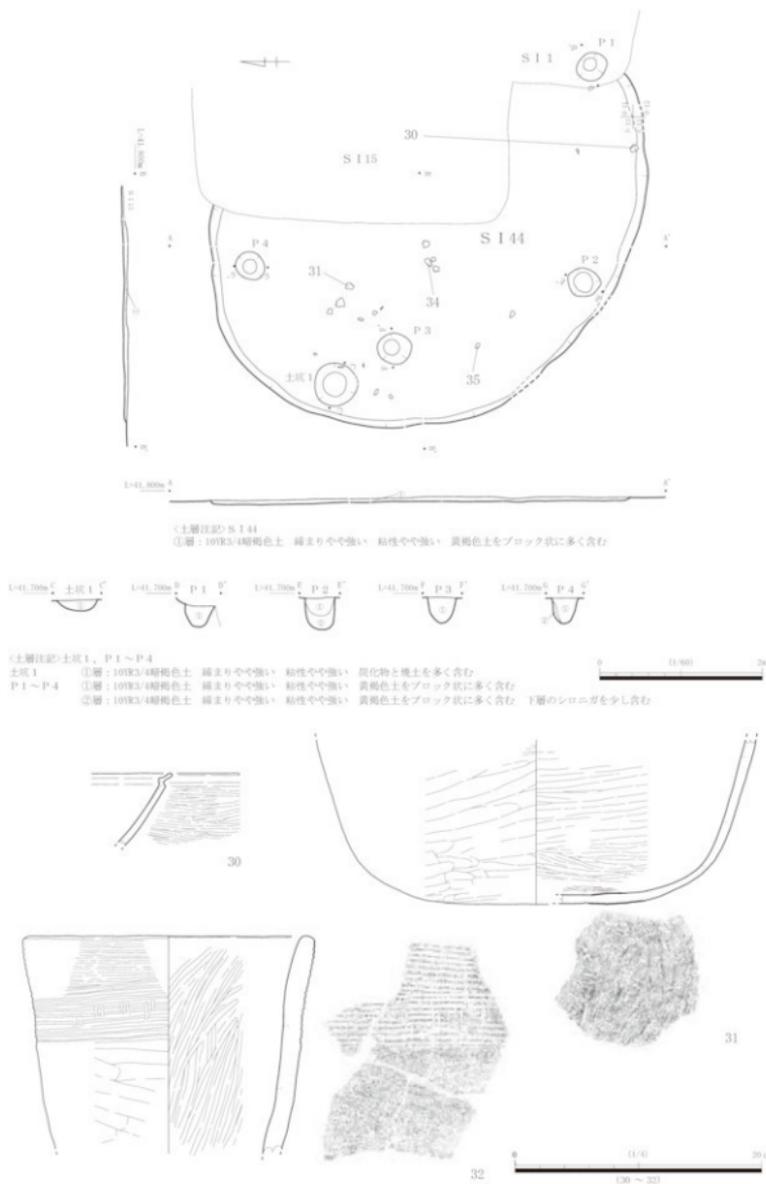
S I 47はP 12・13に位置する。遺構規模は長軸約5.34m、検出面からの深さ0.12mを測り、平面形態はややいびつな円形を呈するものと推定される。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を3基検出した。柱穴は深さ約18～22cmを測る。柱穴はS I 43・44のように建物壁際に配置されることはない。

遺物は覆土から点在して出土している。ここでは土器2点、石器1点を図示した。41は頸部と口縁部が一体化し短くなっている浅鉢である。口縁部内面に沈線が1条めぐる。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。42は深鉢である。口縁部には沈線状の条痕が施されている。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。43は黒曜石製の使用痕のある剥片である。

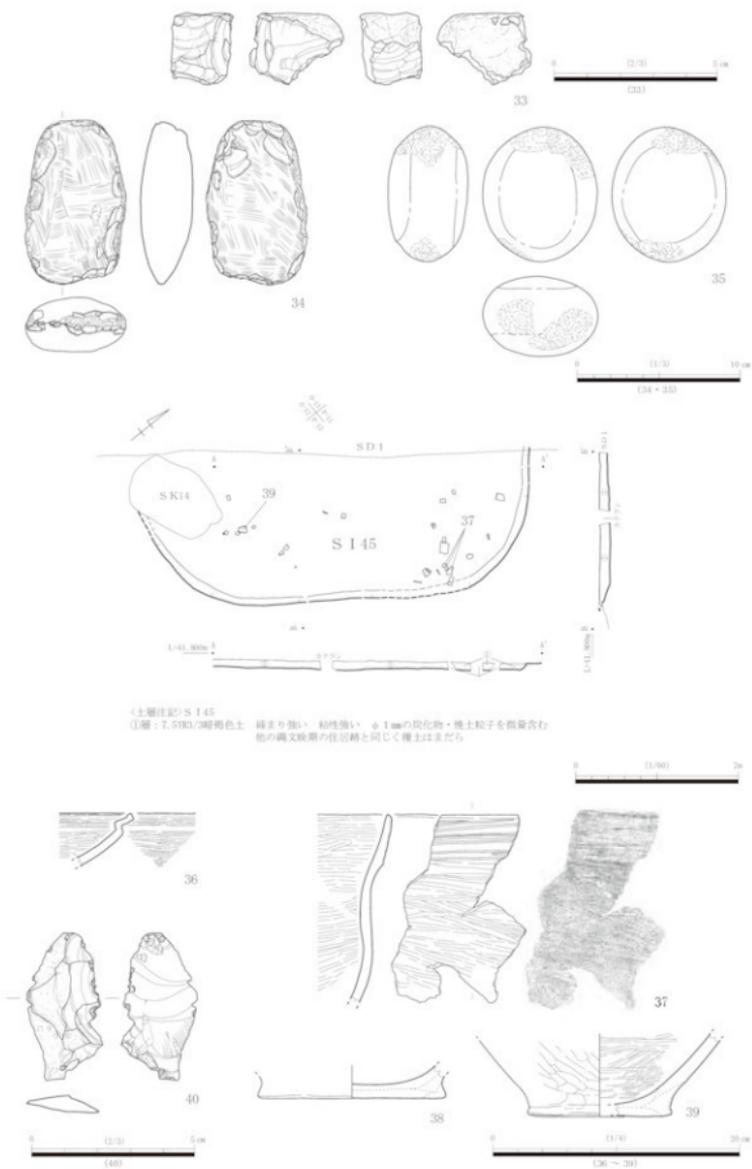
S I 57 (第25図)

S I 57はR 10・11、S 10・11に位置する。建物北東側がS I 10と重複している。先後関係はS I 57→S I 10である。遺構規模は長軸約5.42m、短軸約4.02m検出面からの深さ0.08mを測り、平面形態はややいびつな楕円形を呈するものと推定される。建物覆土は1層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を1基検出した。柱穴は深さ約18cmを測る。柱穴はS I 43・44のように建物壁際に配置されることはない。

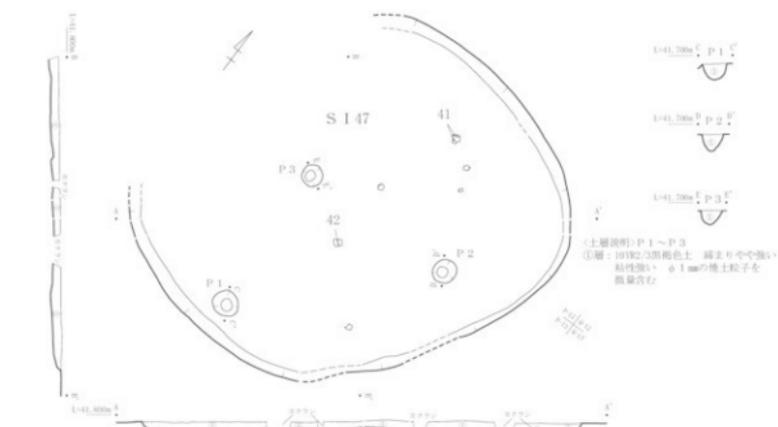
実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代後期後半から晩期前半の遺構と推定している。



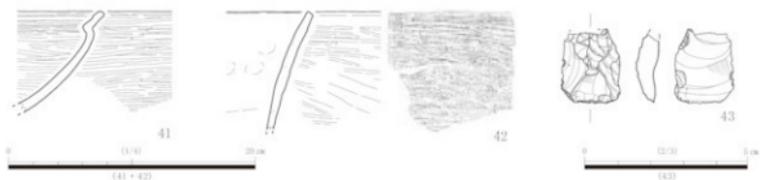
第23図 S144遺構・出土遺物実測図1



第24図 S144・45遺構・出土遺物実測図



〈土層注記〉S147
①層：7.5YR2/3赤褐色土 締まり強い・粘性強い、φ1mmの焼土粒子・炭化物を微量含む。他の縄文晩期の住居跡と同じく焼土はまだら。



第25図 S147・57 遺構・出土遺物実測図

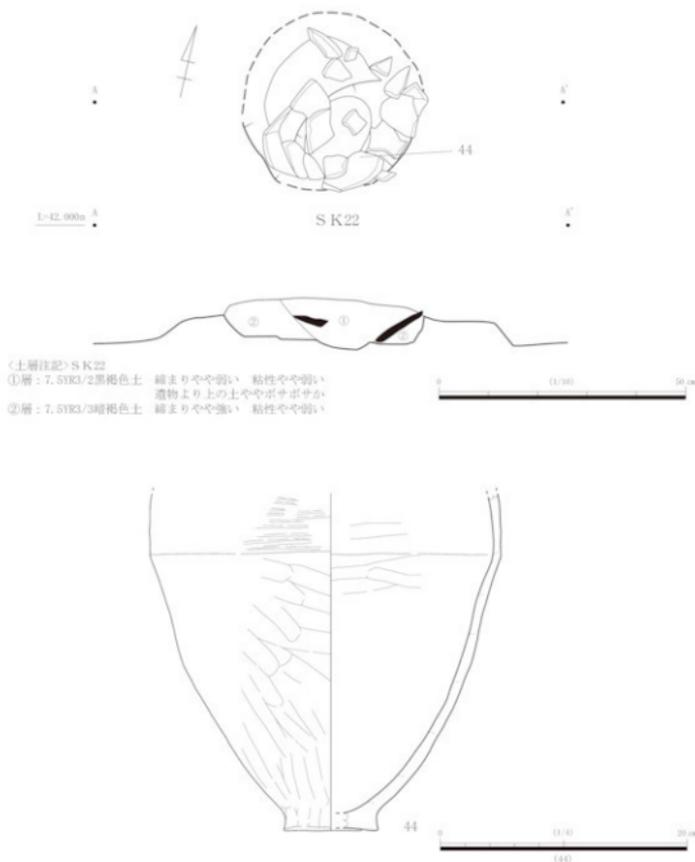
④土器埋設遺構

S K 22 (第26図)

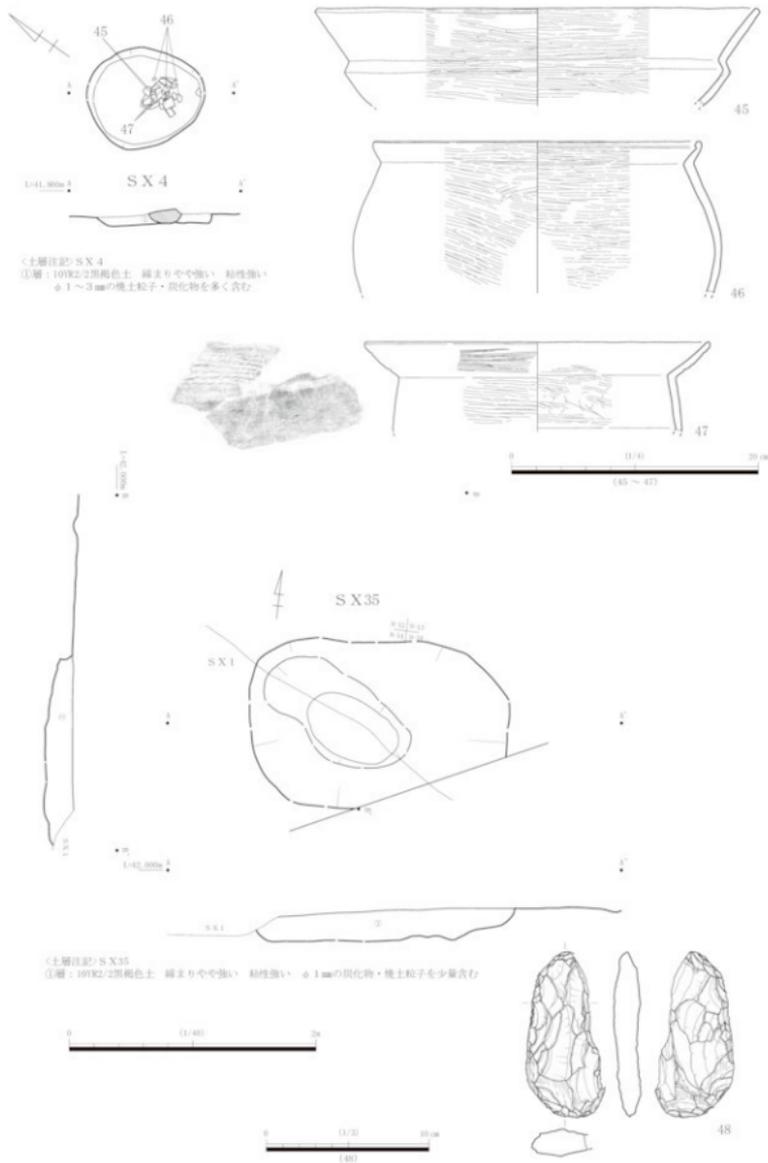
S K 22 はM 14 に位置する。上面は削平されているが、掘方のある土器埋設遺構である。

遺構規模は直径約0.36 m、検出面からの深さ0.12 mを測り、平面形態は円形、断面形態は台形を呈する。覆土は2層とした。掘方内にほぼ垂直に据えられていた。口縁部から胴部上半を欠いているが、もともと欠いているのか、削平等により欠けているのか判断としない。

44 は胴部上半から底部が残存していた。胴部屈曲部に横方向の条痕が施されている。内面はナデが丁寧に施されている。外面の調整は粗い。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。



第4章 調査の成果



第27図 SX4・35遺構・出土遺物実測図

⑤不明遺構

S X 4 (第27図)

S X 4はN 12に位置する。上面は削平されているが、掘方のある遺構である。S K 22や調査3区で検出した土器埋設遺構と異なり、複数個体の土器片が出土しているが、本項目で説明することとした。

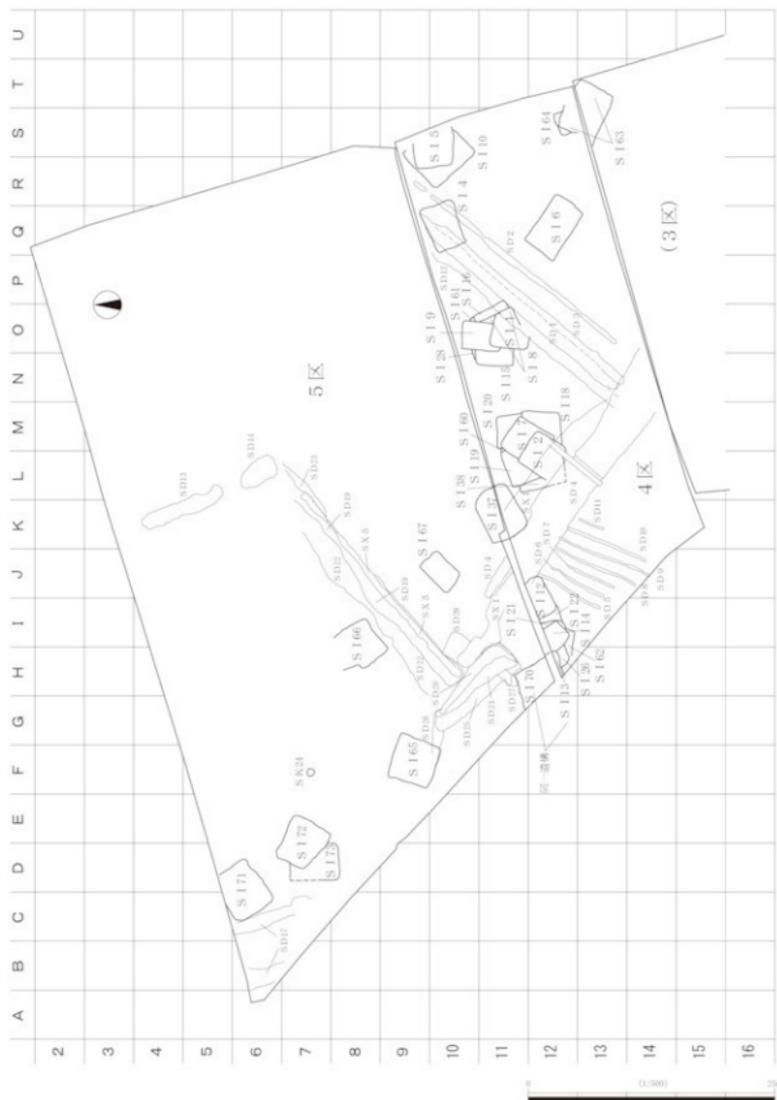
遺構規模は長軸約0.96 m、短軸約0.82 m検出面からの深さ0.08 mを測り、平面形態はやや楕円形、断面形態は台形を呈する。覆土は1層とした。

45は口縁部から胴部下半が残存していた。浅鉢と思われる。大きく開く直行口縁をもつ。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。46は頸部がかなり短い大形の鉢と思われる。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。47は口縁部から胴部上半が残存していた深鉢と思われる。口縁部はやや内湾ぎみにひらく。口縁部には沈線状の条痕が施されている。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

S X 35 (第27図)

S X 35はN 14、O 14に位置する。上面は削平されている。最後まで遺構なのか自然の窪みなのか判然としなかったが、ここでは遺構として報告する。遺構規模は長軸約2.1 m、短軸約1.36 m検出面からの深さ0.26 mを測り、平面形態は楕円形、断面形態は台形を呈する。覆土は1層とした。

覆土から48の頁岩製の打製石斧が出土している。



第28図 4・5区遺構配置図(弥生時代)

(2) 弥生時代後期の遺構・遺物(第28図～第73図)

調査4区・5区における弥生時代の主要な検出遺構は、竪穴建物33軒、土坑1基である。時期は弥生時代後期前半から後半が主体と想定される。ただし、調査4区に竪穴建物が集中しているのは、調査5区が開田事業により大きく削平されたことに起因しており、本来の遺跡の状況を表しているとは考えていない。

なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているが、それでも正確に把握できなかったものがある。そのため、遺構の重複関係に曖昧な部分が残りと、遺物の帰属遺構に正確さを欠いている箇所がある。反省すべき点が多い調査となってしまった。

また、遺構内の出土遺物は可能な限り出土位置の三次元情報を記録し取り上げたが、報告書にはドットマップを掲載することができなかった。所見にはその成果をできるだけ生かすこととしたが、客観的に提示することができていない。しかも、職員の異動に伴い年度ごとに整理担当者が代わっている関係で、遺物の選び出しを行った者と執筆者が異なっている。そのため、本来掲載すべきと思われる遺物をカバーできていない可能性がある。所見執筆時に若干補っているが、不十分なところが多々ある。どうか、ご容赦願いたい。

①竪穴建物跡

S I 1 (第29図)

S I 1はO 11・12に位置する。S D 1やS K 2などにより、建物南東側約1/4が破壊されている。遺構の規模は長軸約3.90m、短軸約3.38m、検出面からの深さ0.22mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は1層とした。建物に伴う遺構として柱穴を3基検出した。深さは約18～36cmを測る。建物北東側に柱穴を1基推定できるが、後世の土坑により攪乱されている。炉跡やベッド状遺構は確認できなかった。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の遺構と推定している。

S I 9 (第29図)

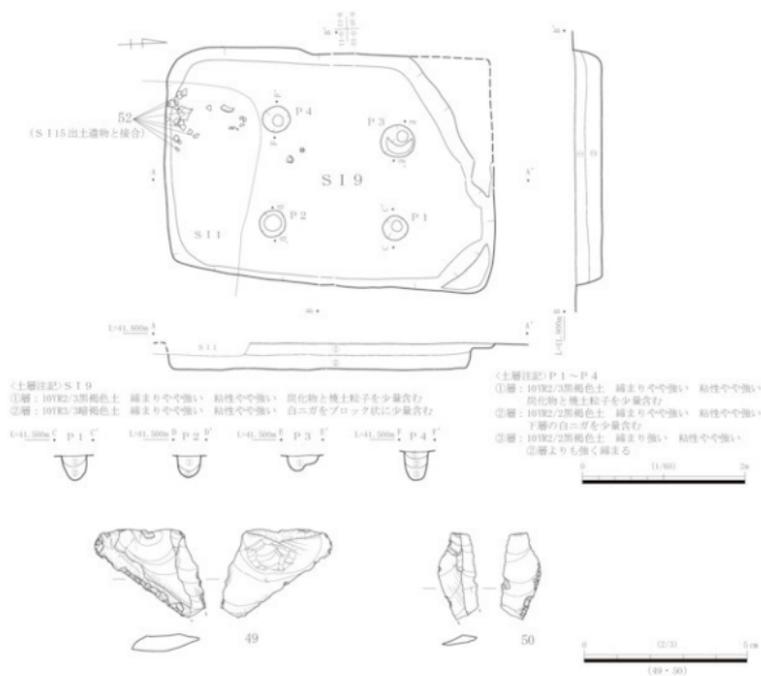
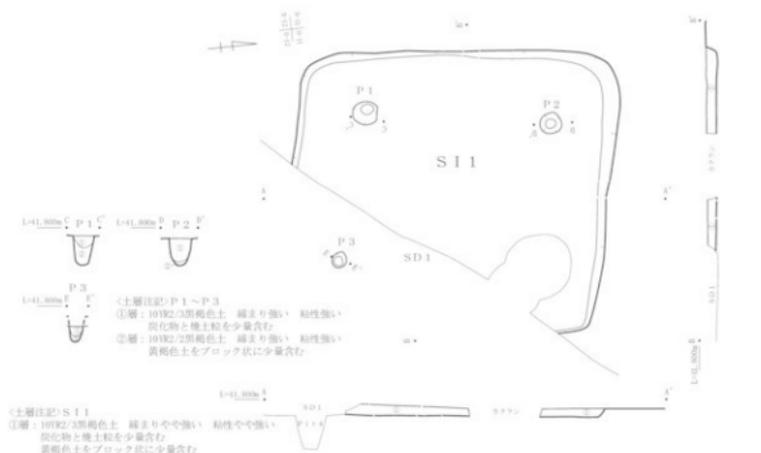
S I 9はO 10・11に位置する。建物南側約1/5がS I 1と重複している。先後関係はS I 9→S I 1である。遺構の規模は長軸約4.0m、短軸約2.84m、検出面からの深さ0.40mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は2層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは約20～35cmを測る。建物北東側と北西側にベッド状の高まりを確認した。炉跡は検出していない。

出土遺物は少し気にはなるが、S I 1と重複する建物南側でまとまって出土している。ここでは石器2点を図示したがいずれも流れ込みと思われる。49・50は黒曜石製の使用痕のある刮片である。

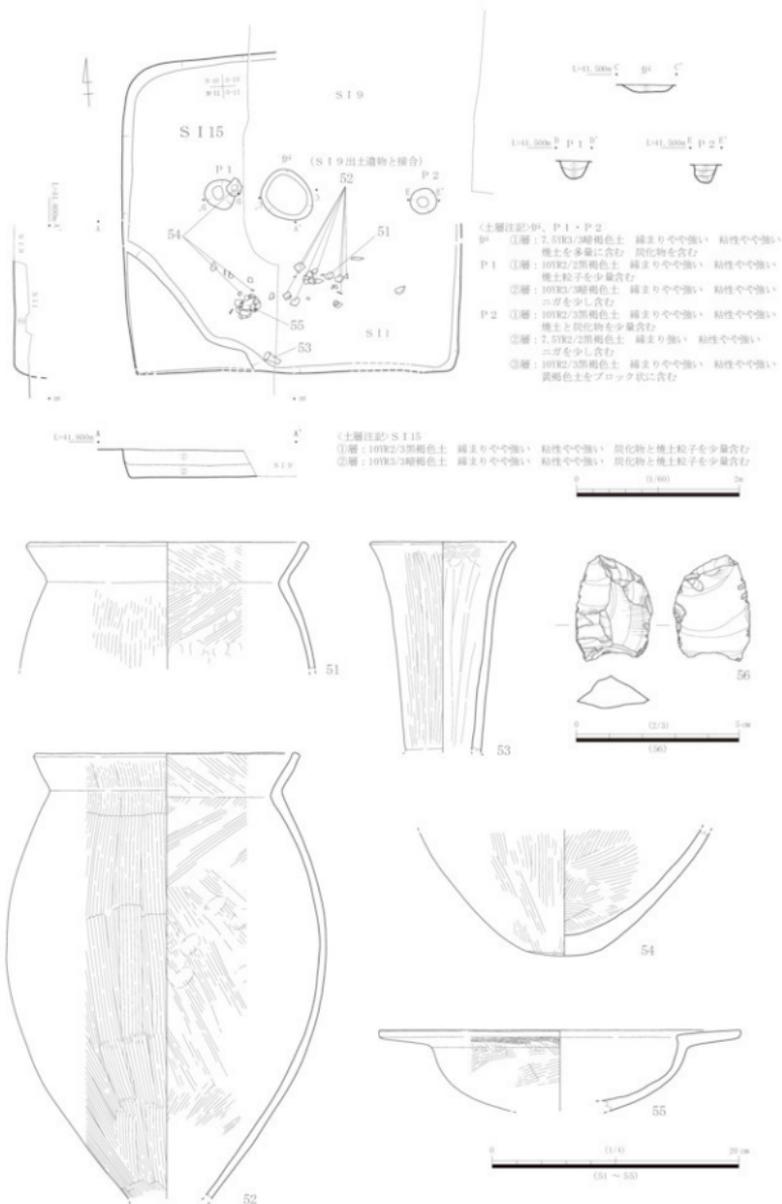
S I 15 (第30図)

S I 15はN 10・11、O 10・11に位置する。建物東側約1/2がS I 9とS I 1と重複している。重複が激しいが、先後関係はS I 15→S I 9→S I 1と捉えている。遺構の規模は長軸約4.22m、短軸約3.98m、検出面からの深さ0.44mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は2層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を2基検出した。深さは約22cmを測る。建物南西側にベッド状の高まりを確認した。建物中央で炉跡を1基検出している。

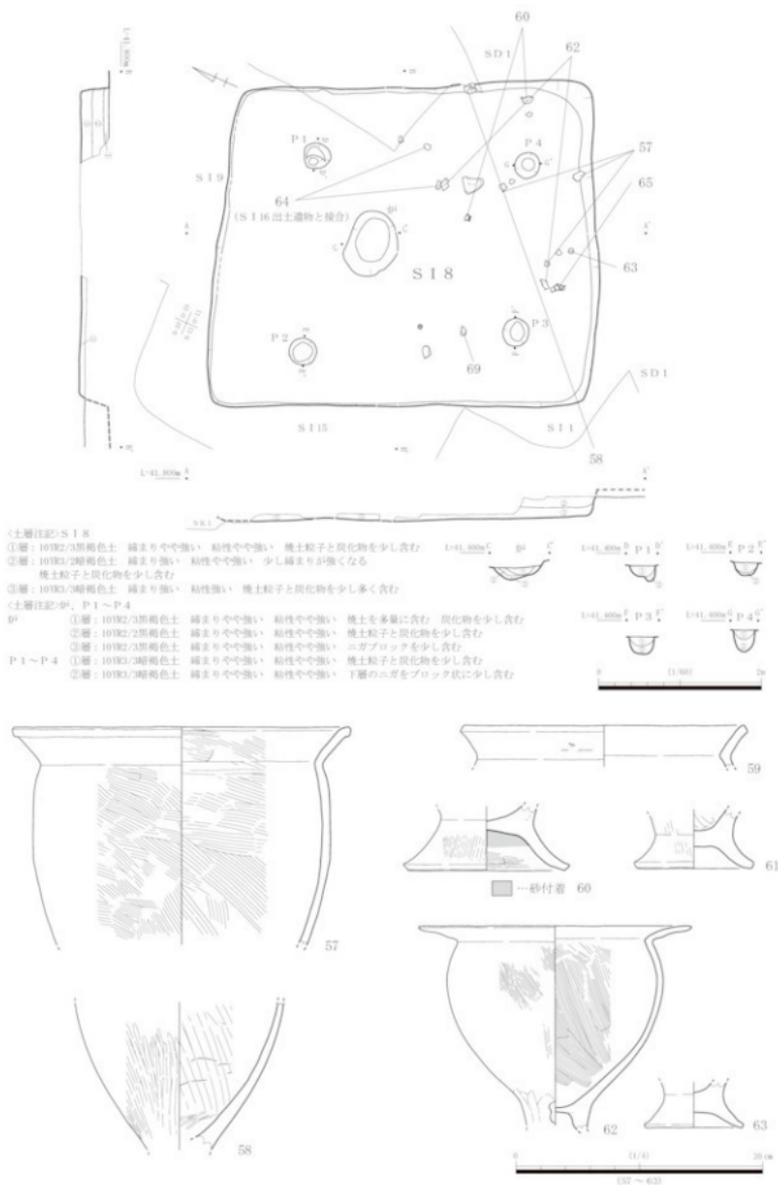
出土遺物は、建物跡南側の下層でややまとまって出土している。51・52は竈である。51は口縁部から胴部上半まで、52は口縁部から胴部下半まで残存していた。いずれも口縁部は内湾ぎみに開き、胴部中位に最大径をもつ。外面はハケ目と横ナデ、内面はハケ目のち横ナデを施している。52は重複関係のないS I 10出土遺物と接合関係にある。脚台付の竈と思われる。53・54は竈である。53は長頸壺の頸部であり、外面に縦のミガキが施されている。54は胴部下半から底部内外面ともハケ目とナデが施されている。55は高坏で



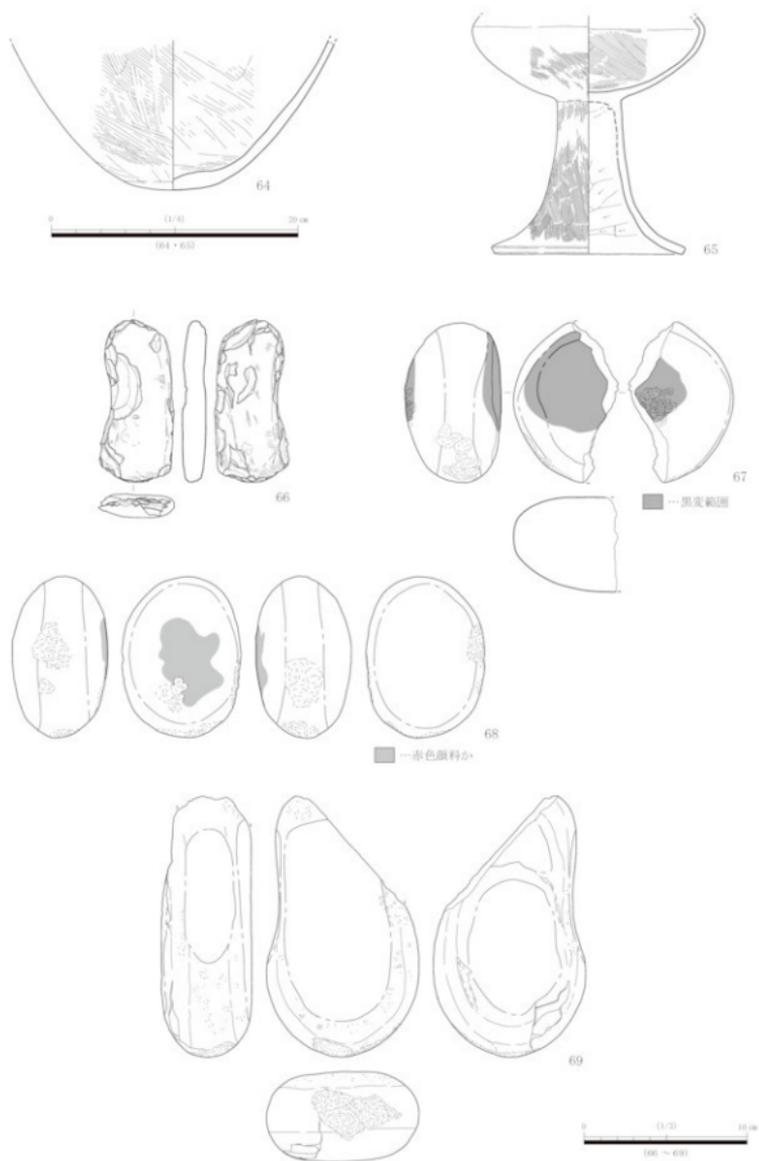
第29図 S11・9遺構・出土遺物実測図



第30図 S115遺構・出土遺物実測図



第31図 S18遺構・出土遺物実測図1



第32図 S18出土遺物実測図2

ある。脚部を欠いている。浅い坏部に、強く屈曲しほぼ水平に開く口縁を有する。内面は残りが悪く調整が不明瞭である。口縁部から坏部の屈曲部分にかけてやや粗いハケ目が施されている。重複関係のないS I 10出土遺物と接合関係にある。56は黒曜石製の使用痕のある剥片である。流れ込みと思われる。

S I 8 (第31図・第32図)

S I 8はN 11、O 11に位置する。建物北側がS I 9、南側がS I 1、南東側がS D 1と重複している。重複が激しいが、先後関係はS I 8→S I 15→S I 9→S I 1→S D 1と捉えている。遺構の規模は長軸約4.58m、短軸約3.90m、検出面からの深さ0.36mを測り、平面形態は隅丸のやや長方形を呈する。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは16～28cmを測る。建物中央やや北西寄りで跡を1基検出している。ベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は、建物東側で中層から下層にかけて点在して出土している。57～59は甕である。57は口縁部から胴部中位まで残存しており、胴部上位に最大径をもつ。外面は横ナデとハケ目、内面はハケ目と横ナデを施す。58は胴部中位から胴部下半まで残存しており、小形の脚台付きの甕と捉えた。59は口縁部破片である。60・61は甕の脚台部であり、裾部が外側に開く。いずれも高さは低い。62は台付鉢もしくは高環と思われる。深い胴部に、強く屈曲し大きく開く口縁部を有する。内面にハケ目が明瞭に残っている。63は甕もしくは鉢の脚台部である。64は甕であり、外面に粗いハケ目が施されている。65は高環と思われる。坏部にわずかに屈曲部が残存している。坏部から脚部外面に横ナデと縦のハケ目を施している。66は緑色片岩製の磨製石斧である。67～69は磨石類である。敲打痕が認められる。

S I 16 (第33図)

S I 16はO 10・11に位置する。建物西側約4/5がS I 8と重複している。先後関係はS I 16→S I 8と捉えている。遺構の規模は長軸約3.6m、柱穴の位置からの推定で短軸約2.8m、検出面からの深さ0.36mを測り、平面形態は柱穴の位置から隅丸長方形と推定した。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは14～20cmを測る。跡やベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は、S I 8と重複していない建物東側の下層で点在して出土している。70・71は甕の脚台部である。脚の裾部が外側に開き、器高は低い。全体的厚く、外面にハケ目ののち横ナデが施される。72は粘板岩製の石応丁であり、ふたつの孔は両側から穿たれている。73は磨石類である。敲打痕が認められる。

S I 61 (第33図)

S I 61はO 10に位置する。建物の大部分がS I 16やS I 9と重複しているため残りは非常に悪い。S I 16調査時の掘り残しの可能性も考えたが、S I 16の柱穴の位置や想定される建物規模等から別遺構と考えた。検出面からの深さ0.36mを測るが、残存状況が悪いため、建物規模、平面形態、付属施設はわからない。建物覆土は3層に分けることができる。

実測可能な遺物はなかったため、検出面からの深さや覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

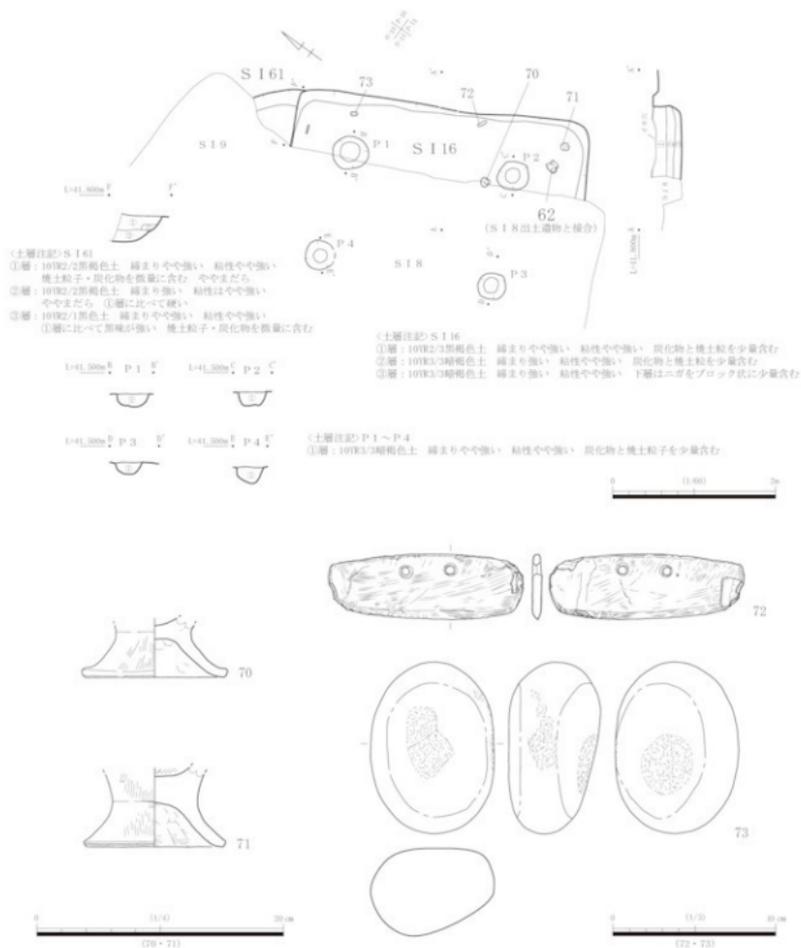
S I 28 (第34図)

S I 28はN 10・11、O 10・11に位置する。建物の大部分がS I 16やS I 9と重複しているため残りは非常に悪い。遺構の規模は柱穴と跡の位置から推定して長軸約4.60m、短軸約3.80m、検出面からの深さ0.14mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈するものと推定した。建物覆土は1層とした。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは16～22cmを測る。建物中央で跡を1基検出している。

実測可能な遺物はなかったため、検出面からの深さや覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

S12 (第35図)

S12はL11・12、M11・12に位置する。建物の大部分がSD4と重複しているため残りは非常に悪い。遺構の規模は長軸約3.84m、短軸約3.78m、検出面からの深さ0.40mを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は4層に分けることができる。本遺構は現地調査時に2時期あると考えられた。建物壁際に深さ



第33図 S116・61 遺構・出土遺物実測図

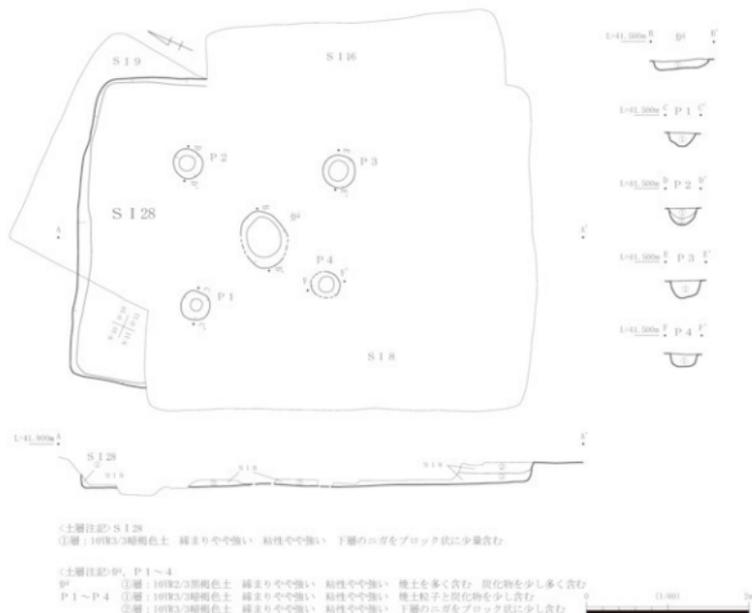
約20～32cmの柱穴が4基配置される竪穴が使用されたのち、建物北西側にベッド状遺構を構築し、深さ約18～24cmの柱穴が4基配置される竪穴となる。硬化面は認められなかったが、やや締まった土が広がっていたため、その面を床面とし2時期と推測している。

74は龕の脚台部である。内外面はハケ目と横ナデが施される。75はチャート製の打製石鏃。76は砂岩製の磨製石斧である。77は磨石類である。敲打痕が認められる。

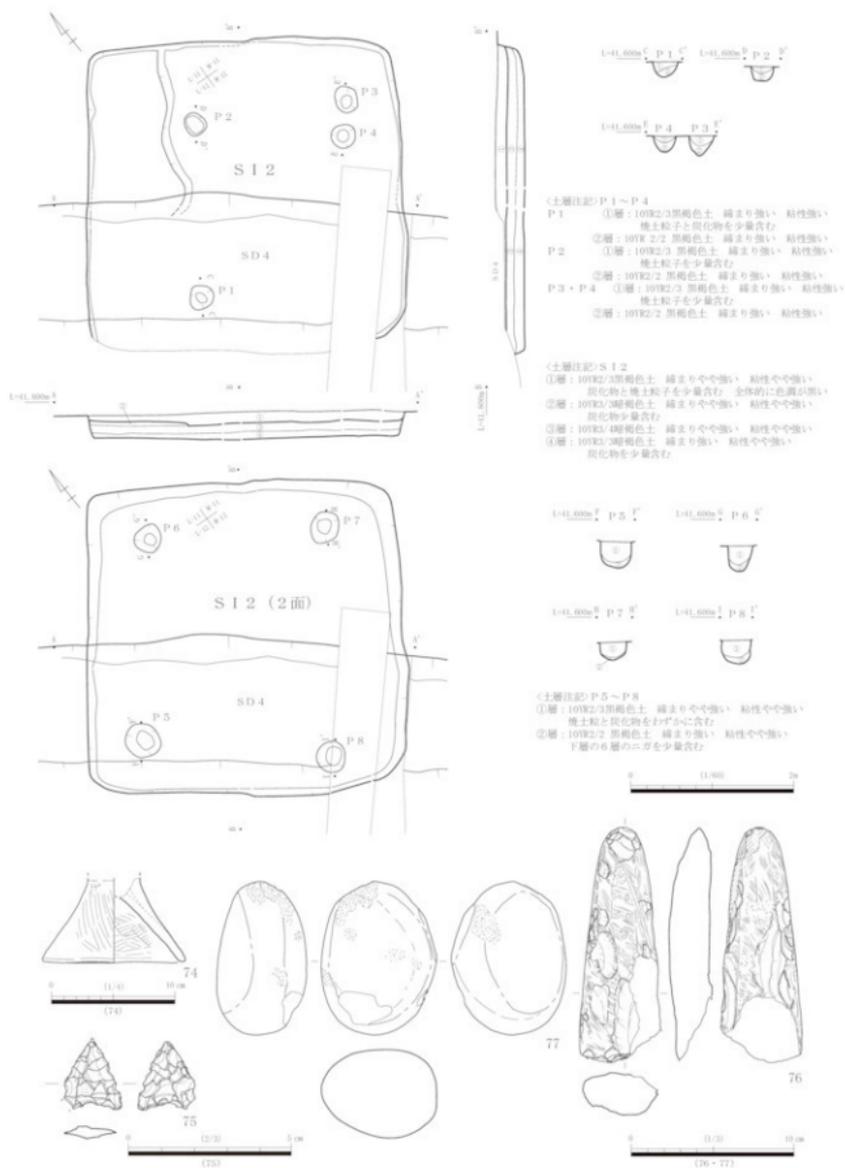
S I 7 (第36図)

S I 7はL 11・12、M 11・12に位置する。建物南西側約1/2がS I 2と重複している。先後関係はS I 7→S I 2と捉えている。遺構の規模は長軸約4.22m、短軸約3.82m、検出面からの深さ0.58mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形と呈する。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を5基検出した。深さは約22～34cmを測る。P4は他の柱穴との位置関係から主柱穴とは別と思われる。跡やベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は覆土上層で出土している。78は鉢もしくは壺の口縁部から胴部上半である。内外面は横ナデが施される。79は黒曜石製の打製石鏃、80は安山岩製の打製石斧、81は緑色片岩製の磨製石斧である。



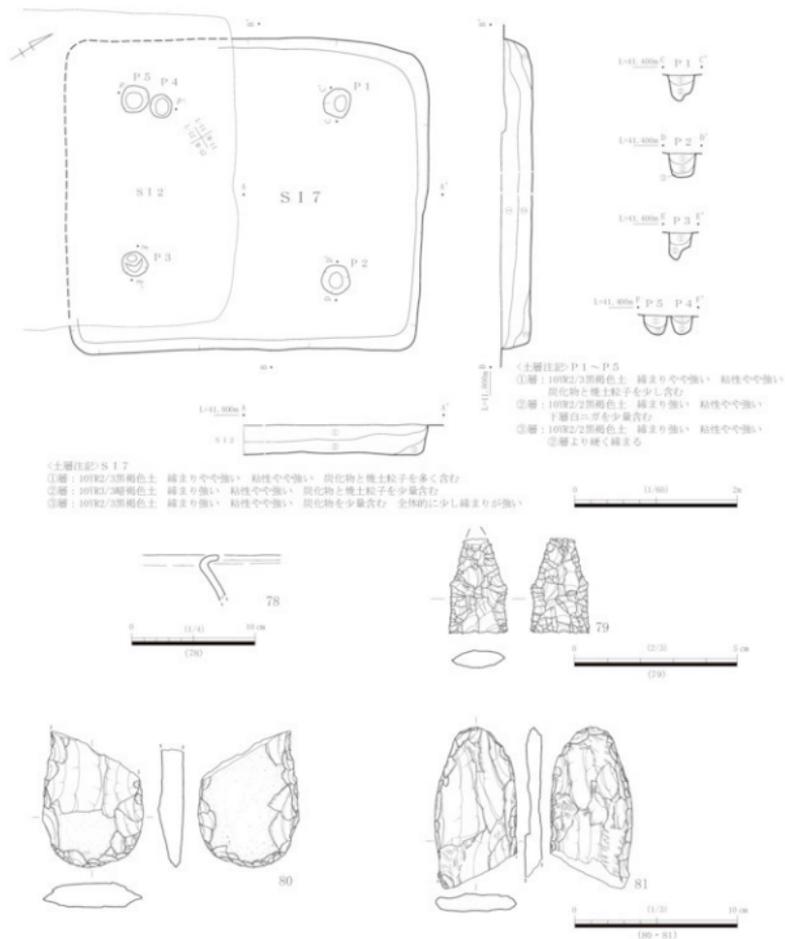
第34図 S I 28 遺構実測図



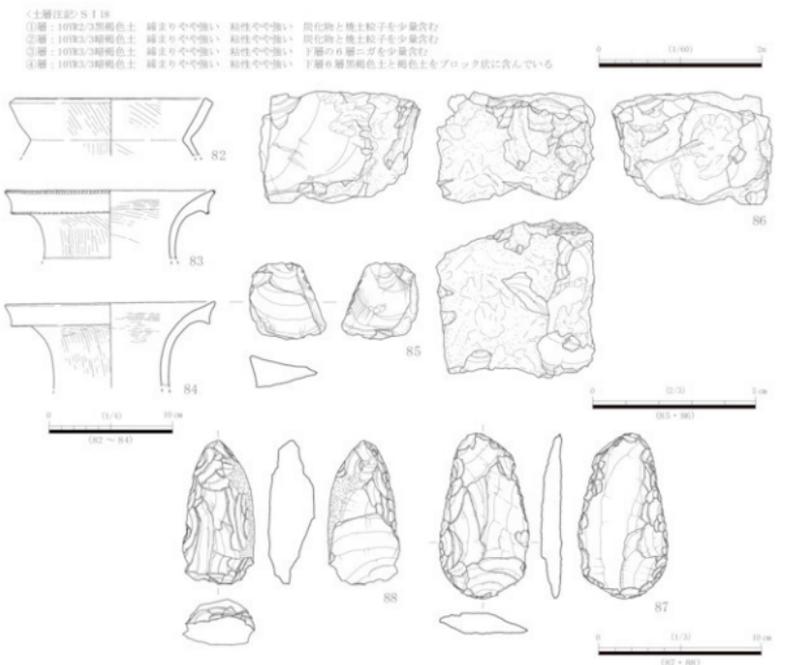
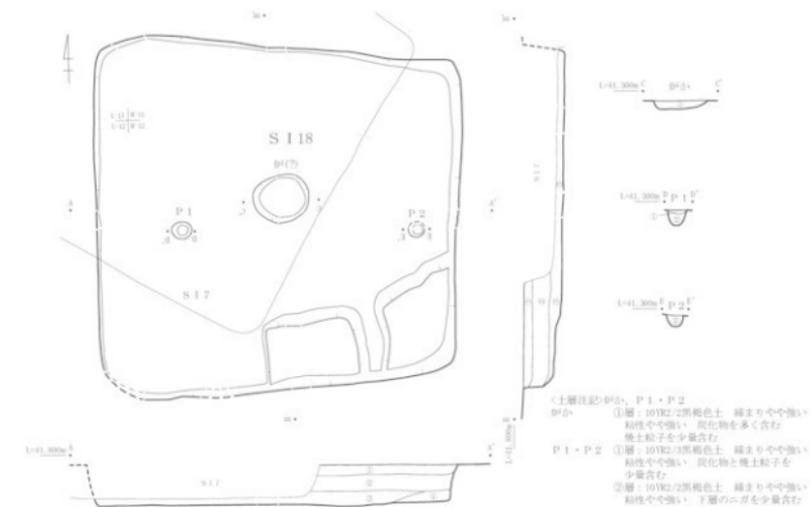
第35図 S12遺構・出土遺物実測図

S I 18 (第37図)

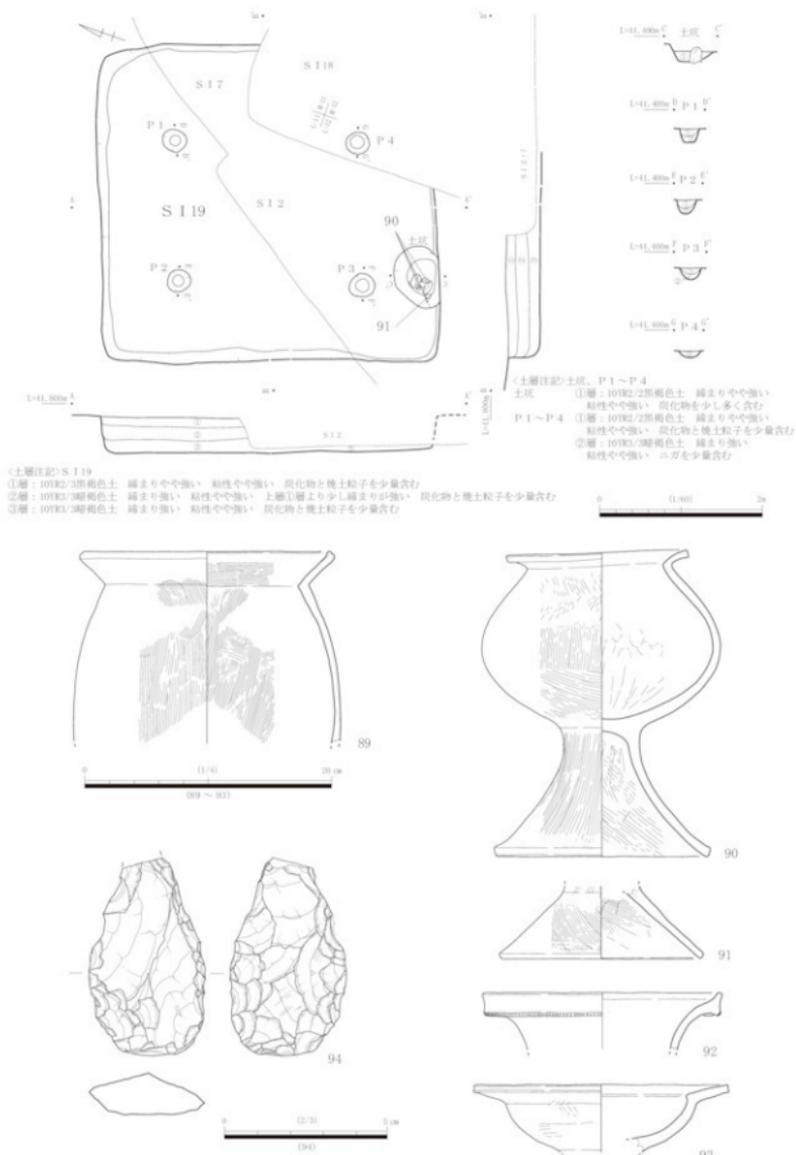
S I 18はL 11・12、M 11・12に位置する。建物北西側約1/2がS I 7と重複している。先後関係はS I 18→S I 7である。遺構の規模は長軸約4.42 m、短軸約4.19 m、検出面からの深さ0.50 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は4層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を2基検出した。深さは約14～18cmを測る。建物南東隅と南側にベッド状遺構を確認した。建物中央で碁跡と推定されるものを1基検出している。



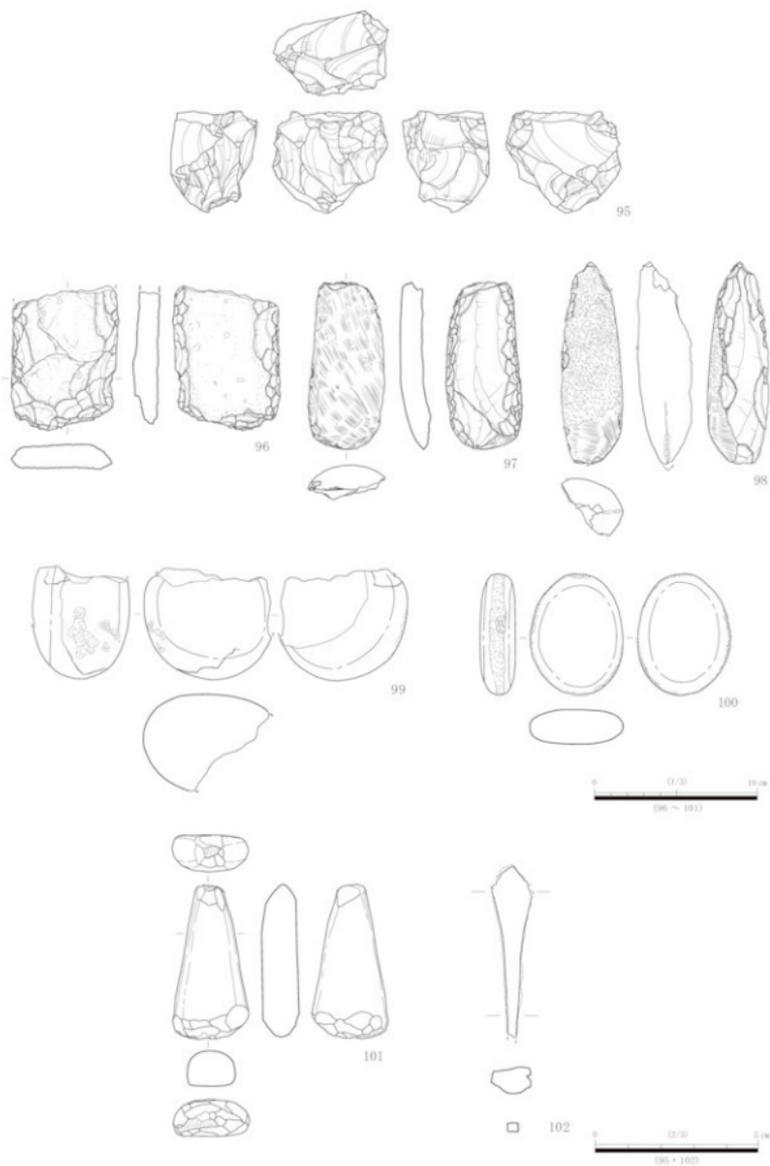
第36図 S I 7遺構・出土遺物実測図



第37図 S118 遺構・出土遺物実測図



第38図 S 119 遺構・出土遺物実測図1



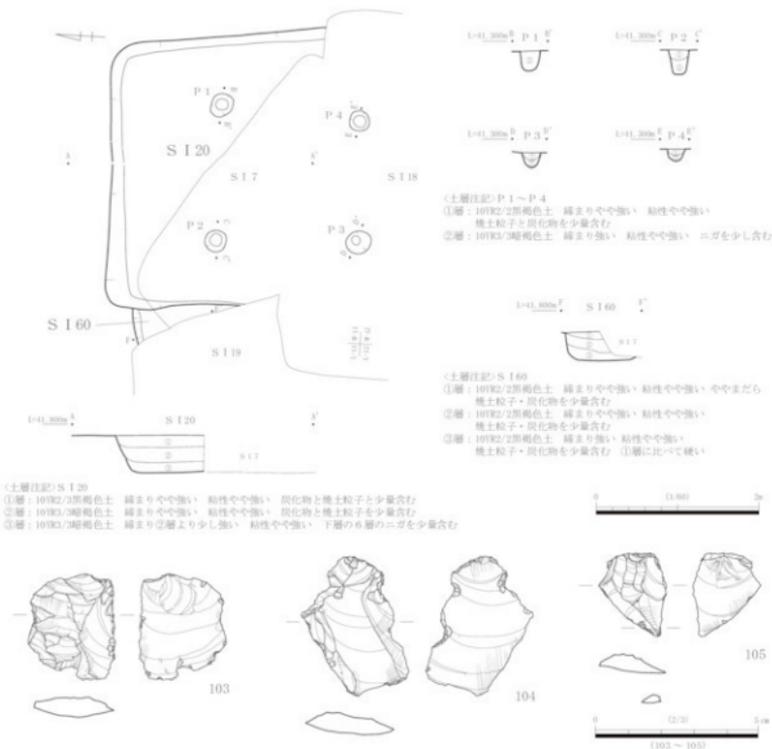
第39図 S I 19 出土遺物実測図2

出土遺物は覆土中層から下層で出土している。82は裏の口縁部である。内外面にハケ目と横ナデが施される。83・84は壺の口縁部から頸部である。外反する口縁部は肥厚して断面が三角形状をなす。83は上端と下端に刻み目を入れる。上端の刻み目の方が間隔は狭い。85は使用痕のある剥片、86は石核でいずれも黒曜石。87は安山岩製の打製石斧である。88は砂岩製の磨製石斧。

S I 19 (第38図・第39図)

S I 19はL 11・12、M 11・12に位置する。建物南東側約1/2がS I 7とS I 2と重複している。重複が激しいが、先後関係はS I 19→S I 7→S I 2と捉えている。遺構の規模は長軸約4.08 m、短軸約3.88 m、検出面からの深さ0.44 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは約8～17cmを測る。建物南側壁際に長軸約76cm、短軸約60cm、深さ約14cmの土坑があり、内部からほぼ完形の脚台付の鉢が倒れた状態で出土している。が跡やベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は覆土下層を中心に出土している。89は裏で、口縁部から胴部上半まで残存していた。口縁部は



第40図 S I 20・60 遺構・出土遺物実測図

頸部から直線的に開き、端部内面が少し縮んだようになる。内外面は横ナデとハケ目が施される。90は脚台付きの鉢である。口縁部は外反しており、口径が胴部径より小さい。胴部下位に最大径をもつ。91は鉢の脚台部と思われる。胴部との接合部が残っており、外側に直線的に開く。内外面にハケ目が明瞭に残っている。92は壺の口縁部から頸部である。外反する口縁部は肥厚して断面が三角形をなす。口縁下端のみ細かい刻み目を入れる。93は高杯の口縁部から杯部である。脚部との接合部が少し残っている。浅い杯部に、強く屈曲しほぼ水平に開く口縁を有する。内外面は横ナデとハケ目が施される。94は安山岩製のスクレイパー、96は安山岩製の打製石斧である。97・98は砂岩製の磨製石斧である。99・100は磨石類である。敲打痕が認められる。101は敲石である。102は有茎式の鉄鏝である。

S I 20 (第40図)

S I 20はM 11・12に位置する。建物南側約2/3以上がS I 18とS I 17と重複しているため、非常に残りが悪い。重複が激しいが、先後関係はS I 20→S I 18→S I 17と捉えている。遺構の規模は柱穴と竪跡の位置から推定して長軸約4.36 m、短軸約3.28 m、検出面からの深さ0.46 mを測り、平面形態は隅丸長方形と推定される。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは約15～30cmを測る。竪跡やベッド状遺構は見つけられなかった。

出土遺物は覆土中層から下層にかけて出土している。103～105はいずれも黒曜石の使用痕のある剥片である。

S I 60 (第40図)

S I 60はL 11、M 11に位置する。建物の大部分がS I 19やS I 20と重複しているため残りは非常に悪い。S I 17・19・20調査時の掘り残しの可能性も考えたが、柱穴の位置や想定される建物規模等から別遺構と推定したものである。検出面からの深さ0.36 mを測るが、残存状況が悪いため、他の建物規模、平面形態、付属施設はわからない。建物覆土は3層に分けることができる。

実測可能な遺物はなかったため、検出面からの深さや覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

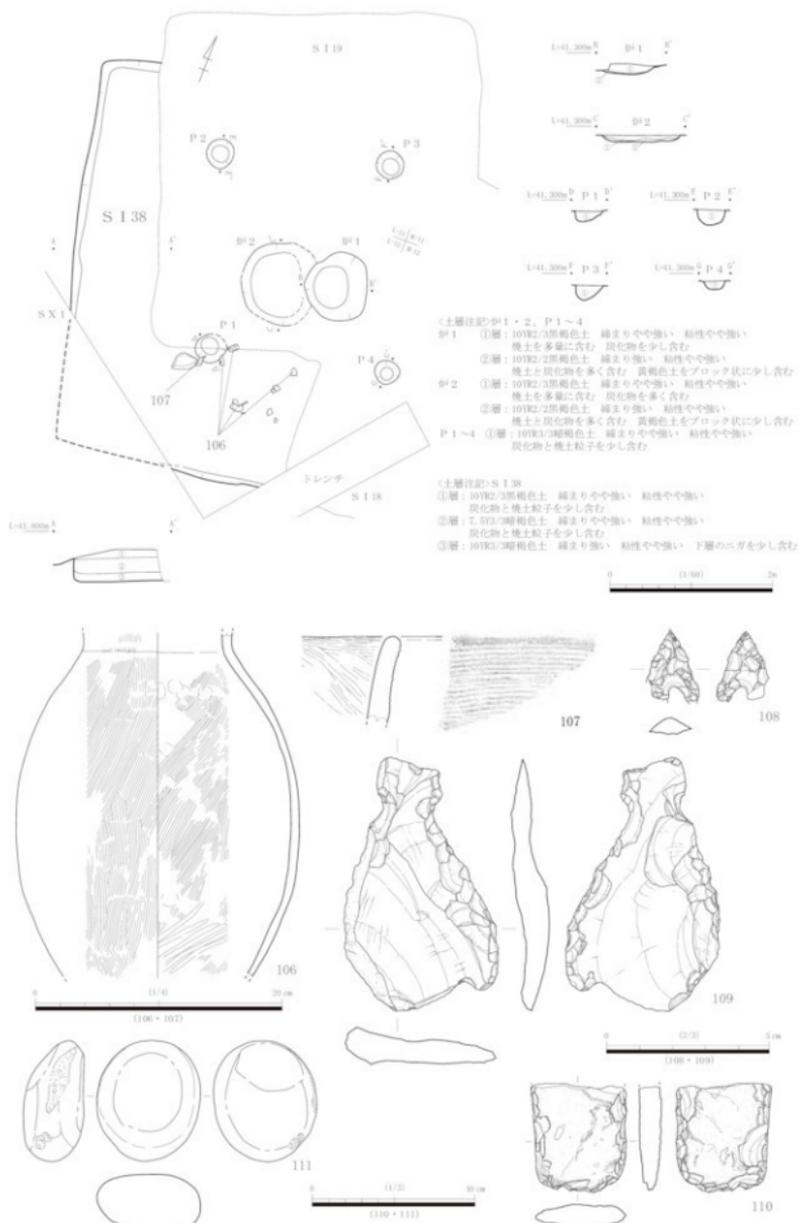
S I 38 (第41図)

S I 38はL 11・12、M 11・12に位置する。建物の大部分がS X 1、S D 4、試掘トレンチ、S I 2・7・18・19と重複しているため、非常に残りが悪い。重複が激しいが、先後関係はS I 38→S I 18・19→S I 7→S I 2→S D 4→S X 1と捉えている。遺構の規模は柱穴と竪跡の位置から推定して長軸約5.2 m、短軸約5.0 m、検出面からの深さ0.40 mを測り、平面形態は隅丸方形と推定される。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは約11～19cmを測る。竪跡は2基検出した。竪2のちが1が構築されている。残存していた範囲ではベッド状遺構は見つけられなかった。

出土遺物は覆土中層から下層にかけて出土している。106は壺である。頸部から胴部下半が残存している。外面にハケ目と横ナデ、内面にハケ目と横ナデが施される。一部ミガキらしきものも見られる。107は縄文時代早期貝殻条痕文系土器の深鉢の口縁部破片である。混入と思われる。108は黒曜石製の打製石鏝、109は安山岩製の石匙の未製品と思われる。110は安山岩製の打製石斧である。111は磨石類である。敲打痕が認められる。

S I 5 (第42図)

S I 5はR 9・10、S 9・10に位置する。建物東側に調査区外周トレンチ、試掘トレンチが入る。遺構の



第41図 S I 38 遺構・出土遺物実測図

規模は長軸約4.0m、短軸約3.5m、検出面からの深さ0.21mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は1層とした。S I 10上にそのまま取まる大きさのため、S I 10の覆土の広がり可能性も想定したが、土に締まりのある面で柱穴を検出したため、一つの竪穴建物跡と捉えた。建物に伴う遺構として柱穴を5基検出したが、他の重複関係が激しい竪穴建物と異なり規則性は認められない。深さは約14～25cmを測る。灰跡やベッド状遺構は検出されなかった。

112は黒曜石製の石錐である。混入と思われる。

S I 10 (第42図・第43図)

S I 10はR 9・10、S 9・10に位置する。建物東側に調査区外周トレンチ、試掘トレンチが入る。建物中央がS I 5と重複しているが、深さは浅い。遺構の規模は長軸約5.54m、短軸推定4.92m、検出面からの深さ0.54mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は13層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を4基検出した。深さは約65～90cmを測り、他の竪穴建物よりもしっかりとした柱穴であり、主柱穴と考えられる。浅い皿状の灰跡を建物中央東寄りで見出している。ベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は覆土上層から中層にかけて出土している。113・114は裏の脚台部と思われる。113は裾端部が外側に開く。外面に横ナデ、内面にハケ目と横ナデが施される。114は緩やかに外反し広がる。内外面にハケ目と横ナデが施される。115は黒曜石の石核、116は磨石類である。敲打痕が認められる。

S I 6 (第44図)

S I 6はP 12、Q 11・12に位置する。遺構の規模は長軸約5.88m、短軸約3.46m、検出面からの深さ0.46mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を2基検出した。深さは約62～68cmを測り、主柱穴と考えられる。建物中央に灰跡を1基検出した。南東側にベッド状遺構を2箇所検出した。北西側にもベッド状の高まりを確認したが、他のベッド状遺構に比べて極めて小規模なため、ベッド状遺構と呼ぶのはためらわれる。

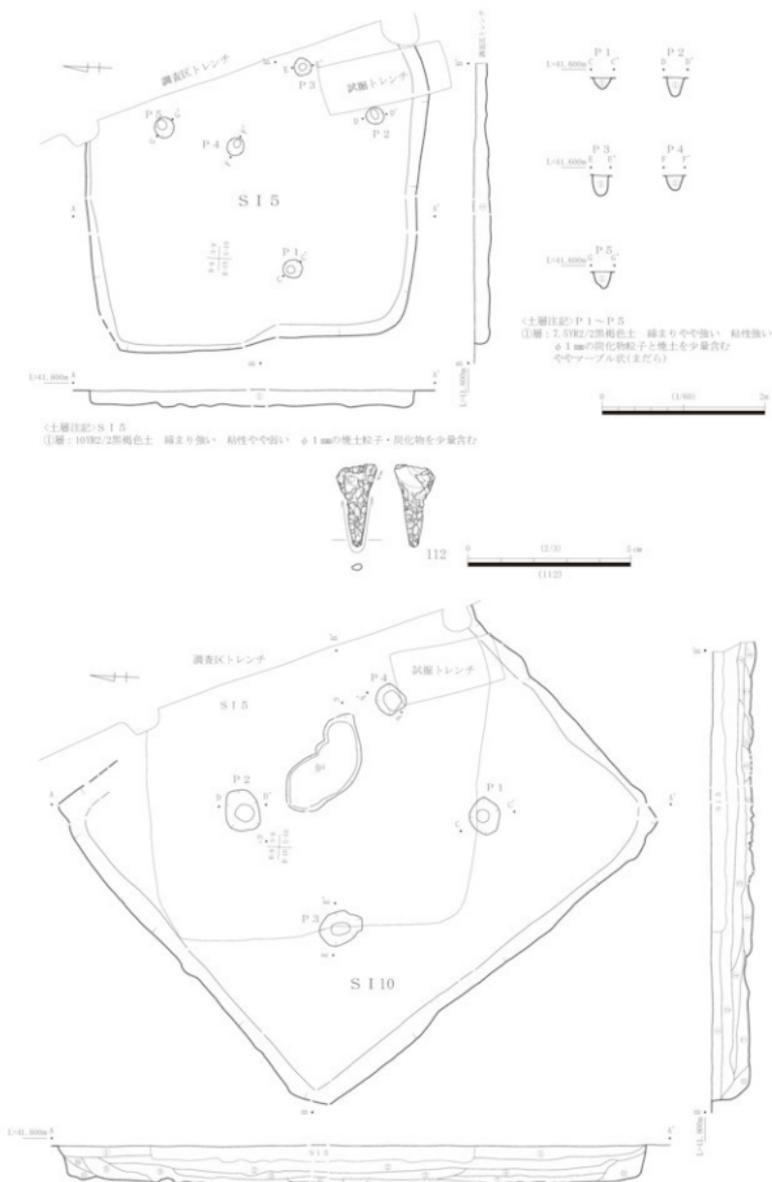
遺物は建物南西側の覆土中層から出土している。117は裏の副部下平から脚台部である。高さは裾部径の半分以下と低い。外面にハケ目と横ナデ、内面にナデが施される。118は皿状のもので、ここでは鉢とした。内外面をハケ目調整し、口縁部に横ナデを施したのち、全面に細かいミガキが施されている。内面にはケズリも見られる。

S I 12 (第45図～第51図)

S I 12はI 12、J 11・12に位置する。調査5区側は開田事業により削平されているため残っていない。現存部分での遺構の規模は長軸約4.12m、短軸約2.04m、検出面からの深さ0.54mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形もしくは長方形を呈するものと推定される。建物覆土は5層に分けることができる。建物に伴う遺構として東側にベッド状遺構を1箇所検出した。柱穴や灰跡は確認できなかった。

遺物は建物東側から西側に向かって流れ込んだように多量に出土している。平面分布と垂直分布を見ると床面やベッド状遺構上面よりやや上に分布していることから、建物使用が終わってから一定の時間を経たのち、S I 12内に同時に埋没したのちと考えられる。S I 12付近は建物跡の重複が激しいうえ、繰り返になるが調査5区側が削られているため、遺構の先後関係に誤認があるかもしれない。しかし、出土遺物はS I 12内でまとまっているうえ、重複遺構からの出土遺物と接合関係がほとんど認められないことから、本遺構に伴うものと判断している。なお、124の裏が5m程離れて東側に位置するS I 37と接合関係にある。

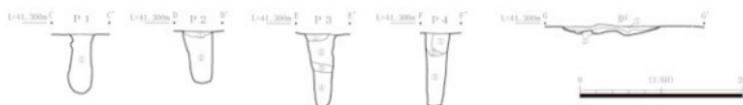
また、自然科学分析の結果、S I 12内から出土した炭化材は、ブナ科シノキ属のツブラジイであった。



第42図 S15・10 遺構・出土遺物実測図

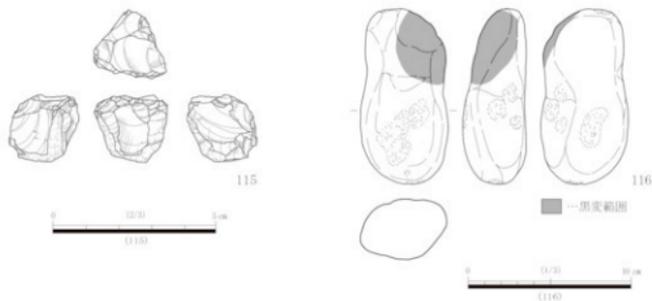
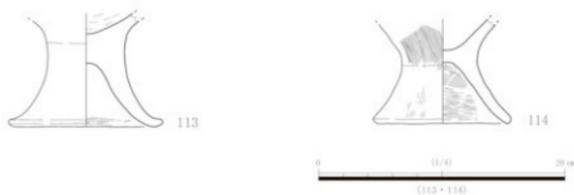
〔土層注記〕S110

- ①層：7.53K2/36暗褐色土 締まり強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ②層：7.53K2/36暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ③層：7.53K2/28暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ④層：7.53K2/36暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ⑤層：7.53K2/28暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ⑥層：7.53K2/28暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ⑦層：7.53K2/36暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ⑧層：7.53K2/36暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む；1~1.5cmの焼土粒子を含む
 シニゴブロックを含む
 ⑨層：7.53K2/28暗褐色土 締まりやや強い、粘性強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む；1cmの焼土を含む；シニゴブロックを含む
 ⑩層：7.53K2/28暗褐色土 締まりやや強い、粘性強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ⑪層：7.53K2/36暗褐色土 締まりやや強い、粘性強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む；2cm大の炭化材を多く含む；1~1.5cmの焼土粒子を含む；シニゴブロックを含む
 ⑫層：7.53K2/36暗褐色土 締まりやや強い、粘性強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 ⑬層：7.53K2/36暗褐色土 締まりやや強い、粘性強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む；2cm大の炭化材を多く含む

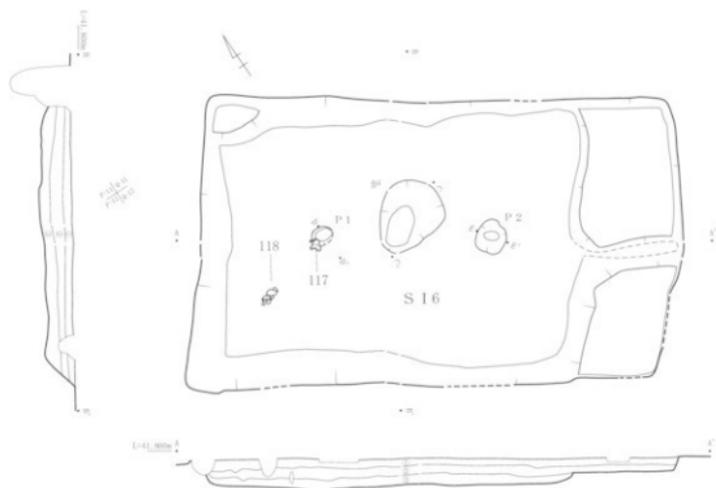


〔土層注記〕P1~P4、9①

- P1 ①層：103K2/38暗褐色土 締まり弱い、粘性強い、 ϕ 1mmの炭化物・焼土粒子を少量含む
 P2 ①層：103K2/28暗褐色土 締まりやや強い、粘性強い、シニゴブロックを含む
 ②層：103K2/28暗褐色土 締まり弱い、粘性強い、ボソボソ、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 P3 ①層：7.53K2/28暗褐色土 締まり強い、粘性強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を多量に含む
 ②~④層：P4の①~③層と同様
 P4 ①層：103K2/1黒色土 締まりやや強い、粘性強い、白ニゴブロックを含む
 ②層：103K2/28暗褐色土 締まりやや強い、粘性は強い、粘性は強い、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を多く含む
 ③層：103K2/28暗褐色土 締まり弱い、粘性強い、ボソボソ、 ϕ 1mmの焼土・炭化物を少量含む
 9① ①層：7.53K2/36暗褐色土 締まり強い、粘性強い、20cm大の炭化材を含む、 ϕ 1mmの炭化物・焼土粒子を多量に含む
 ②層：7.53K2/36暗褐色土 締まり強い、粘性強い、 ϕ 1mmの炭化物・焼土粒子を多量に含む



第43図 S110 遺構・出土遺物実測図



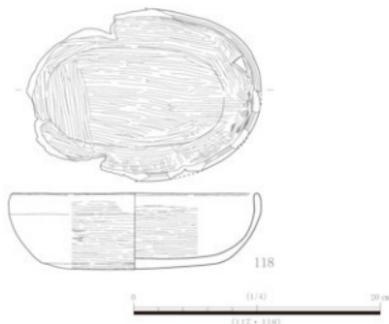
〈土層注記〉S 16

- ①層：101R2/3黒褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い φ 1mmの焼土粒子を少量含む 色調はややまだら
 ②層：101R2/3黒褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い φ 1mmの焼土粒子を微量含む ①層に比べて焼土粒子が少なくまだらでもない
 きれいな土
 ③層：101R2/3黒褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い φ 1mmの焼土粒子を微量含む ②層に比べてやや硬い 削ったときに少しひっかかる



〈土層注記〉P1・P2

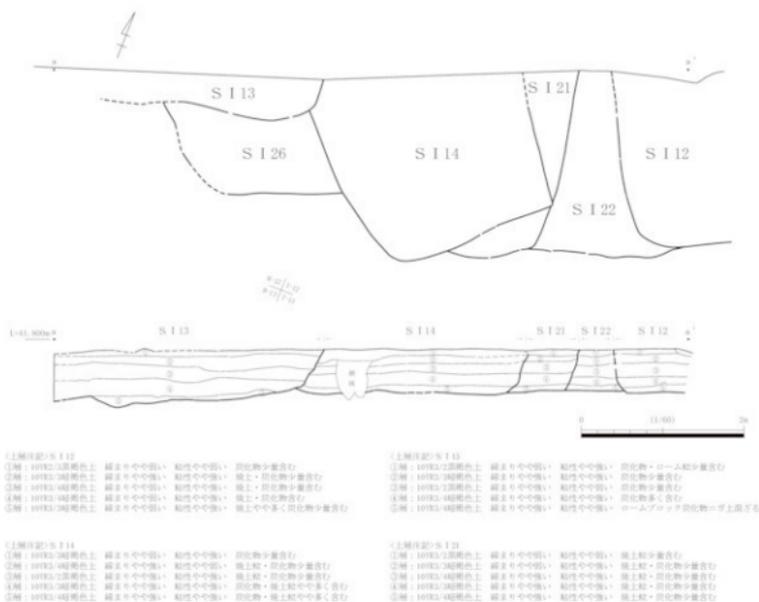
- ①層：101R2/3黒褐色土 締まりやや弱い 粘性やや強い
 φ 1mmの焼土粒子・炭化物を少量含む
 ②層：101R2/3黒褐色土 締まりやや強い 粘性やや強い
 φ 1mmの焼土粒子・炭化物を少量含む φ 1cm大の
 焼土粒子を少量含む
 P1・P2 ①層：101R2/3黒褐色土 締まりやや強い 粘性強い
 φ 1mmの焼土粒子を微量含む



第44図 S 16 遺構・出土遺物実測図

比較的重硬で強度が高いことから建築部材として適材とされている。覆土上層からの出土であったため、S I 12 というよりは、周辺の遺構で使用された建築部材の可能性がある。

119～126は脚台付きの甕と思われる。119～121は口縁部が緩やかに外反しながら開く。外面に縦もしくは斜め方向のハケ目、内面に斜めもしくは横方向のハケ目を施す。119・120の口縁部外面に横ナデが丁寧に施されている。121の口縁部内外面にハケ目が残る。122は胴部外面の縦もしくは斜め方向のハケ目の下にタタキ目が残る。123は頸部からくの字状に口縁部が開く。いずれも胴部中位に最大径をもつ。124・125は小形の脚台付きの甕と思われる。口縁部は緩やかに外反しながら開く。いずれも胴部中位より上半に最大径をもつ。126は甕の脚台部と思われる。高さは裾径の半分以下であり、裾端部は丁寧に面取りされている。内外面にハケ目が施される。127は甕である。口縁部は緩やかに外反しながら開く。胴部上半にハケ目が残る。胴部中位に最大径をもつ。128・129は鉢もしくは甕と思われる。128の口縁部は外側に大きく開く。口縁端部は丁寧に面取りされている。胴部最大径付近まで外面のハケ目が残る。129は小形の甕と思われる。130～133は脚台付きの鉢と思われる。131は内面にハケ目が明確に残っている。133・134は鉢の脚台部と思われるが、残りが悪く判然としな。135は大形の鉢と思われる。頸部屈曲部にハケ目状の刻目突帯を有する。



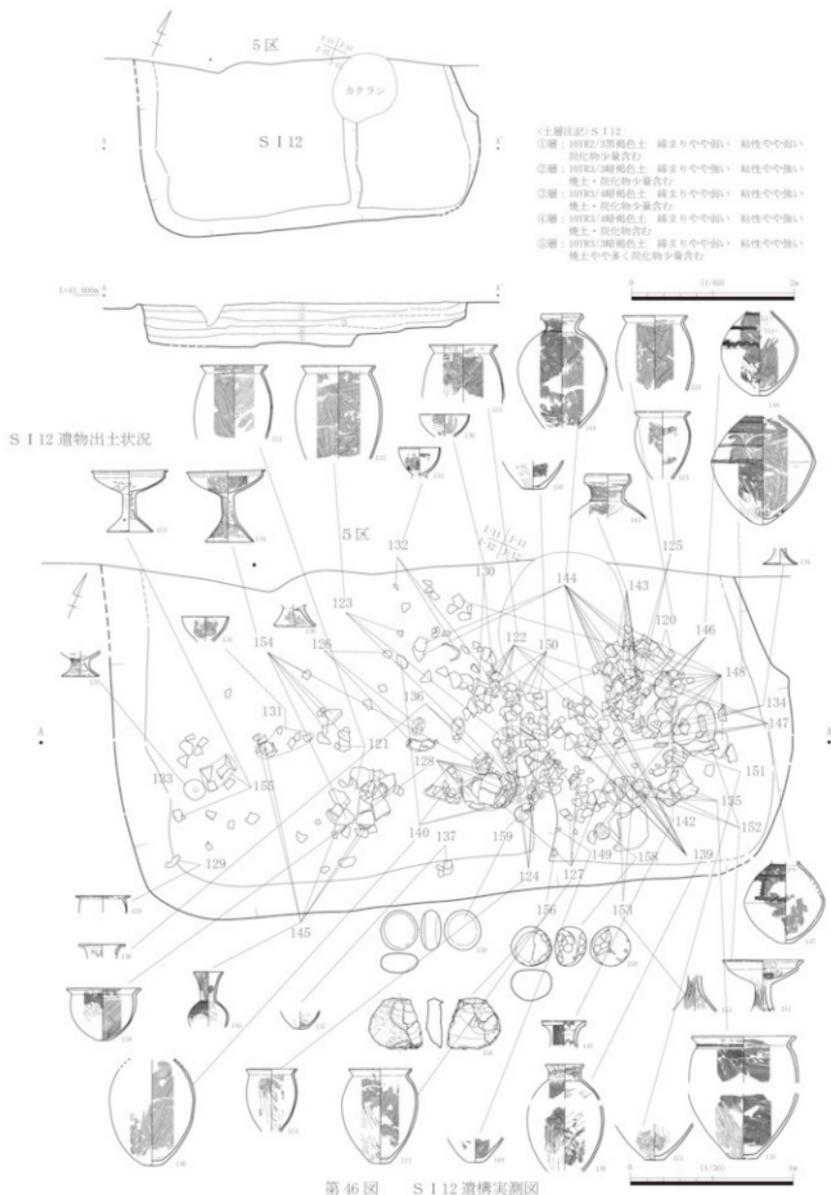
第45図 S I 112～14・21・22・26 相関図

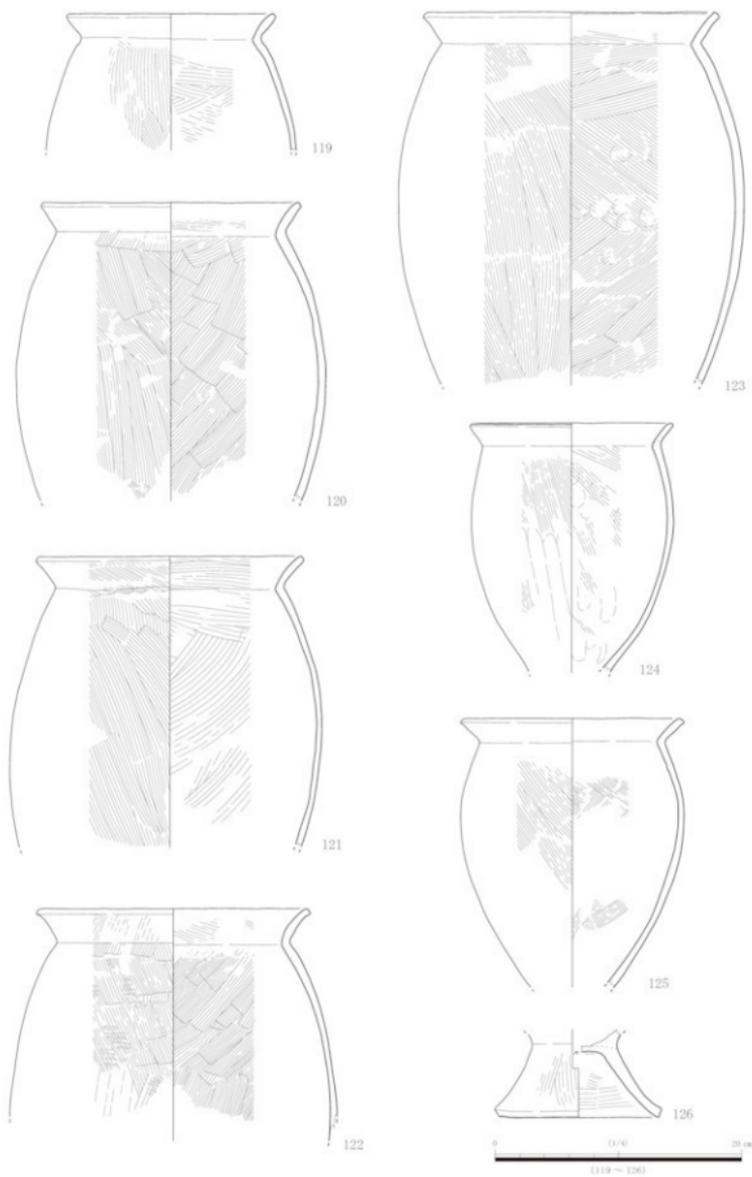
口径よりも胴部最大径の方が大きく、底部は平底になる。136～151は壺である。136は壺の口縁部である。口縁部端部でやや強く開く。138は136と異なり頸部から緩やかに外反し口縁部が開く。いずれも口縁部端部は丁寧に面取りされている。139は肩部から頸部が垂直に立ち上がり、やや外反し開く。140は胴部上半から底部まで残存していた。141・142は外反する口縁部は肥厚して断面が三角形をなす。142はハケ目が明瞭に残る。143・144は複合口縁をもつ壺である。143の一次口縁は外反しながら開き、二次口縁が垂直に立ち上がり最後に緩やかに内傾する。頸部屈曲部に刻目突帯を有する。144の一次口縁は外反しながら開き、短い二次口縁が緩やかに内傾する。胴部上半には斜めのハケ目のち、肩部にハケ状工具により波状文らしき文様が施文されている。145は長頸壺である。頸部外面には丁寧に縦ミガキが施されている。頸部と胴部の境と胴部最大径付近に平行線が引かれたのち、ハケ状工具により波状文らしき文様が4段施文されている。146は外面に斜めのハケ目が施されたのち、頸部と胴部の境に1段目、肩部に2段目、胴部最大径付近に3段目の波状文らしき文様がハケ状工具により施文されている。147は頸部と胴部の境に1段目、肩部に2段目、胴部最大径付近に3段目の波状文らしき文様がハケ状工具により施文されている。2段目と3段目の間に縦方向の波状文らしき文様が施文されている。文様の切り合いから順序は3段目横方向、縦方向、2段目横方向である。148は底部から胴部上半まで残存していた。平行区画線を胴部上位から頸部立ち上がりまで21条施し、平行線の一部に短い縦刻みを2段施す。肩部に3条の平行区画線、胴部最大径の4条の平行区画線を施す。平行区画線の間を上向きに重弧文を描き、その重弧文に沿うように縦刻みを施している。胴部下位に打ち欠いて開けたような孔がある。149～151は壺の胴部下半から底部と思われる。152～155は高環である。152は血状の環部から口縁がほぼ垂直に立ち上がり、さらに短い口唇部が緩やかに外反し開く。脚部に円孔が1箇所残存していた。全体に作りが厚い。153は脚部で縦のミガキが丁寧に施されている。154と155は口縁が内傾して立ち上がり、更に短い口唇部が緩やかに外反し開く。脚部はハの字に開く。155は脚部に円孔が3箇所穿たれている。156はチャート製のスクレイパーである。157は黒曜石製の石核。158・159は磨石類である。158には敲打痕が認められる。

S I 13 (S I 70) (第52図・第53図)

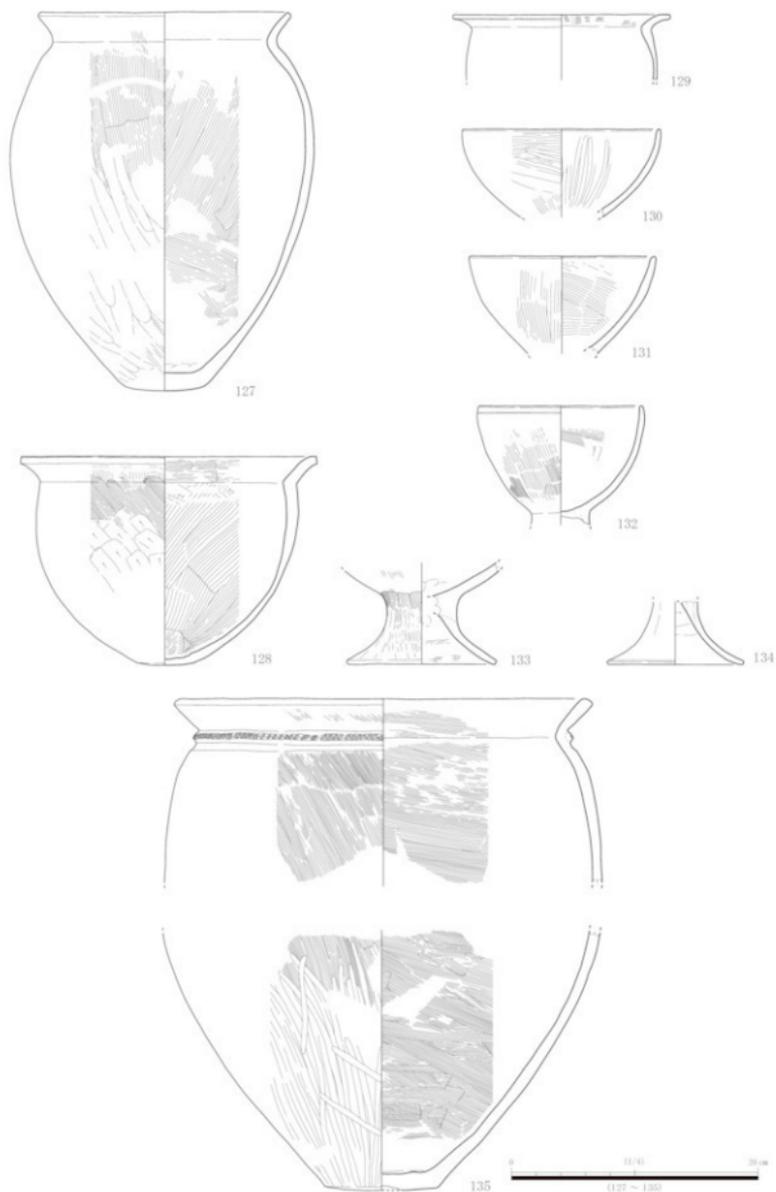
S I 13 (S I 70) はG 11・12、H 11・12に位置する。調査4区側を平成20年度にS I 13として、調査5区側を平成21年度にS I 70として調査している。同一の遺構であるため、S I 13として報告する。前述のとおり5区側が開田事業により削平されているため、残存状況が非常に悪い。遺構の規模は長軸約4.76m、検出面からの深さ0.72mを測る。平面形態は隅丸のいびつな平行四辺形を呈するが、南西隅側にベッド状遺構があった場合は、長方形もしくは方形プランの可能性があり、建物西側が調査区外のため判然としない。建物覆土は5層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴、灰跡、ベッド状遺構は検出できなかった。

遺物は覆土中層から下層にかけて出土している。163の壺が1個体まとまって分布する以外は、建物中央から東側にかけて点在している。160は壺である。口縁部がやや内湾しつつ立ち上がり、口縁部端部は丁寧に面取りされている。外面はタタキのちハケ目、内面はハケ目と横ナデが施されている。161は壺の脚部部である。高さは裾部径の半分以上で、裾部にかけて直線的に広がる。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。162は台付鉢であり、胴部中位から脚部上位まで残存していた。胴部に2条の突帯がめぐる。上位の突帯には赤彩が施されている。内外面ともにハケ目とナデが施されている。163は壺である。外反する口縁部は肥厚して断面が三角形をなす。胴部上半には縦のハケ目のち、ハケ状工具により波状文らしき文様が施文されている。内外面ともにハケ目とナデが施されている。164は黒曜石製の石鏝、165は安山岩製の円盤形石器である。





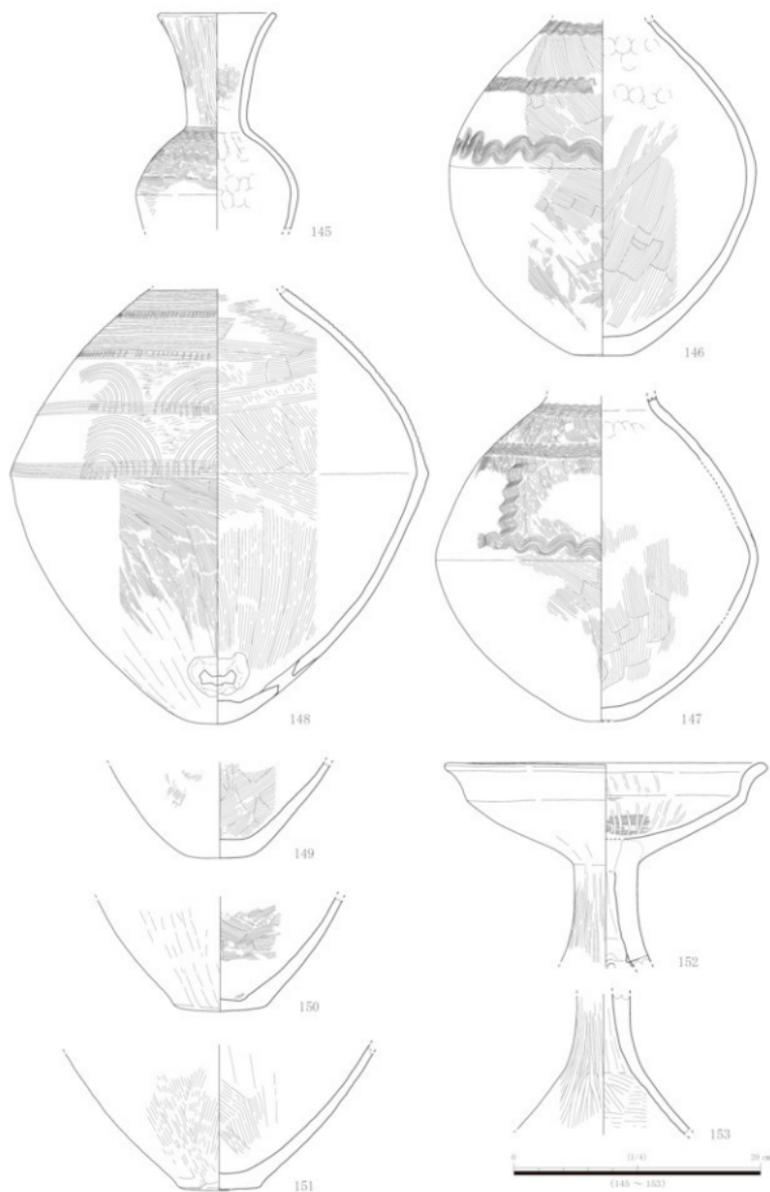
第47図 S I 12 出土遺物実測図1



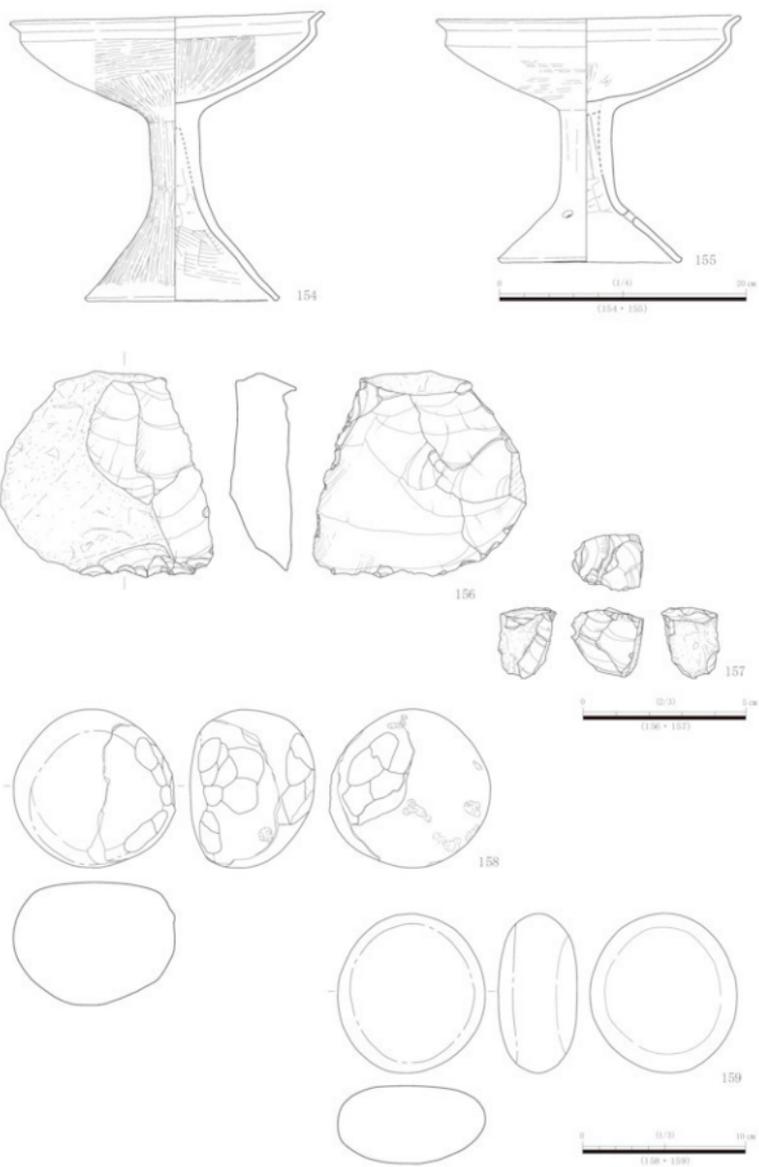
第48図 S 112 出土遺物実測図2



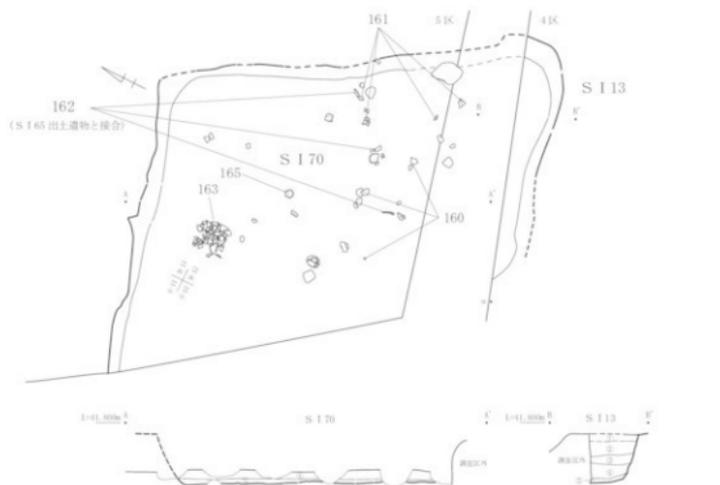
第49図 S 112出土遺物実測図3



第50図 S I 12出土遺物実測図4



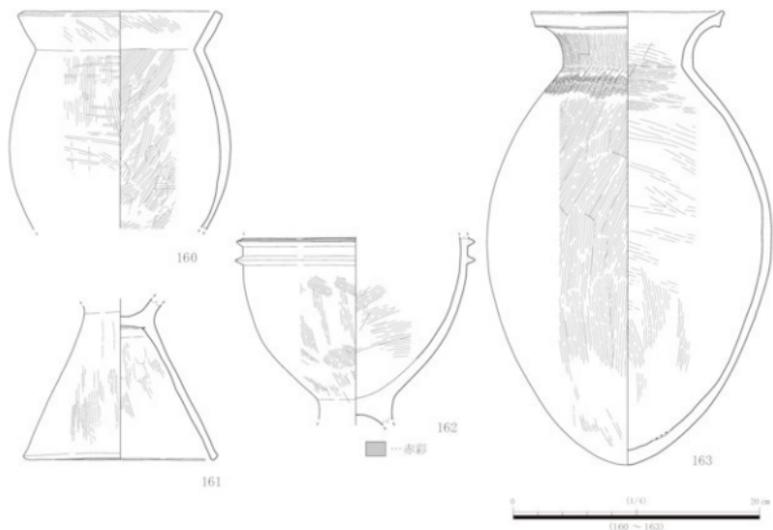
第51図 S I 12 出土遺物実測図5



〔土層目録〕S 113・70

- | | | | |
|----------------|---------|--------|------------------|
| ①層：10YR3/2弱褐色土 | 締まりやや弱い | 粘性やや強い | 炭化物・ローム少量含む |
| ②層：10YR3/3弱褐色土 | 締まりやや強い | 粘性やや強い | 炭化物少量含む |
| ③層：10YR3/2弱褐色土 | 締まりやや弱い | 粘性やや強い | 炭化物少量含む |
| ④層：10YR3/4弱褐色土 | 締まりやや強い | 粘性やや強い | 炭化物多く含む |
| ⑤層：10YR3/4弱褐色土 | 締まりやや強い | 粘性やや強い | ロームブロック炭化物ニガ土混ざる |

0 1:000 20m



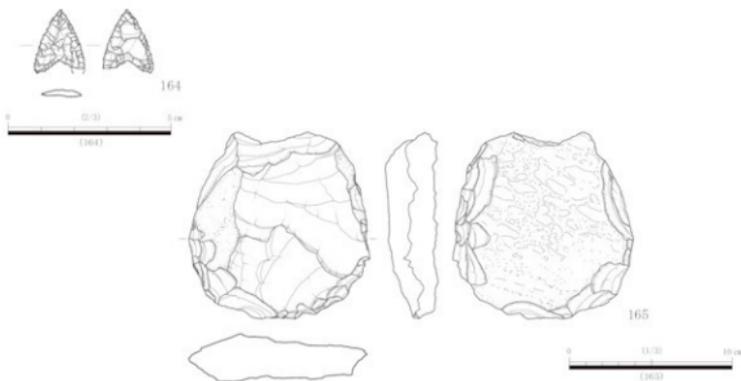
第52図 S 113 (70) 遺構・出土遺物実測図1

S I 14, S I 21 (第54図)

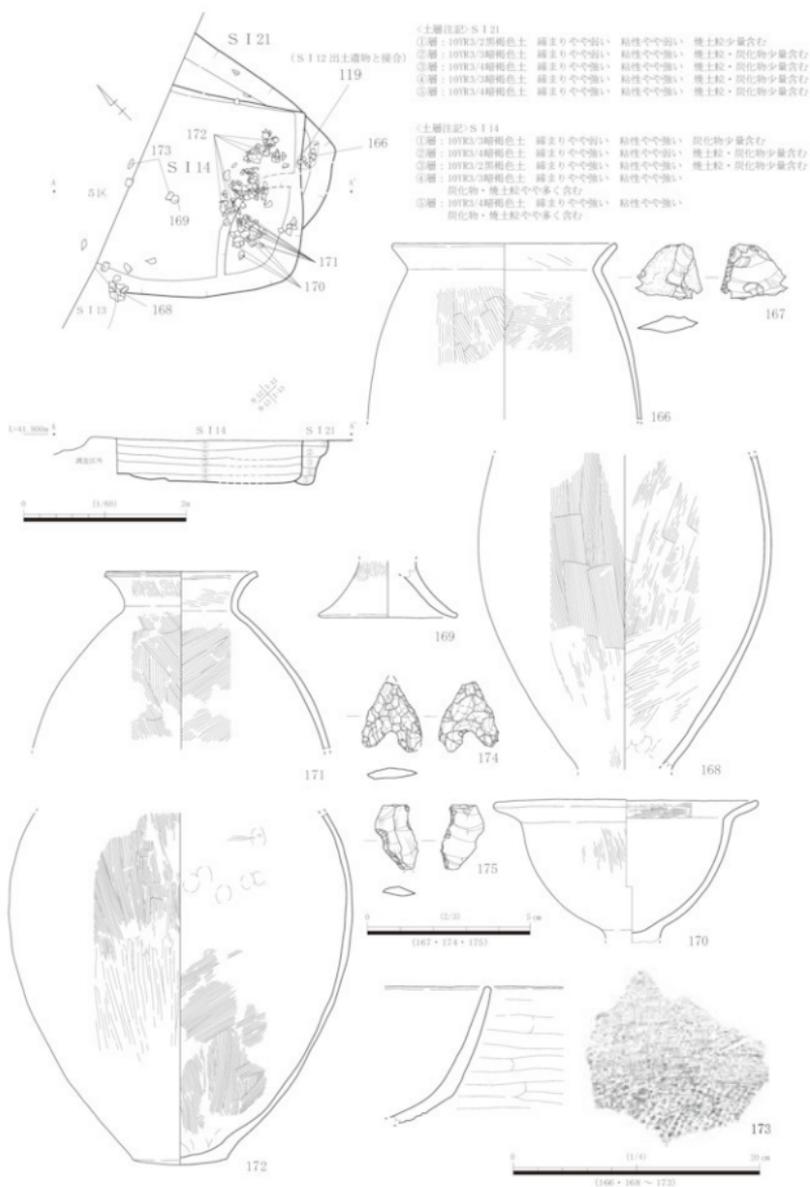
S I 14, S I 21 は H 12, I 11 に位置する。建物北側の調査5区画は開田事業により削平されているため残っていなかった。S I 13 (S I 70)・S I 21 と重複している。先後関係は S I 13 (S I 70) → S I 14 → S I 21 であるが、遺物の出土状況や接合関係からみると、遺構区分の誤認があるかもしれない。S I 14 の現存部分での遺構規模は長軸約 2.58 m、短軸約 2.16 m、検出面からの深さ 0.56 m を測り、平面形態は隅丸方形もしくは長方形を呈するものと推定される。建物覆土は 5 層に分けることができる。建物に伴う遺構として南側にベッド状遺構を 1 箇所検出した。柱穴やが跡は確認できなかった。

一方、S I 21 の現存部分での遺構規模は大部分が S I 14 と開田事業による削平により破壊されているためわからない。建物覆土は 5 層に分けることができる。

遺物は覆土上層から中層にかけて、ベッド状遺構周辺にまとも出土している。床面やベッド状遺構上面より上であることから、建物使用が終わってから一定の時間を経たのち、S I 14 内に埋没した可能性がある。また、繰り返になるが、極めて近接した遺構間で接合関係が認められることから、遺物の所属遺構に誤認があるかもしれない。しかし、遺物の平面分布、垂直分布ともまともまっていることから、同時期に埋没したものと考えられる。166・167 は S I 21 出土。166 は裏で口縁部から胴部上半の一部が残存していた。口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。167 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。168～175 は S I 14 出土。168 は裏で胴部上半から脚台部との接合部まで残存していた。内外面ともにハケ目とナデが施されている。169 は裏の脚台部と思われる。裾部は外側に開く。外面はハケ目と横ナデ、内面はナデが施される。170 は台付鉢もしくは高坏と思われる。深い体部に、屈曲し大きく開く口縁部を有する。器面はかなり摩滅しているが、外面にハケ目と横ナデ、内面にハケ目とナデが施される。171 は壺で底部まで残存していた。外面にハケ目、ナデとミガキ、内面にハケ目が施される。173 は縄文時代晩期前半以降の浅鉢と思われる。内面は横方向のナデが施されている。口縁部外面は横方向のケズリが施されており、胴部外面には型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕が見られる。遺構外出土遺物として報告している 332 と同一個体と思われる。混入と思われる。174 は安山岩製の石盃、175 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。



第53図 S I 13 (70) 出土遺物実測図2

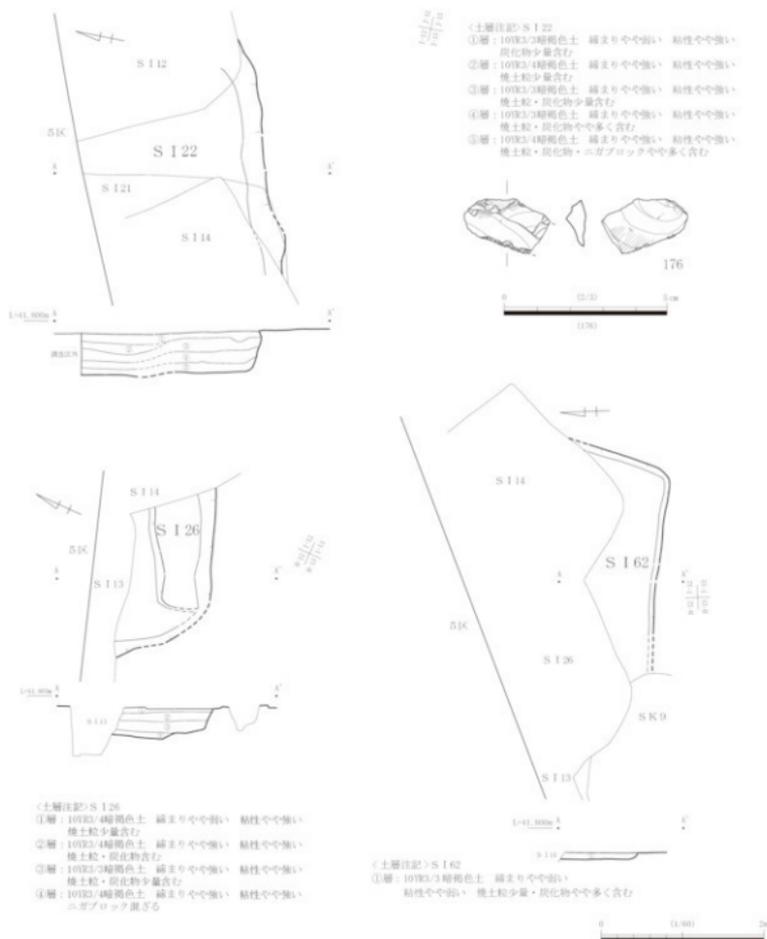


第54図 S114・21遺構・出土遺物実測図

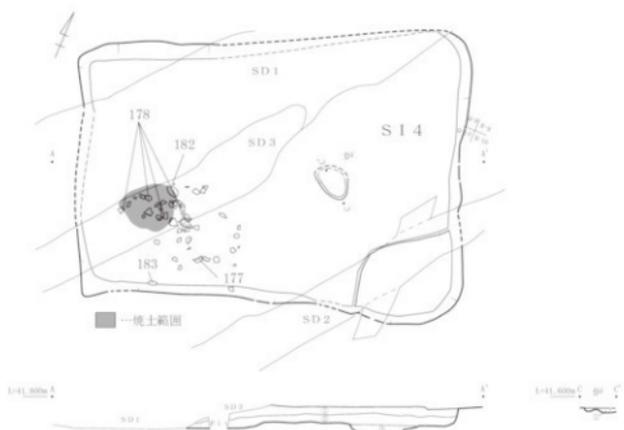
S I 22 (第55図)

S I 22はI 12に位置する。建物の大部分がS I 12、S I 21、S I 14により切られており、北側の調査5区側は開田事業により削平されているためほとんど残っていない。先後関係はS I 22→S I 12・S I 21→S I 14である。検出面からの深さ0.54mを測るが、残存状況が悪いため、建物規模、平面形態、付属施設はわからない。建物覆土は5層に分けることができた。

遺物は176の黒曜石製の使用痕のある剥片が出土しているが、重複関係、検出面からの深さ、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。



第55図 S I 22・26・62 遺構・出土遺物実測図

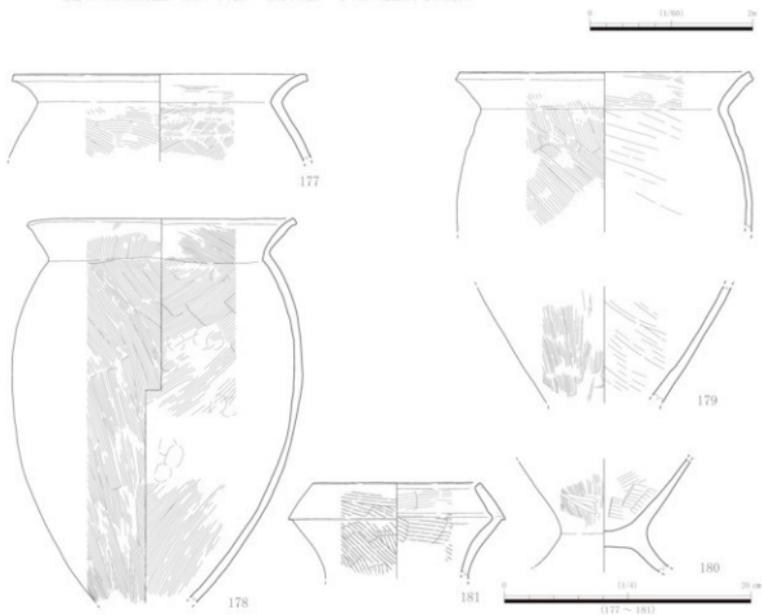


〔土層注記〕S14

- ①層：101R2/3黒褐色土。締まりやや強い、粘性やや強い。φ1mmの焼土粒子・炭化物を少量含む。色調はややマゼンタ状。
 ②層：7.01R2/3暗緑褐色土。締まりやや強い、粘性強い。φ1mmの焼土粒子・炭化物を少量含む。①層に比べてやや粘っこい。
 ③層：101R2/3黒褐色土。締まり強い、粘性やや強い。φ1mmの焼土粒子・炭化物を多量に含む。

〔土層注記〕G

- ①層：101R2/2黒褐色土。締まりやや強い、粘性やや強い。φ1mmの焼土粒子を少量含む。



第56図 S14遺構・出土遺物実測図1

S I 26 (第55図)

S I 26はH 12に位置する。建物の大部分がS I 13 (S I 70)、S I 14により切られており、北側の調査5区側は開田事業により削平されているためほとんど残っていない。先後関係はS I 26→S I 14→S I 13 (S I 70)である。検出面からの深さ0.38 mを測るが、残存状況が悪いため、他の建物規模や平面形態はわからない。建物南側でベッド状遺構を確認した。建物覆土は4層に分けることができた。

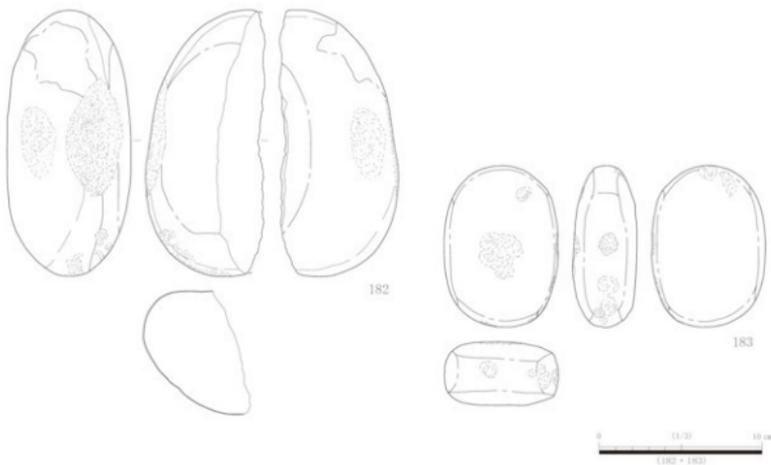
実測可能な遺物がなかったため、重複関係、検出面からの深さ、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

S I 62 (第55図)

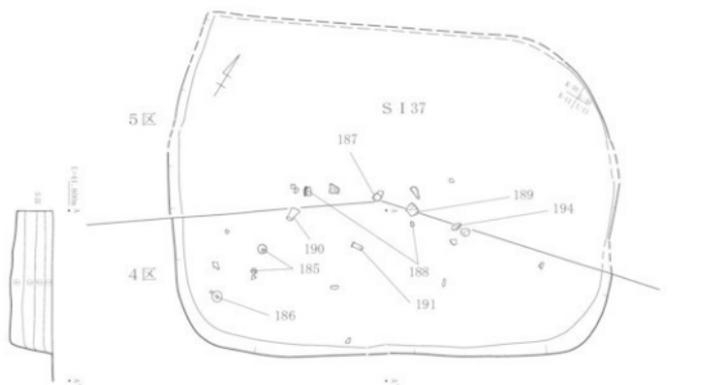
S I 62はH 12、I 12に位置する。建物の大部分がS K 9、S I 26、S I 13 (S I 70)、S I 14により切られており、北側の調査5区側は開田事業により削平されているためほとんど残っていない。先後関係はS K 9→S I 26→S I 14→S I 13 (S I 70)である。検出面からの深さ0.09 mを測るが、残存状況が悪いため、他の建物規模や平面形態はわからない。建物覆土は1層とした。実測可能な遺物がなかったため、残存範囲での平面形態、切り合い関係、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。当該期の他の竪穴建物よりも浅いため、竪穴建物のベッド状遺構の可能性はある。

S I 4 (第56図・第57図)

S I 4はQ 9・10、R 10に位置する。建物南側約1/2以上がS D 1・2・3と重複しているため、残りが悪い。重複が激しいが、先後関係はS I 4→S D 1→S D 2・3と考えている。遺構の規模は長軸約4.68 m、短軸約3.12 m、検出面からの深さ0.33 mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は3層に分けることができる。建物に伴う遺構として中央東寄りでは跡、南東隅でベッド状遺構を確認したが、柱穴は検出できなかった。また、建物西側で焼土の広がりを確認したが、掘り込みはなく焼土が床面に乗っている状況であったため、好とは捉えなかった。

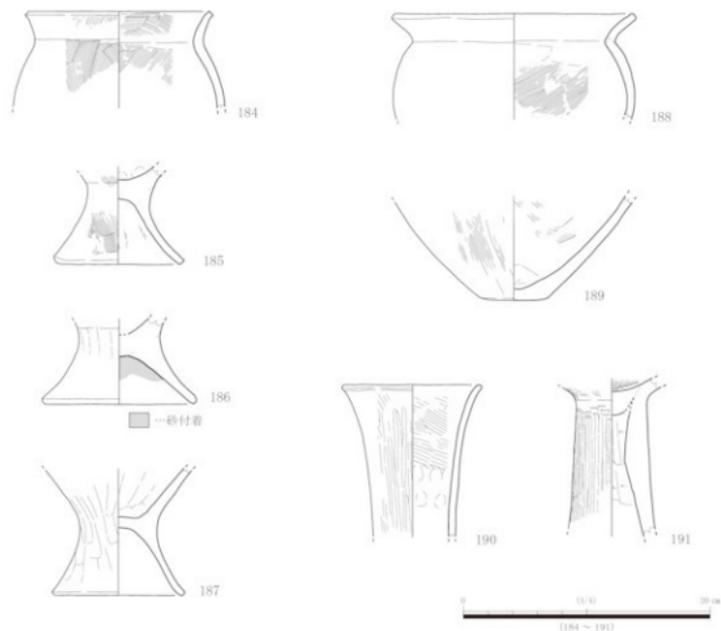


第57図 S I 4 出土遺物実測図2



〈土層注記〉S 137

- ①層：10YR2/3原褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、炭化物と焼土粒子を少量含む。
 ②層：10YR3/2暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、炭化物と焼土粒子を全体にまばらに含む。
 ③層：10YR3/2暗褐色土 ②層よりやや締まりが強い、炭化物が全体的にゴツゴツと多くみられる。
 ④層：10YR2/2原褐色土 締まり強い、粘性やや強い、炭化物と焼土粒子がかたまっており多く含む。三角を少し含む。



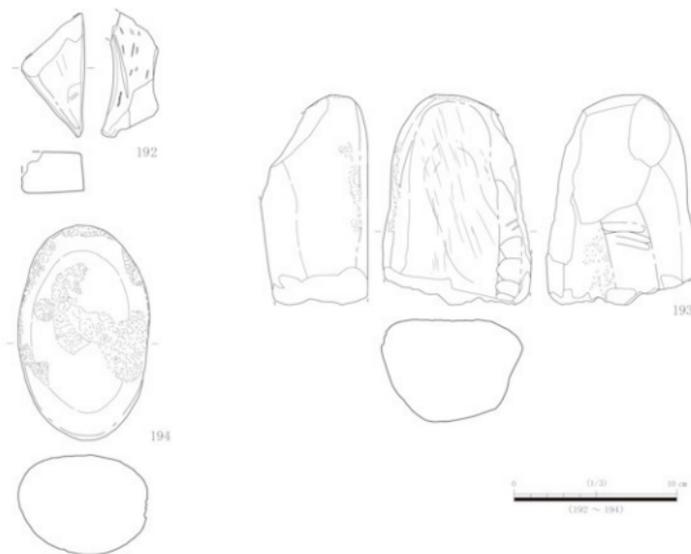
第58図 S 137 遺構・出土遺物実測図1

遺物は覆土中層からまとまって出土している。177～180は裏である。177の口縁部は強く外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。178は口縁部から胴部下半まで残存していた。口縁部は頸部から直線的に開いたのち、口縁部は揃んだようにしてやや強めに外側に開く。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。179は口縁部から胴部上半が残存しており、口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。180は裏の脚台部であり、裾部が外側に開く。裾部を欠いているが、高さは裾部径の半分以下と推測される。内外面ともにハケ目とナデが施される。181は壺の複合口縁の破片である。一次口縁は外反しながら開き、二次口縁が内傾気味に立ち上がる。内外面ともにハケ目が明瞭に残る。182・183は磨石類である。敲打痕が認められる。

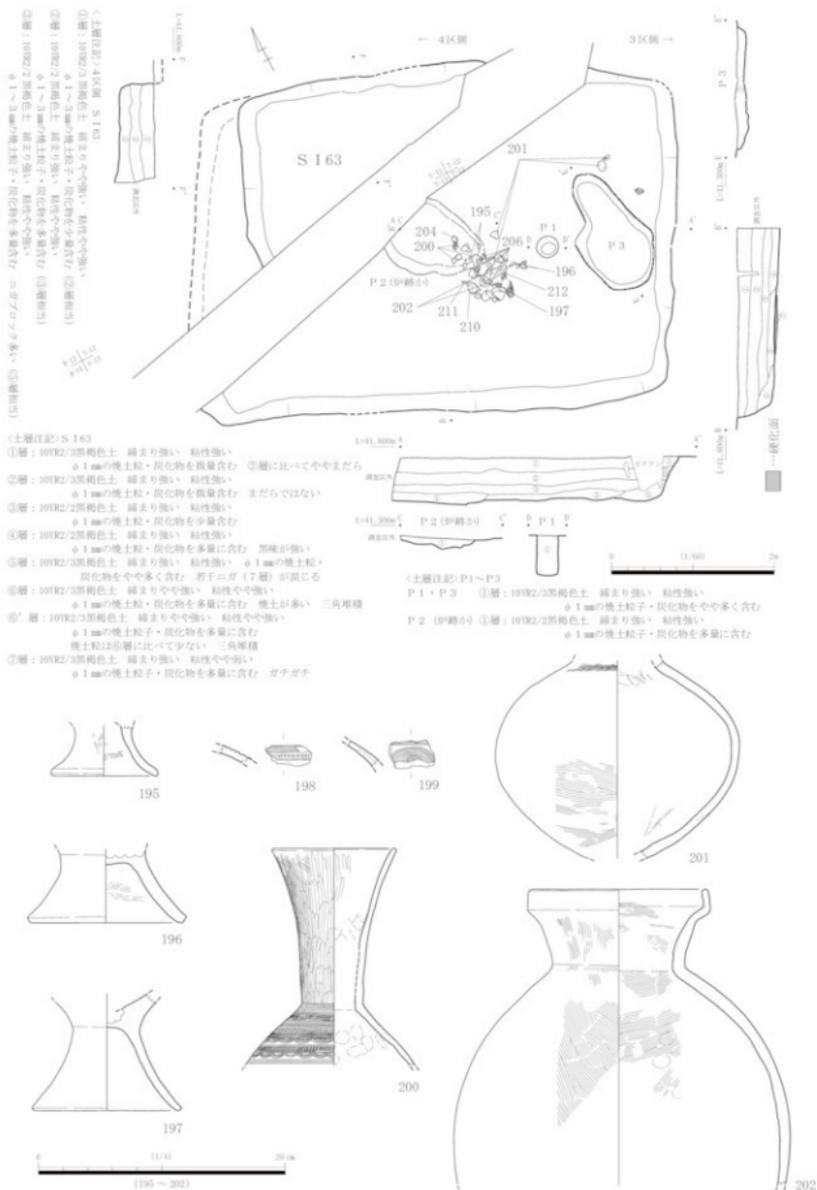
S 1 37 (第 58 図・第 59 図)

S 1 37はK 10・11、L 10・11、調査4区と調査5区の境に位置している。そのため、土地全体が削平されている調査5区側の建物北側は大部分が破壊されている。遺構規模は長軸約5.52m、短軸3.96m、検出面からの深さ0.52mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は4層に分けることができた。建物に伴う遺構として柱穴、弁跡、ベッド状遺構等は検出されなかった。

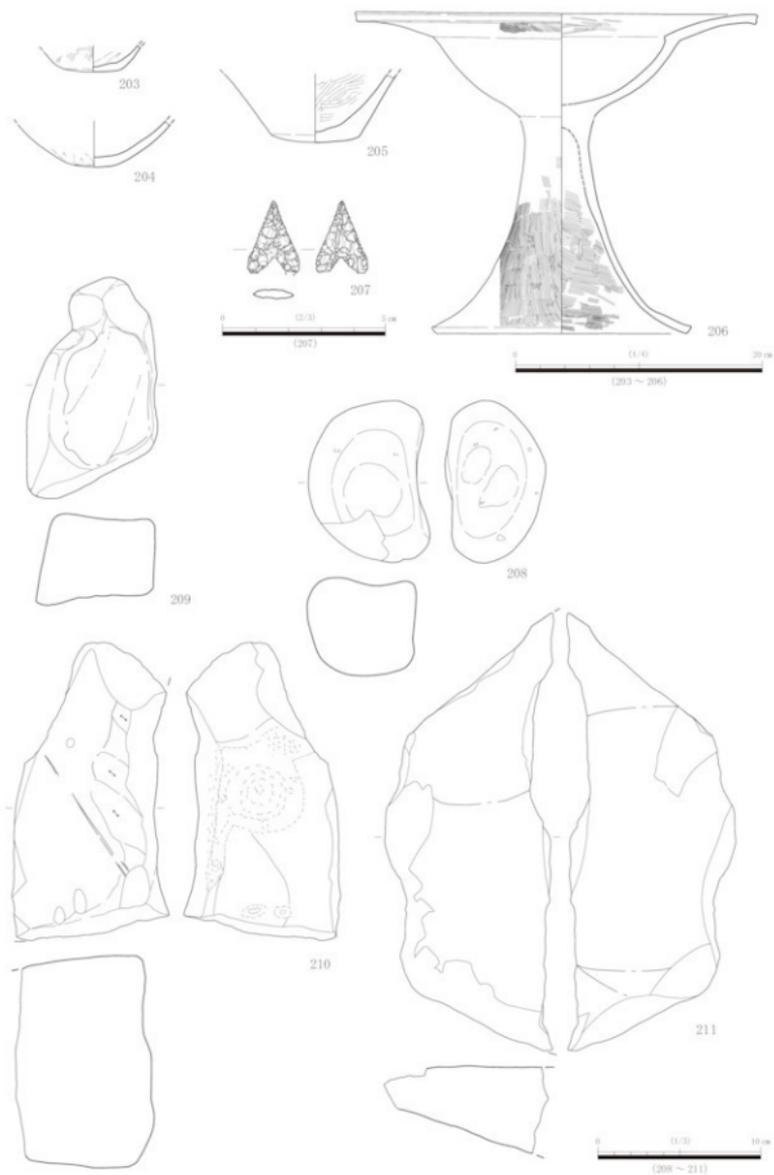
遺物は建物南側、残存状況の良い調査4区側の覆土中層から下層にかけて点在して出土している。平面分布、垂直分布から建物廃絶後、時間をおかず埋没したものと思われる。184は裏と思われ、口縁部から胴部上半まで残存している。口縁部は緩やかに外反し、口縁部は丁寧に面取りされている。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。185～187は裏の脚台部である。185は底部から裾部まで直線的に広がる。裾部は丁寧に面取りされており、外面はハケ目とナデ、内面はナデが施されている。186は底部から裾部まで直



第59図 S 1 37 出土遺物実測図2



第60図 S163遺構・出土遺物実測図1



第61図 S 163 出土遺物実測図2

線的に広がり、内外面ともに丁寧に横ナデが施されている。脚台部の底には砂が付着している。187は底部から裾部まで直線的に広がる。内外面ともに横ナデが施されている。188は鉢で口縁部から胴部上半の一部であり、口縁部は緩やかに外反する。外面は横ナデ、内面にはハケ目と横ナデが施されている。外面はかなり厚減している。189は甕の胴部下半から底部と思われる。内外面ともにハケ目とナデが施されている。190は長頸甕の頸部である。ほぼ直立しながら緩やかに外反して開く。外面に縦のミガキ、内面にハケ目が残っている。191は高坏の坏部底から脚部である。脚部外面に甕のミガキが施されている。坏部底は充填したように成形されている。192は砥石、193・194は磨石類である。敲打痕が認められる。

S I 63 (第60図～第62図)

S I 63はS 12・13、T 13に位置する。南側の半分は調査3区に位置し、既に報告済みであるが(水上2013)、遺構の一部が調査4区側に位置するため、ここで改めて報告する。遺構規模は長軸約5.58m、短軸4.08m、検出面からの深さ0.56mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は7層に分けることができた。付属施設として柱穴を1基、灰跡と思われるP2、長楕円形で断面が皿状のP3を検出した。柱穴は深さ約50cmを測る。P1と対応する柱穴が、灰跡と推定されるP2を挟んで建物中央に入れた調査4区外周トレンチの部分に想定される。調査3区側のプランから西側にベッド状遺構を想定できる。既報告分を訂正したい。



第62図 S I 63 出土遺物実測図3

遺物は建物中央でまとまって出土している。平面分布、垂直分布から建物廃絶後、時間をおかずに埋没したものと思われる。195～197は裏の脚台部である。198・199は甕形土器の胴部破片。200は甕形土器の頸部から胴部である。201は甕形土器の胴部。頸部と底部を欠いている。202は複合口縁の甕形土器。203～205は甕形土器の底部と思われる。206は高環形土器である。環部と口縁部の境に段があり、口縁部は大きく外側に開く。207はチャート製の石甕。208は磨石類で、209・210は砥石の可能性がある。211は石皿、212は台石と思われる。

S I 64 (第63図)

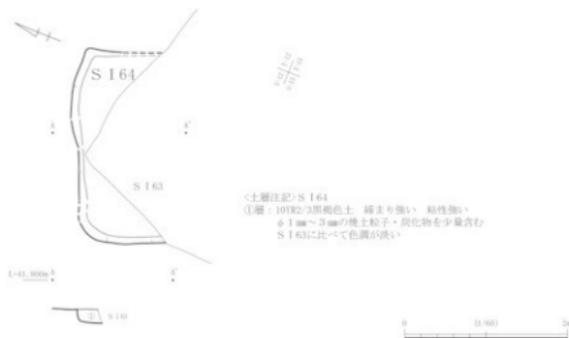
S I 64はS I 12に位置する。建物の大部分がS I 63と重複しているためほとんど残っていない。先後関係はS I 63→S I 64である。検出面からの深さ0.18mを測るが、残存状況が悪いため、他の遺構規模や平面形態はわからない。建物覆土は1層とした。当該期の他の竪穴建物よりも浅いため、竪穴建物のベッド状遺構の一部である可能性も想定したが、小規模であり、機能が異なる遺構とも思われる。

実測可能な遺物がないため、残存範囲での平面形態、重複関係、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

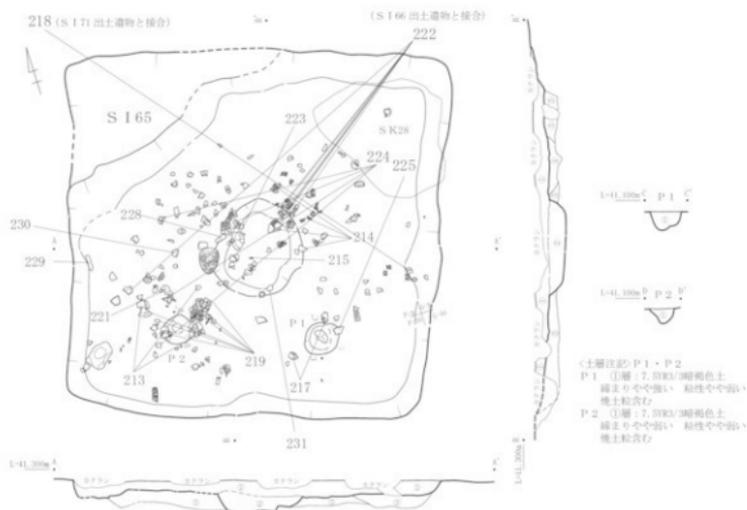
S I 65 (第64図～第66図)

S I 65はF 9・10、G 9に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は決して良くない。遺構規模は長軸約4.50m、短軸約4.50m、検出面からの深さ0.42mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は5層に分けることができる。建物に伴う遺構として北西隅にベッド状の高まりを1箇所検出した。柱穴を建物南側で2基検出した。深さは約23～26cmと浅い。一方、北側に対応する柱穴は検出できなかった。跡は建物中央で1基検出した。本遺構は塔平遺跡では珍しく掘方を有しており、覆土③層～⑤層の上に床面が構築されている。

遺物は建物中央を中心に覆土下層から出土しており、本遺構と重複関係にないS I 66出土の資料が220と222、S I 71出土の資料が218と接合関係にあることがわかっている。213～215は甕である。213・214の口縁部は頸部から緩やかに外反する。胴部最大径はやや上位に位置する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。214の口縁端部は丁寧に面取りされている。215は脚台部で底部から裾部に緩やかに開く。裾端部は丁寧に面取りされている。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。216は台付鉢である。脚台の裾部はや

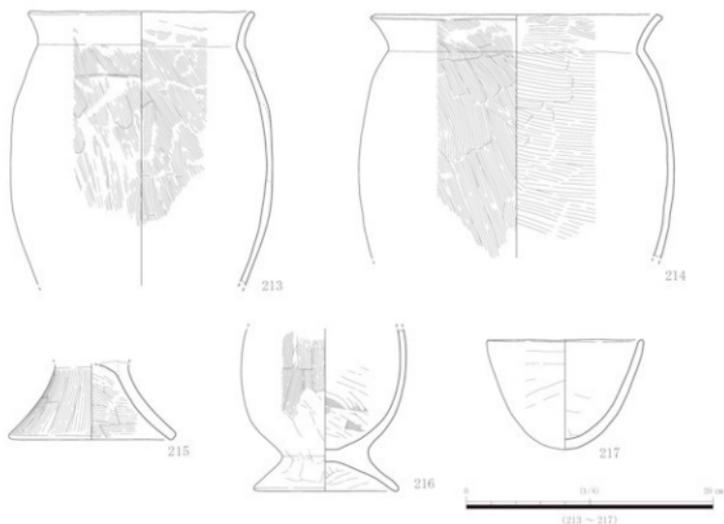


第63図 S I 64 遺構実測図

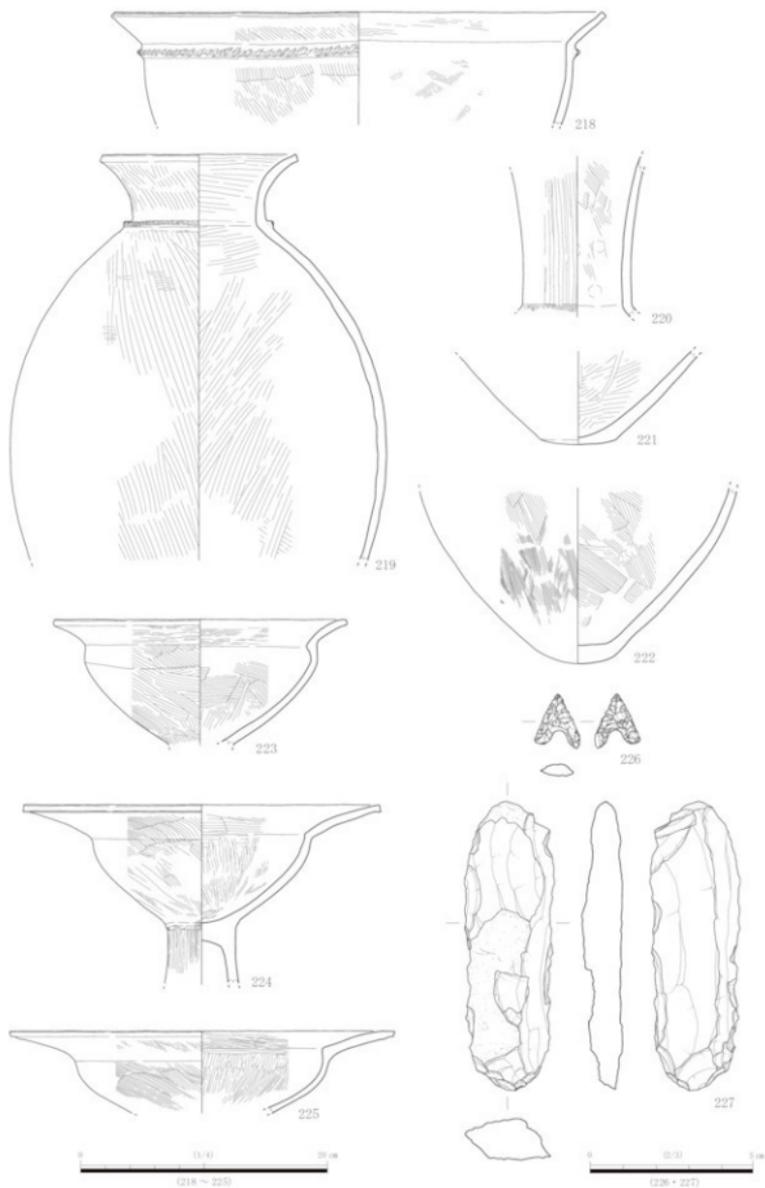


(土層注記) S165

- ①層：10YK2/3原褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、焼土・炭化物を含む
 ②層：10YK2/2原褐色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い、焼土・炭化物多く含む
 ③層：10YK2/1原褐色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い、焼土・炭化物 (0.1mm以下) 多く含む
 ④層：10YK3/3暗褐色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い、焼土多く含む
 ⑤層：10YK3/2暗褐色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い、焼土・炭化物やや多く含む



第64図 S165遺構・出土遺物実測図1



第65図 S165出土遺物実測図2

や内湾ぎみに大きく開く。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。217は小形の鉢であり、やや直線的に開く。内外面ともに横ナデが施されている。218は鉢と思われる。頸部は直線的に開く。頸部屈曲部に刻目突帯を有する。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。219は甕である。口縁部は頸部から立ち上がり外反して開く。口縁端部は丁寧に面取りされている。頸部下端に刻目突帯を有する。内外面にハケ目が明瞭に施されている。外面の一部にタタキ目らしきものが残っている。220は長頸甕の頸部である。外面に丁寧なミガキ、内面にハケ目が施されている。220はS I 66と接合関係にある。221・222は甕で胴部下半から底部が残存していた。ハケ目が明瞭に施されている。222はS I 66と接合関係にある。223～225は高環である。223は口縁の長さに対して深い環部を有する。口縁部は緩やかに外反しながら開く。内面に一部ミガキが認められるが、内外面ともにハケ目が明瞭に残っている。224は長い口縁を有する。内外面にハケ目が残るが、環部内面に225に比べて若干粗いミガキが施されている。外面と口縁部内面は赤味を帯びている。225は浅い環部に強く屈曲した口縁部を有する。内面は丁寧にミガキが施されており、放射状の暗文を呈している。226は黒曜石製の石鏃、227は二次加工のある剥片である。228は安山岩製の打製石斧である。229は砥石、230・231は磨石類である。敲打痕が認められる。



第66図 S I 65 出土遺物実測図3

S I 66 (第 67 図)

S I 66 は H 8・9、I 8・9 に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。遺構規模は長軸約 4.50 m、短軸約 4.32 m を測り、検出面からの深さ 0.18 m を測り、平面形態は隅丸のいびつな長方形を呈する。大きく削平されていたため、いきなり床面を検出した。建物覆土は 1 層とした。覆土①層の上に床面が構築されている。建物に伴う遺構として建物中央で基跡を 1 基、柱穴を 4 基検出した。柱穴の深さは 14 ~ 22 cm と浅い。柱穴はいずれも床面を掘方まで掘削中に確認できたものであり、本来はもう少し深いもの



第 67 図 S I 66 遺構・出土遺物実測図

と推定される。建物北西側のいびつな部分はベッド状遺構の可能性があるが、建物の壁が削平されているため判然としない。

自然科学分析の結果、S I 66 内から出土した炭化材は、コナラ属アカガシ亜属であった。比較的重硬で強度が高いことから建築部材として適材とされている。床面からの出土であり本遺構で使用された建築部材の可能性はある。

遺物は建物中央を中心に覆土からややまとまって出土しており、本遺構と重複関係にないS I 65 から出土した甕(220・222)と接合関係にあることがわかっている。図示した遺物は1点だが、他にも甕や高坏、甕と思われる胴部の破片資料が多数出土している。また、甕の脚台部と思われる資料が4個体分出土している。いずれも高さは低い資料であった。232は磨石類である。右側面に擦痕が認められる。

S I 67 (第68図)

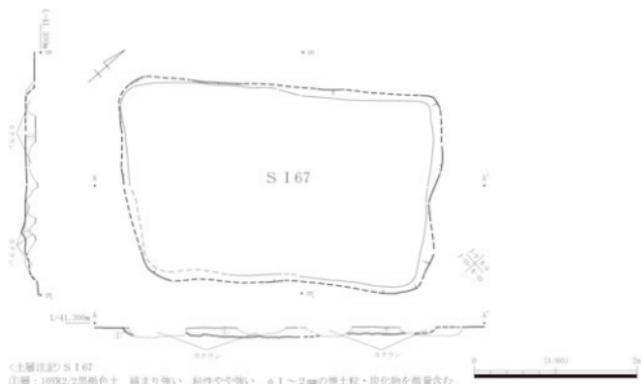
S I 67 はJ 9・10に位置する。建物の大部分が削平と耕作時のトレンチャーにより破壊されているため残りが非常に悪い。遺構規模は長軸約3.90m、短軸2.40m、検出面からの深さ0.12mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は1層とした。建物に伴う遺構として柱穴、碁跡、ベッド状遺構は検出されなかった。

実測可能な遺物がないため、平面形態、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

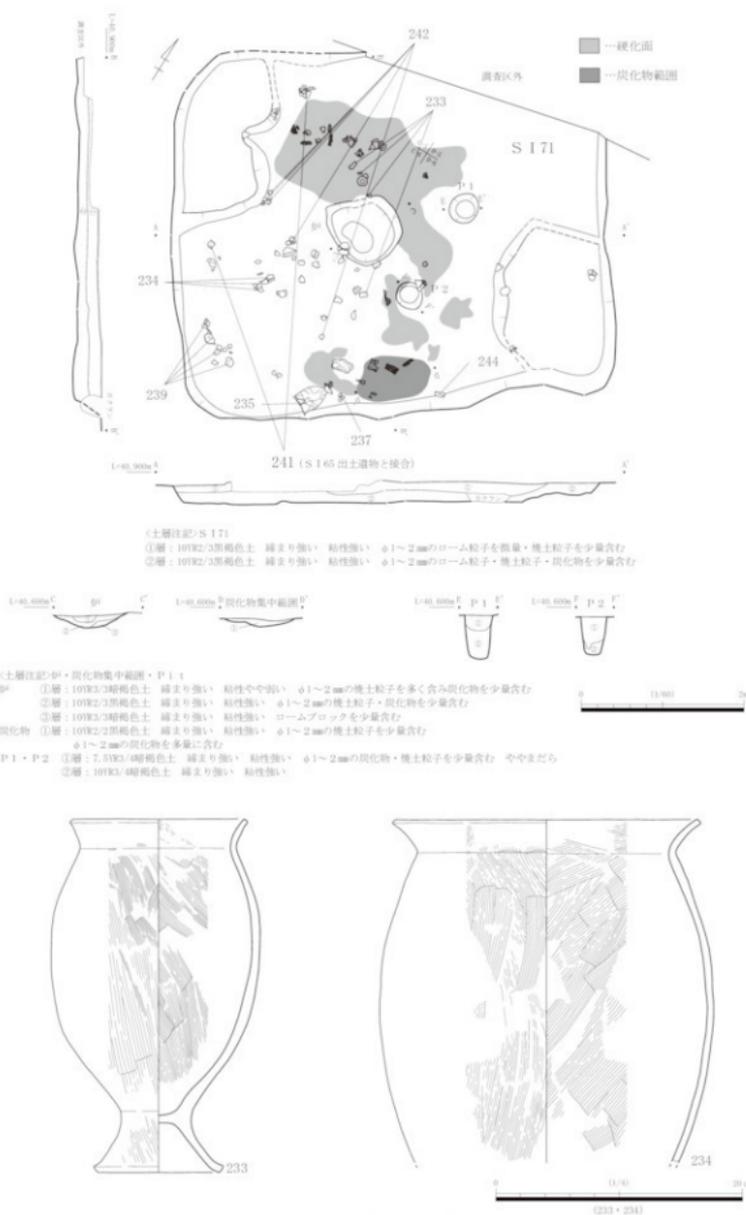
S I 71 (第69図・第70図)

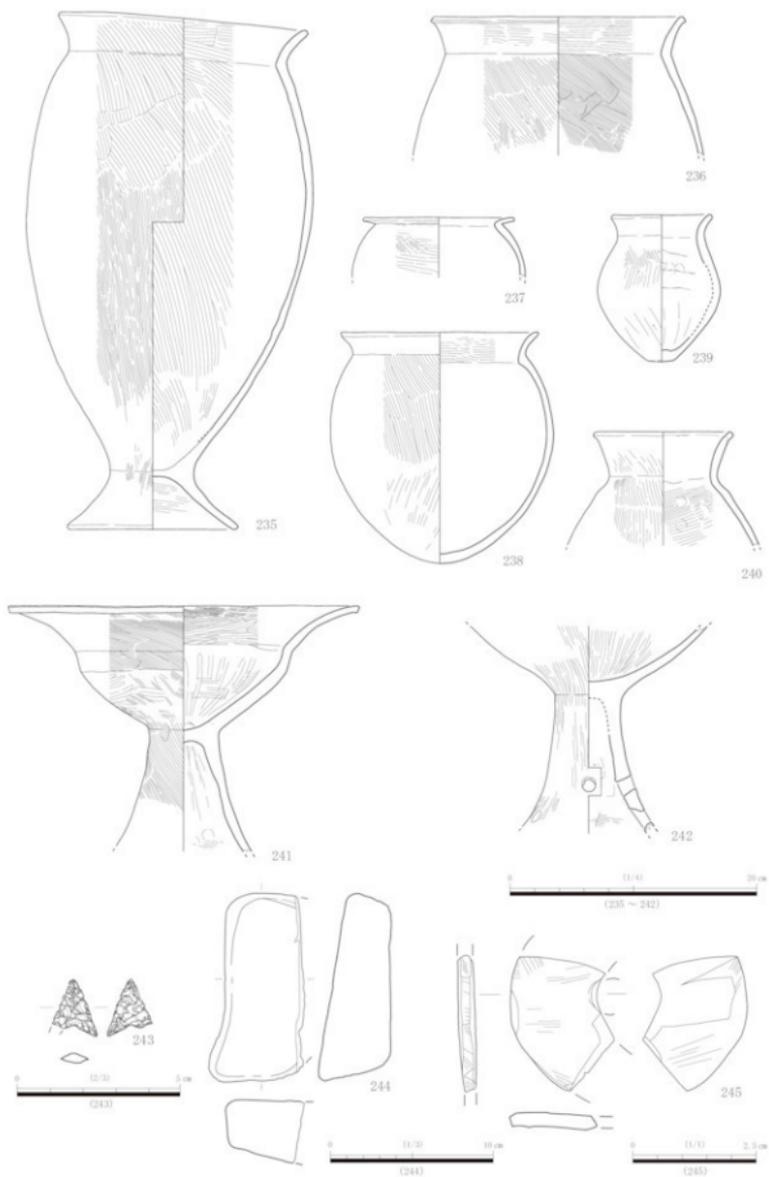
S I 71 はC 5・6、D 5・6に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。遺構規模は長軸約5.28m、短軸約4.50m、検出面からの深さ0.36mを測り、平面形態は隅丸の長方形を呈する。北東側が調査区外に広がる。建物覆土は2層とした。建物に伴う遺構として建物中央で碁跡を1基、柱穴を2基検出した。柱穴の深さは46～54cmと浅い。碁の北側と南側で硬化した床面を検出した。建物北西隅と南東隅にベッド状遺構を確認した。

自然科学分析の結果、S I 71 内から出土した炭化材は、S I 66 同様にコナラ属アカガシ亜属であった。比較的重硬で強度が高いことから建築部材として適材とされている。床面に近い覆土2層からの出土であり、



第68図 S I 67 遺構実測図





第70図 S 171 出土遺物実測図2

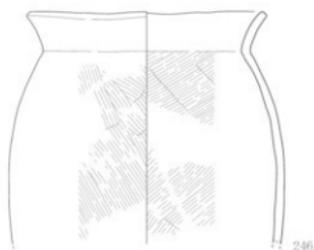


〈土層注記〉S172

- ①層：101K2/3肌褐色土 締まり強い 粘性やや強い φ1～2mmの焼土粒子・炭化物を少量含む
- ②層：101K2/2肌褐色土 締まり強い 粘性やや強い φ1～2mmの焼土粒子・炭化物を少量含む コーム粒子を少量含む
- ③層：101K2/2肌褐色土 締まり強い 粘性やや強い φ1～2mmの焼土粒子・炭化物を少量含む ニガシロのブロックを多く含む

〈土層注記〉S173

- ①層：101K2/3肌褐色土 締まり強い 粘性強い φ1～2mmのコーム粒を微量含む 焼土粒子を少量含む
- ②層：101K2/2肌褐色土 締まり強い 粘性強い φ1～2mmのコーム粒を少量含む 焼土粒子を少量含む



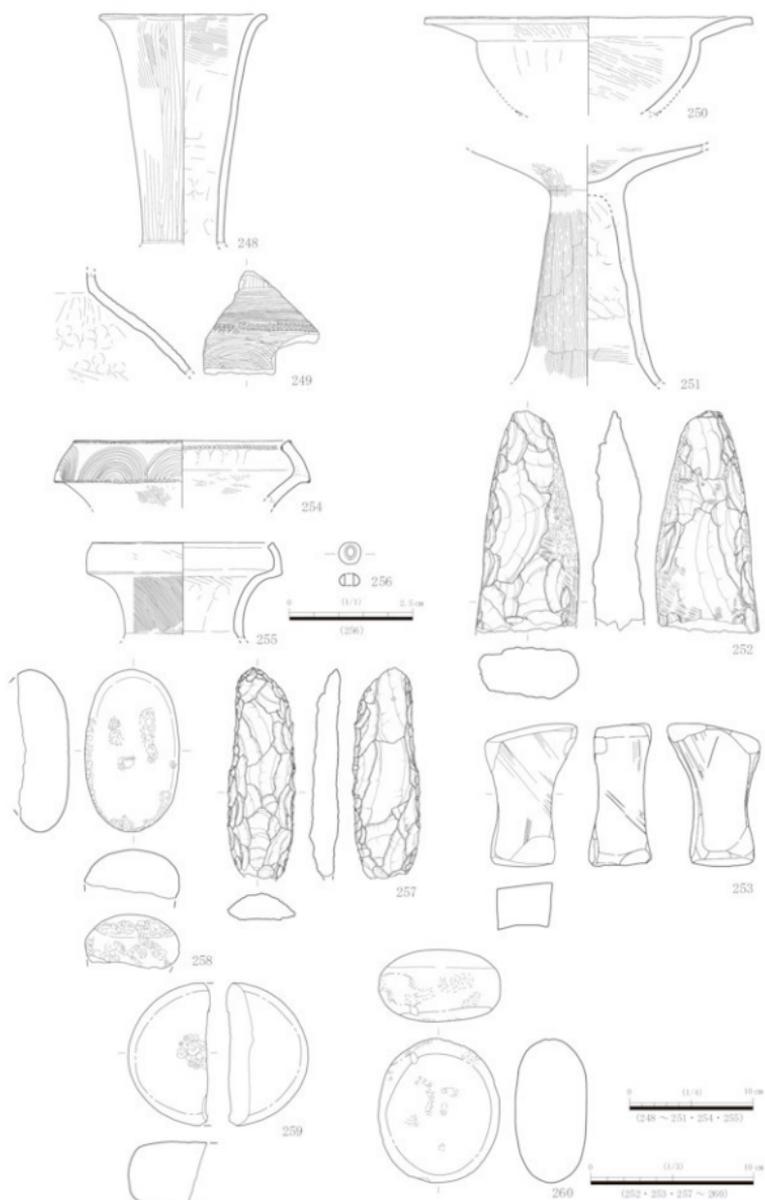
246



247

0 (1/4) 20m
(246・247)

第71図 S172・73 遺構・出土遺物実測図1



第72図 S172・73出土遺物実測図2

炭化物も散在していたが、建物床面が焼けていることはなく、炭化材の出土量も少量でもあることから、本遺構もしくは周辺遺構で使用された建築部材と考えたい。

遺物は建物南側を中心に覆土下層から多量に出土しており、本遺構と重複関係のない S I 65 の出土遺物と接合関係にあることがわかっている。233～236 は甕である。233 の口縁部は頸部から緩やかに外反する。口縁端部は丁寧に面取りされている。胴部中位に最大径をもつ。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。脚台部の高さは裾部径の半分程度である。234 の口縁部は頸部からやや強く外反する。胴部上位に最大径をもつ。内外面ともに口縁部から胴部まで明瞭にハケ目が施されている。235 の口縁部は頸部から外反し開く。胴部中位に最大径をもつ。内面と外面胴部上位のハケ目は目が粗く、胴部中位から下位のハケ目は目の細かいものが施されている。脚台部の高さは裾部径の半分以下である。236 の口縁部は頸部から緩やかに外反する。口縁端部は丁寧に面取りされており、外側は揃んだように仕上げられている。237 は鉢と思われる。短い口縁部が外側に強く開く。238 は鉢と思われる。口縁部は頸部からまっすぐ立ち上がり緩やかに外反する。外面は胴部中位までのハケ目は目が粗く、中位から下位のハケ目は細かい。239 は小形の甕であり、完形で残っていた。口縁部は緩やかに開く。胴部上半に斜めのハケ目が残る。240 は甕である。頸部からややまっすぐに立ち上がり短く外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。241・242 は高環である。241 は長い口縁を有する。内外面にハケ目が残るが、環部内面に若干粗いミガキが施されている。S I 65 と接合関係にある。242 は環部から脚部下位まで残存していた。脚部には円孔が二段互い違いに4箇所ずつ穿たれている。内外面ともに丁寧にミガキが施され、赤味を帯びる。外面は摩滅が激しい。243 は二等辺三角形をしている凹基式の黒曜石製の石鏃。244 は砥石。245 は円盤状の石製品である。

S I 72 (第71図・第72図)

S I 72 は D 7、E 7 に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。建物北西側が S I 73 と重複している。先後関係は S I 73 → S I 72 である。遺構規模は長軸約 4.68 m、短軸約 4.20 m、検出面からの深さ 0.30 m を測り、平面形態は隅丸のややいびつな長方形を呈する。建物覆土は 3 層とした。建物に伴う遺構として北東隅と北西隅にベッド状遺構を検出した。柱穴やか跡は検出されなかった。

遺物は建物中央を中心に覆土下層から多量に出土している。S I 73 との重複箇所から出土した遺物同士で接合関係が認められた。調査時に明確にそれぞれの帰属遺構を区別できなかったことが原因である。出土位置の三次元情報を頼りに帰属遺構を推定し分類したが、ここでの接合関係は精度が低い。

246・247 は甕である。246 の口縁部は頸部から緩やかに外反する。胴部上位に最大径をもつ。内外面ともにハケ目と横ナデを施す。247 は甕で、胴部下半から脚台部が残存していた。脚台部の高さは裾部径の半分以下である。裾部付近で外側に開く。S I 73 と接合関係にある。248 は長頸甕の頸部である。頸部と胴部の接合部付近に区画線が 1 条施されている。外面には丁寧に縦ミガキが施されている。249 は甕の胴部破片である。平行区画線を胴部上位から頸部立ち上がりまで 16 条施し、平行線の一部に短い縦刻みを施す。その下部に上向きの重弧文を描く。250・251 は高環である。250 はやや深い胴部に強く屈曲した口縁部を有する。内面は丁寧にミガキが施され、内外面ともに赤味を帯びる。S I 73 と接合関係にある。251 は浅い環部から脚部下半まで残存していた。外面には縦のハケ目が明瞭に残り、内面にはミガキが施されている。内外面ともに赤味を帯びる。252 は蛇紋岩製の磨製石斧である。253 は砥石である。

S I 73 (第71図・第72図)

S I 73 は D 7・8 に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。建物北東側約 1/4 が S I 72 と重複している。先後関係は S I 73 → S I 72 である。また、北西側は表土剥ぎの際、重機で掘

削し過ぎてしまったため完全に飛んでしまっている。遺構規模は長軸約5.0m、短軸約3.84m、検出面からの深さ0.30mを測り、平面形態は隅丸の長方形を呈する。建物覆土は2層とした。S172と重複した北東側を明確に把握することができなかった。調査について反省すべき点が多い遺構となってしまった。建物に伴う遺構として柱穴、が跡、ベッド状遺構は検出できなかった。

遺物は建物東側を中心に覆土下層から多量に出土している。S172との重複箇所から出土した遺物同士で接合関係が認められた。調査時に明確にそれぞれの帰属遺構を区別できなかったことが原因である。出土位置の三次元情報を頼りに帰属遺構を推定し分類したが、ここでの接合関係は精度が低い。

254・255は複合口縁の甕である。254の一次口縁はやや外反しながら開き、二次口縁が内傾して立ち上がる。一次口縁の内外面にハケ目が明瞭に残る。二次口縁の口縁端部の内外面及び一次口縁との接合部外面に短い縦刻みを施したのち、外面に上向きの中弧を描いている。縦刻みを目印に描いているように見える。255の一次口縁は外反しながら開き、短い二次口縁が緩やかに内傾して立ち上がる。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。S172と接合関係にある。256はガラス製小玉で径4.5mm、厚さ2.5mm、孔径2mmを測る。薄い群青色を呈する。257は砂岩製の打製石斧である。258～260は磨石類である。敲打痕が認められる。

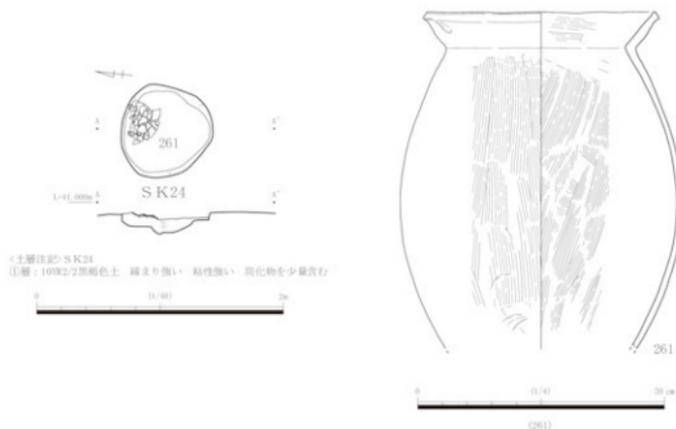
②土坑

S K 24 (第73図)

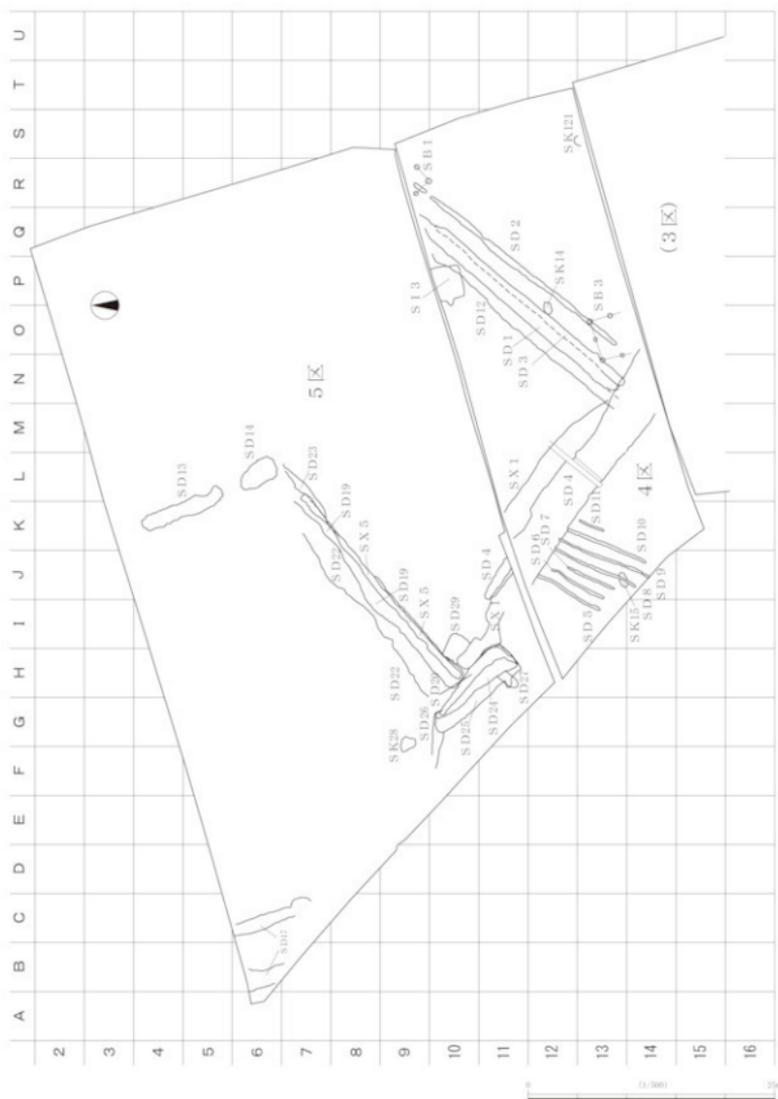
S K 24はF7に位置する。調査5区が開田事業により削平されているため、本来竪穴建物の付属遺構なのか、単独の土坑なのか判断としないが、ここでは単独の土坑として報告する。

遺構規模は直径約0.76m、検出面からの深さ0.16mを測り、平面形態は円形を呈する。覆土は1層とした。甕がつぶれたような状態で出土したため周辺を探ったところ、土坑に伴うものとわかった。

261は甕である。口縁部は頸部からやや内湾ぎみに開く。口縁端部は丁寧に面取りされている。胴部中位に胴部最大径をもつ。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。



第73図 S K 24 遺構・出土遺物実測図



第74図 4・5区遺構配置図(古代以降)

(3) 古代の遺構・遺物 (第74図～第76図)

調査4区・5区における古代の主要な検出遺構は、竪穴建物1軒、掘立柱建物2棟である。時期は9世紀初頭から9世紀中葉が主体と想定される。当該期は、これまでの研究(網田1997)により小型の竪穴建物から掘立柱建物へと移行する時期とされる。第6章で本遺跡の状況について考えたい。

①竪穴建物跡

S I 3 (第75図)

S I 3はP 10、調査4区と調査5区の境に位置している。そのため、土地全体が削平されている調査5区側にあたる建物北側は大部分が破壊されている。遺構の規模は長軸約4.08m、検出面からの深さ0.45mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は13層とした。主軸方位はN-79°-Eで座標西よりわずかに東に振れる。建物に伴う遺構としてカマド1基、柱穴2基を検出した。カマドは建物西側に造り付けられており、袖幅約27～46cmを測る。柱穴は建物南側でP 1・2が並んで検出されている。深さは約12～14cmを測り、やや浅いが主柱穴と思われる。対応する北側の柱穴は削平により破壊されているものと考えている。床面はカマド周辺から建物中央にかけて硬化した面が広がっている。

出土遺物は、覆土から土師器、カマドの燃焼部から管玉が出土している。ここでは土器1点、管玉1点を図示した。262は土師器の長胴甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部の開きが強く、やや横方向に開く。胴部外面に縦方向のハケ目、内面に縦方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデが施されている。9世紀前葉から中葉の所産に収まるものと思われる。263は灰色がかかった緑色の管玉である。長さ0.65cm、幅0.35cm、孔径0.15cmを測る。

②掘立柱建物

S B 1 (第76図)

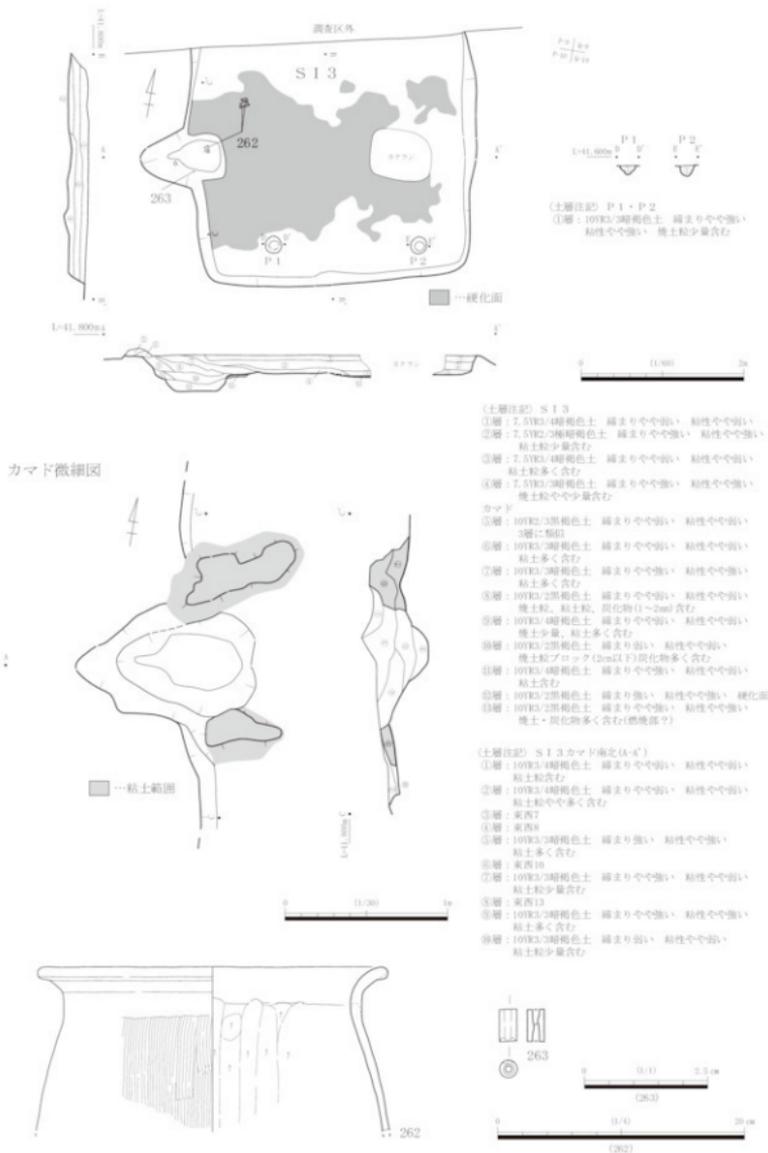
S B 1はR 9、調査4区と調査5区の境に位置している。そのため、土地全体が削平されている調査5区側にあたる建物北側は大部分が破壊されている。よって、検出できたのは桁行1間・梁行1間であった。しかし、本遺跡で検出されている掘立柱建物の規模から推定すると、本来はもう少し規模のある建物と思われる。柱穴は径40～58cm、深さ約32～46cmを測る。柱穴の下端レベルはほぼ一定である。

柱穴からの出土遺物はないが、重複関係、覆土の色調、塔平遺跡での掘立柱建物の調査状況から当該期の遺構と推定している。

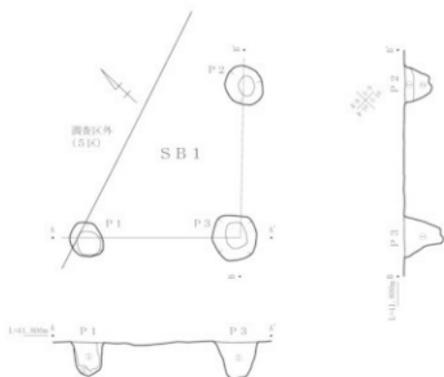
S B 3 (第76図)

S B 3はN 13、O 13、調査3区と調査4区の境に位置している。3区(永土2013)の調査では、S B 3の広がりを探したが検出することはできなかった。調査区外周に設定した土層トレンチや別遺構により破壊されている可能性もある。検出できたのは、桁行2間・梁行1間であったが、S B 1同様に本来はもう少し規模のある建物と推定される。柱穴は径約38～54cm、深さ約26～58cmを測る。柱穴の下端レベルは一定ではない。主軸方位は調査3区で検出されている桁行2間・梁行3間の掘立柱建物4棟とほぼ同一である。

柱穴からの出土遺物はないが、重複関係、覆土の色調、塔平遺跡での掘立柱建物の調査状況から当該期の遺構と推定している。

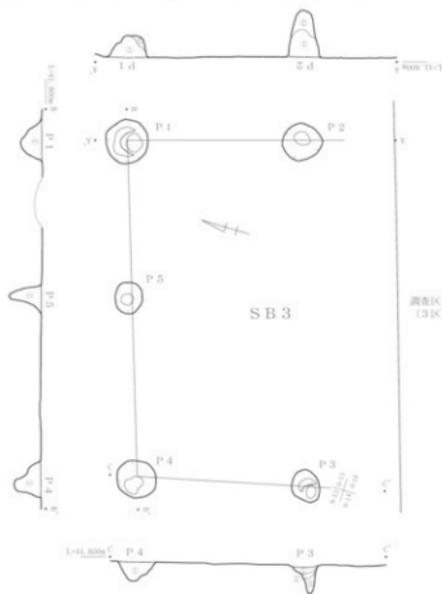


第75図 S13遺構・出土遺物実測図



〔土層注記〕SB1 P1～P3

- ①層：101R2/2黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、焼土粒子を少量含む
 ②層：101R3/3黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、焼土粒子を少量含む

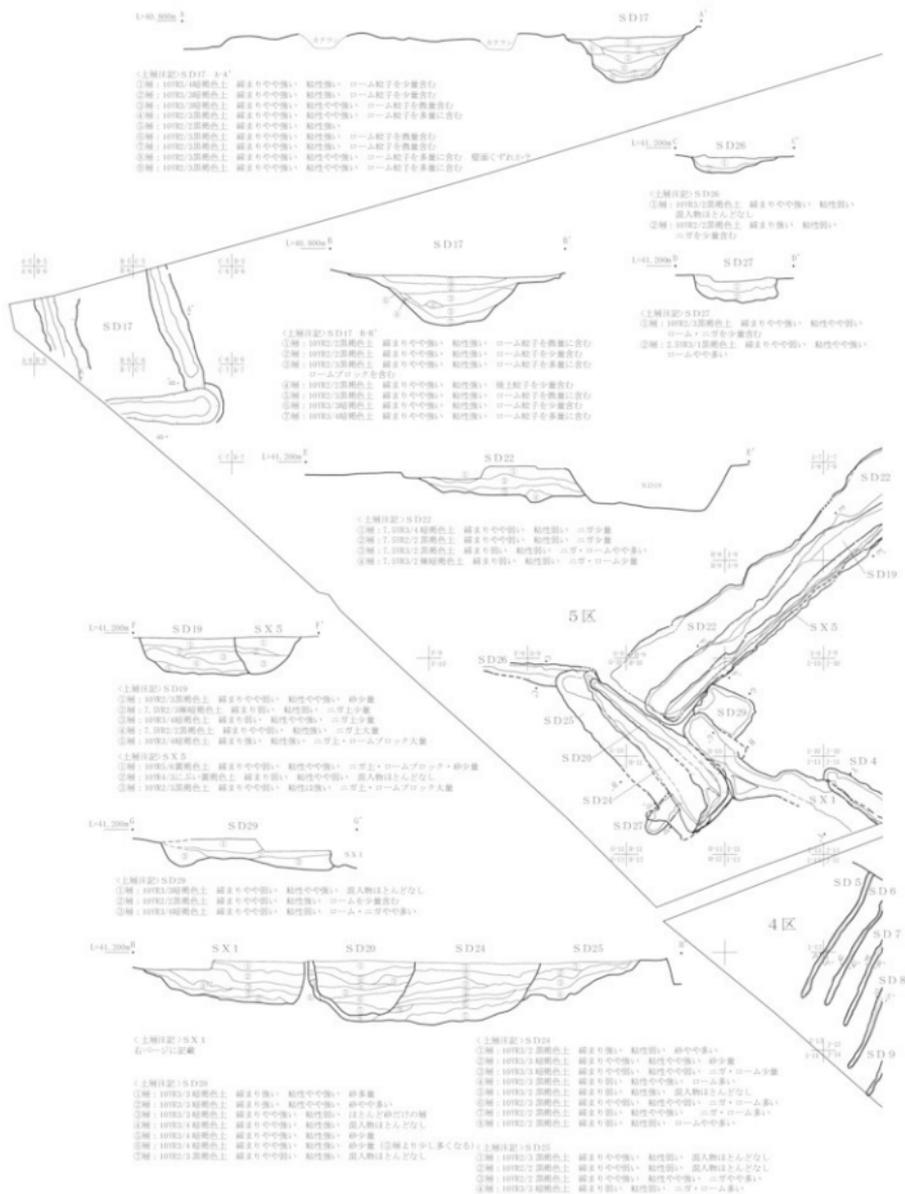


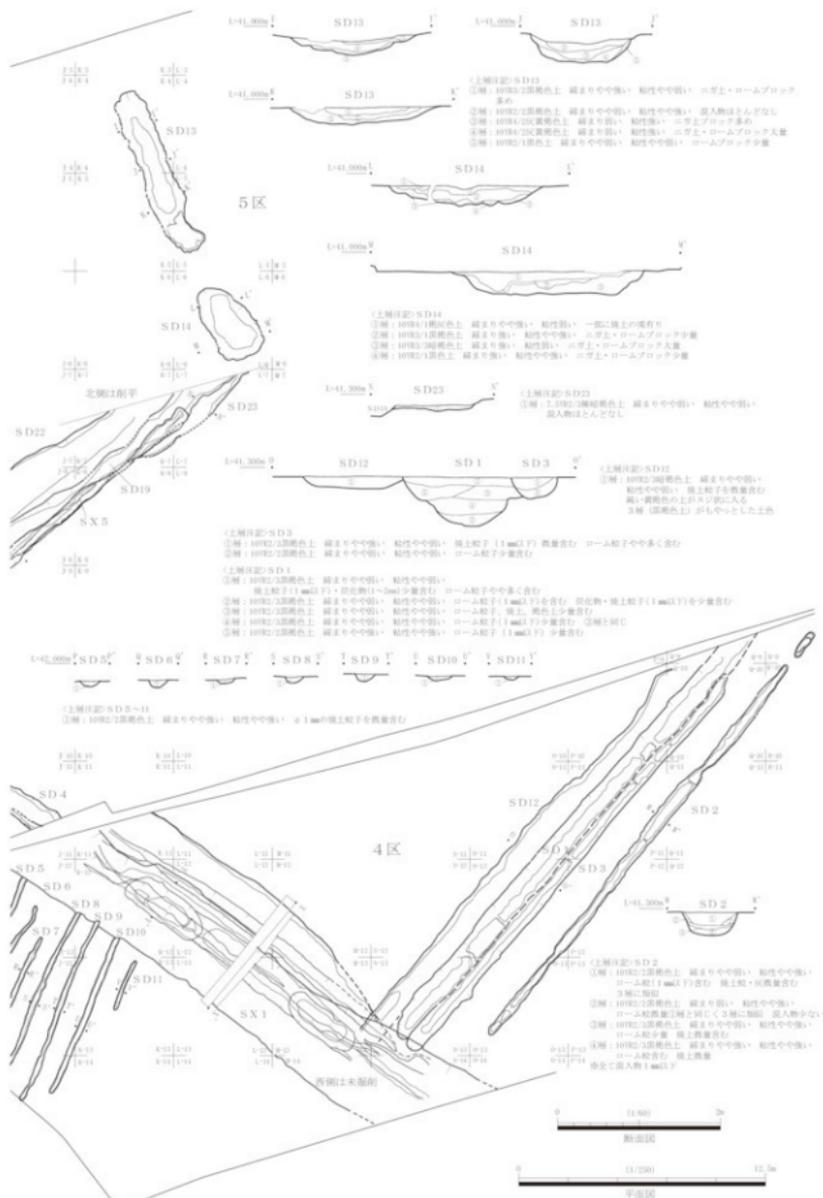
〔土層注記〕SB3

- P1 ①層：101R2/3黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、炭化物と焼土粒を少量含む、白ニガを少し含む
 ②層：101R2/3黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、黄褐色土をブロック状に含む
 P2・P5 ①層：101R2/3黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、炭化物と焼土粒を少量含む、白ニガを少し含む、黄褐色土をブロック状に含む
 ②層：101R2/3黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、黄褐色土をブロック状に含む、白ニガを少し含む
 P3 ①層：101R2/3黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、炭化物と焼土粒を少量含む、白ニガを少し含む
 ②層：101R2/2黒褐色土 全体的に①層より色調が濃い、炭化物を少し含む
 ③層：101R2/2黒褐色土 黄褐色土をブロック状に多く含む
 P4 ①層：101R2/3黒褐色土 締まりや強い、粘性や強い、炭化物と焼土粒を少量含む、白ニガを少し含む

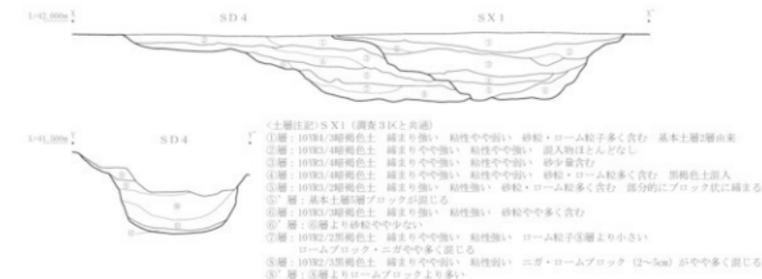


第76図 SB1・3遺構実測図



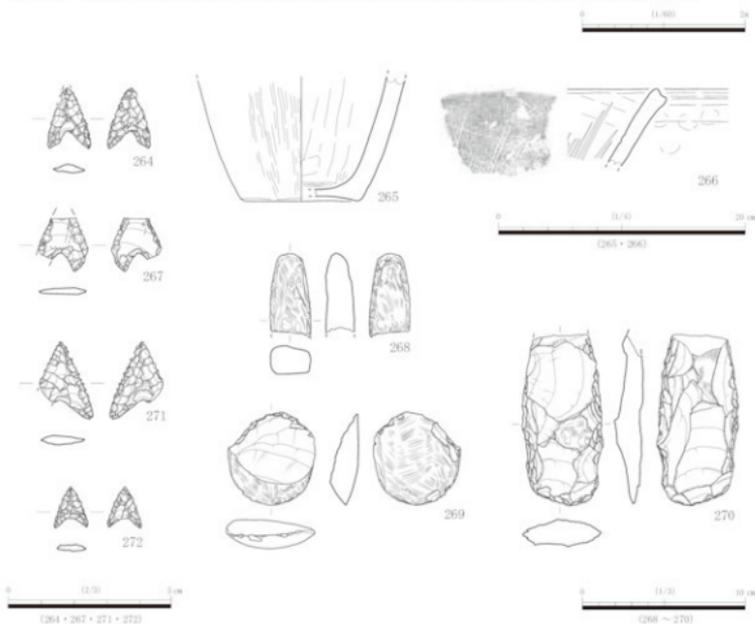


第77図 SD・SX遺構実測図

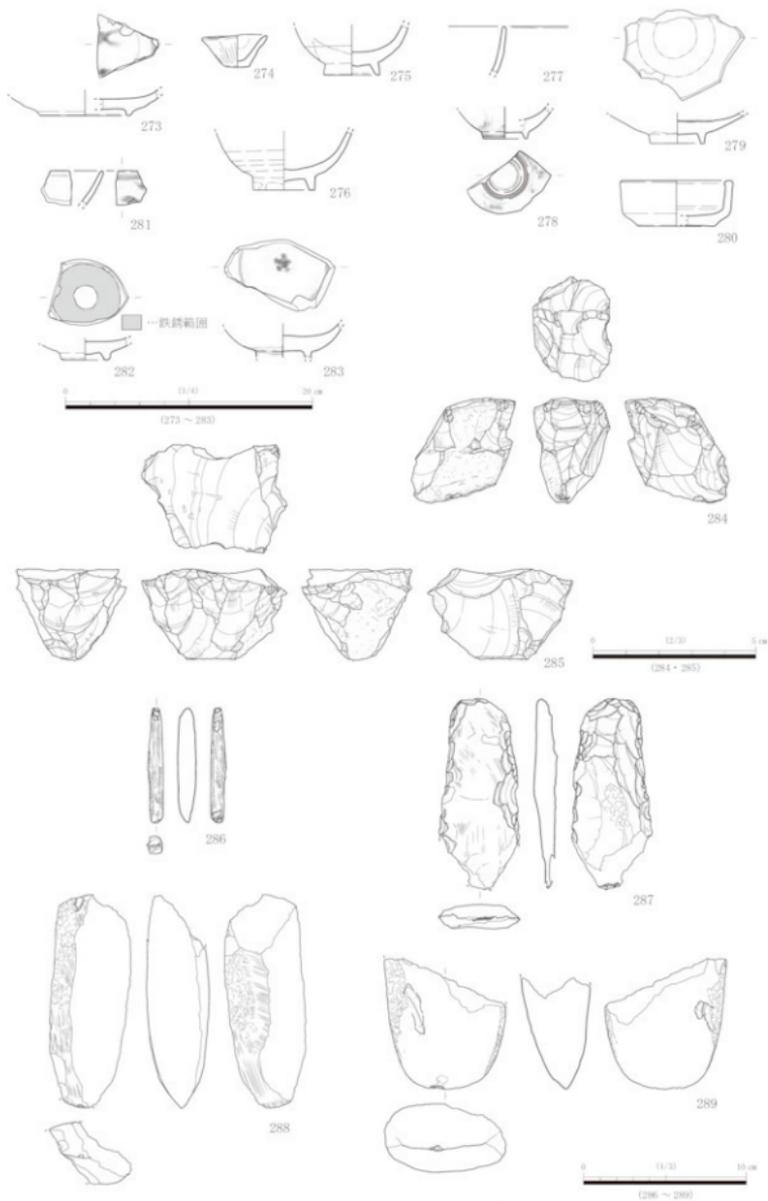


〈土層注記:SD 4

- ①層: ①層 10W3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや弱い、
 砂粒(ローム粒)・塊土粒・炭化物(1mm以下)を多く含む。
 ②層 10W3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや弱い、
 砂粒(ローム層)・塊土粒・炭化物(1mm以下)を多く含む。黒褐色土混ざる。
 ③層: ③層 10W3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや弱い、
 砂粒(ローム層)・塊土粒・炭化物(1mm以下)を多く含む。部分的にブロック状に締まる。
 ④層 10W3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや弱い、
 砂粒(ローム層)・塊土粒・炭化物(1mm以下)を多く含む。黒褐色土混入。部分的にしめる。
 ⑤層: ⑤層 10W2/3黒褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、
 砂粒(ローム粒)・塊土粒・炭化物(1mm以下)少量含む。黒褐色土少量混ざる。褐色土多く混ざる。
 ⑥層 10W2/3黒褐色土 締まり強い、粘性やや強い、
 砂粒(ローム粒)・塊土粒・炭化物(1mm以下)含む。
 ⑦層: ⑦層 10W3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、
 砂粒(ローム層)・塊土粒・炭化物(1mm以下)混雜含む。
 ⑧層 10W2/3黒褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、
 砂粒(ローム層)・塊土粒・炭化物(1mm以下)混雜含む。ニガ土混ざる。
 ⑨層: ⑨層 10W2/3黒褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、2×2cm以上の黒褐色土をブロック状に多量に含む。
 白ニガをわずかに含む。
 ⑩層 10W2/2黒褐色土 締まりやや強い、粘性強い、砂を多く含み、4×4cm以上の黒褐色土ブロックを多量に含む。
 ⑪層 10W2/3黒褐色土 締まり弱い、粘性強い、砂質が2層より強い、白ニガをブロック状に多く含む。
 ⑫層: ⑫層 10W2/3黒褐色土 締まりやや強い、粘性強い、きのこ層0.4~0.6を含む。白ニガをブロック状に含む。下層のロームブロックを少し含む。



第78図 SD・SX遺構・出土遺物実測図1



第79図 S D・S X出土遺物実測図2

(4) 近現代の遺構・遺物(第74・77図～第79図)

基本土層2層～3層中において確認された溝である。調査3区では多くの溝状遺構検出時において、プランを囲むように耕作時の攪乱(いも穴)を確認しているが、調査4区・5区では溝状遺構に沿うような攪乱を確認することはあまりなかった。溝状遺構内において取り上げた遺物には良好な資料を包含していた。

ここでは主要なSD、SXの所見及びSD、SXで特徴的な出土遺物の所見を記すこととする。

①溝状遺構

SD2(第77図)

SD2は調査4区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約26.2m、幅約0.65m、検出面からの深さ0.28mを測る。調査4区・5区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は4層に分けることができた。実測可能な遺物がなかったため、覆土の色調、類別等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

SD12(第77図・第78図)

SD12は調査4区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約24.3m、幅約1.2m、検出面からの深さ0.15mを測る。調査5区との境界付近でプランが不明瞭なまま取戻したため、調査5区までは伸びないものと捉えた。SD3、SD12、SX1と重複している。先後関係はSD12→SD1・SX1→SD3・SX1と捉えている。調査4区・5区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は1層だが、色調がとても淡く、最後まで遺構とすか迷ったものである。

269は砂岩製の磨製石斧である。270は安山岩製の打製石斧である。混入と捉えている。覆土の色調、類別等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

SD1(第77図・第78図)

SD1は調査4区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約27.5m、幅約1.33m、検出面からの深さ0.6mを測る。調査5区に向かって伸びるが、削平されているため、検出は4区でとどまっている。SD3、SD12、SX1と重複している。先後関係はSD12→SD1・SX1→SD3・SX1と捉えている。調査4区・5区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は5層に分けることができた。

264は二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鏃。混入と捉えている。重複関係、覆土の色調、類別等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

SD3(第77図)

SD3は調査4区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約25.0m、幅約0.56m、検出面からの深さ0.26mを測る。SD1、SX1と重複している。先後関係はSD1・SX1→SD3・SX1と捉えている。調査4区・5区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は2層に分けることができた。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類別等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

SD5～11(第77図)

SD5～11は調査4区西側で南西から北東方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報

告する。遺構規模は長さ約 2.7～10.0 m、幅約 0.15～0.30 m、検出面からの深さ 0.1～0.15 m を測る。調査 4 区・5 区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は 1 層。出土遺物はなかった。覆土の色調や規模から近現代の畑の畝ではないかと推測している。

SX1 (SD4) (第77図～第79図)

SX1 (SD4) は調査 4 区西側で南東から北西方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 35.0 m、幅約 4.10 m、検出面からの深さ 0.84 m を測る。SD1、SD3、SD12 と重複している。先後関係は SD12 → SD1・SX1 → SD3・SX1 と捉えている。調査 4 区・5 区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。SD4 の覆土は 12 層、SX1 の覆土は 8 層に分けることができた。SD1 や SD3 と交差しており、同時期のものと考えている。調査 3 区の SX1 と同一のものである。断面は北東から緩やかに落ち込み、段を成すごとに急傾斜し、南西側に最深部をもつ。

SX1 と SD4 の区別は断面図を作成したポイントでは可能だが平面での区別は難しく、翌年の 3 区調査時に見分けようと試みたが、南側では断面での区別も付かない状況であった。したがって、本来同一の遺構だが、ある時期に 4 区側で埋没しかけた溝を西側の SX1 部分だけ掘り直したのではないかと推定している。つまり、SX1 は 2 時期に分けられ、掘り直された時に、埋没したまま残った部分が SD4 ではないかと思われる。区画溝もしくは水路ではないかと推定しており、覆土上層の特徴から、戦後の圃場整備が行われた際に最終的に埋め戻されたものと考えている。

265 は深鉢の胴部下半から底部の破片である。縄文時代早期のものと思われる。266 は瓦質の播鉢の口縁部破片である。267 は二等辺三角形をしている凹基式の黒曜石製の打製石鏃。268 は蛇紋岩製の磨製石斧である。281 は磁器の染付碗（青花）である。漳州窯系と思われる。282 は白磁の碗である。283 は磁器の染付碗である。コンヤク印判で五弁花が付けられている。

284・285 は黒曜石製の石核である。286 は蛇紋岩製の片刃の磨製石斧もしくは石製と思われる。287 は結晶片岩製の磨製石斧と思われる。288 は砂岩製の両刃の磨製石斧である。289 は安山岩製の両刃の磨製石斧である。

SD29 (第77図)

SD29 は調査 5 区西側で南東から北西方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 2.70 m、幅約 2.12 m、検出面からの深さ 0.33 m を測る。SX1 と重複している。先後関係は SD29 → SX1 と捉えている。覆土は 3 層に分けることができた。新たな遺構名を付けているが、SD4 と同一のもので、SX1 として掘り直した際に埋没したまま残った部分と思われる。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、傾斜等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

SD13・14 (第77図・第78図)

SD13・14 は調査 5 区中央で南西から北東方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報告する。遺構規模は長さ約 4.2～8.5 m、幅約 1.75～2.3 m、検出面からの深さ 0.17～0.26 m を測る。調査 4 区・5 区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は 4 層～5 層に分けることができた。

271 は二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鏃。混入と捉えている。覆土の色調、傾斜等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

S D 20・24・25 (第77図・第79図)

S D 20・24・25は調査5区西側で南東から北西方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報告する。遺構規模は長さ約9.80～10.6 m、幅約1.26～3.40 m、検出面からの深さ0.44～0.76 mを測る。調査4区・5区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は4層～8層に分けることができた。先後関係はS D 25→S D 24→S D 20と捉えている。S D 25を3時期にわたり掘り直したものと推定している。

273はS D 20から出土した磁器の染付皿である。肥前系と思われる。277はS D 24から出土した陶器の碗である。278はS D 24から出土した磁器の染付碗である。279はS D 24から出土した青磁の皿である。

S D 26 (第77図)

S D 26は調査5区西側で南東から北西方向へ伸びる。遺構規模は長さ約5.0 m、幅約1.06 m、検出面からの深さ0.19 mを測る。S D 20・S D 24・25と重複している。先後関係はS D 26・S D 25→S D 24→S D 20と捉えている。覆土は2層に分けることができた。遺構名を分けたが、S D 25が西側に折れた部分と思われる。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類別等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

S D 27 (第77図)

S D 27は調査5区西側で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約2.0 m、幅約0.84 m、検出面からの深さ0.24 mを測る。S D 24・25と重複している。先後関係はS D 27→S D 25→S D 24と捉えている。覆土は2層に分けることができた。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類別等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

S D 22・23・19・S X 5 (第77図～第79図)

S D 22・23・19・S X 5は調査5区西側で南西から北東方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報告する。遺構規模は長さ約6.90～25.1 m、幅約0.80～3.80 m、検出面からの深さ0.44～0.46 mを測る。調査4区・5区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は3層～5層に分けることができた。先後関係はS D 22・23→S D 19→S X 5と捉えている。S D 22・23を3時期にわたり掘り直したものと推定している。

272は二等辺三角形をしている凹基式の黒曜石製の打製石鏃。274はS D 22から出土した鉢形をしたミニチュア土器である。外面にハケ目が施されている。275はS D 22から出土した陶器の碗である。276はS D 22から出土した白磁の碗である。280はS D 28から出土した青磁の火入である。肥前系と思われる。いずれも混入と思われる。

S D 17 (第77図)

S D 17は調査5区西側に位置する。遺構規模は長さ約3.80～6.00 m、幅約1.50～2.20 m、検出面からの深さ0.54～0.59 mを測る。一部が交差しているが一連のものと推定した。覆土は9層に分けることができた。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類別等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

(5) 時期不明の遺構・遺物 (第74・80図)

①土坑

SK 14 (第80図)

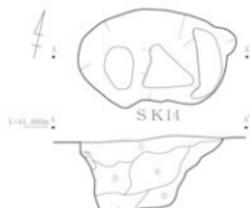
SK 14はO 12に位置する。遺構規模は長軸約1.2m、短軸約0.78m、検出面からの深さ0.78mを測り、平面形態はややいびつな楕円形、断面形態はいびつな台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は6層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している。

SK 15 (第80図)

SK 15はJ 13・14に位置する。遺構規模は長軸約1.55m、短軸約0.76m、検出面からの深さ0.58mを測り、平面形態は楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は5層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している。

SK 121 (第80図)

SK 121はS 12・13に位置する。遺構規模は長軸約1.06m、検出面からの深さ0.36mを測る。平面形態は円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は2層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している。



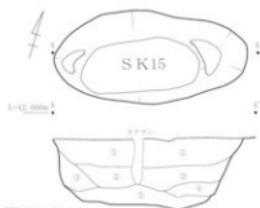
〈土層注記〉SK 14

- ①層：10R2/3黒褐色土 締まり強い、粘性強い
φ 1mmの炭化物・焼土粒子を微量含む
- ②層：7.5R3/3暗褐色土 締まり強い、粘性強い
カベの崩れか
- ③層：10R2/2黒褐色土 締まり強い、粘性強い
- ④層：10R2/2黒褐色土 締まり強い、粘性強い
- ⑤層：10R2/2黒褐色土 締まりやや弱い、粘性強い
- ⑥層：10R3/3暗褐色土 締まり強い、粘性強い



〈土層注記〉SK 121

- ①層：10R2/2 黒褐色土 締まりやや強い、粘性強い
φ 1mmの焼土粒子を微量含む ややまだら
- ②層：10R2/3黒褐色土 締まりやや強い、粘性強い



〈土層注記〉SK 15

- ①層：7.5R3/4暗褐色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い アカホヤ (5) が
やや混じる ローム粒を少量含む
- ②層：7.5R3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い ローム粒少量含む
- ③層：7.5R3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い ローム粒・白ニガ
少量含む
- ④層：7.5R2/2黒褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い ローム粒少量含む
- ⑤層：7.5R3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い 白ニガ混じり



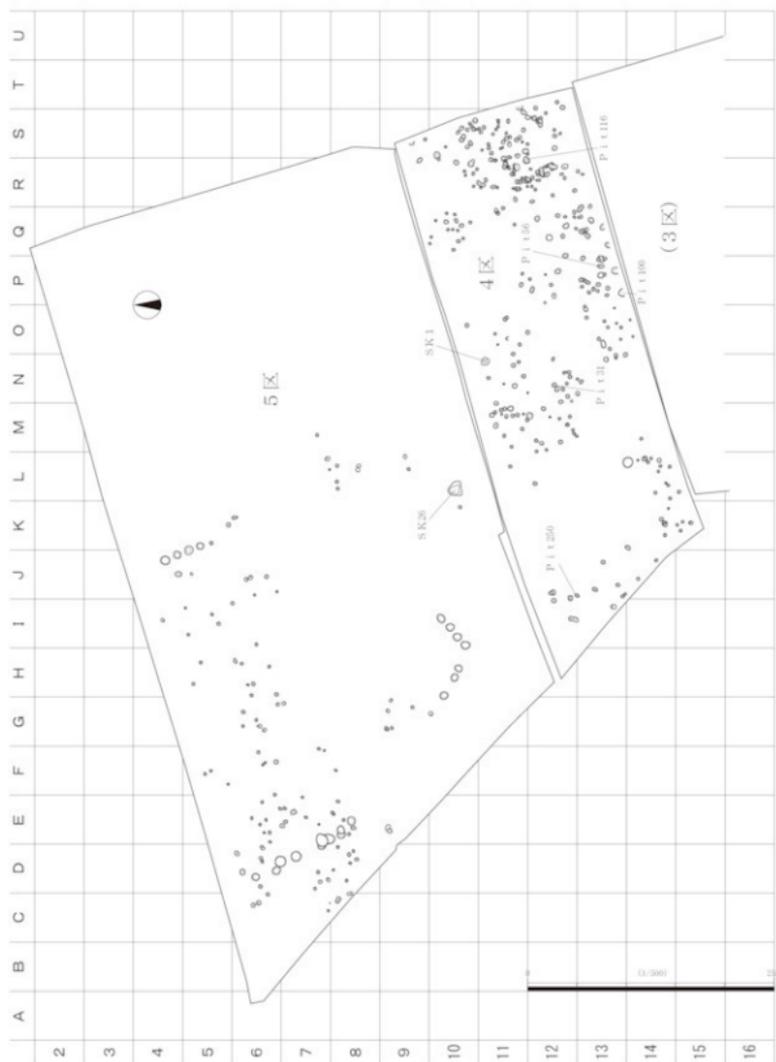
〈土層注記〉SK 28

- ①層：10R3/3暗褐色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い 炭化物・焼土粒子を少量含む
- ②層：10R3/2黒褐色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い 炭化物をやや多く含む
ローム土少量含む

第80図 SK 14・15・121・28 遺構実測図

SK 28 (第80図)

SK 28 は F・G 9 に位置する。遺構規模は長軸約 1.56 m、短軸 1.38 m、検出面からの深さ 0.47 m を測る。平面形態はいびつな円形を呈する。断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は 2 層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している。



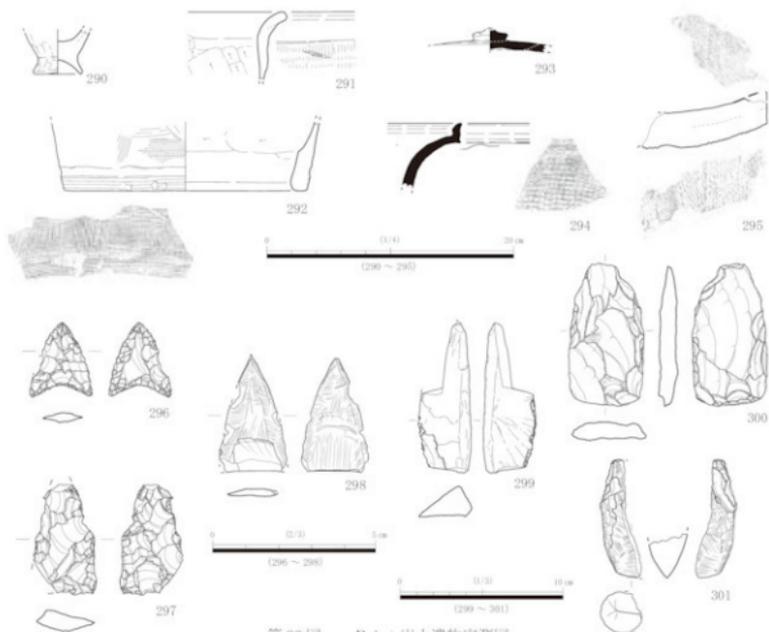
第81図 4・5区Pit配置図

(6) P i t 出土遺物 (第 81・82 図)

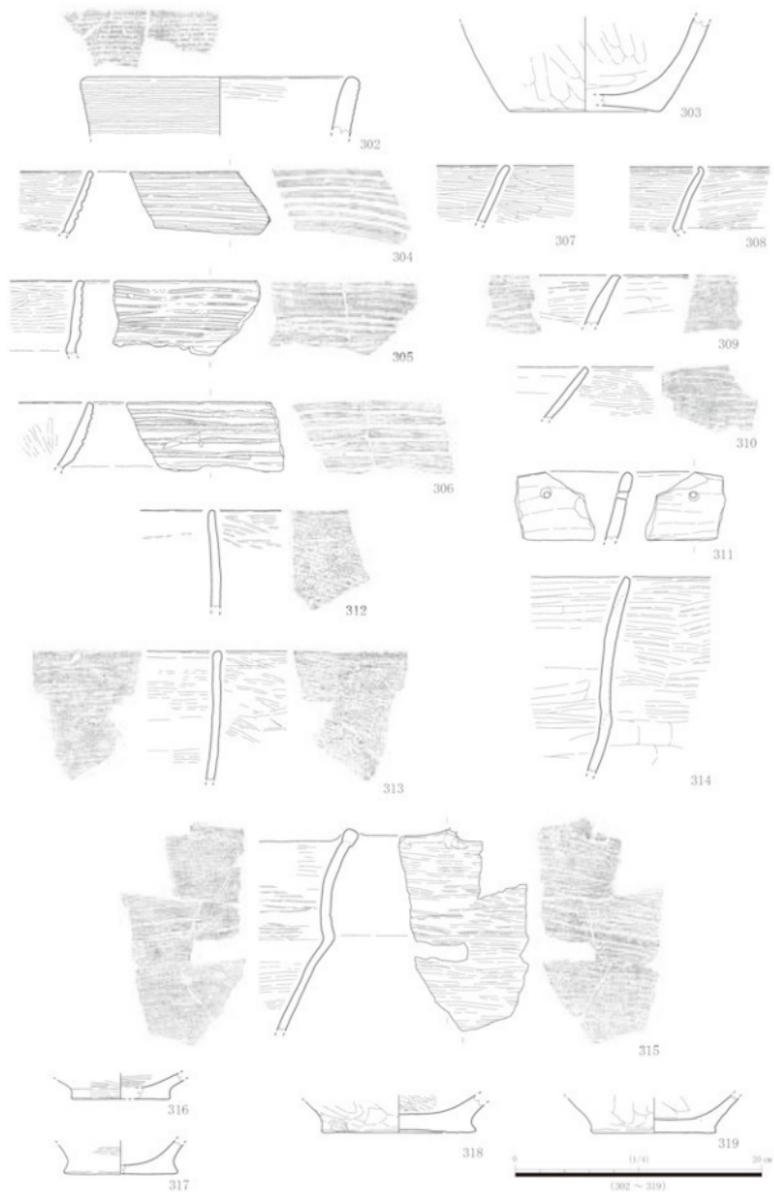
調査4区・5区においては多数のピットを検出した。いずれの遺構覆土も黒褐色～暗褐色を呈しており、混入物、土質にそれぞれ若干の違いがあったが、遺構の正確な時期は解らなかった。ここではピット内から出土した遺物のうち、土器5点、瓦1点、石器6点を図示した。

290は脚台付甕もしくは台付鉢のミニチュア土器である。弥生時代後期のものと思われる。291は土師器の長胴甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部はやや斜め上向きに開く。胴部外面に縦方向のハケ目、内面に斜め方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデが施されている。胴部の器壁がやや薄い。9世紀前葉から中葉のものと思われる。内面から口縁端部にかけてスガが付着している。292は土師器の甕であろうか。底部が残存していた。外面にハケ目が明瞭に残り、内面は深いケズリが施されている。293は須恵器の蓋である。つまみはやや扁平な擬宝珠形のもの。294は須恵器の甕の口縁部から頸部と思われる。外面に格子目タタキ、内面には回転ナデが残っている。295は平瓦で凸面に縄目、凹面に布目痕が残る。

296はP i t 56から出土した二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鏃。297はP i t 116から出土した二等辺三角形をしている平基式の黒曜石製の打製石鏃。298はS K 1から出土した二等辺三角形をしている凹基式の磨製石鏃で緑色片岩製である。299はP i t 100から出土した頁岩製の礫器と思われる。300はP i t 229から出土した安山岩製の打製石斧である。301はP i t 250から出土した蛇紋岩製の両刃の磨製石斧である。



第 82 図 P i t 出土遺物実測図



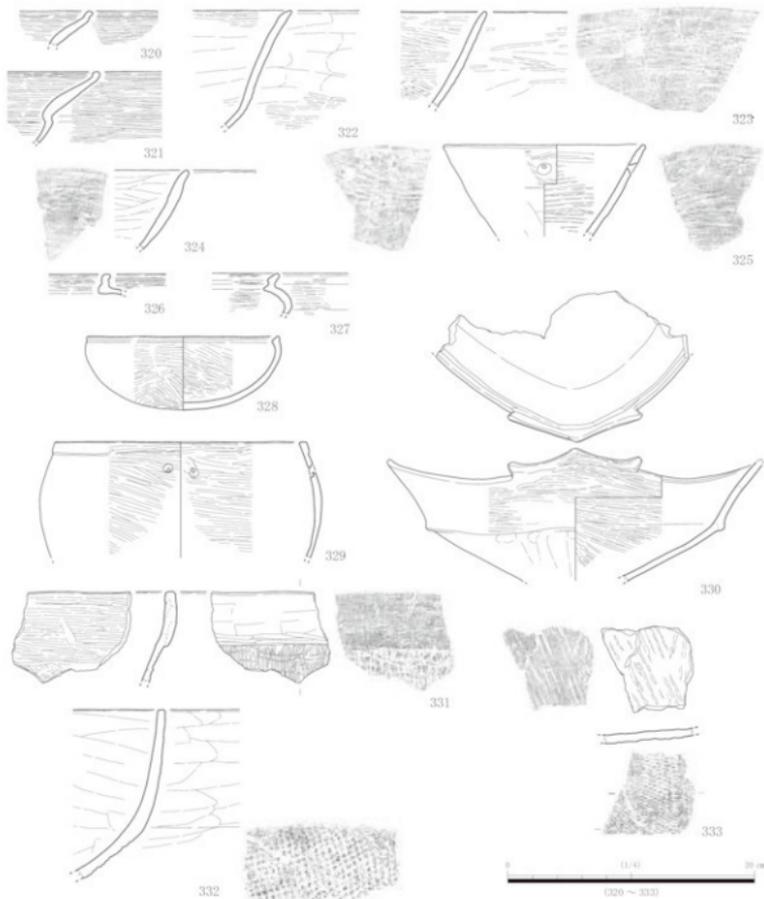
第83図 遺構外出土遺物実測図1

(7) 4区・5区遺構外出土遺物(第83図～第91図)

調査4区・5区の遺構外からは多量の遺物が出土している。現地調査では遺構外の出土遺物は、いずれもグリッド名と層位名を付けて取り上げている。整理作業の過程で種別、時期別に分類し、周辺遺構から出土した遺物との接合作業も行っている。ここでは、遺構出土遺物と接合することなかった土器46点、瓦1点、陶器1点、石器96点、玉類3点、鉄器5点を図示した。

①土器・瓦類(第83図～第85図)

302は貝殻条痕文の深鉢の口縁部破片である。口縁部はやや斜め上方に直線的に開く。厚さは1cm以上ある。外面に押引文、内面にナデとミガキが施される。303は深鉢の底部～胴部下半である。厚さは1cm以上ある。



第84図 遺構外出土遺物実測図2

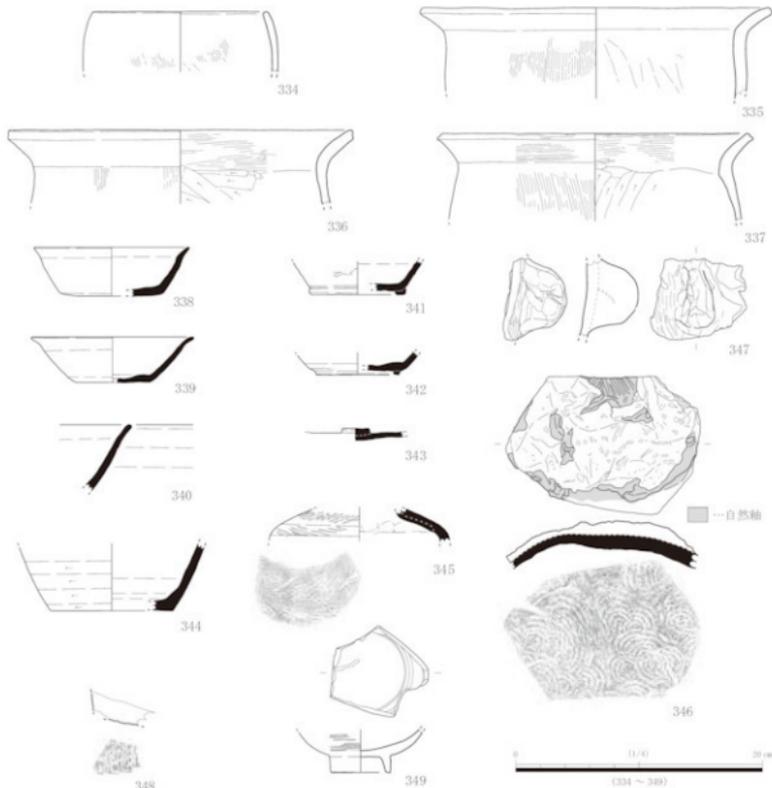
内外面に縦方向のやや強いナデが施されている。いずれも縄文時代早期のものと思われる。

304～306は深鉢と思われる口縁部破片である。304は5条、305は8条、306は6条口縁部外面に沈線がめぐる。内面は丁寧なミガキが施されている。307は深鉢もしくは浅鉢の口縁部、308は浅鉢の口縁部破片である。内外面ともに丁寧な横ミガキが施される。309～311は深鉢もしくは浅鉢の口縁部破片である。304～308に比べて調整が粗雑であり、貝殻条痕調整が明瞭に残っている。311は穿孔されている。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

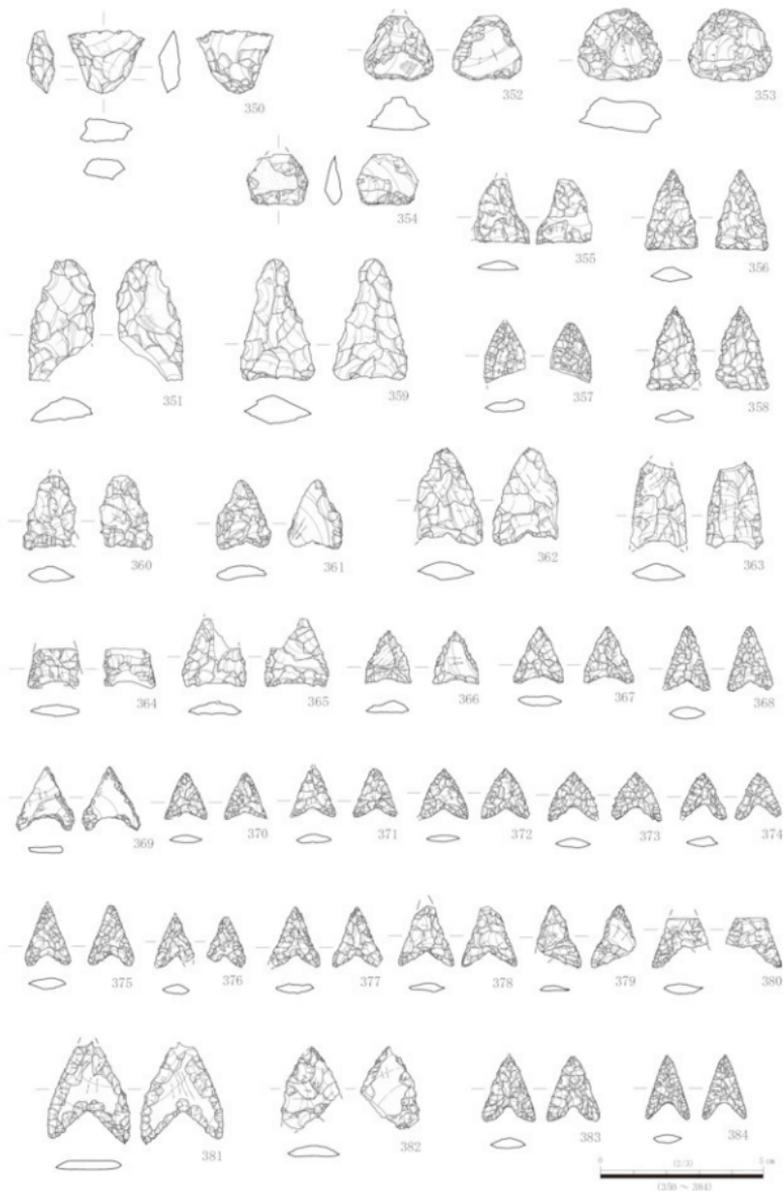
312・313は深鉢の口縁部破片である。外面にやや斜めの貝殻条痕調整が明瞭に残る。314は深鉢の口縁部から胴部上半である。胴部で屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。外面にやや横方向の貝殻条痕調整が施されている。315は深鉢の口縁部から胴部上半であり、胴部で屈曲し口縁部は外反する。口縁部は波状である。外面に横方向の貝殻条痕調整が施されている。いずれも縄文時代晩期前半以降のものと思われる。

316～319は深鉢の底部である。320・321は浅鉢の口縁部から胴部である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施され、口縁に1条沈線がめぐる。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

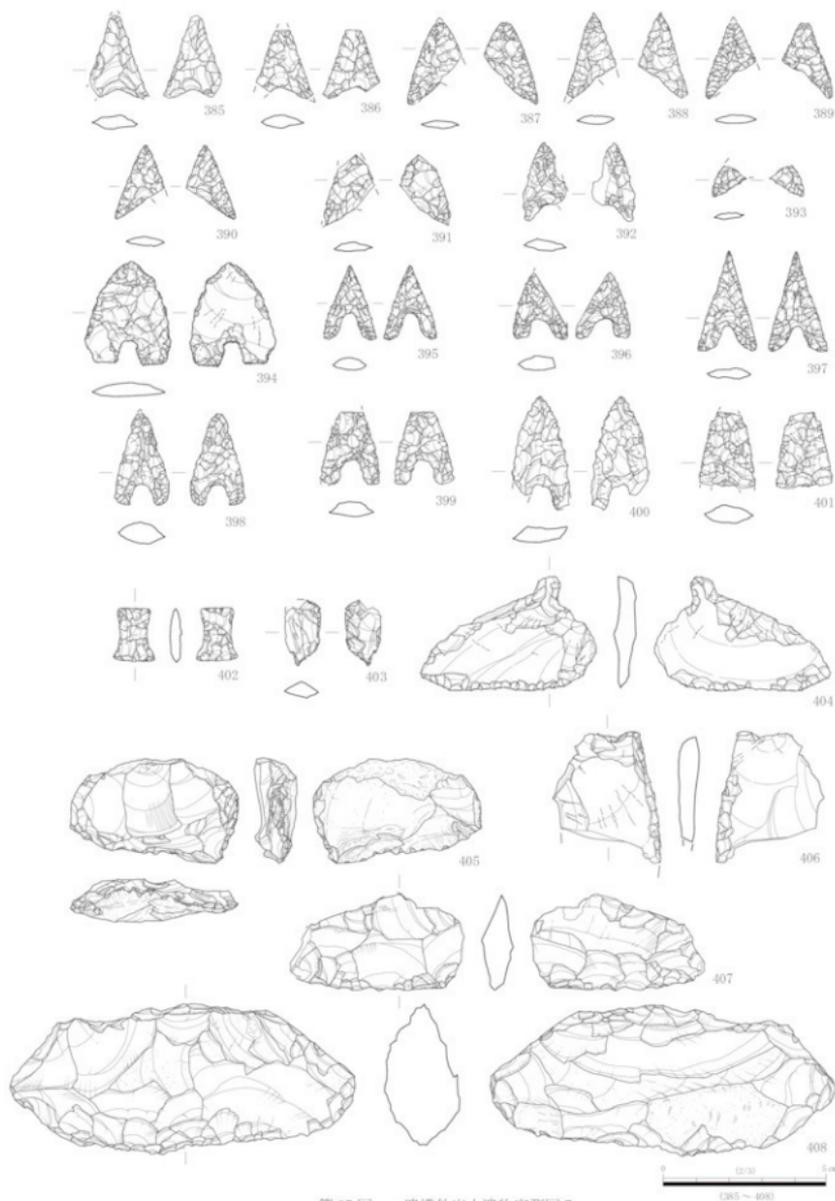
322・323は深鉢の口縁部から胴部である。外面に横方向の貝殻条痕調整が施されている。324は浅鉢の口



第85図 遺構外出土遺物実測図3



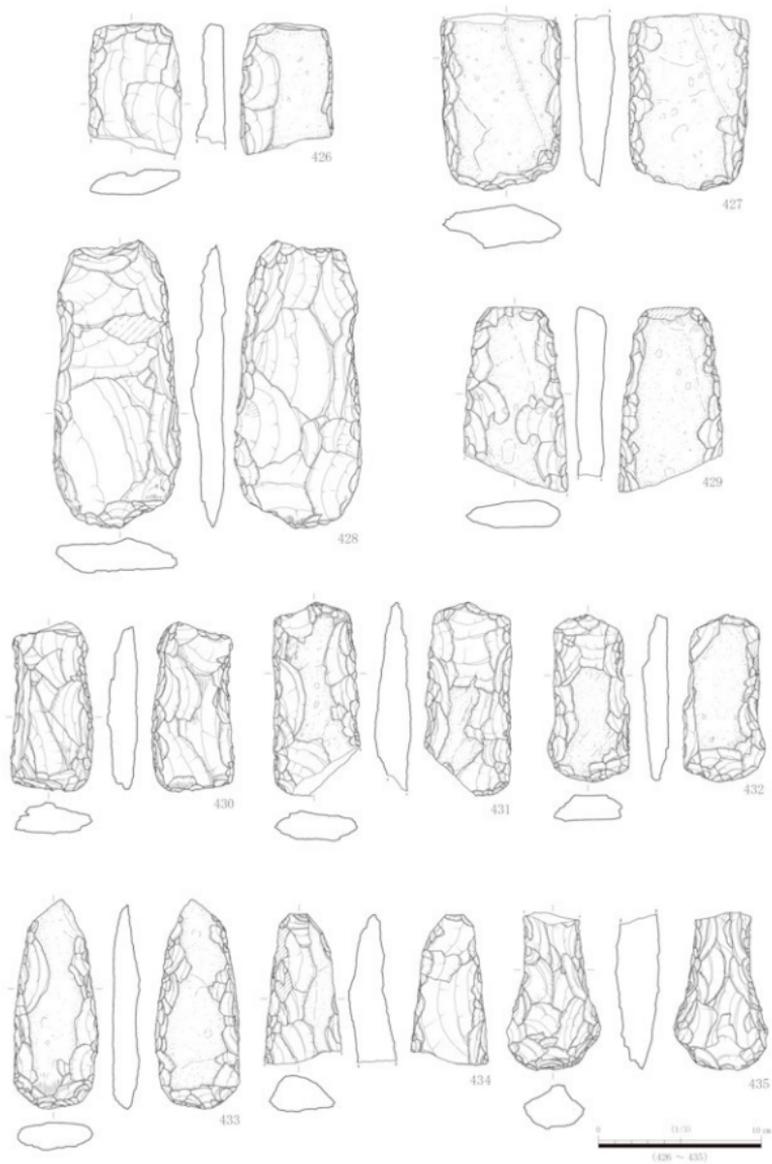
第86図 遺構外出土物実測図4



第87図 遺構外出土遺物実測図5



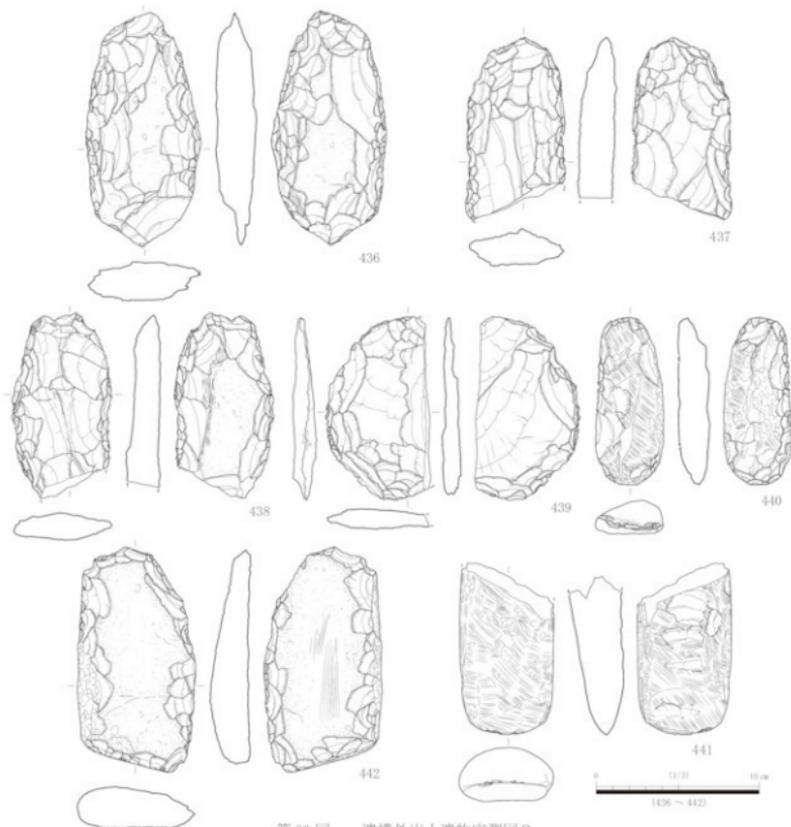
第88図 遺構外出土遺物実測図6



第89図 遺構外出土遺物実測図7

縁部と思われる。325は鉢の口縁部から胴部である。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整が施されている。焼成後、外面から穿孔されている。326・327は浅鉢の口縁部破片である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施されている。326は口縁外面に1条沈線がめぐる。328は浅鉢である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施されており、口縁部の内外面にそれぞれ1条沈線がめぐる。329は鉢である。外面に丁寧なやや斜めのミガキが施されており、口縁部の外面に沈線状のものが一部ある。焼成後、外面から穿孔されている。いずれも縄文時代晩期前半以降のものと思われる。

330は浅鉢である。残存部から方形のものと推定できる。口縁部にはリボン状突起が付き、口縁部内面に1条沈線がめぐる。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施されている。331～333はいわゆる組織痕土器の浅鉢と思われる。331は口縁部から胴部上半で、内面は丁寧な横方向のミガキが施されている。口縁部外面は横方向のナデが施されており、胴部外面には型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕がみられる。332は口縁部から胴部下半で、内面は横方向のナデが施されている。口縁部外面は横方向のケズリが施されており、胴部外面には型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕がみられる。333は胴部と思われる。内



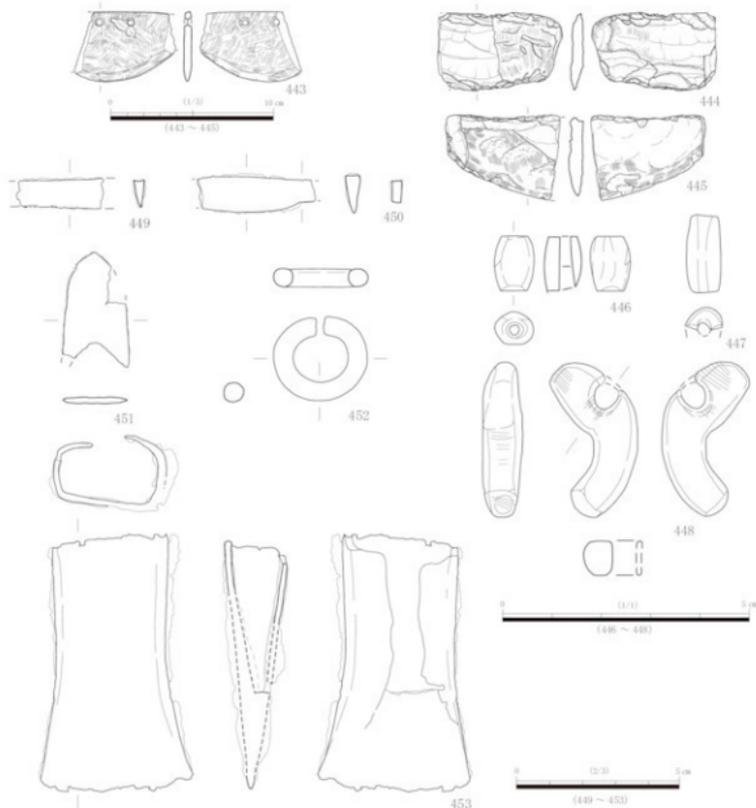
第90図 遺構外出土遺物実測図8

面は貝殻条痕調整ののちナデが施されている。外面には型自体に由来すると考えられている網代の圧痕がみられる。いずれも縄文時代晩期前半以降のものと思われる。

334は弥生土器の鉢の口縁部から胴部である。外面に一部ハケ目が残るが、丁寧な横ナデが施されている。弥生時代後期のものと思われる。

335～337は土師器の長胴甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部はやや斜め上向きに開く。胴部外面に縦方向のハケ目、内面に縦方向もしくは斜め方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデが施されている。336・337は胴部の器壁がやや薄い。個体により時期は異なるが、9世紀前葉から中葉の所産に収まるものと思われる。

338～339は須恵器の坏である。平底の底部はヘラ切り後、ナデがみられる。340は須恵器鉢の口縁部から椀部破片と思われる。341・342は須恵器の椀である。高台は貼り付け。343は須恵器の蓋である。つまみは扁平なもの。344は須恵器の長胴甕の底部破片と思われる。345は須恵器の長胴甕の肩部破片と思われる。外面には平行タタキ目ののち、回転ナデが施されている。346は須恵器の甕の胴部破片と思われる。外面には



第91図 遺構外出土遺物実測図9

平行タタキ、内面に同心円のあて具痕が残る。外面には厚い自然軸が付いている。個体により時期は異なるが、9世紀中葉以降のものと思われる。

347は土師器の甕もしくは甕の把手部である。粘土紐を折り曲げて胴部に貼付していることがよくわかる資料である。内面には縦方向のケズリが施されている。9世紀前葉から中葉のものであろうか。

348は平瓦で凸面に縄目が残る。349は陶器の碗である。

②石器類 (第86図～第91図)

350は3層から出土したチャート製の台形様石器である。351は二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鐮の未製品である。352は二等辺三角形をしている平基式の黒曜石製の打製石鐮の未製品と思われる。353は黒曜石製の加工痕のある石器である。354は黒曜石製の加工痕のある剥片である。355～401は打製石鐮である。355～358は二等辺三角形をしている平基式。黒曜石製である。359は二等辺三角形をしている凹基式で、凹基の状態はわずかに内湾する程度。安山岩製で未製品と思われる。360～366は二等辺三角形をしている凹基式。凹基の状態はわずかに内湾する程度である。360・361・364・365は黒曜石製、362・363・366・367は安山岩製である。368～371は二等辺三角形をしている凹基式。368はチャート製、369～371は黒曜石製である。372～374はほぼ正三角形をしている凹基式。372・373は黒曜石製、374はチャート製である。375～383は二等辺三角形をしている凹基式で、基部の挟りが三角状をしている。380～382は脚部がやや長い。375・378・381は安山岩製、376・379・380は黒曜石製、377・382・383はチャート製。384～393は二等辺三角形をしている凹基式で、基部の挟りが三角状、脚部が長くなり先端が尖る。384・386・387・389・392・393は黒曜石製、385・388は安山岩製、390・391はチャート製である。394～401は二等辺三角形をしている凹基式で、基部の挟りがアーチ状、両脚部の先端が水平である。394～397・401はチャート製、398～400は安山岩製である。

402は器種が解らず異形石器とした。黒曜石製である。403は黒曜石製の二次加工のある剥片である。404は安山岩製の石匙、405は黒曜石製の石核で、スクレイパーに転用されている。406～408はスクレイパー。406・408は安山岩製、407は黒曜石製である。409～414は二次加工のある剥片で、409・410・412・413は黒曜石製、411・414はチャート製である。415・417・418は黒曜石製、416はチャート製の使用痕のある剥片である。419は輝緑凝灰岩製の剥片。420～424は黒曜石製の石核、425は安山岩製の石核である。

426・427はいわゆる「短冊形」と呼ばれてきた打製石斧。安山岩製である。428～434・436～438はいわゆる「撥形」と呼ばれてきた打製石斧。437は砂岩製で、他は安山岩製である。435はいわゆる「分銅形」と呼ばれてきた打製石斧。砂岩製である。439は粘板岩製の円盤形石器と思われる。440は緑色片岩製の磨製石斧である。441は砂岩製の両刃の磨製石斧である。442は安山岩製の打製石斧の未製品である。磨石類に転用されている。

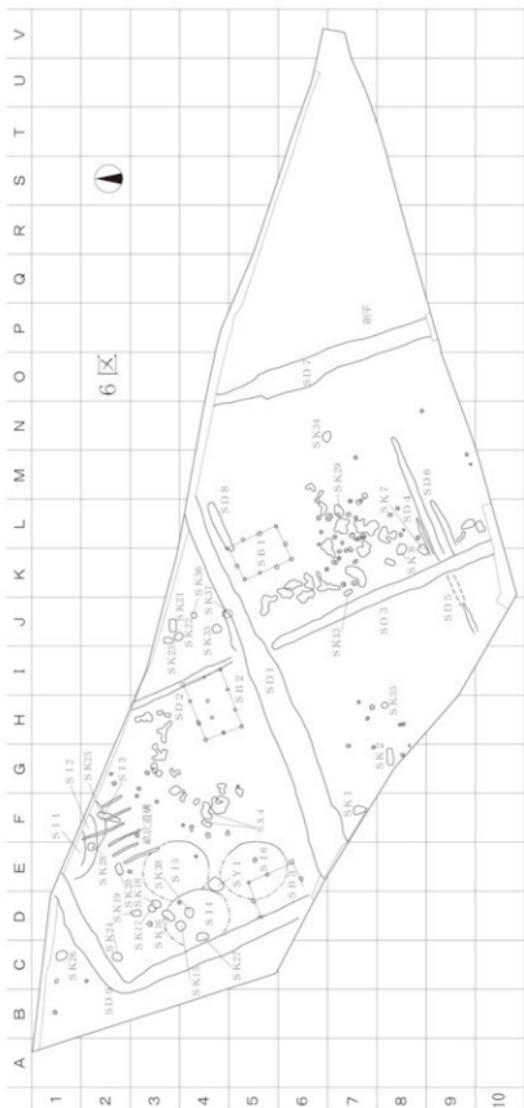
443は粘板岩製の石庖丁である。孔径0.5cm、孔間1.9cmを測る。二つの孔は両面から穿孔されている。444・445は石庖丁の未製品と思われる。444は蛇紋岩製、445は砂岩製である。

③玉類 (第91図)

446・447は碧玉である。446は緑色を呈し、全長1.1cm、幅0.8cmで孔径0.2cmを測る。447は淡い緑色を呈し、全長1.6cm、幅0.7cmで孔径0.3cmを測る。448は勾玉である。緑色を呈し、全長3.2cm、幅1.8cmで孔径0.5cmを測る。孔は一部が欠損している。

④鉄器類 (第91図)

449・450は刀子の破片と思われる。449は刀身と茎の部分、450は刀身の部分と思われる。451は鉄鐮である。基部に挟入部をもつ。452は青銅製の耳環である。排土の選搬中に偶然作業員が排土置場で見つけたものであるため、あくまで参考資料として掲載した。453は3区出土の袋状斧である。袋部の断面形が長方形で、基部より刃部の方が広い。



空室欄内にある遺構で破片が無く表示されているものは、
一方より傾斜がないと想定されるものである。



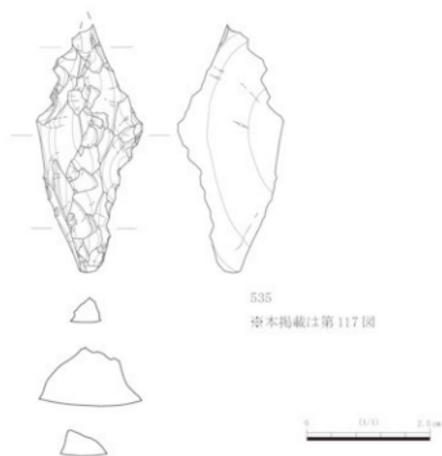
第92図 6区遺構配置図

第2節 調査6区

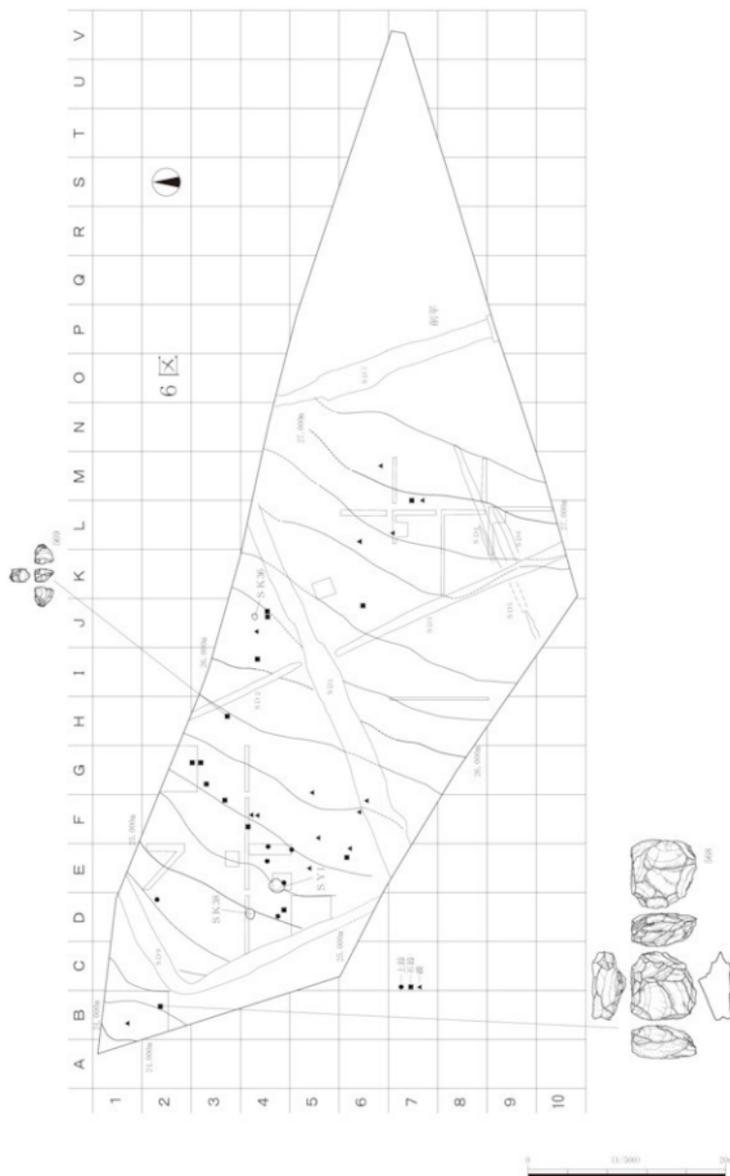
塔平遺跡6区の調査では、第92図に示す縄文時代、古代～中世、近世、近代にかけての遺構、及び旧石器を含めた各時代の遺物が検出された。図を見ても分かるように調査区の東側は後世の削平を激しく受けていたため遺構は滅失していた。調査前は田畑地としての利用があり、北西にかけて緩やかに傾斜する箇所であったが、圃場整備による土地改良で東側は言うまでもなく、西側でも削平の影響を多大に受けていた。平成22年3月に当初調査範囲としていた西の約1,800㎡分の確認調査でもその影響の大きさを表す結果を示し、耕作土、圃場整備土の下はローム層が占めていた。そこで、本節では調査範囲の絞り込み後の調査区として、各時代における調査成果を記述する。

(1) 旧石器時代の遺物 (第93図～第95図)

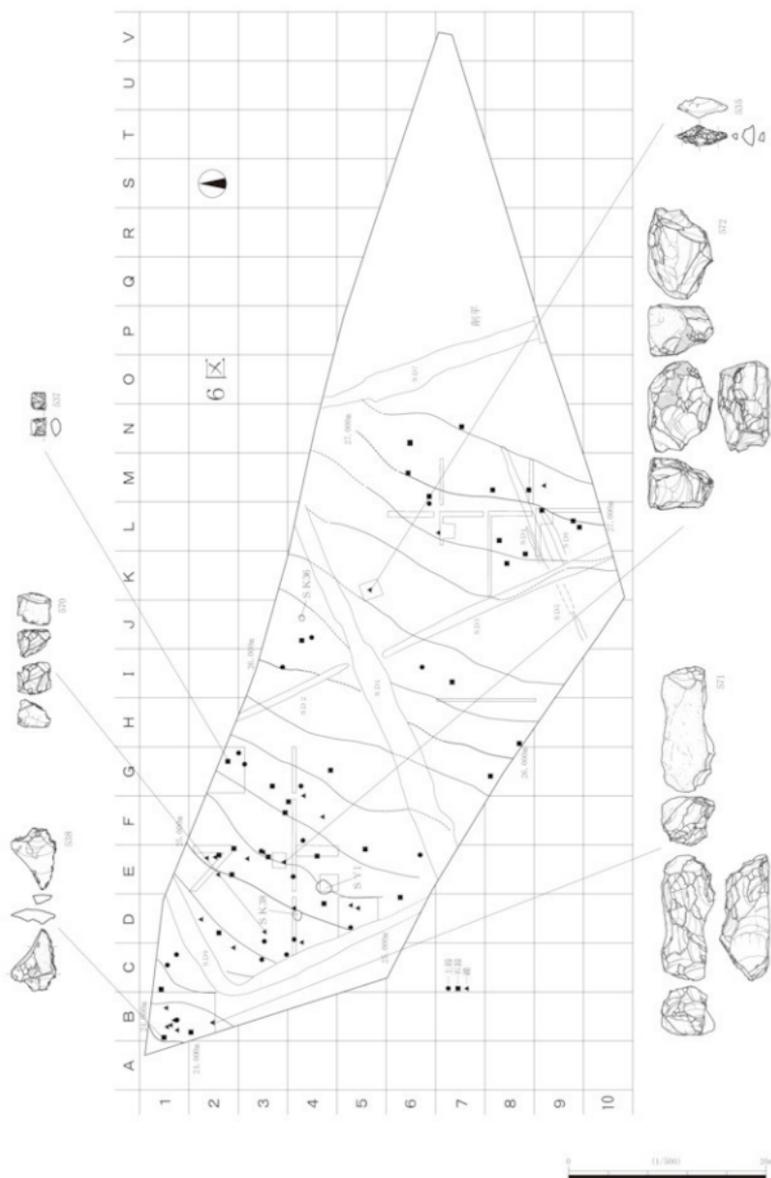
K5グリッドの5層(アカホヤ2次堆積層)下より、下図の三稜尖頭器を検出した。平成24年度に「塔平遺跡1」として報告をまとめた調査1区・3区においても旧石器(三稜尖頭器2点、ナイフ形石器1点)が出土しており、これに加え当該調査区においても旧石器の存在が確認されたことから、出土点を中心とした5層以下のより慎重な掘削調査を試みたが、石器ブロックや炭化物集中部などの遺構は検出されなかった。しかし縄文期を含む、時期特定には至らない細片遺物の点在が確認されたため、6a層、5層における出土遺物を第94図、第95図においてドットで示すこととした。なお、それぞれの遺物出土状況図は旧石器時代文化層、面を示すものではないことを追記しておく。その中で出土した三稜尖頭器に加え、出土層位が本来的な出土状態を示していなくとも、自然環境変化による影響からの遺物の上下動を勘案するとともに、資料観察を行った結果、縄文時代以前の可能性をもつ資料を第94図と第95図及び第117図と第119図で示している。参照されたい。



第93図 6区遺物実測図(三稜尖頭器)



第94図 6区6a層検出遺構配置図・遺物出土状況



第95図 6区5層検出遺構配置図・遺物出土状況

(2) 縄文時代早期の遺構・遺物 (第94図～第96図)

遺構は基本層6a層上面で土坑2基、集石1基を検出した。これら遺構内における遺物は集石の礫のみだが、遺物は基本層5層及び6a層上面にて土器等の出土もあったが細片で実測が難しいものがほとんどであった。

本調査区からほど近い北東に位置する「柳島遺跡」では、昭和47年度の調査において多数の灰穴、集石群が検出されている。さらには配置、遺物に特徴をもった遺構として紹介した国土交通省が実施主体の工事区間で調査した塔平遺跡調査3区、そして本報告書で紹介する調査4・5区においても灰穴、集石が検出されていることから、本調査区においても同様の遺構の検出を期待していたが、下記に示す3遺構の検出にとどまった。各遺構について紹介する。

①土坑

S K 36 (第96図)

J 4グリッドに位置する。基本層5層掘削後、焼土粒子が多く混入するビット状の遺構を検出した。検出当初より、連結土坑の可能性を踏まえてSKとして調査することとした。その確認のために遺構北西部、及び南西部を掘り下げ、広がりの有無を調査した結果、痕跡は認められなかった。平面形は円形を呈し、径は約0.48m、検出面からの深さは約0.95mを測る。埋土は3層に分けられ、1層、2層は基本層6層ブロックが混入する。埋土3層の下層はロームブロックが混入する。全体的に炭化物を微量に含むが、焼土粒子の量は下層ほど少量になる。焼土塊は1、3層において確認できている。焼土粒子を多く含むビット状遺構である、という以外の情報が確認できず、用途は不明である。

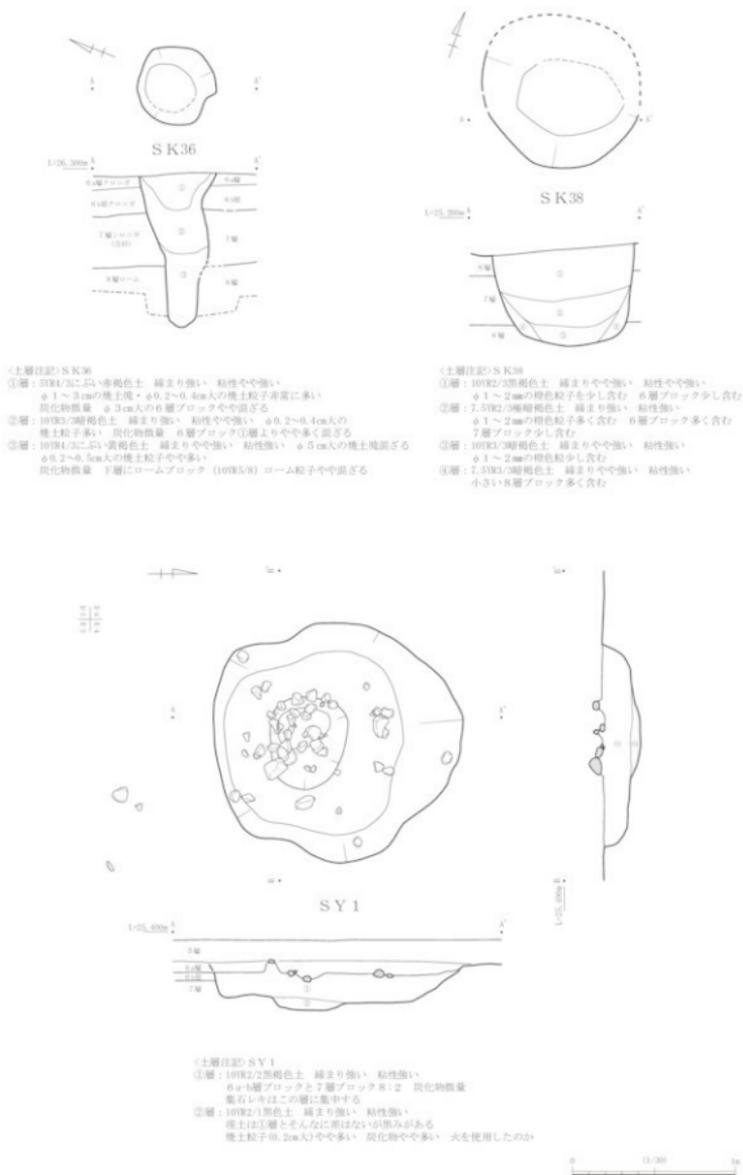
S K 38 (第96図)

D 4グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は台形状を呈する。径は約0.88m、検出面からの深さは約0.68mを測る。埋土は4層に分けることができ、基本層6層、7層土が混入する。遺物等は確認されていない。遺構検出時は黒褐色土で覆われており、埋土には基本層5層土(アカホヤ含む褐色土)が混入していない、また埋土が6層ブロックを主体として7層ブロックが混入することなどから層位的にみて縄文時代早期の遺構と捉えた。

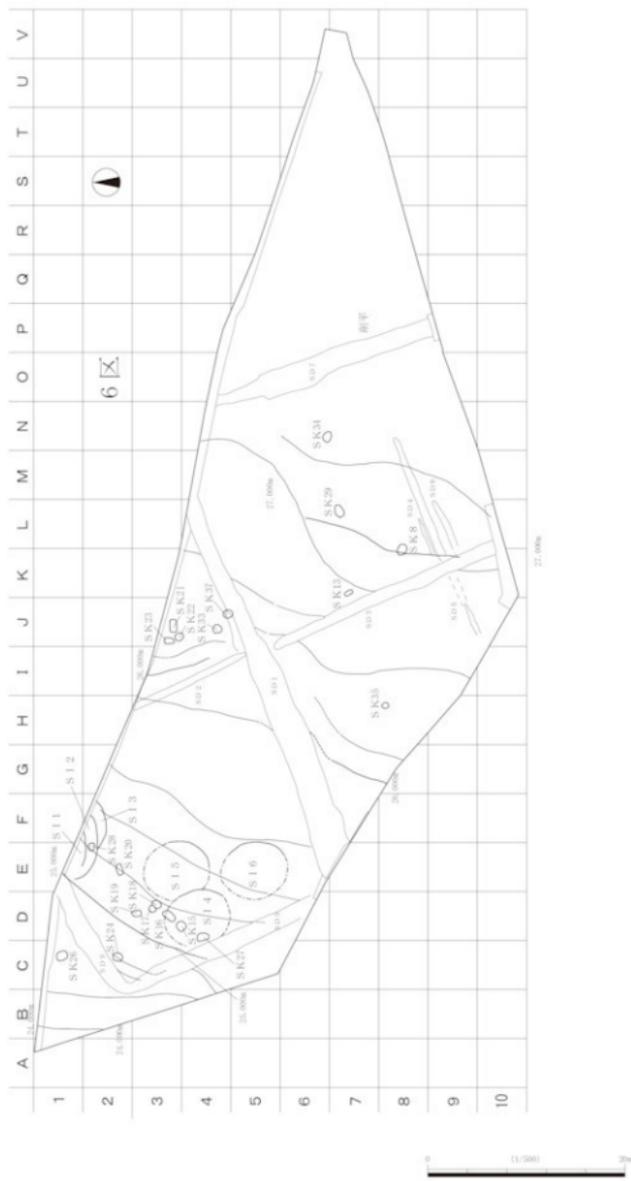
②集石

S Y 1 (第96図)

E 4グリッドにて検出した。50個程度の円礫、角礫で構成されており、扁平礫もわずかに含まれる。掘り込みの平面形は不整な円形を呈し、断面は浅い皿状、中央がやや窪んでいる。平面形の最大径は約1.5m、検出面からの深さは約0.23mを測る。礫は埋土1層の中位～上位にかけて多く見られる。また、埋土2層には炭化物、焼土粒子の混入が見られ、土坑内での火の使用を認めることができる。しかし、集石内の礫に、明瞭な赤変などは確認できなかった。



第96図 SK36・38・SY1 遺構実測図



第97図 6区遺構配置図（縄文後晩期）

(3) 縄文時代後～晩期の遺構・遺物 (第97図～第105図)

① 竪穴建物跡

S I 1 (第98図)

E 1・2、F 1・2グリッド、調査区北壁付近に位置する。同時期の遺構と考えられるS I 2・3を切る形で検出した。3遺構の新旧関係はS I 3(古)→S I 2→S I 1(新)である。検出しようとした基本層4層の残りが悪く、3層の掘り下げ時に誤って埋土の多くを掘り下げてしまっている。また、西側の一部は削平により、推定できるプランとして載せている。断面は整地によりほぼ水平を成している。検出面からの深さは最大で約34cmを測る。埋土はS I 1～3ともに基本層4層、5層のブロックが7:3程度の割合で混入し、暗褐色土として確認している。平面で見られる溝状の遺構は加工時によるものと考えられ、床面を形成した際に埋まっている。遺構のほとんどが北側の未調査域に伸びるため詳細な情報を得ることができなかった。加えて主柱穴と考えられるピットも全体の配置を捉えることができなかったため、その遺構のものかを断定するまでには至らなかった。ここでは、平面径が約30～42cm、深度が約15～18cmの、主柱穴として可能性があるものを4基検出している。か跡、硬化面は確認されなかった。

遺物は454の磨・巖石が出土している。両面とも顕著に使用した痕跡を残し、側面には敲打痕が観察できる。右側面には黒変した箇所がある。

S I 2 (第98図)

E 2、F 2グリッドにて検出した。そのほとんどが後世の削平や遺構による損壊を受け、また調査区外へと伸びるため詳細な情報は得られていない。西側の一部は削平により、推定できるプランとして載せている。断面は整地によりほぼ水平を成している。検出面からの深さは最大で約0.18mを測る。またS I 1と同様、ピットも全体の配置を捉えることができなかったため、主柱穴と断定するまでには至らなかった。ここでは、平面径が約34～44cm、深度が約18～24cmの、主柱穴として可能性があるものを3基検出している。しかしP 2に関しては、ここで検出された竪穴建物の主柱穴が遺構の縁に配置されることを想定して考えるに、後述するS I 3のものである可能性もある。か跡、硬化面は確認されなかった。

S I 3 (第98図)

E 2、F 2グリッドにて検出した。前述した竪穴建物跡と同様、そのほとんどが後世の削平や遺構による損壊を受け、また調査区外へと伸びるため詳細な情報は得られていない。西側の一部は削平により、推定できるプランとして載せている。断面は整地によりほぼ水平を成している。検出面からの深さは最大で約0.10mを測る。ピットの全体配置も不明で、主柱穴と断定するまでには至らなかった。ここでは、平面径が約34～36cm、深度が約13～24cmの、主柱穴として可能性があるものを2基検出している。か跡、硬化面は確認されなかった。

S I 4 (第99図)

調査区西側のD 3・4グリッドに位置する遺構である。平面形は南北にやや張り出した楕円形を呈する。推定される長軸約6.74m、短軸約5.64mを測る。ただ、後世の削平の影響で埋土は東側の一部と遺構中央の土坑以外は確認できない状態で、遺構があったであろう推定範囲に染み状に残るのみであった。長軸はN-9°-Wである。埋土は基本層4層のブロックを主体とした暗褐色土で整地層の一部と考えられる。

土坑は中央からやや南に位置し、長軸約111cm、短軸約92cm、検出面からの深さは約18cmを測る。焼土と考えられる橙色粒と2mm大の炭化物を微量に含んでいる。か跡の可能性をもつ。P 1～P 7を検出し、柱痕を確認できた箇所はないが、位置的な関係を考えるとそれぞれが主柱穴の可能性が高い。径は約34～46cm、検

出面からの深さは約12cm～30cmを測る。下端のレベルは一定ではない。貯蔵穴等も検出されていない。

遺物は455の黒曜石製の使用痕をもつ縦長剥片、456の手持砥石が出土している。

S I 5 (第100図)

D3・4、E3・4グリッドに位置し、南西の一部をS I 4に壊された遺構である。検出時の状況としてはS I 4と同じで、埋土は南東の一部と、中央のがと考えられる土坑を残すのみであった。平面形は楕円形を呈し、推定される長軸約6.56m、短軸約6.26mを測る。長軸はN-20°-Eである。埋土は基本層4層のブロックを主体とした暗褐色土で整地層の一部と考えられる。土坑は中央からやや南に位置し、長軸約113cm、短軸約97cm、検出面からの深さは約14cmを測る。焼土と考えられる橙色粒と2mm大の炭化物を微量に含んでいる。炉跡の可能性はある。P1～P7を検出し、柱痕を確認できた箇所はないが、配置的な関係を考えてそれぞれが主柱穴となる可能性がある。径は約33～45cm、検出面からの深さは約20cm～54cmを測り、下端のレベルも一定ではない。貯蔵穴等も検出されていない。

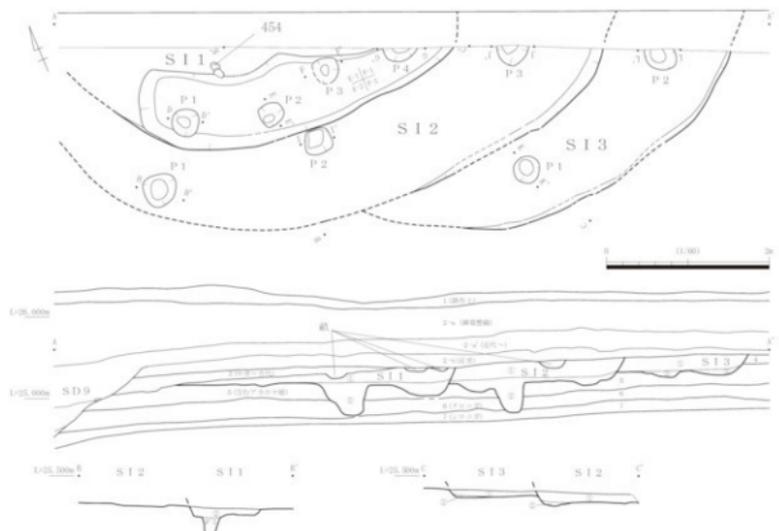
遺物は457の黒曜石製の二次加工痕をもつ剥片、458の磨・砥石が出土している。

S I 6 (第101図)

E4・5グリッド、S I 5の真南に位置する。検出時の状況は前述のS I 4・5と同じで、埋土は西側の一部を残すのみであった。平面形は楕円形を呈し、推定される長軸約6.86m、短軸約5.76mを測る。長軸はN-21°-Wである。埋土は基本層4層のブロックを主体とした暗褐色土で整地層の一部と考えられる。中央のやや低まった箇所も同様で、炉跡と考える要素は確認できず、整地時の埋土と思われる。遺構縁辺部にP1～P6を検出し、柱痕を確認できた箇所はないが、それぞれが主柱穴となる可能性がある。径は約34～58cm、検出面からの深さは約14cm～26cmを測る。下端のレベルは一定ではない。炉跡や貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は石斧が2点出土している。459の磨製石斧は砂岩製の撥形を呈する。裏面に顕著な剝離面を残し、基部は薄く反りが大きくなっている。縦方向へ割れたものを再加工したと考えられる。460は打製のもので刃部と基部を欠損するが、縁辺部に加工が観察できる。安山岩製である。

遺構検出面までの掘削過程において、上記遺構が位置するグリッドで一括取り上げた遺物もある。そのほとんどが土器であり、第115図の遺構外出土遺物実測図1にて掲載しているため、詳細はそこで紹介することとする。



＜土層注記 S11＞

- ①層：10R3/3暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 6.2mmの棕色粒子(焼土粒子)や多い 炭化物や多い 6.20～30mmの5層ブロック多く含む
 ②層：10R3/4暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 6.2mmの棕色粒子(焼土粒子)少量 炭化物少量 6.10～30mmの5層ブロックやや多く含む

＜土層注記 S12＞

- ①層：10R3/4暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 6.2mmの棕色粒子(焼土粒子)少量 炭化物少量 6.20～40mmの5層ブロック多く含む
 ②層：10R3/3暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 6.2mmの棕色粒子(焼土粒子)少量 炭化物少量 6.20～40mmの5層ブロックやや多く含む

＜土層注記 S13＞

- ①層：7,10R3/2暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 6.2mmの棕色粒子(焼土粒子)少量 炭化物少量 6.20～40mmの5層ブロックやや多く含む
 ②層：10R3/3暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 6.2mmの棕色粒子(焼土粒子)少量 炭化物少量 6.20～40mmの5層ブロック少し含む

S11

1/10,000 P1 1/10,000 P2 1/10,000 P3 1/10,000 P4



S12

1/10,000 P1 1/10,000 P2 1/10,000 P3



＜土層注記 S11 P1～P4＞

- ①層：10R3/4暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い
 4・5層のブロック7:3程度で、当該層でいうマール状の土
 炭化物少量 棕色粒子(焼土粒子)少量 S11埋土2層と類似
 ②層：①層よりやや弱みあり

S13

1/10,000 P1 1/10,000 P2

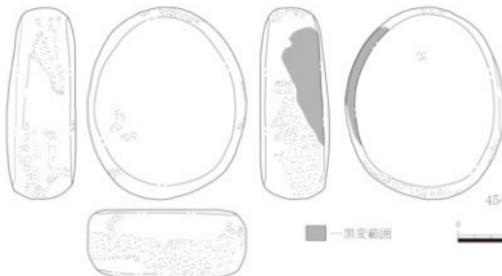


＜土層注記 S12 P1～P3＞

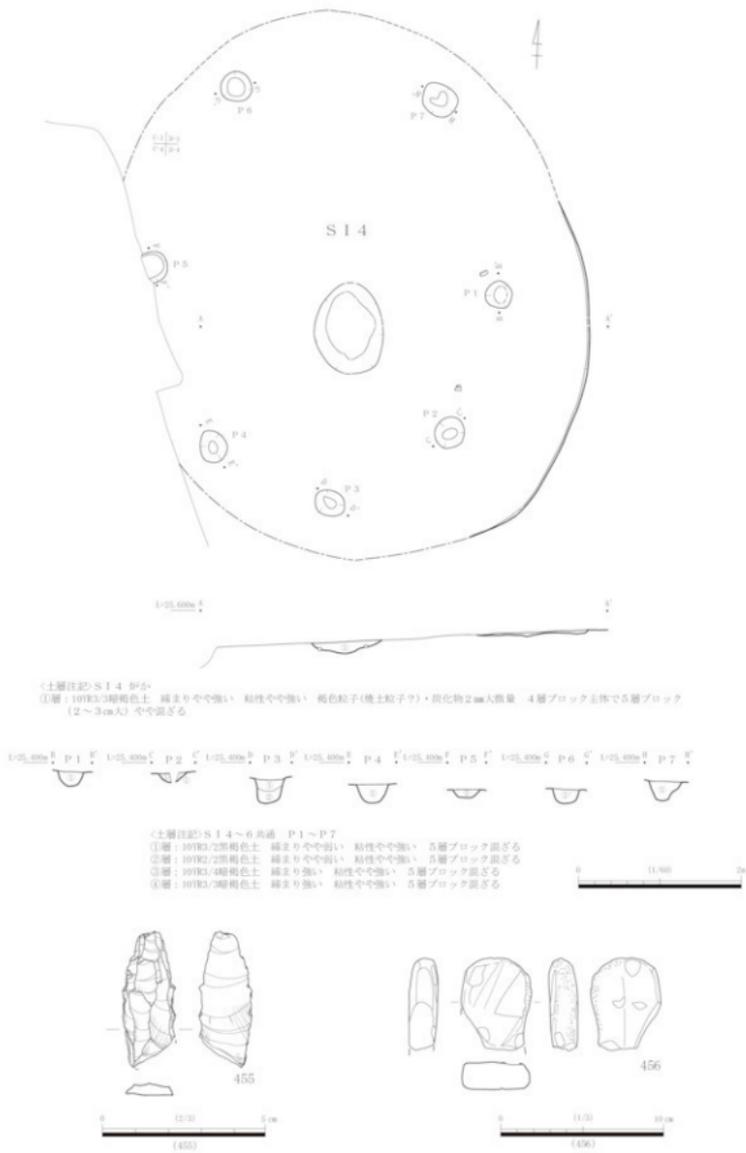
- ①層：10R3/3暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 5層ブロック
 ややまじる 炭化物少量 棕色粒子(焼土粒子)少量
 ②層：①層よりやや弱みあり

＜土層注記 S13 P1～P2＞

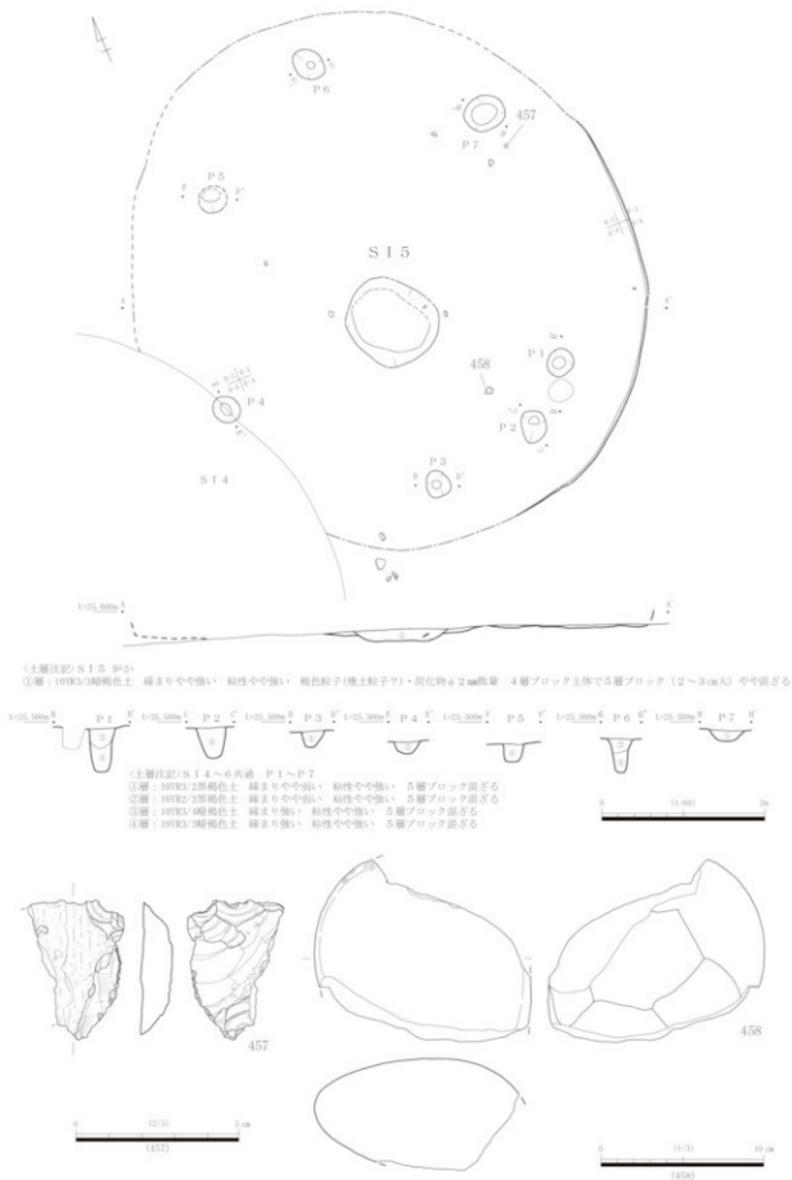
- ①層：10R3/3暗褐色土 締まりや強い 粘性や強い 5層
 ブロックややまじる 炭化物少量 棕色粒子(焼土粒子)少量



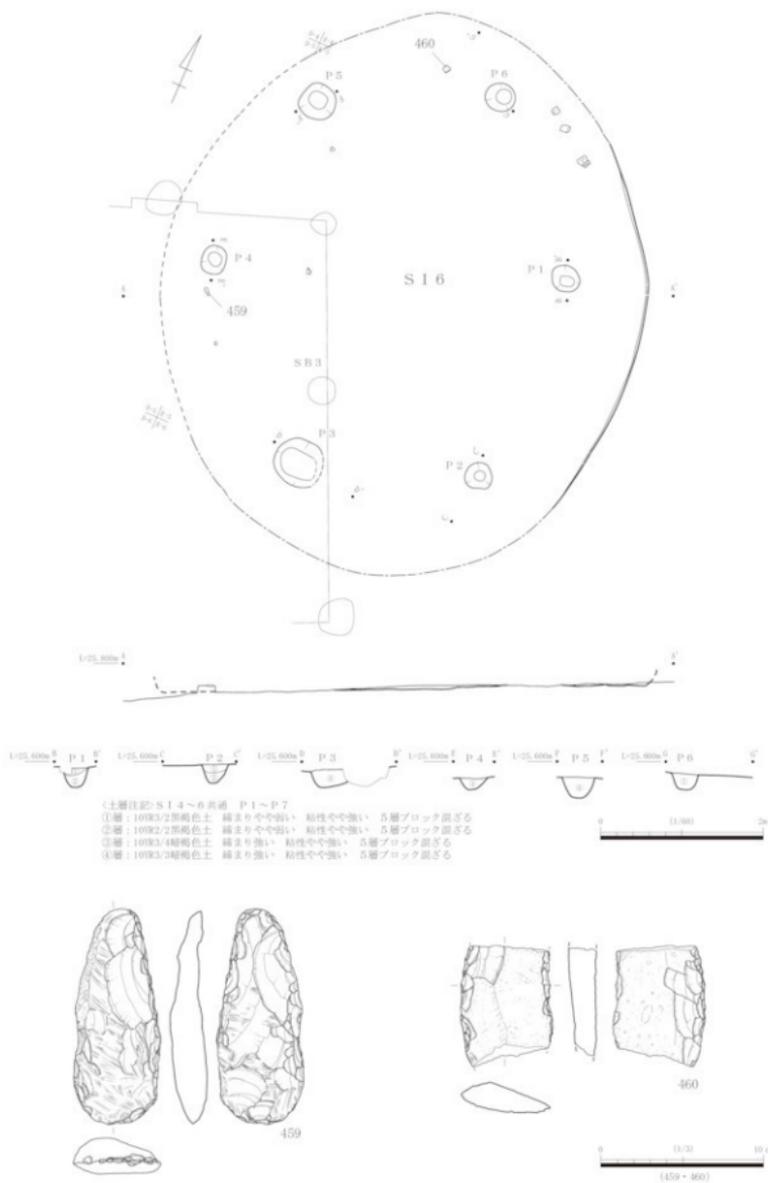
第98図 S11～3遺構・出土遺物実測図



第99図 S14遺構・出土遺物実測図



第100図 S15遺構・出土物実測図



第101図 S16遺構・出土遺物実測図

②土坑

S K 29 (第102図)

L7グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約1.33m、短軸は約0.85m、検出面からの深さは約0.28mを測る。埋土は焼土と思われる橙色粒、炭化物を多量に含んだにぶい黄褐色土層、上層よりは少なくなるも橙色粒、炭化物を多く含んだ暗褐色土層とに分けることができる。埋土1層の西側には炭化材が検出されている。埋土2層上面にて火を用いたと考えられるが、何の機能をもった遺構かは不明である。

遺物は461の黒曜石製の石鎌が出土しており、基部を欠損している。

S K 34 (第102図)

N6・7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は深い台形状を呈する。長軸約1.0m、短軸は約0.86m、検出面からの深さは約0.70mを測る。埋土は基本層5層ブロックを含む黒褐色土で、ブロックは下層になるほど少量化していく。埋土1層下方より、462で示す縄文晩期の深鉢形土器片が出土している。口縁～胴部下部までの残存で、径の復元はできなかったが、残存する器高は約33.9cmを測る。外器面は横、斜めの条痕、内器面はミガキが観察できる。

S K 8 (第103図)

K8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約1.22m、短軸約0.90m、検出面からの深さは約0.10mを測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒子、炭化物を微量に含んでいる。基本層4層土を主体とした黒褐色土で、2～3cm大の5層ブロックが混じる。

S K 13 (第103図)

K7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は中央に向かって落ち込む皿状を呈する。長軸約0.88m、短軸は推定0.44m、検出面からの深さは約0.18mを測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒を少し含んでいる。基本層4層ブロックを多く含んだ暗褐色土である。

S K 15 (第103図)

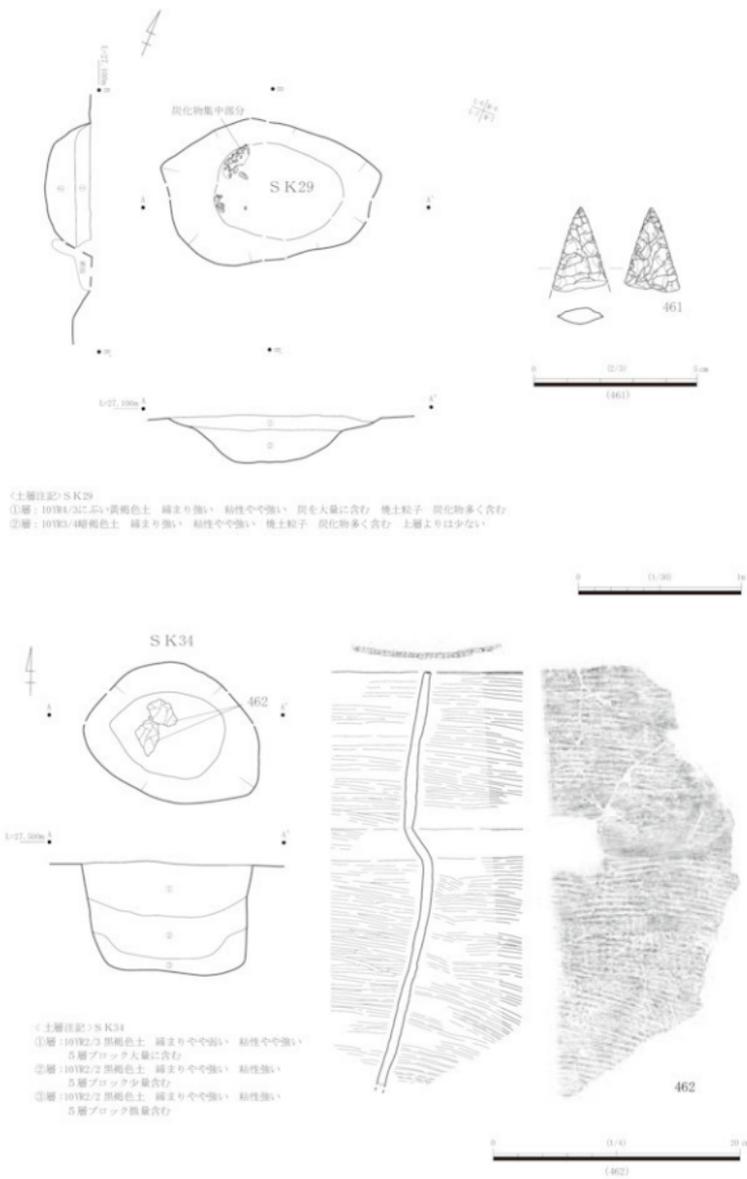
D3・4グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約0.96m、短軸約0.92m、検出面からの深さは約0.16mを測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒子、2mm大の炭化物を微量に含んだ暗褐色土である。基本層4層ブロックを主体とし、下層には2～3cm大の5層ブロックをやや多く含んでいる。

S K 16 (第103図)

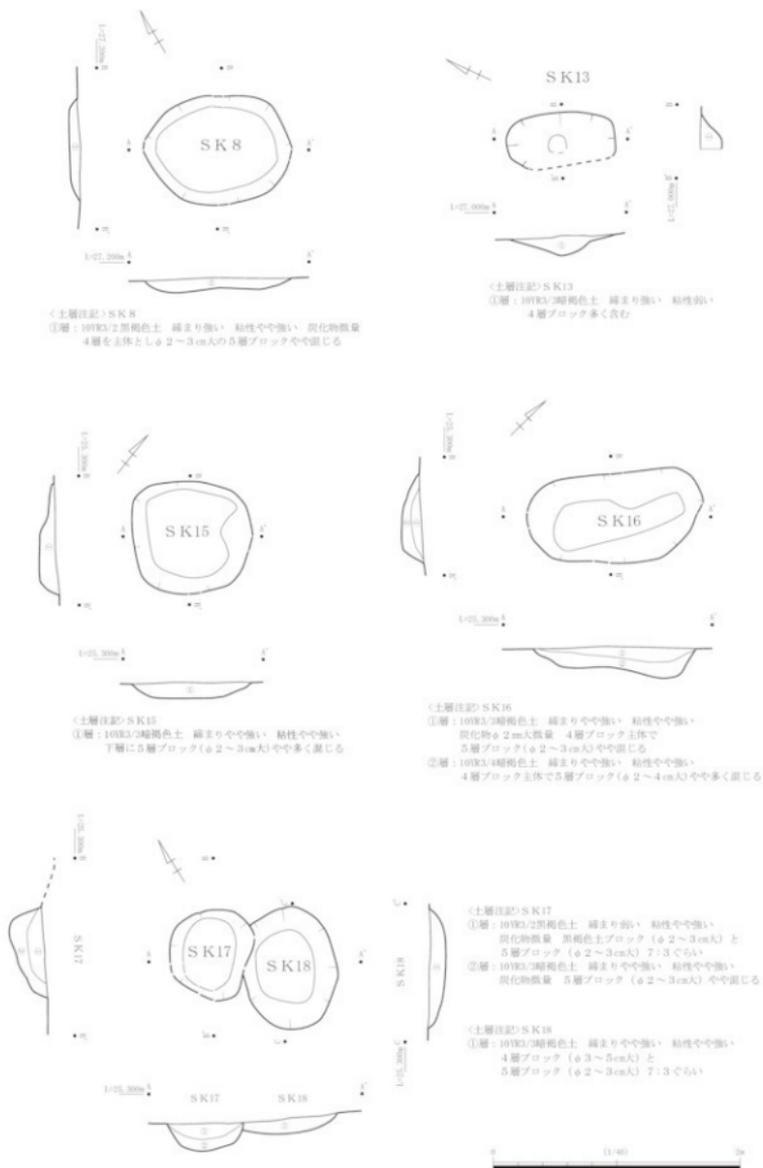
D3グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面は歪な皿状を呈する。長軸約1.36m、短軸は約0.72m、検出面からの深さは約0.26mを測る。埋土は2層で、基本層4層ブロックを主体とし、5層ブロックがやや混じる暗褐色土である。上層は焼土と思われる橙色粒と、2mm大の炭化物を微量に含んでいる。

S K 17 (第103図)

D3グリッドに位置する。S K 18の北西部の一部を壊している。平面形は歪な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約0.74m、短軸は推定0.67m、検出面からの深さは約0.32mを測る。埋土は黒褐色土に5層ブロックが

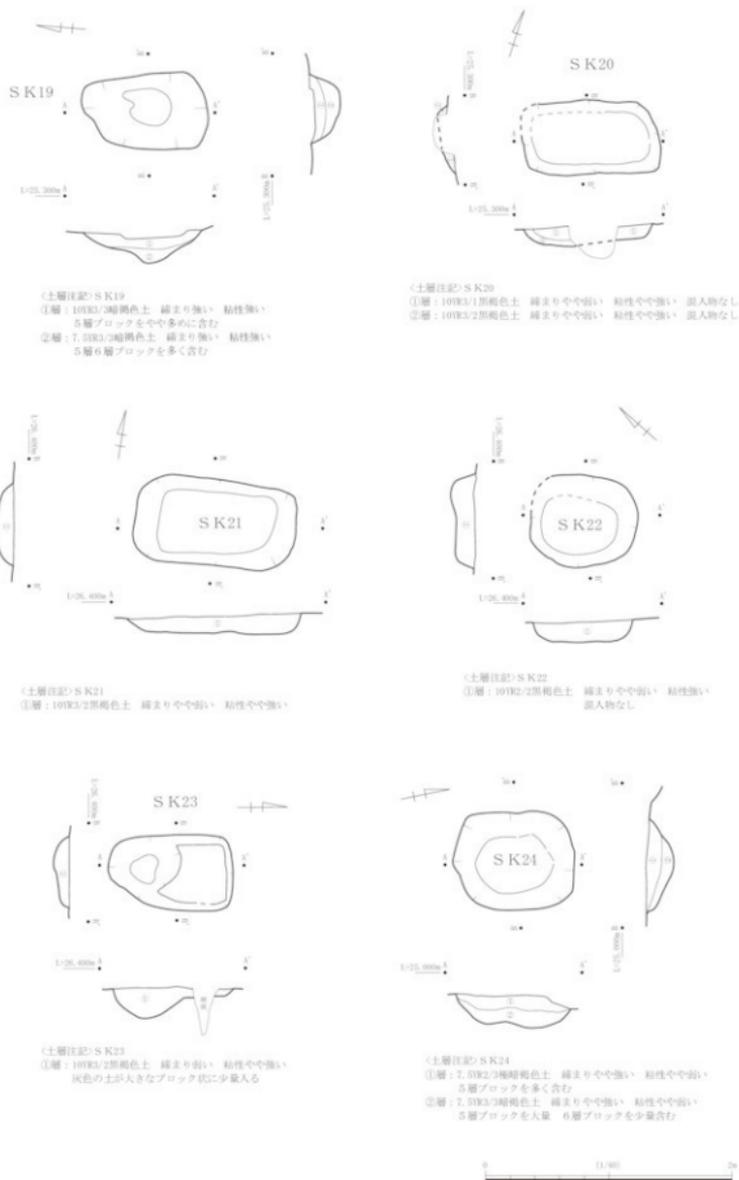


第102図 S K 29・34 遺構・出土遺物実測図



第103図 SK8・13・15～18 遺構実測図

第4章 調査の結果



第104図 SK19～24 遺構実測図

混じる層と、暗褐色土に5層ブロックがやや混じる層とに分かれる。両層ともに炭化物を微量に含んでいる。

S K 18 (第103図)

D3グリッドに位置する。S K 17に一部を壊されている。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約1.0m、短軸は推定0.76m、検出面からの深さは約0.16mを測る。埋土は基本層4層ブロックを主体とし、5層ブロックがおおよそ7:3の割合で混じり合う暗褐色土である。

S K 19 (第104図)

D3グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、断面は中央が窪んだ皿状を呈する。長軸約1.00m、短軸は約0.62m、検出面からの深さは約0.26mを測る。埋土は暗褐色で、5層ブロックをやや多めに含む層と、5、6層ブロックを多く含む層とに分かれる。

S K 20 (第104図)

E2グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、断面は皿状を呈する。中央部はビットで壊されている。長軸約1.12m、短軸は約0.61m、検出面からの深さは約0.20mを測る。埋土は黒褐色土で2層に分けることができる。

S K 21 (第104図)

J3グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、断面は皿状を呈する。長軸約1.32m、短軸は約0.70m、検出面からの深さは約0.16mを測る。

S K 22 (第104図)

J3・4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約0.86m、短軸は約0.74m、検出面からの深さは約0.2mを測る。

S K 23 (第104図)

J3グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、断面は南側が大きく窪んだ皿状を呈する。長軸約1.12m、短軸は約0.61m、検出面からの深さは約0.28mを測る。

S K 24 (第104図)

C2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は凹凸のある皿状を呈する。長軸約0.98m、短軸は約0.80m、検出面からの深さは約0.28mを測る。埋土は基本層5層ブロック多く含んだ暗褐色土層と、多量の5層ブロックに6層ブロックを少量含んだ暗褐色土層とに分けることができる。

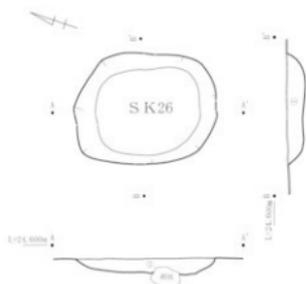
S K 26 (第105図)

C1グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約1.16m、短軸は約0.90m、検出面からの深さは約0.16mを測る。埋土は境上と思われる橙色粒を少し含んだ暗褐色土で、基本層5、6層ブロックを少し含む。1cm大の礫も含んでいる。

S K 27 (第105図)

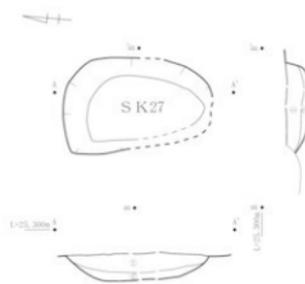
D4グリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約1.2m、短軸は約0.78m、

第4章 調査の結果



〈土層注記〉S K 26

①層：10YR5/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、5層ブロック少し含む



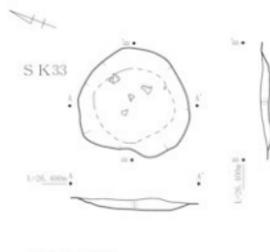
〈土層注記〉S K 27

①層：10YR3/2黒褐色土 締まり強い、粘性やや強い、5層ブロックやや多めに含む
②層：10YR3/3暗褐色土 締まり強い、粘性やや強い、5層ブロック大量に含む



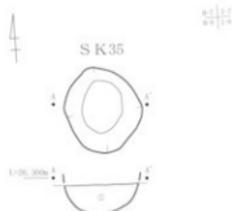
〈土層注記〉S K 28

①層：10YR2/3黒褐色土 締まりやや弱い、粘性やや強い



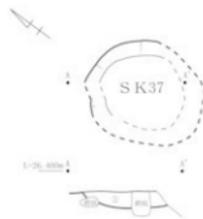
〈土層注記〉S K 33

①層：10YR3/2黒褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、5層ブロック少し含む



〈土層注記〉S K 35

①層：10YR3/2黒褐色土 粘質土（シルト質） 締まり強い、粘性強い、φ 3cm 大の黒ニガブロック少し含む、褐色粒を少し、5層ブロックを多く含む



〈土層注記〉S K 37

①層：10YR3/2黒褐色土 締まり強い、粘性強い、φ 1～5cm 大の焼土片大量に含む、5層ブロック多く含む



第105図 S K 26～28・33・35・37 遺構実測図

検出面からの深さは約0.24mを測る。埋土は焼土と思われる橙色粒を少し含み基本層5層ブロックをやや多く含んだ黒褐色土と、5層ブロックを多量に含んだ暗褐色土層に分けられる。

S K 28 (第105図)

E 2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。南側の一部はビットで壊されている。長軸約0.80m、短軸は約0.60m、検出面からの深さは約0.20mを測る。

S K 33 (第105図)

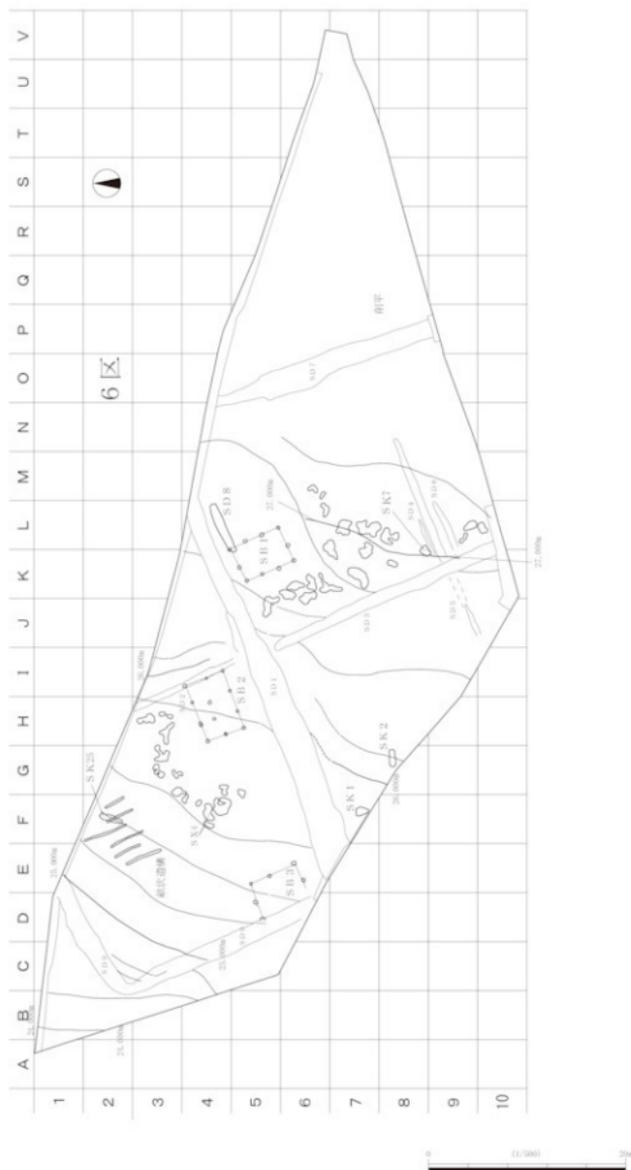
J 4グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約0.90m、短軸は約0.82m、検出面からの深さは約0.10mを測る。埋土は焼土と思われる橙色粒を少し含み基本層5層ブロックを少し含んだ黒褐色土である。遺物は縄文後・晩期の深鉢形土器の胴部片、浅鉢形土器の口縁～胴部片等が出土している。

S K 35 (第105図)

H 8グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約0.69m、短軸は約0.63m、検出面からの深さは約26cmを測る。埋土は焼土と思われる橙色粒を少し含み、基本層5層ブロックを多く、3cm大の6層ブロックを少し含んでいる。

S K 37 (第105図)

J 4グリッドに位置する。S D 1とトレンチにより半分以上が壊されている。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは約0.14mを測る。埋土は基本層5層ブロックを多く含んだ黒褐色土で1～6cm大の焼土粒を大量に含む。



第106図 6区遺構配置図(古代・中世)

(4) 古代～中世の遺構・遺物(第106図～第109図)

基本層4層上面にて掘立柱建物跡、土坑、ピット、溝状遺構、畝状遺構を検出した。遺物は遺構に伴うものはほとんど無く、表土、包含層、近現代の溝より古代～中世の土器の出土を確認した。加えて後世の削平などが各遺構の時期考察を困難にしていたため、埋土の状況と調査で得られた遺物資料などから、「古代～中世」として記載することとした。

①掘立柱建物跡

SB1(第107図)

K5・6、L5・6グリッドに位置する。P1、P9は半分以上を擾乱(いも穴)により壊された状態で検出した。桁行は3間で、東側柱列(P1-P2-P3-P4)約5.26m、西側柱列(P9-P8-P7-P6)約5.00m。梁行は2間で北側柱列(P1-P10-P9)約3.71m、南側柱列(P6-P5-P4)約3.72mを測る側柱建物である。桁行方向はN-25°-Wである。柱間は、桁行約1.70～1.87m、梁行約1.62～2.90mを測る。柱掘方は平面円形であり、径は約32～47cm、検出面からの深さは最深で約54cmを測る。柱穴の下端レベルは一定ではないが、最大差が約28cmを測る。全ピットにおいて柱痕を確認している。埋土中に2mm大の焼土と思われる橙色粒、炭化物を微量に含んでいる。

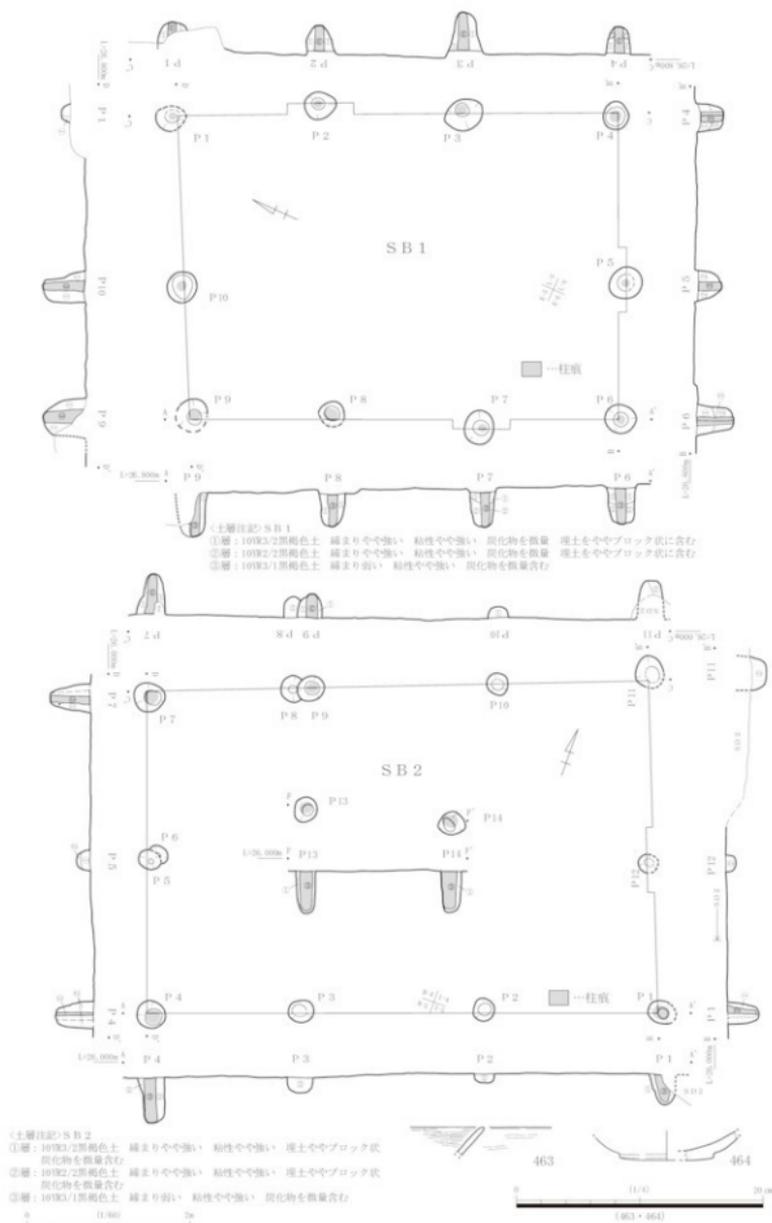
SB2(第107図)

H4・5、I4グリッドに位置する。P1、P12、P11はSD2、攪乱(いも穴)によりそのほとんどを壊され、西側に配するピットも、上層のほとんどを後世の削平を受けている。桁行は3間で、北側柱列(P11-P10-P9-P7)約5.94m、南側柱列(P4-P3-P2-P1)約6.05m。梁行は2間で東側柱列(P1-P12-P11)約4.16m、西側柱列(P7-P5-P4)約3.91mを測る側柱建物である。桁行方向はN-60°-Eである。柱間は、桁行約1.79～2.26m、梁行約1.91～2.30mを測る。柱掘方は平面円形であり、径は約24～40cm、検出面からの深さは最深で約55cmを測る。柱穴の下端レベルは一定ではないが、4隅(P1、P4、P7、P11)は他の柱穴よりも深く掘られていることに特徴がある。埋土中に2mm大の焼土と思われる橙色粒、炭化物を微量に含んでいる。中央付近に位置する2基のピットは柱痕も確認しており、梁支えの柱、支柱などSB2に付随する何らかの用途があったと考えられるが詳細は不明である。

遺物はP4において、463に示す黒色土器A類椀の口縁部片が出土している。

SB3(第108図)

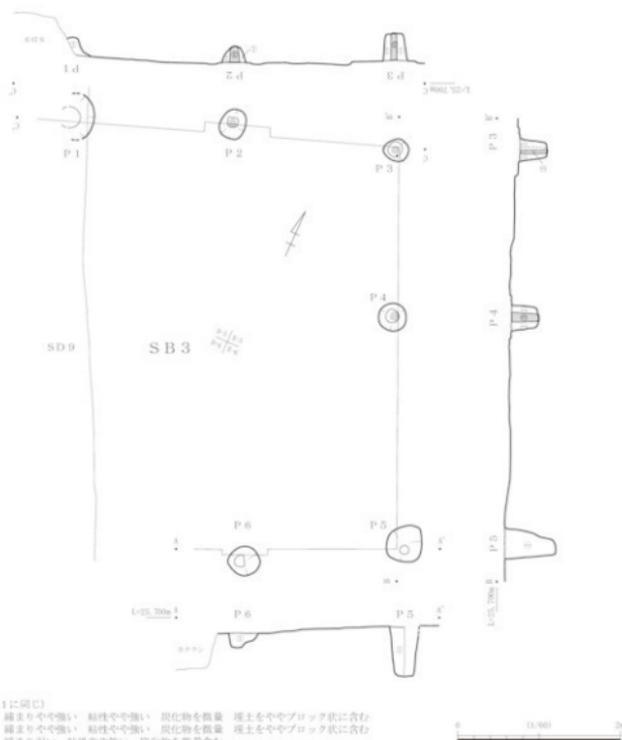
D5・6、E5・6グリッドに位置する。調査区が大きく段を成して落ち込む部分にかかり、遺構の半分は情報が得られなかったが、柱痕を確認できるピットの存在、配置、想定される桁行方向がSB2と似ることなどから、掘立柱建物跡として調査した。梁行、桁行軸は不明だが、残存する柱列(P1-P2-P3)約4.10m、柱列(P3-P4-P5)約4.43mを測る。柱列(P1-P2-P3)の軸方向はN-60°-Eで、SB2と同じである。柱間は、約1.97～2.87mを測るが、2間をなす柱列(P3-P4-P5)の柱間が広いことから、削平されている西側方向へ柱数が増える可能性もある。柱掘方は平面円形であり、径は約31～42cm、検出面からの深さは最深で約62cmを測る。柱穴の下端レベルは一定ではない。埋土中に2mm大の焼土と思われる橙色粒、炭化物を微量に含んでいる。



第107図 SB 1・2遺構・出土遺物実測図

調査6区において検出された3棟の掘立柱建物に関しては、得られた遺物資料が乏しく時期の特定は難しい。しかし、S B 1とS B 2がほぼ90度方向に軸が変わる。また、大小差はあるものの、桁、梁の規格が一致していることが特徴として挙げられる。国土交通省事業で実施した塔平遺跡1区にも同じ構造規格、軸方向の違いをもった掘立柱建物跡2棟が検出されている。同時期に建てられていた、また、用途の違いをもった建物跡という考え、可能性を含むが推察の域を超えない。

掘立柱建物跡関連のものかと思われた不明遺構について記す。掘立柱建物跡の検出時に、その周辺にて古い時期のものと考えられる不明遺構(樹痕跡)を多数検出した。形状はそれぞれ歪だが、箇所としては40箇所を超える。うち1つのS X 4からは464に示す土師器の坏の底部片が出土している。気になるのはその配置である。その多くがS B 1の南西、S B 2の北西に、桁・梁軸に平行するようにコの字形で配置されていたことである。掘立柱建物跡に被るものではなく、意図的に植樹されているかのような配置状況であった。「生垣」のように思える樹痕跡の存在の可能性を否定できない。ただ上記以外の情報を得ることができず断定には至らなかった。



第108図 S B 3遺構実測図

②土坑

SK 1 (第109図)

F 7 グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.34m、短軸約 0.82m、検出面からの深さは約 0.18 m を測る。埋土は単層で、基本層 3 層を主体とした黒褐色土で、4 層、下層には 5 層ブロックが少し混じる。焼土と思われる橙色粒子、炭化物を微量に含んでいる。

SK 2 (第109図)

G 8 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面は中央が窪んだ皿状を呈する。長軸約 1.74m、短軸約 0.64m、検出面からの深さは約 0.28m を測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒子をやや多く含み、炭化物を微量に含んでいる。基本層 3 層と 4 層ブロックを主体とした黒褐色土で、中央の窪んだ箇所は 5、6 層土が混じる。

SK 7 (第109図)

K 8、L 8 グリッドに位置する。不整な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.08m、短軸約 0.66m、検出面からの深さは約 0.20m を測る。埋土は 2 層に分けることができ、埋土 1 層は基本層 3 層を主体とした黒褐色土に焼土と思われる橙色粒子、炭化物を微量に含んでいる。埋土 2 層は埋土 1 層を主体とし、基本層 5 層ブロックがやや多く混じる。

SK 25 (第109図)

F 2 グリッドに位置する。平面形は不整な長楕円形で、断面は中央が窪んだ皿状を呈する。長軸約 2.42m、短軸約 0.58m、検出面からの深さは約 0.32m を測る。

基本層 4 層上面において検出した土坑は、3 層主体の埋土をもつもの、3 層及び 4 層ブロック混じりの埋土をもつものに分けられる。前者においては縄文後・晩期の遺物の出土をみるが、後者には良好な遺物資料はなかったものの、S B 2 の四隅で観察できた埋土に近い。同じ 3 層土が混じること、調査区内（遺構外）出土資料から古代～中世の土器資料が確認されたことからこの時期の遺構ではないかと考えるに至った。

③溝

SD 8 (第109図)

L 4・5 グリッドに位置し、4 層上面にて検出した。最大幅約 0.98m、長さ約 5.17m、検出面からの深さは最深度で約 0.72m を測る。長軸は N-66°-E である。断面は中央やや西寄りの最深度に向かい、両端より階段状に落ち込んでいる。埋土は 3 層に分けることができるが水成堆積は確認できず、埋土 3 層は基本層 7 層のブロックを大量に含み、締まりは非常に強い。加工時の成形土と考えられる。検出時は溝状にでき、周囲の近現代の溝と同時期のものと考えていたが、埋土は黒褐色で、掘立柱建物跡を成すピットの埋土よりも黒味が強。また、S B 1 のピットを切る状況も確認された。用途は不明である。

④畝状遺構 (第109図)

E 2・3、F 2・3 グリッドに位置し、4 層上面にて検出した。畝の凹状遺構と考えられる。長いもので約 4.55m、一番短いものが約 2.22m を測る。6 条の全てがほぼ N-30°-W 方向を向く。植物依存体などは確認されていない。黒褐色の埋土で混入物は確認できなかった。

遺物は 465 に示す東播系須恵器の捏鉢の口縁部片が出土している。内面の下半部は、使用による擦れが観察できる。

(5) 近世～近代の遺構・遺物(第110図～第114図)

検出したのは溝状遺構8条、土坑3基であるが前者のみ記載する。遺物は、近世瓦、陶磁器片を主として、須恵器、土師器、縄文土器、石器が少量出土している。瓦以外の遺物は細片が多くを占めるが、ここでは実測ができた遺物について記載する。

SD1(第110図・第113図・第114図)

調査区中央、北東から南西方向へと伸び、溝方向はN-66°-Eである。両端はそれぞれ調査区外へと続く。南西に向けて溝幅は広がり、確認できる長さは約38.4m、南西壁面で確認できる溝幅は約4.5m、深さは約1.48mである。断面は深い皿状を呈する。周辺の溝との位置関係を考えるに、区画溝としての使用が考えられる。使用期は3期に分けられると考えられ、その都度掘り返し、及び整地を繰り返した痕跡を残す埋土である。

SD1からの出土遺物は20点を図示している。466は把手である。467は龍泉窯系青磁碗で、外面に細連弁文が観察できる。内面の見込みは無文である。468は削り出し高台をもつ壺と思われる。外面の一部に自然軸が観察できる。469は砂目積痕をもつ肥前系陶器の皿である。高台にも3箇所の砂目積痕が残る。470は肥前系の染付皿である。見込みは手描きと思われる五弁花、高台内は渦福の一部が観察できる。471の染付皿は見込みに手描きの五弁花、外面には唐草文の一部が観察できる。472～474は肥前の染付碗である。外面には円文(縞)と菱文をもち、472の見込みにはコンニャク印判による五弁花が観察できるが形はかなり崩れており歪である。475は染付皿で、内面には二線を対とした草文、圏線が観察できる。476・477は陶器碗で、476は蛇の目の軸刺ぎ痕、高台内には渦状の削り込みをもつ。

478・479は縦長の剥片で、それぞれ安山岩製、輝緑凝灰岩製のものである。480はチャート製の残核で、上面に礫面を残す。少なくとも2面の幅広剥片を剥出したと考えられる。481は安山岩製の短冊形を呈する打製石斧で基部を欠損する。下半部に摩擦が観察できる。482は砂岩製の打製石斧で不整形な撚形を呈する。刃部はやや尖る。483は2点が接合した安山岩製の石斧である。下半部の平面に擦痕が観察できる。484・485は使用面を4面もつ砥石である。

SD2(第110図・第114図)

調査区中央、北西から南東方向へと伸び、溝方向はN-24°-Wである。SD1に向かい直行するような方向へ伸びるも、交錯はしない。確認できる長さは約11.1m、溝幅は約0.62m、深さは約0.30mを測る。

SD2からは486に示す天草砥石の硯が出土している。砥石として使用されていたものを硯へ転用したと考えられ、左側、裏面において砥石時の使用痕が残る。硯の陸部には墨を磨りやすくするための横方向への刻みが施されている。海部、波止部、陸部全域に墨の付着が観察できる。

SD3(第110図)

調査区中央、南東から北西方向へと伸び、溝方向はN-24°-WとSD2と同じである。同じくSD1に向かい直行するような方向へ伸びるも、交錯はしない。確認できる長さは25.9m、溝幅は最大で約1.15m、深さは約0.40mを測る。

SD4(第110図・第114図)

調査区の中央、南西側に位置し、近接するSD5、6とは並行に並んでおり、SD3に直行するように走る。北東から南西方向へと伸び、溝方向はN-68°-Eである。確認できる長さは約4m以上、溝幅は最大で

約0.34m、深さは約0.14mを測る。SD5の延長がSD3の西側で確認されていることから、圃場整備等で土層が大きく削平されているため確認はできないが、このSD4もSD3に直交していたものと考えられる。

487は須恵器の蓋と考えられる胴部片が出土しており、脚部は剥落している。

SD5 (第110図)

SD4の南に位置する。溝方向はN-67°-Eである。確認できる長さは推定で約21.1m以上、溝幅は最大で約0.85m、深さは約0.22mを測る。SD3の西側でSD5の延長部が確認されている。

SD6 (第110図)

SD5の南に位置する。溝方向はN-63°-Eである。確認できる長さは推定で約6.1m以上、溝幅は最大で約0.60m、深さは約0.12mを測る。

SD7 (第112図・第114図)

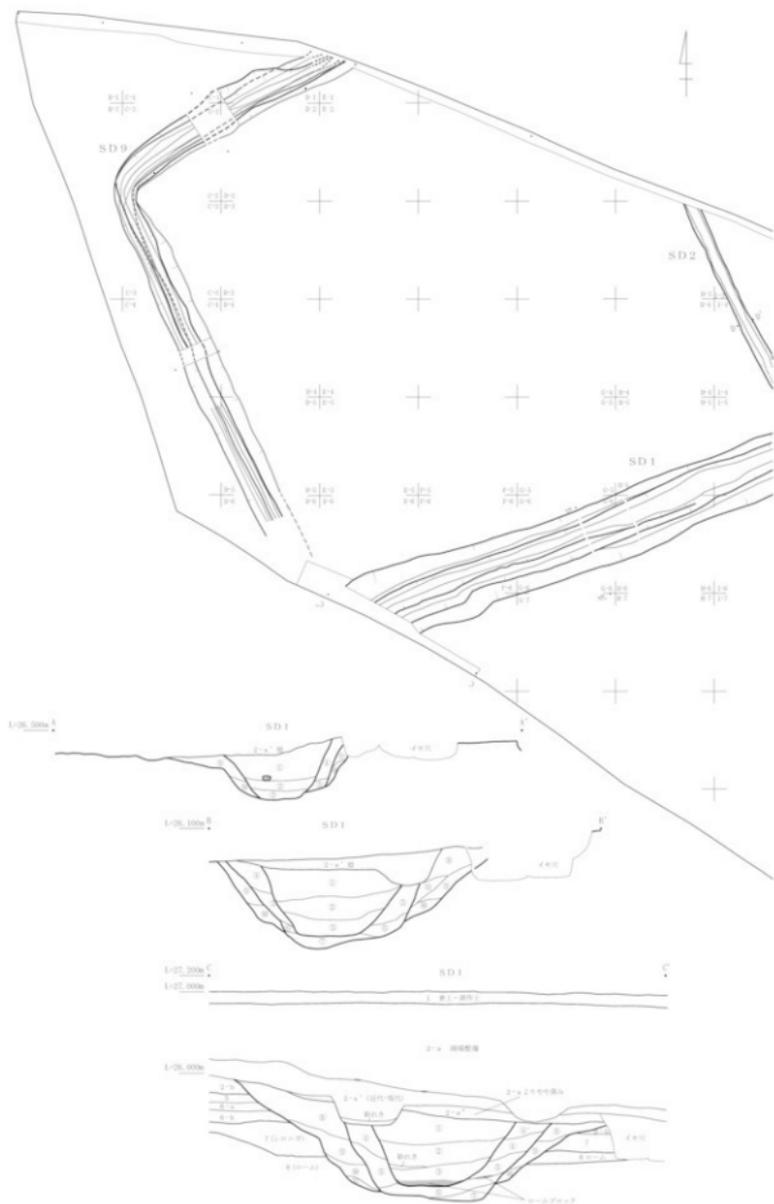
調査区東、南東から北西方向へと延び、溝方向はN-20°-Wである。両端はそれぞれ調査区外へと続く。確認できる長さは約23.6m、A-A'で確認できる溝幅は約2.7m、深さは約0.92mである。断面は台形状を呈する。使用期はSD1と同様3期に分けられると考えられる。

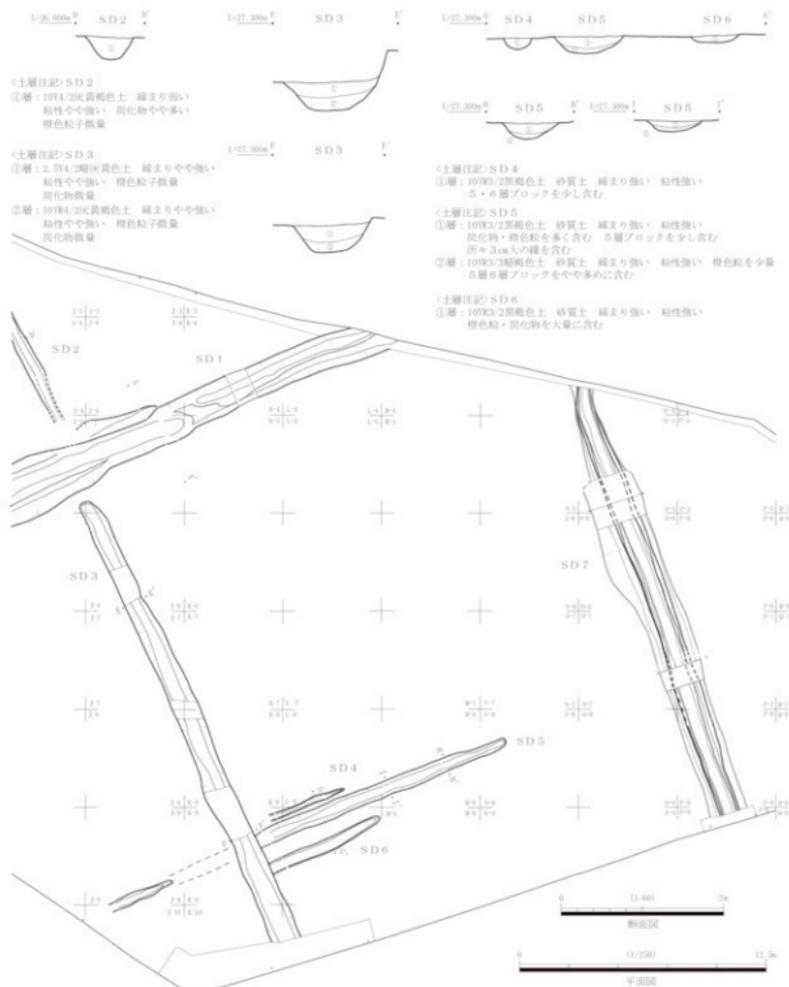
SD7からは488に示す須恵器の鉢の底部片が出土している。外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。489は近代文具の石板である。

SD9 (第111図・第114図)

調査区西に位置し、90°近く屈曲する溝である。南東から北西への向きから、B2・3、C2・3グリッドを隔てる杭付近より北東へと向きを変える。両端はそれぞれ調査区外へと続く。確認できる長さは約34.5m、北壁面で確認できる溝幅は約2.85m、深さは約1.0mを測る。SD1、SD7と同じく、使用期は3期に分けられる。

SD9から出土した遺物は4点図示している。490は須恵器の溶着塊で、蓋3点、甕の胴部1点の少なくとも4個体分の存在が確認できる。上面には窯壁と思われる塊が付着している。重ね焼き、もしくは廃棄品を重ね置いていたものが窯内で焼成され、溶着したものと考えられる。蓋の形状から9世紀頃のものと考えられる。近くの生産遺跡としては、当遺跡から南南東へ約3.2km、チサンゴルフ場西側斜面、御船町大字高木字善助山にある古代、中世期の「善助山窯跡」がある。この窯跡所産の可能性があるが、出土地までの距離など根拠に乏しい。調査区からより近くの箇所に未発見の窯跡が存在する可能性もある。491は甕の底部直上部と思われる中世須恵器片である。内面は斜方向からのハケメ、外面は格子目状のタタキを施している。0.5mm～1.0mm程度の砂粒を少し含み、2.0mm程度の小石を含んでいる。美濃口雅朗氏（熊本市文化振興課）より、樺番城系のものではないかという御教示を得たものである。492はSD1で示した469と同様、砂目積痕をもつ肥前系陶器の皿である。493は白磁の皿で、波佐見系のもと思われる。内面に蛇の目の釉剥ぎ痕が観察できる。

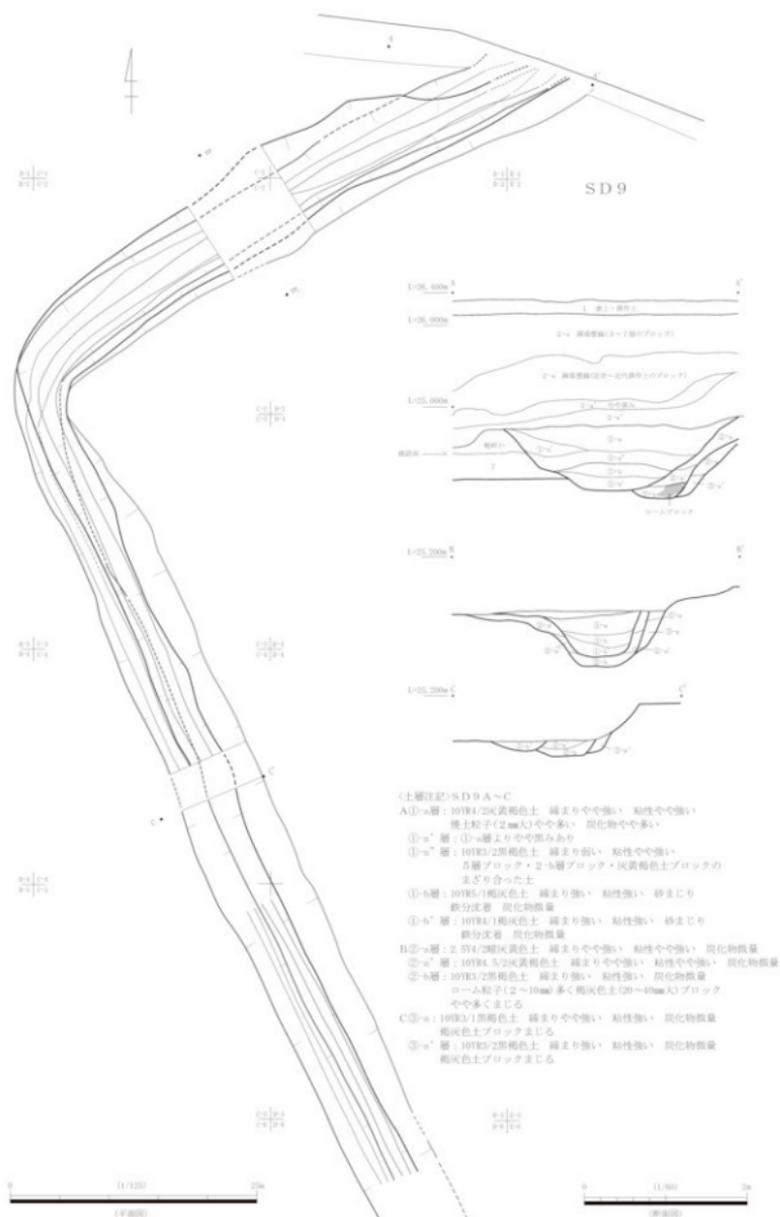


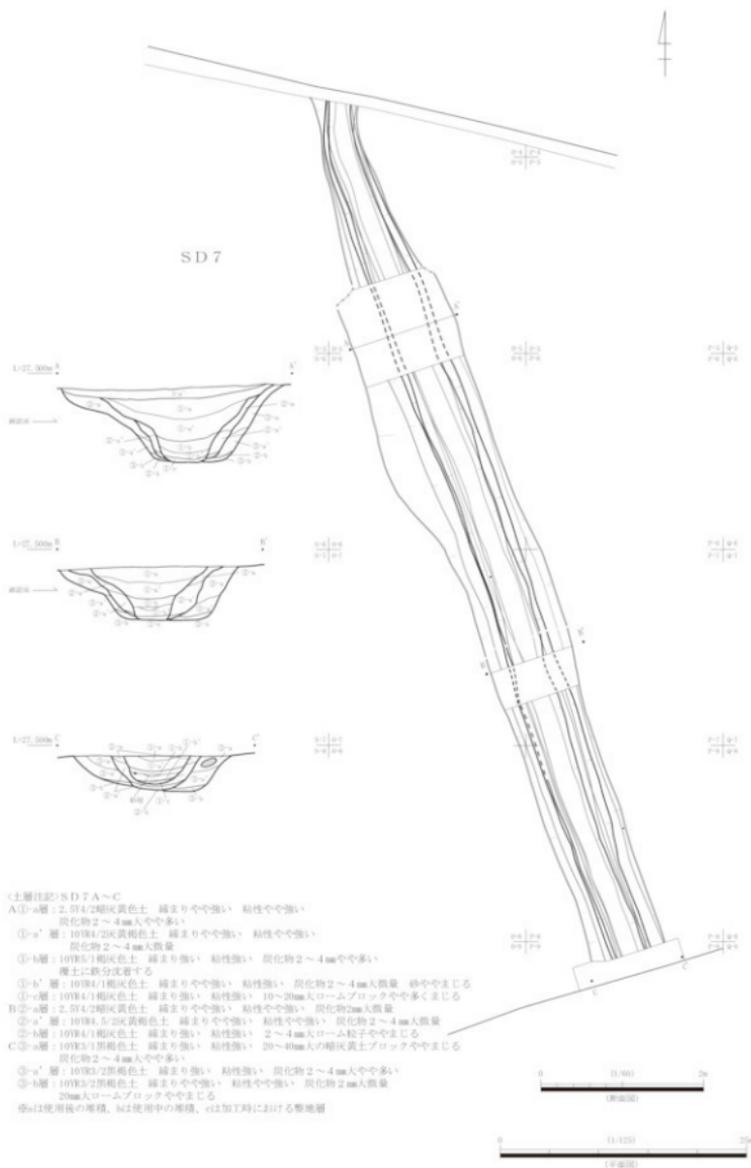


〔土層注記〕SD1 A~C

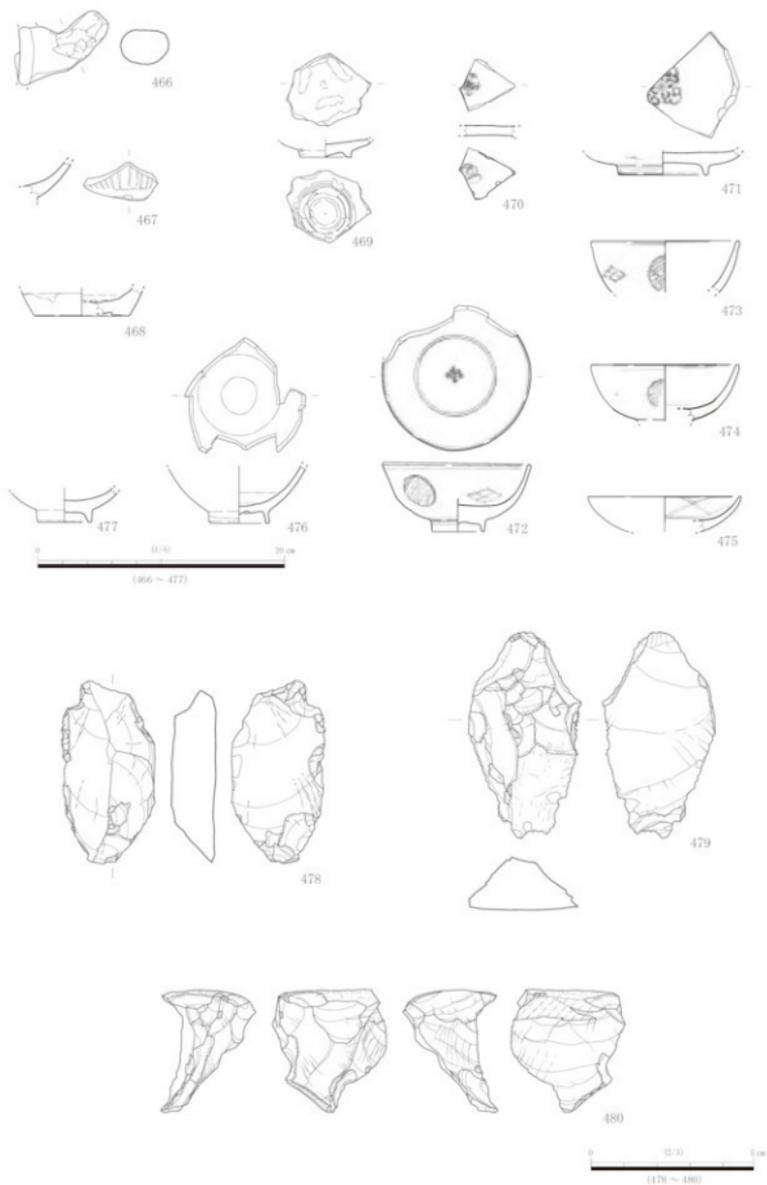
- A①層：10R4/2R黄褐色土 締まりや強い、粘性やや強い、2mm大褐色粒子・炭化物やや多く含む
 ②層：10R5/1R褐色土 締まり強い、粘性強い、2mm大褐色粒子・炭化物微量 砂ややまじる
 ③層：10R4/1R褐色土 締まり強い、粘性強い、2mm大褐色粒子・炭化物やや多い、砂ややまじる
 地中①②層は堤脚埋積層(水と混雑あり)
- B①層：2.0R4/2R黄褐色土 締まり強い、粘性弱い、2mm大褐色粒子・炭化物微量 ⑦よりやや明るい
 ②層：10R4/5/2R黄褐色土 締まり強い、粘性弱い、2mm大褐色粒子やや多い、炭化物微量
 ③層：10R5/2R黄褐色土 締まり強い、粘性やや強い、2mm大褐色粒子・炭化物微量 砂ややまじる
 ④層：10R3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、2mm大ローム粒子・20~30mm大ロームブロック多く含む、2mm大褐色粒子・炭化物微量
- C①層：2.0R4/2R黄褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、2mm大褐色粒子・炭化物微量
 ②層：10R3/2暗褐色土 締まり強い、粘性強い、2mm大褐色粒子・炭化物やや多い、灰黄褐色土ブロック(20~30mm大)ややまじる
 ③層：10R4/2暗褐色土 締まり強い、粘性弱い、2mm大褐色粒子・炭化物土ブロック(20~30mm大) 2~4mm大ローム粒子ややまじる
 ④層：2.0R4/5/2R黄褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、⑦よりやや暗い、2mm大褐色粒子・炭化物微量
 ⑤層：10R3/3暗褐色土 締まりやや強い、粘性やや強い、20~40mm大ロームブロックややまじる

第110図 SD遺構実測図

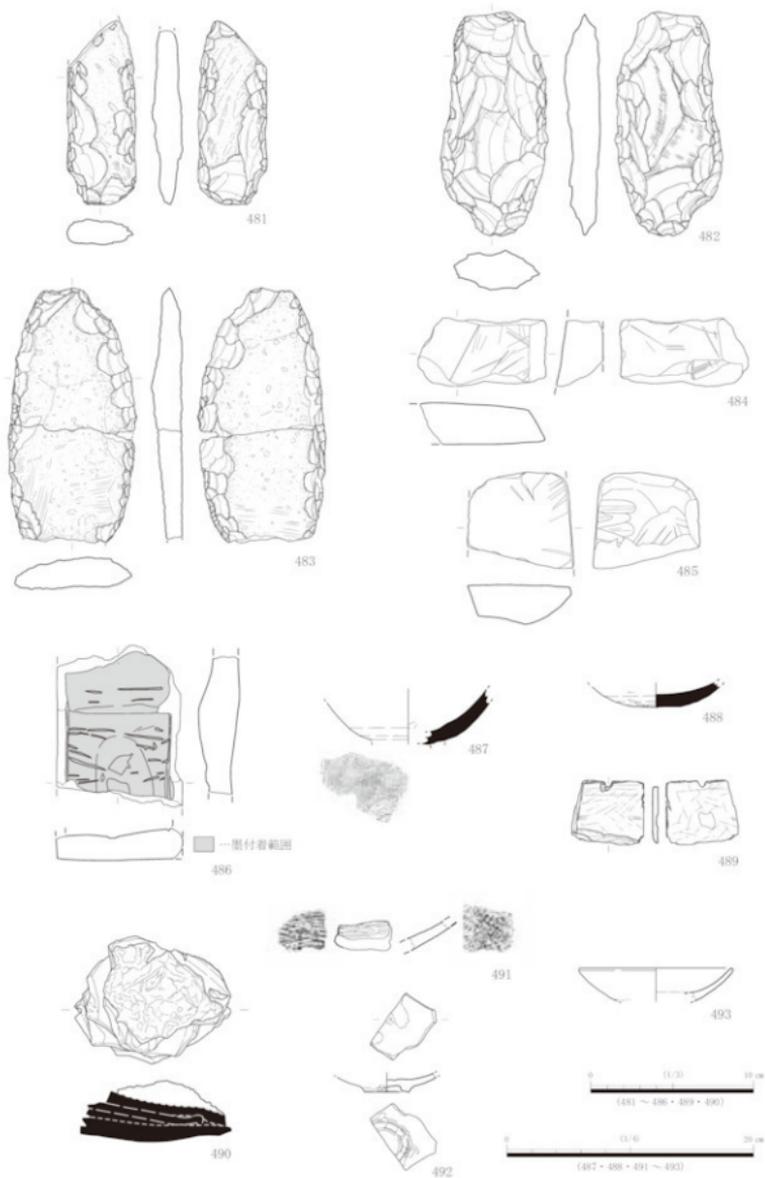




第112図 SD7 遺構実測図



第113図 SD出土遺物実測図1



第114図 SD出土遺物実測図2

近世～近代のものとして検出した8条の溝は、それぞれの配置関係からそのほとんどが区画溝として利用されていたと考えられる。流れ込んだ遺物も近世のものが多いながらも、古代～中世のものも含む。ここで調査者が気になる点を2つ記しておく。1つめは近世～近代のものとした溝8条と古代～中世のものとした畝状遺構、SD8との関係である。畝状遺構は近～現代、特にSD1・2・9の溝から成る方形区画に対し並行、直行する。またSD8もSD1と並行する点である。2つめは古代～中世とした掘立柱建物3棟もまた、8条の溝の方向軸を意識しているかのような配置である点である。おそらくは古代～中世期から近～現代に至るまで、土地形状、土地利用にあまり差がなかったためとも考えられる。つまり、ここで記した溝8条は検出層位や埋土の状況からは近世～近代として使用を確認できるのだが、それよりも前の古代～中世期にも8条全てでは無いにせよ、同じ方向軸をもった溝の初期段階が存在し、その後土地利用を同じくする近世～近代において大きく掘り返しを受けた結果、初期段階のものは滅失したのではないかと推察する。

(6) 遺構外出土遺物 (第115図～第122図)

基本層位毎の掘り下げ、確認トレンチ掘削、攪乱土より出土した遺物である。

494～512の19点は縄文期の土器を示している。494は縄文早期の深鉢で、外面は燃糸文と考えられる。495は貝殻条痕、496は押引文がそれぞれ施されている。497は阿高式の口縁部片で、口唇部に3箇所の刻目、外面に凹点と3条の凹線文が施されている。498は古閑式の浅鉢形土器の口縁で、補修孔をもつ。499～503・507・508・512は浅鉢形土器である。499は内外面ともに顕著なミガキが施されている。501は欠損するも片側への口縁部の上がり方から、リボン状突起を有するものと考えられる。503もリボン状突起が貼り付けられている。507・508は内面にそれぞれ横、斜めのミガキが、外面は貝殻条痕が施されている。512は残存形状からみて極めて底部に近い部分と考えられ、組織痕をもつものである。498から示した縄文後・晩期の土器15点のうち、499・504～507はS11・2・3を、501・503・508・512はS14・5・6を検出したグリッド、及び近接グリッドからの出土である。

513の土師器甕は復元口径約25.7cmを測る。514は甕の胴部と考えられ外面に横方向のハケメを施している。

515・516は須恵器の椀で貼付高台をもち、両遺物とも復元底径は約8.8cmを測る。内外面ともに回転ナデが施されている。

517は瓦質土器の播鉢で内面の一部に縦方向の描目が観察できる。外面には指頭圧痕が観察できる。518は同じく瓦質の鉢である。519は瓦玉である。側面に研磨が施されている。瓦質土器の再加工とも考えられるが、約2.0cmという厚みを測るため瓦玉の可能性が高い。

523は阿安窯系の青磁碗片で、内面には斜め方向の櫛状、外面には縦方向の彫刻が施されている。524～526は龍泉窯系の青磁碗片で、524は内面口縁部3条の彫刻が施されている。525は外面に、526は内面にそれぞれ蓮花の一部が観察できる。

520～522は白磁皿、碗である。521の白磁皿片は内面には横方向の、外面には縦方向の彫刻が観察できる。

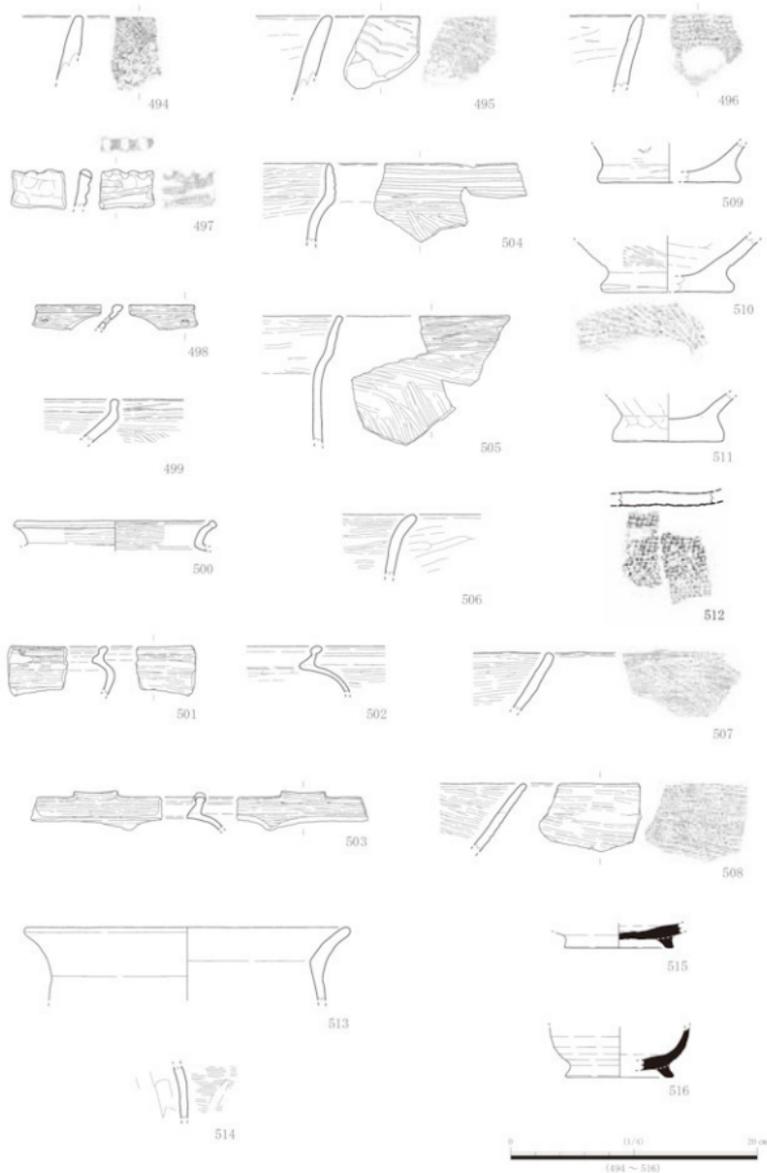
527～530は陶器の皿、碗である。529は細片だが、内面に軸刺ぎ痕の一部が観察できる。531は肥前系陶器播鉢で、明瞭な糸切り痕をもった平底である。17世紀前半のものと考えられる。532は筒形の染付碗である。内面口縁部に2条の團縁、外面には樹木文のようなものが観察できる。533の染付皿は見込に五弁花が配されており、高台内は文字の一部が観察できるが判読はできない。534は蛇の目の軸刺ぎ痕をもつ比較的新しい染付碗である。

石器は全60点を示す。

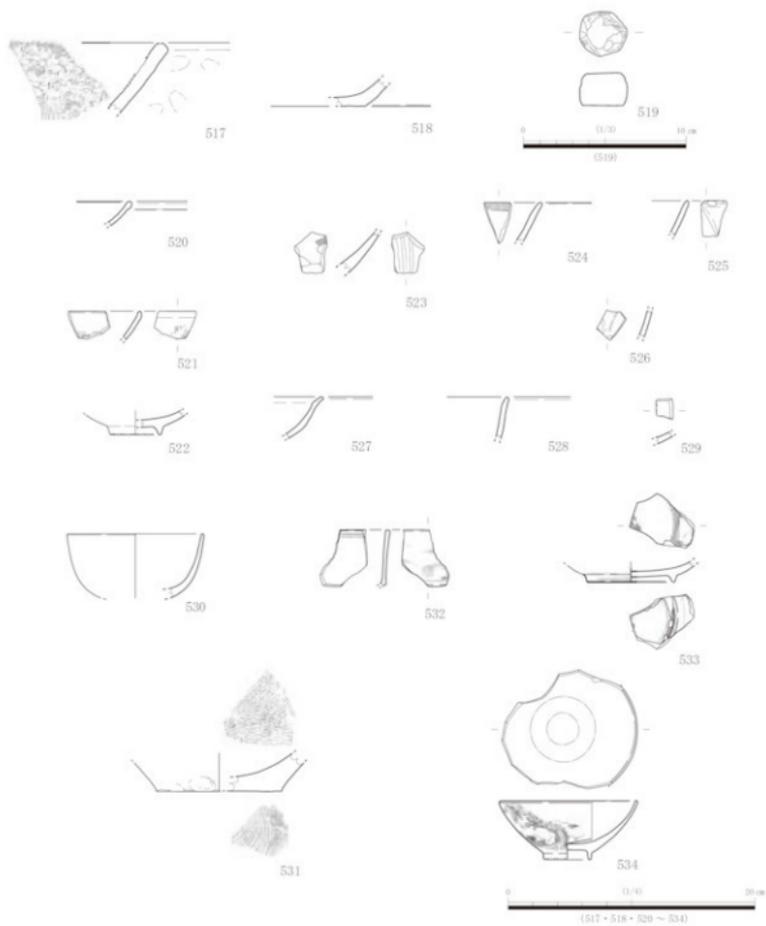
535はK5グリッド、5層下より出土した三稜尖頭器である。珪質頁岩の肉厚な横長剥片を素材とし、稜上からの調整痕が観察できる。背面側からの調整はほとんど行われていない。先端部を一部欠損する。長さ5.1cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm、重さ10.12gを測る。周辺部を掘り下げて、石器、ブロックの有無を確認するもこの1点にとどまった。塔平遺跡では国土交通省が実施主体の工事区間で調査したものと合わせて、3点の三稜尖頭器が出土したことになる。

536はL9グリッド、4層及び同グリッド5層より出土した遺物の接合資料で、両側縁に使用痕をもつ剥片である。西北九州産の黒曜石を石材とし、両側縁に使用痕が見られる。長さ2.7cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.15gを測る。細石刃の可能性もあるが、大辻遺跡(2013 益城町教育委員会)より出土したもの(長さ2.4cm、幅0.95cm、厚さ0.2cm、重さ0.4g)と比較しても、やや幅広く大きいものであること、細石核が出土していないこと、出土層位などから疑問を残すままである。

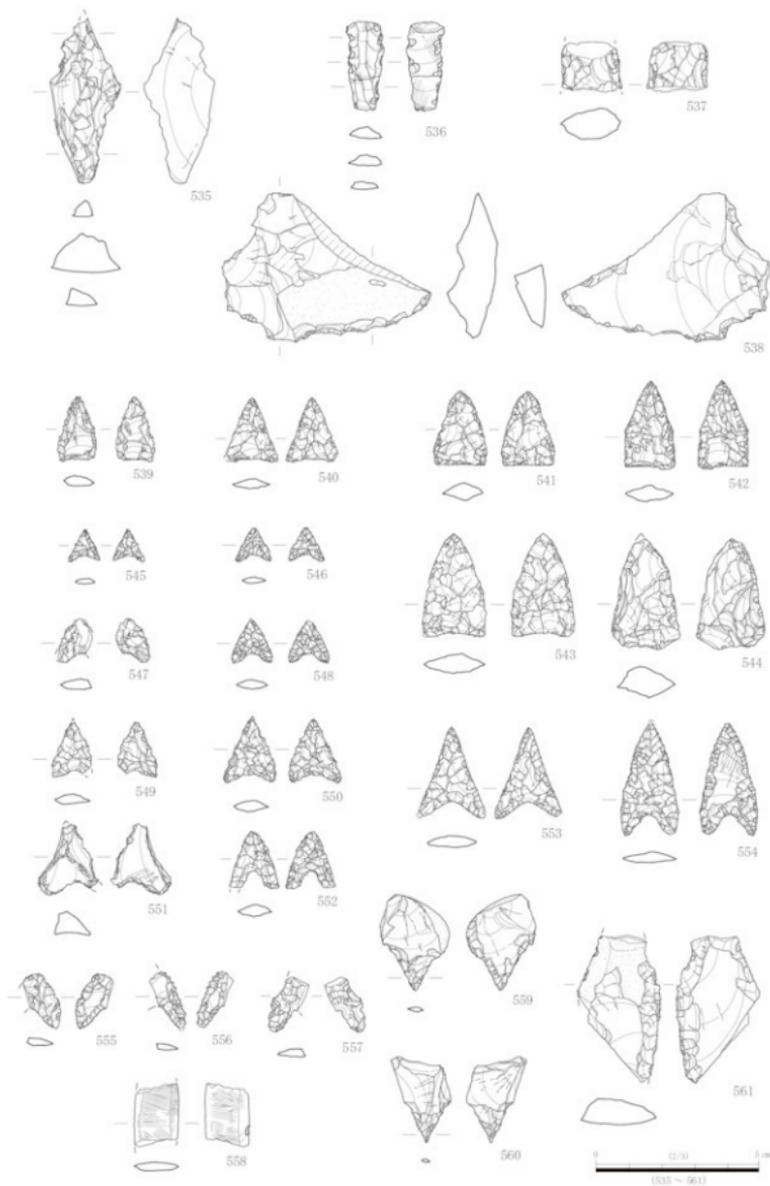
537はG2グリッドの5層中から出土し頁岩製の石器片で、先端部、基部を欠損しているため全体の形状は不明である。約1.0cmもの厚みをもつため異形石鏃、あるいは尖頭器である可能性は否定できない。長さ1.5cm、



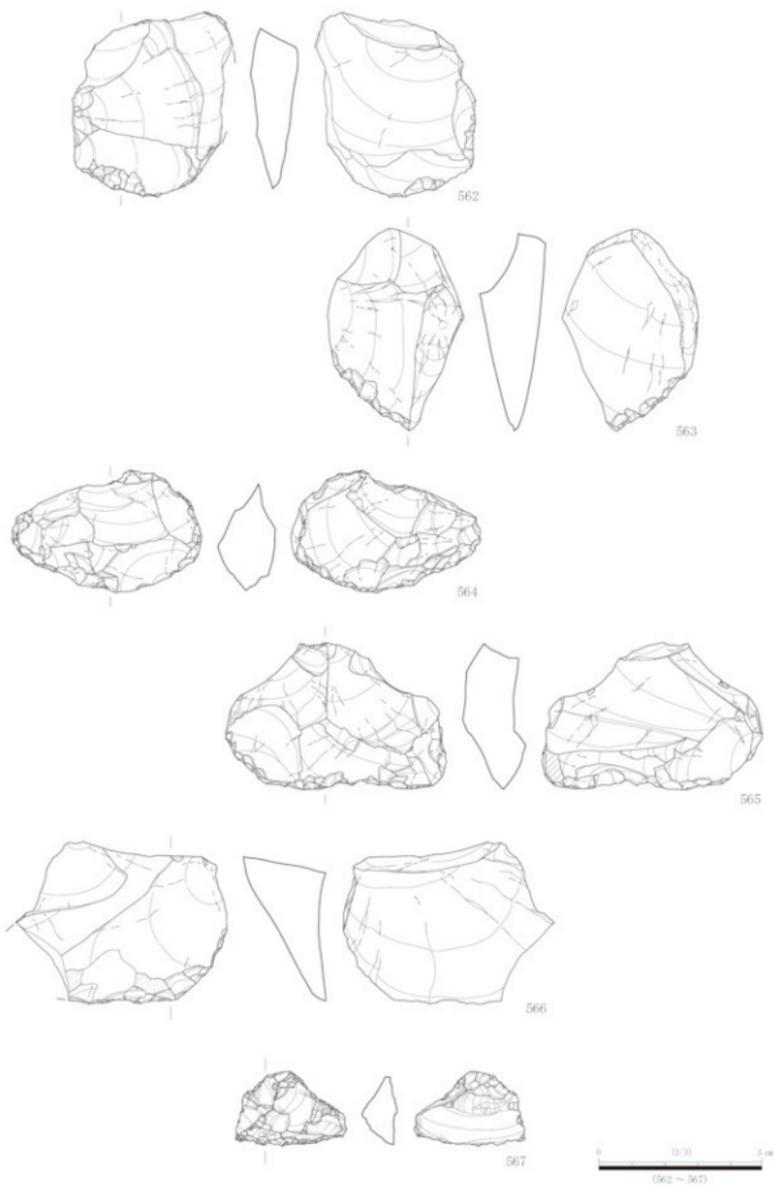
第115図 遺構外出土遺物実測図1



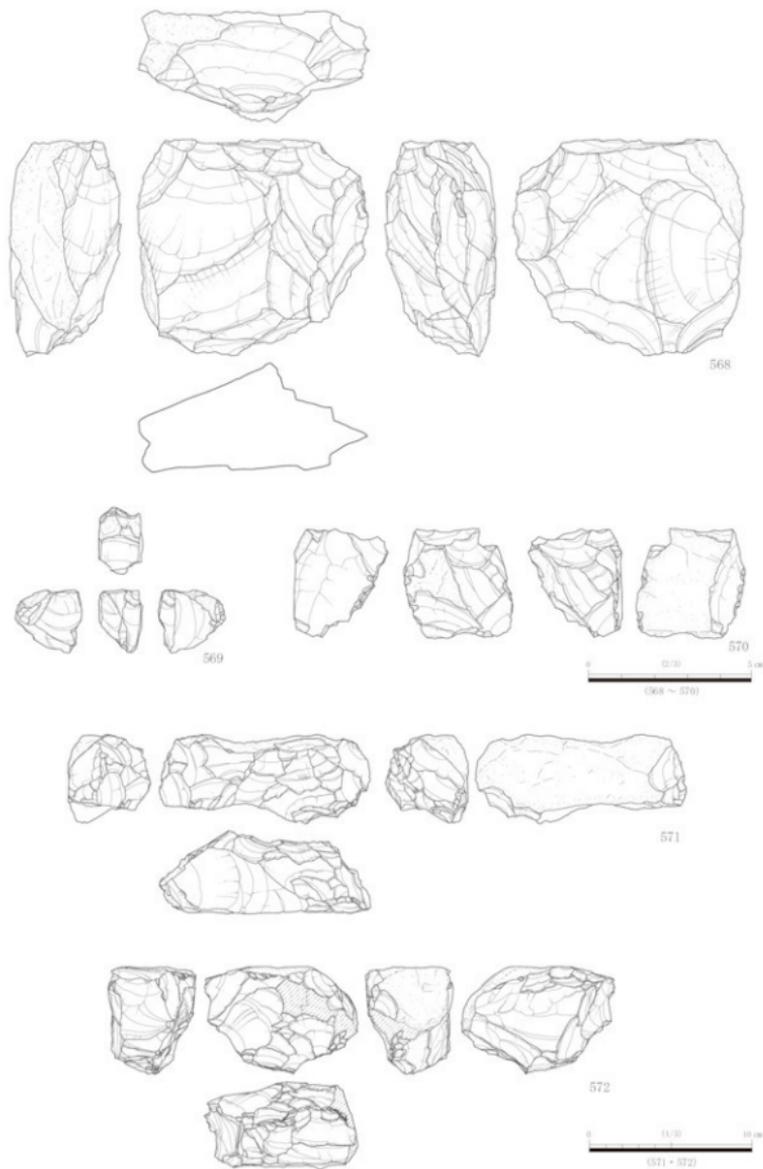
第116図 遺構外出土遺物実測図2



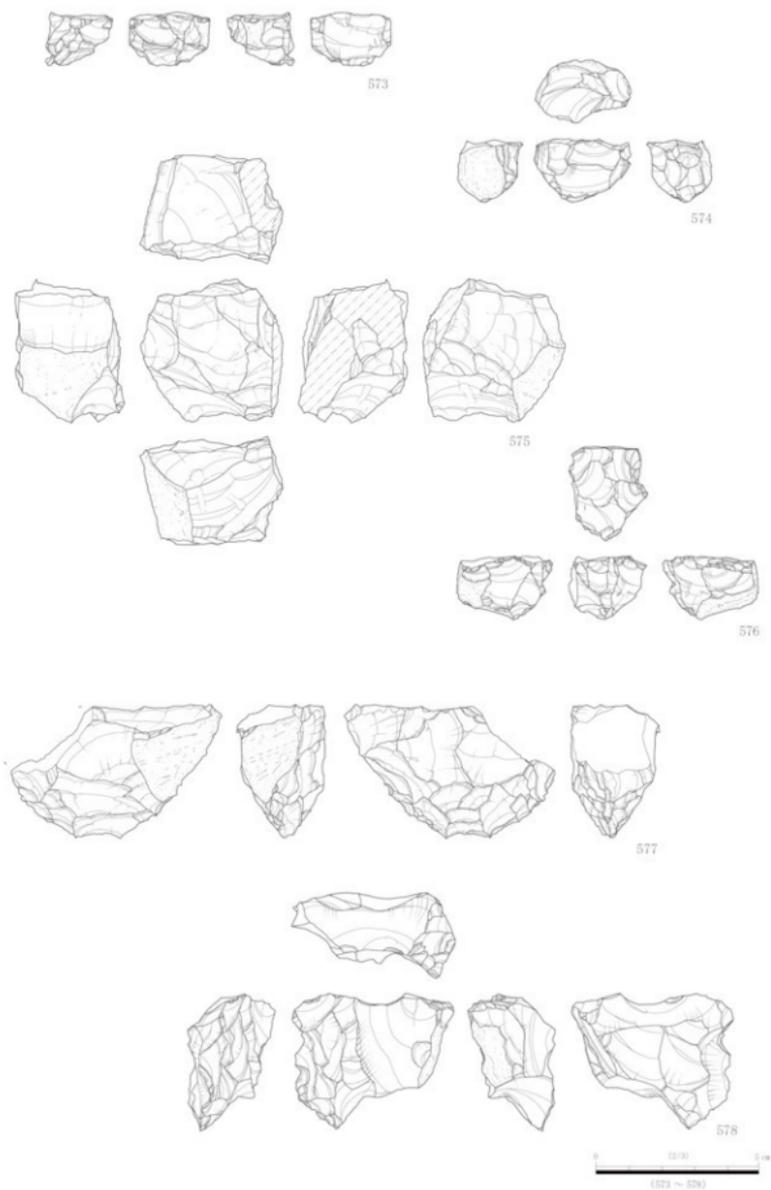
第117図 遺構外出土遺物実測図3



第118図 遺構外出土遺物実測図4



第119図 遺構外出土遺物実測図5



第120図 遺構外出土遺物実測図6



第121図 遺構外出土遺物実測図7

幅 1.9cm、重さ 3.37 g を測る。

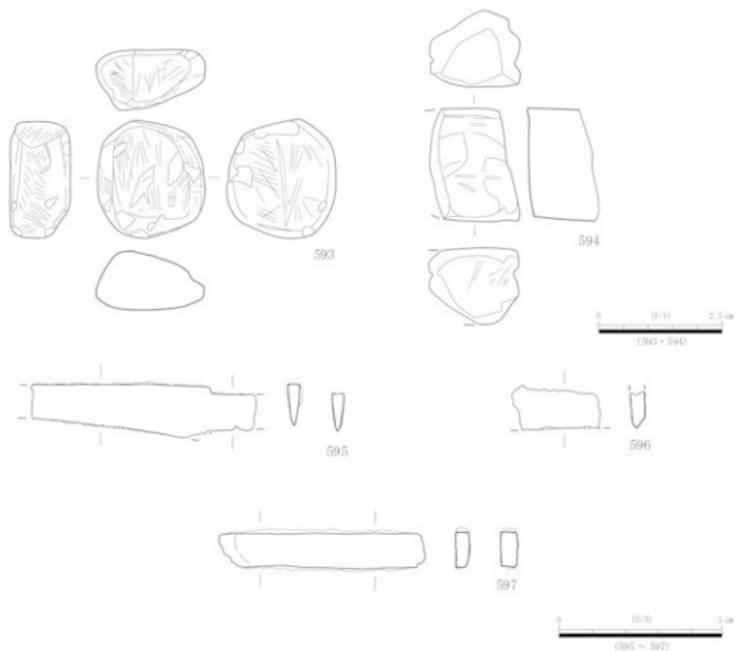
538 は B 1 グリッド 5 層下より出土した珪質頁岩製のスクレイパーである。幅広い剥片に一部自然面を残し、刃部調整は簡易で主に主面側に集中している。使用痕も観察できるが、風化しているようにも見える。縄文期以前の古い時代の石器である可能性をもつ。長さ 4.6cm、幅 6.4cm、厚さ 1.5cm、重さ 34.10 g を測る。

539 ～ 558 の 20 点は石鏃を図示している。

539 ～ 543 は平基からやや円基のものである。542 と 543 は基部から先端部にかけて鋭角から鈍角に変わる。544 は未製品と思われる。545 ～ 557 は基部の挟りが深くなる。545 は長さ 1.0cm、幅 1.0cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.11g を測り、出土した中で最小のものである。551 は未製品である。ここで記した 19 点の打製石鏃の石材は、黒曜石 12 点 (63%)、チャート 4 点 (21%)、安山岩 3 点 (16%) と、黒曜石製が半数以上を占める。558 は 6 区で出土した唯一の磨製石鏃である。チャート製で先端と基部を欠損しているが、柳葉形であったと考えられる。全体的に丁寧な研磨が施されている。

559・560 は安山岩製の石鏃で、両縁側において先端部への調整が施されている。

561 は珪質頁岩製のもので、先端部を大きく欠損しているため全体の形状は不明だが、縦長石鏃の未製品と考えられる。両面の縁辺部の調整が観察できる。562 ～ 567 は二次加工が施された剥片である。564 や 567 のように全周にわたって、563・566 のように一側面のみ剥離調整が施されたものなどがある。



第 122 図 遺構外出土遺物実測図 8

568～578の11点は石核を图示している。

568はB2グリッドから出土した安山岩製のもので、周縁部から求心状に幅広剥片を剥出している。569はH3グリッドから出土した黒曜石製のもので、礫面の残る上面を調整剥離後打面にして、小剥片を剥出している。この2点は6a層上より出土したものである。570はD3グリッドから出土しており、頁岩製で上面を除く周縁部より不定形剥片を剥出している。571はB2グリッドの5層下より出土している。頁岩製で、周縁部からの打撃により不定形剥片を剥出している。上面から背部に礫面を大きく残している。380gを測る大形のものである。572はE3グリッドの5層下から出土したものである。緑色チャートを石材とし、少なくとも3箇所の打面から幅広剥片を剥出している。上面は礫面を大きく残す。これも392gを測る大形のものである。570～572は5層ないし5層下より出土しており、剥離された面が他の石核と比較して風化している箇所をもつものもある。

上記5点の石核に関しては出土した層と同じ層位において縄文期の土器細片も確認されているが、調査6区で出土した石核の中でも、やや下層において出土したものである。三稜尖頭器の層位錯誤の例もあることから、536～538を含めてこれらも旧石器時代のものである可能性もあるが、報告者の力量、資料観察不足で判断には至らなかった。

573・574・576は黒曜石製のものである。573は5層中から出土したもので、4箇所以上の打面から小形の幅広剥片を剥出している。574は3箇所以上の打面から小形の幅広剥片を剥出している。5層中から出土している。575は5層中から出土した輝緑凝灰岩製のもので、少なくとも2箇所の打面より不定形剥片を剥出している。全体的に節理が多く、目的剥片は多く得られていないと思われる。576は4層中から出土したもので、少なくとも4箇所の打面から小形の幅広剥片を剥出している。577は安山岩製で、5箇所より不定形剥片を剥出している。578は頁岩製のもので、5面の打点より不定形剥片を剥出する。

579～587の9点は石斧を图示している。579・580は撥形を呈し、それぞれ緑色片岩、安山岩を石材とする。581は分銅形を呈し、片側のみ挿入し、基部は膨らまない。刃部、基部ともに端部を欠損する。582は蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部のみ残存である。刃部の稜は湾曲し水平ではない。583は砂岩製のもので、撥形を呈すと考えられる。584も撥形を呈するが、やや小ぶりである。585は欠損した磨製石斧を再加工したものである。刃部側の両側面に再調整のための剥離が施されている。刃部に使用痕と思われる小剥離が観察できる。586は蛇紋岩製の小形のもので、刃部を大きく欠損する。全体的に丁寧で、基部の端部まで研磨調整が施されている。587は扁平片刃石斧の破片と思われる。基部と片側縁を欠損している。粘板岩製で風化が激しいが、全体的に丁寧な研磨が施されていたようである。

588は欠損が著しいが、安山岩製の石庭丁の刃部片と考えられる。

589は粘板岩を石材とし、両面ともに研磨が施されている。489と同様、近代文具の石板の一部と考えられる。

590は使用面を5面もつ天草砥石である。591・592は磨・敲石で、それぞれ側面、中央部に敲打痕が観察できる。

593は黒色の硬質石材を加工研磨した碁石と考えられる。表裏、全側面において研磨が施されている。長さ2.4cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ10.2gを測る。594は滑石製の石器片で、石錐の耳の一部と考えられる。

鉄器は3点图示する。595の刀子は、残存する長さ6.85cm、幅1.70cm、厚さ0.35cmを測る。刃部、基部を欠損する。断面は三角形を呈する。596は断面が三角形を呈しているが、欠損が激しく全体の形状、器種は不明である。刀子片とも考えられる。597は長さ6.25cm、幅1.30cm、厚さ0.55cmを測る棒状鉄器である。断面は四角形を呈している。

【引用・参考文献】

- 麻生優・加藤晋平・藤本強編 『日本の旧石器文化3 遺跡と遺物(下)』
- 麻生優・加藤晋平・藤本強編 『日本の旧石器文化5 旧石器文化の研究法』
- 高谷和生・江本直編 1983 『曲野遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第61集 熊本県教育委員会
- 松本健郎・野田拓治ほか編 1983 『上の原遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第58集 熊本県教育委員会
- 江本直編 1986 『熊本県旧石器時代調査報告書』熊本県文化財調査報告第81集 熊本県教育委員会
- 宮坂孝宏編 1994 『白鳥平B遺跡』熊本県文化財調査報告第142集 熊本県教育委員会
- 古森政次編 1999 『潮山・クノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第179集 熊本県教育委員会
- 稲葉一文・橋口剛士ほか編 2010 『瀬田池ノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第252集 熊本県教育委員会
- 小林達夫・小川忠博 1989 『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』
- 小林達夫・小川忠博 1989 『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』
- 渡辺誠 1991 『組織痕土器研究の諸問題』『交流の考古学』三島格会長古稀記念号
- 緒方勉・高木正文編 1975 『久保遺跡—観音堂・獅子遺跡—』熊本県文化財調査報告第18集
熊本県教育委員会
- 隈昭志ほか編 1980 『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告第47集 熊本県教育委員会
- 野田恒親・濱田彰久編 1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第184集 熊本県教育委員会
- 野田恒親・濱田彰久編 1999 『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告第175集 熊本県教育委員会
- 出合宏光 2000 『九州南部における平安時代の土器・陶磁器』『中近世土器の基礎研究』XV
日本中世土器研究会
- 美濃口雅朗 1997 『榊番城窯跡の中世須恵器(1)』『肥後考古第10号』
- 美濃口雅朗 2007 『榊番城(熊本県)』『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年 補遺編』
- 大宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編—』
- 加藤唐九郎編 『原色陶器大辞典』
- 矢部良明ほか編 『角川 日本陶磁大辞典』
- 荒尾市 2012 『荒尾市史 通史編』
- 益城町 1990 『益城町史 通史編』
- 益城町 1990 『益城町史 資料・民俗編』
- 文化庁編 2010 『発掘調査のてびき』
- 水上公誠ほか編 2013 『塔平遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第285集 熊本県教育委員会

第2表 塔平遺跡発掘調査表

4-5-5(3)遺構

遺構()は遺構名、掘出時期、年代不明、年代不明、発掘中の段階に示す。

発掘層	層番号	種別	科 目	西土記号			法量(m ²)			積 算			備 考	
				区	種別	番号	面積(平方)	容積(立方)	重量(kg)	外周	内周	容積		
第1区画	1	西土記号	溝跡	3	5K	32	-	(5.3)	-	-	-	片支	瓦	遺
第1区画	2	西土記号	溝跡	5	5K	32	-	(14.0)	(3.6)	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	3	西土記号	溝跡	5	5K	32	10.0	0.1	0.2	0.2	ナリ	瓦	瓦	瓦
第1区画	4	西土記号	溝跡	5	5K	32	10.0	0.1	0.2	0.2	ナリ	瓦	瓦	瓦
第1区画	5	西土記号	溝跡	5	5K	33	10.0	0.1	0.2	0.2	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	6	西土記号	溝跡	4	5I	34	26.4	3.2	647.0	安山	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	7	西土記号	溝跡	4	5I	25	20.6	-	(1.0)	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	8	西土記号	溝跡	4	5I	25	20.6	-	(5.4)	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	9	西土記号	溝跡	5	5I	25	20.6	-	(14.3)	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	10	西土記号	溝跡	6	5I	25	22.0	-	(10.5)	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	11	西土記号	溝跡	4	5I	35	10.4	3.7	137.40	安山	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	12	西土記号	溝跡	4	5I	25	11.2	3.8	113.00	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	13	西土記号	溝跡	4	5I	35	9.3	0.9	73	107.00	安山	瓦	瓦	瓦
第1区画	14	西土記号	溝跡	5	5I	25	9.4	2.7	4.5	291.0	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	15	西土記号	溝跡	5	5I	31	22.1	-	(4.2)	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	16	西土記号	溝跡	4	5I	20	7.0	0.8	6.4	4.3	377.8	瓦	瓦	瓦
第1区画	17	西土記号	溝跡	4	5I	42	1.7	1.6	0.4	1.00	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	18	西土記号	溝跡	4	5I	42	1.7	0.6	1.7	2.42	安山	瓦	瓦	瓦
第1区画	19	西土記号	溝跡	4	5I	42	12.0	3.2	2.1	130.00	安山	瓦	瓦	瓦
第1区画	20	西土記号	溝跡	4	5I	42	13.8	16.2	2.9	400.00	安山	瓦	瓦	瓦
第1区画	21	西土記号	溝跡	4	5I	32	3.1	1.1	3.0	0.00	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	22	西土記号	溝跡	4	5I	32	10.5	5.6	1.3	124.20	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	23	西土記号	溝跡	4	5I	30	7.9	4.2	4.1	100.0	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	24	西土記号	溝跡	4	5I	34	-	-	(0.3)	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	25	西土記号	溝跡	4	5I	34	5.5	3.3	3.4	0.00	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	26	西土記号	溝跡	4	5I	34	9.9	5.1	1.5	94.0	安山	瓦	瓦	瓦
第1区画	27	西土記号	溝跡	4	5I	34	5.5	8.2	5.3	216.0	瓦	瓦	瓦	瓦
第1区画	28	西土記号	溝跡	4	5I	40	10.0	4.3	0.9	62.00	溝跡	瓦	瓦	瓦

邦文題名	番号	種別	品目	式工形態		労務(人)			機械(台)	燃料(トン)	内積	外積	単位
				区	種別	製作	内装(棟)	建築(棟)					
第1区画 29	石橋	打掛石	4	5	41	5.9	5.9	—	0.79	—	—	—	—
第2区画 30	竣工土壁	海浜	5	5	44	—	—	0.9	—	—	—	—	取壊
第2区画 31	竣工土壁	海浜	5	5	44	—	—	126.0	13.6	—	—	—	比高調整
第2区画 32	竣工土壁	海浜	4	5	44	0.4	—	0.4	—	—	—	—	比高調整
第4区画 33	石橋	海浜	4	5	44	2.2	2.9	7.9	12.9	—	—	—	比高調整
第4区画 34	石橋	海浜	4	5	44	10.1	0.2	2.3	335.0	—	—	—	取壊
第4区画 35	石橋	海浜	4	5	44	8.5	7.6	4.9	399.0	—	—	—	取壊
第4区画 36	竣工土壁	海浜	4	5	45	—	—	—	16.3	—	—	—	比高調整
第4区画 37	竣工土壁	海浜	4	5	45	—	—	—	13.3	—	—	—	比高調整
第4区画 38	竣工土壁	海浜	4	5	45	—	—	119.2	12.7	—	—	—	比高調整
第4区画 39	竣工土壁	海浜	4	5	45	—	—	118.0	6.8	—	—	—	比高調整
第4区画 40	石橋	海浜	4	5	45	4.5	2.3	0.9	5.5	—	—	—	比高調整
第4区画 41	竣工土壁	海浜	4	5	47	—	—	—	0.7	—	—	—	取壊
第4区画 42	竣工土壁	海浜	4	5	47	—	—	—	19.5	—	—	—	比高調整
第4区画 43	石橋	海浜	4	5	47	2.8	1.6	0.7	2.6	—	—	—	比高調整
第4区画 44	竣工土壁	海浜	4	5	47	27	—	—	17.5	—	—	—	比高調整
第4区画 45	竣工土壁	海浜	4	5	47	16.6	—	—	6.0	—	—	—	比高調整
第4区画 46	竣工土壁	海浜	4	5	47	10.6	—	—	17.3	—	—	—	比高調整
第4区画 47	竣工土壁	海浜	4	5	47	10.1	—	—	17.1	—	—	—	比高調整
第4区画 48	石橋	海浜	4	5	47	10.3	0.6	1.7	93.2	—	—	—	取壊
第4区画 49	石橋	海浜	4	5	47	2.7	3.4	0.9	4.0	—	—	—	取壊
第4区画 50	石橋	海浜	4	5	47	2.7	3.2	0.3	0.5	—	—	—	取壊
第4区画 51	竣工土壁	海浜	4	5	47	—	—	—	10.6	—	—	—	比高調整
第4区画 52	竣工土壁	海浜	4	5	47	20.8	—	—	10.4	—	—	—	比高調整
第4区画 53	海浜土壁	海浜	4	5	47	11.6	—	—	17.1	—	—	—	比高調整
第4区画 54	海浜土壁	海浜	4	5	47	—	—	—	6.1	—	—	—	取壊
第4区画 55	竣工土壁	海浜	4	5	47	29.1	—	—	6.6	—	—	—	比高調整
第4区画 56	石橋	海浜	4	5	47	3.2	2.3	1.1	7.0	—	—	—	取壊
第4区画 57	海浜土壁	海浜	4	5	47	—	—	—	12.2	—	—	—	比高調整

押印番号	番号	種別	高橋	出上処理		請求元		請求 (延日)	国庫		区庫		備考
				区	特別	番号	区印番号		区印番号	区印番号	区印番号	区印番号	
第4回 130	130	出上区庫	庫	4	5	17	0760	-	044	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 127	127	出上区庫	庫	4	5	12	0420	-	0220	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 124	124	出上区庫	庫	4	5	12	0420	-	0180	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 123	123	出上区庫	庫	4	5	12	0220	-	0260	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 121	121	出上区庫	庫	4	5	12	0237	061	0233	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 120	120	出上区庫	庫	4	5	12	0720	0218	0218	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 118	118	出上区庫	庫	4	5	12	-	019	0213	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 117	117	出上区庫	庫	4	5	12	0260	063	009	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 116	116	出上区庫	庫	4	5	12	217	44	176	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 115	115	出上区庫	庫	4	5	12	0760	-	033	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 110	110	出上区庫	庫	4	5	17	0180	-	073	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 107	107	出上区庫	出付体	4	5	12	0140	-	000	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 104	104	出上区庫	出付体	4	5	12	0133	-	003	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 103	103	出上区庫	出付体	4	5	12	-	018	003	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 101	101	出上区庫	出付体	4	5	12	-	010	053	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 100	100	出上区庫	庫	4	5	12	0260	02	0560	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 99	99	出上区庫	庫	4	5	12	0180	-	040	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 107	107	出上区庫	庫	4	5	12	-	07	0570	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 106	106	出上区庫	庫	4	5	12	0160	-	000	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 105	105	出上区庫	庫	4	5	12	0113	0210	0113	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 100	100	出上区庫	庫	4	5	12	-	01	0360	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 107	107	出上区庫	庫	4	5	12	0620	-	033	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 102	102	出上区庫	庫	4	5	12	142	-	040	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 101	101	出上区庫	庫	4	5	12	038	-	040	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第4回 100	100	出上区庫	庫	4	5	12	0120	-	0120	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第50回 145	145	出上区庫	庫	4	5	12	0920	-	0760	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号
第50回 146	146	出上区庫	庫	4	5	12	0290	010	0290	区印番号	出上区庫	区印番号	区印番号

研究区画番号	番号	性別	年齢	職業	生計世帯		世帯収入(万円)			居住(市町村)	職業	世帯	世帯	世帯
					区	種別	世帯収入	世帯収入	世帯収入					
第1区画	147	男性	4	51	無職	1	156.53		無職	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第2区画	148	女性	4	32	専業主婦	1	155.53		専業主婦	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第3区画	149	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第4区画	150	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第5区画	151	男性	4	31	無職	1	166.53		無職	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第6区画	152	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第7区画	153	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第8区画	154	男性	4	31	無職	1	166.53		無職	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第9区画	155	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第10区画	156	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第11区画	157	男性	4	31	無職	1	166.53		無職	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第12区画	158	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第13区画	159	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第14区画	160	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第15区画	161	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第16区画	162	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第17区画	163	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第18区画	164	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第19区画	165	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第20区画	166	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第21区画	167	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第22区画	168	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第23区画	169	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第24区画	170	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第25区画	171	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第26区画	172	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第27区画	173	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品
第28区画	174	男性	4	51	専業主夫	1	166.53		専業主夫	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品	外国産品

社名	番号	種別	種名	樹高(m)		直径(cm)		樹種	樹齢(年)	位置	生育	備考
				幹高	全高	胸径	根径					
東武東上線	175	石積	樹幹	4	9	14	2.0	1.3	0.5	0.71	崩落区	
東武東上線	176	石積	樹幹	4	9	23	1.7	2.6	0.7	1.86	崩落区	
東武東上線	177	地上土留	葉	4	9	4	22.8		(7)		根腐死	比叢(遺骨)
東武東上線	178	地上土留	葉	4	9	4	21.5		(21.4)		根腐死	比叢(遺骨)
東武東上線	179	地上土留	葉	4	9	4	22.0		(13.0)		根腐死	比叢(遺骨)
東武東上線	180	地上土留	葉	4	9	4	22.0		(9.2)		根腐死	比叢(遺骨)
東武東上線	181	地上土留	葉	4	9	4	(13.6)		(7.8)		根腐死	比叢(遺骨)
東武東上線	182	石積	樹幹	4	9	4	6.2	7.3	7.5	11.6		
東武東上線	183	石積	樹幹	4	9	4	9.0	7.0	3.9	4.9		
東武東上線	184	地上土留	葉	4-5	9	11	(14.7)		(7.9)			比叢(遺骨)
東武東上線	185	地上土留	葉	4-5	9	37		9.6	38.0			根腐死
東武東上線	186	地上土留	葉	4-5	9	39		12.0	79.0			根腐死
東武東上線	187	地上土留	葉	4-5	9	39		10.2	102.0			根腐死
東武東上線	188	地上土留	樹幹	4-5	9	37	(14.2)		(8.0)			根腐死
東武東上線	189	地上土留	葉	4-5	9	37		5.5	38.3			根腐死
東武東上線	190	地上土留	葉	4-5	9	39	1.0		(12.4)			根腐死
東武東上線	191	地上土留	葉	4-5	9	37			(12.9)			根腐死
東武東上線	192	石積	樹幹	4-5	9	39	7.7	3.8	3.4	62.2		根腐死
東武東上線	193	石積	樹幹	4-5	9	37	2.0	9.3	6.5	96.0		根腐死
東武東上線	194	石積	樹幹	4-5	9	37	3.3	6.1	6.2	98.2		根腐死
東武東上線	195	地上土留	葉	3-4	9	63		8.4	(4.2)			根腐死
東武東上線	196	地上土留	葉	3-4	9	63		12.2	56.0			根腐死
東武東上線	197	地上土留	葉	3-4	9	63		11.7	56.0			根腐死
東武東上線	198	地上土留	葉	3-4	9	63			(1.0)			根腐死
東武東上線	199	地上土留	葉	3-4	9	63			(2.6)			根腐死
東武東上線	200	地上土留	葉	3-4	9	63	9.7		(17.7)			根腐死
東武東上線	201	地上土留	葉	3-4	9	63			(16.0)			根腐死
東武東上線	202	地上土留	葉	3-4	9	63	14.0		(24.2)			根腐死
東武東上線	203	地上土留	葉	3-4	9	63		4.6	(2.3)			根腐死
東武東上線	204	地上土留	樹幹	3-4	9	63			(3.8)			根腐死

補助番号	科目	種別	品目	品上取組		削減率(%)			削減額(千円)		削減率(%)	削減額(千円)	削減率(%)	削減額(千円)	削減率(%)	削減額(千円)	
				区	特別	品上	品上	品上	品上	品上							品上
第55回	205	労務士料	労務士料	3-4	5	63	7.2	45.0	員	員	員	員	員	員	員	員	員
第56回	206	労務士料	労務士料	3-4	5	63	32.0	20.3	員	員	員	員	員	員	員	員	員
第57回	207	労務士料	労務士料	3-4	5	63	2.2	0.3	員	員	員	員	員	員	員	員	員
第58回	208	労務士料	労務士料	3-4	5	63	9.0	7.6	61	443.4	員	員	員	員	員	員	員
第59回	209	労務士料	労務士料	3-4	5	63	11.8	8.9	5.6	654.0	員	員	員	員	員	員	員
第60回	210	労務士料	労務士料	3-4	5	63	18.3	16.6	11.9	339.0	員	員	員	員	員	員	員
第61回	211	労務士料	労務士料	3-4	5	63	26.8	36.3	5.3	366.0	員	員	員	員	員	員	員
第62回	212	労務士料	労務士料	3-4	5	63	37.0	45.5	14.5	2070.0	員	員	員	員	員	員	員
第63回	213	労務士料	労務士料	3	5	65	117.0	-	123.3	員	員	員	員	員	員	員	員
第64回	214	労務士料	労務士料	3	5	20	32.0	-	104.0	員	員	員	員	員	員	員	員
第65回	215	労務士料	労務士料	3	5	65	-	33.0	65.1	員	員	員	員	員	員	員	員
第66回	216	労務士料	労務士料	3	5	65	-	17.4	113.7	員	員	員	員	員	員	員	員
第67回	217	労務士料	労務士料	3	5	65	132.6	3.2	8.9	員	員	員	員	員	員	員	員
第68回	218	労務士料	労務士料	3	5	65	139.6	-	9.2	員	員	員	員	員	員	員	員
第69回	219	労務士料	労務士料	3	5	65	15.6	-	13.1	員	員	員	員	員	員	員	員
第70回	220	労務士料	労務士料	3	5	65	-	-	13.1	員	員	員	員	員	員	員	員
第71回	221	労務士料	労務士料	3	5	65	-	66.2	77.0	員	員	員	員	員	員	員	員
第72回	222	労務士料	労務士料	3	5	65	-	61.5	145.3	員	員	員	員	員	員	員	員
第73回	223	労務士料	労務士料	3	5	65	23.7	-	104.2	員	員	員	員	員	員	員	員
第74回	224	労務士料	労務士料	3	5	65	126.0	-	144.0	員	員	員	員	員	員	員	員
第75回	225	労務士料	労務士料	3	5	65	17.4	0.4	6.49	員	員	員	員	員	員	員	員
第76回	226	労務士料	労務士料	3	5	65	88.28	1.2	34.39	員	員	員	員	員	員	員	員
第77回	227	労務士料	労務士料	3	5	65	12.4	5.5	25	171.80	員	員	員	員	員	員	員
第78回	228	労務士料	労務士料	3	5	65	17.4	4.3	3.5	403.3	員	員	員	員	員	員	員
第79回	229	労務士料	労務士料	3	5	65	9.8	6.0	40.0	員	員	員	員	員	員	員	員
第80回	230	労務士料	労務士料	3	5	65	7.8	6.9	3.9	274.8	員	員	員	員	員	員	員
第81回	231	労務士料	労務士料	3	5	66	11.5	8.3	5.0	705.3	員	員	員	員	員	員	員
第82回	232	労務士料	労務士料	3	5	71	133.0	9.8	28.8	員	員	員	員	員	員	員	員
第83回	233	労務士料	労務士料	3	5	71	133.0	9.8	28.8	員	員	員	員	員	員	員	員

種別(番号)	母 語	科 目	使用の品			原価 (円)			積立 (円)		備 考 (注)	品 類			備 考	
			区	種別	数量	平均単価(円)	合計(円)	区	種別	数量		区	種別	数量		
第19品 24	物産品	紙	5	5	7	124.3	-	280.5	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第20品 25	物産品	紙	5	5	7	10.5	13.4	42	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第21品 26	物産品	紙	5	5	7	200.0	-	111.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第22品 27	物産品	紙	5	5	7	0.2	-	5.9	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第23品 28	物産品	紙	5	5	7	1.5	-	10.2	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第24品 29	物産品	紙	5	5	7	2.8	2.1	12.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第25品 29	物産品	紙	5	5	7	10.6	-	9.3	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第26品 23	物産品	紙	5	5	65.7	28.6	-	20.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第27品 24	物産品	紙	5	5	7	-	-	136.9	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第28品 24	物産品	紙	5	5	7	1.8	1.4	0.3	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第29品 24	物産品	紙	5	5	7	11.7	5.8	4.4	16.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第30品 25	物産品	紙	5	5	7	2.8	2.2	0.4	2.5	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第31品 26	物産品	紙	5	5	7	10.3	-	116.9	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第32品 27	物産品	紙	5	5	72.3	-	419.8	12.1	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第33品 29	物産品	紙	5	5	7	13.4	-	118.7	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第34品 29	物産品	紙	5	5	7	7.4	-	36.4	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第35品 29	物産品	紙	5	5	72.3	126.3	-	30.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第36品 30	物産品	紙	5	5	7	-	-	19.6	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第37品 25	物産品	紙	5	5	7	13.6	6.3	3.2	34.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第38品 25	物産品	紙	5	5	7	8.9	3.7	3.8	20.6	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第39品 29	物産品	紙	5	5	7	17.4	-	5.4	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第40品 29	物産品	紙	5	5	72.3	14.3	-	7.9	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第41品 29	物産品	紙	5	5	7	6.45	0.4	6.25	0.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第42品 29	物産品	紙	5	5	7	1.9	6.1	1.9	103.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第43品 29	物産品	紙	5	5	7	16.0	3.8	3.3	24.9	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第44品 29	物産品	紙	5	5	7	8.6	5.0	4.0	23.3	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第45品 29	物産品	紙	5	5	7	8.3	7.4	4.4	135.0	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品
第46品 29	物産品	紙	5	5	24	118.3	-	127.9	紙	物産品	5	物産品	5	紙	物産品	
第47品 30	物産品	紙	4	5	1	137.6	-	113.6	紙	物産品	4	物産品	4	紙	物産品	

施設番号	施設名	種別	生土地区画			遊園地(㎡)			植栽 (本数)	遊歩道	小池	水質	備考
			区画数	面積(㎡)	割合(%)	区画数	面積(㎡)	割合(%)					
第1号区画	263	公園	4	50	3	0.65	0.35	0.30				高層ビルビルド	
第2号区画	264	公園	4	50	1	1.6	0.3	0.3	ネット				
第3号区画	265	公園	4	50	4	-	0.80	0.40				公園内遊歩道	
第4号区画	266	公園	4	50	4	-	-	0.33				公園内遊歩道	
第5号区画	267	公園	4	50	4	1.7	1.5	0.2	高層ビル				
第6号区画	268	公園	4	50	4	5.1	2.5	1.7	0.2%				
第7号区画	269	公園	4	50	2	3.7	3.3	1.7	33.6%				
第8号区画	270	公園	4	50	2	10.5	4.9	1.6	99.2%				
第9号区画	271	公園	5	50	3	2.4	3.6	0.3	0.64	9.9.1.1			
第10号区画	272	公園	5	50	3	1.3	1.9	0.2	0.19	高層ビル			
第11号区画	273	公園	5	50	20	-	0.2	0.21				高層ビル	
第12号区画	274	公園	5	50	22	5.1	2.9	2.6				高層ビル	
第13号区画	275	公園	5	50	22	-	6.5	0.43	高層ビル			高層ビル	
第14号区画	276	公園	5	50	22	-	0.30	0.40				高層ビル	
第15号区画	277	公園	5	50	44	-	-	0.40				高層ビル	
第16号区画	278	公園	5	50	24	-	0.30	0.20				高層ビル	
第17号区画	279	公園	5	50	24	-	4.4	0.5				高層ビル	
第18号区画	280	公園	5	50	40	0.60	0.6	1.1				高層ビル	
第19号区画	281	公園	5	50	1	-	-	0.20				高層ビル	
第20号区画	282	公園	5	50	-	-	2.5	0.80				高層ビル	
第21号区画	283	公園	5	50	-	-	-	0.20				高層ビル	
第22号区画	284	公園	4	50	-	3.2	2.3	3.2	20.31			高層ビル	
第23号区画	285	公園	4	50	-	2.6	4.5	3.0	34.32			高層ビル	
第24号区画	286	公園	4	50	-	7.0	0.9	1.1	30.28			高層ビル	
第25号区画	287	公園	5	50	-	11.7	0.9	1.4	80.70			高層ビル	
第26号区画	288	公園	4	50	-	13.0	3.9	3.8	144.00			高層ビル	
第27号区画	289	公園	4	50	-	8.0	7.4	9.2	230.00			高層ビル	
第28号区画	290	公園	5	50	26	-	0.30	0.30				高層ビル	
第29号区画	291	公園	4	50	90	-	-	0.55				高層ビル	
第30号区画	292	公園	4	50	7	-	0.60	0.40				高層ビル	
第31号区画	293	公園	4	50	174	-	-	0.80				高層ビル	

林区番号	林種	林種別	出土地域		樹高 (mm)		傾斜 (度)	傾斜 (度)	傾斜 (度)	風 向		心 積		備 考
			区	林種別	区 (北緯)	区 (東経)				区 (北緯)	区 (東経)	内陸風	外風	
第42区	294	雑木林	4	PI	67	-	-	53	良	雑木林	西	西	西	東北
第42区	295	杉	4	PI	175	-	-	30	良	-	西	西	西	東北
第42区	296	杉	4	PI	56	2.3	3.9	0.4	1.29	ヤナート	-	-	-	-
第42区	297	杉	4	PI	116	3.4	3.9	0.6	3.51	風害区	-	-	-	-
第42区	298	杉	4	SK	-	3.3	2.9	0.2	3.34	雑木林	-	-	-	-
第42区	299	杉	4	PI	100	9.2	3.2	1.5	46.49	雑木林	-	-	-	-
第42区	300	杉	4	PI	229	8.6	6.7	1.1	66.84	風害区	-	-	-	-
第42区	301	杉	4	PI	200	7.3	2.5	2.5	33.87	風害区	-	-	-	-

4-5 区番号

注：() は北緯、東経、中緯度、南緯の順で示す。

林区番号	林種	林種別	出土地域		樹高 (mm)		傾斜 (度)	傾斜 (度)	傾斜 (度)	風 向		心 積		備 考
			区	林種別	区 (北緯)	区 (東経)				区 (北緯)	区 (東経)	内陸風	外風	
第43区	302	雑木林	4	R	32	-	-	64	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	303	雑木林	4	R	31	-	-	120	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	304	雑木林	4	Q	31	-	-	53	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	305	雑木林	4	Q	31	-	-	62	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	306	雑木林	4	Q	31	-	-	53	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	307	雑木林	4	R	31	-	-	61	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	308	雑木林	4	R	33	-	-	63	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	309	雑木林	4	R	32	-	-	85	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	310	雑木林	4	Q	31	-	-	100	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	311	雑木林	4	Q	30	-	-	115	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	312	雑木林	4	J	32	-	-	110	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	313	雑木林	4	Q	31	-	-	104	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	314	雑木林	4	Q	31	-	-	123	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	315	雑木林	4	Q	30	-	-	121	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	316	雑木林	4	Q	31	-	-	125	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	317	雑木林	4	Q	31	-	-	125	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	318	雑木林	4	Q	31	-	-	125	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	319	雑木林	4	Q	31	-	-	131	良	雑木林	西	西	西	東北
第43区	320	雑木林	4	R	31	-	-	128	良	雑木林	西	西	西	東北

観音堂名	宗派	名称	12~17世紀		鎌倉(1185)~室町(1568)		構造(石造)	位置		経緯		備考	
			区	番号	位置(宗派)	面積(坪)		経度(東経)	緯度(北緯)				
第84回 321	純土宗	法林	4	L	14	-	15(8)	東	2号塔	外庭園	外庭園	石造	
第84回 322	純土宗	法林	4	Q	11	-	15(8)	東	1号 工堀ノ子, 2号塔	1号 工堀ノ子, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 323	純土宗	法林	4	R	11	-	17(8)	東	工堀ノ子, 2号塔, 比叡, 法林	比叡, 法林, 2号塔, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 324	純土宗	法林	5	E	4	-	15(8)	東	1号塔, 2号塔, 1号塔	1号塔, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 325	純土宗	法林	4	R	11	116(3)	-	17(8)	東, 比叡, 法林, 2号塔	東, 比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 326	純土宗	法林	4	P	32	-	13(3)	東	1号塔, 2号塔	1号塔, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 327	純土宗	法林	4	P	32	-	13(3)	東	2号塔, 2号塔, 2号塔	2号塔, 2号塔, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 328	純土宗	法林	4	N	42(13)	115(4)	-	15(8)	東, 比叡, 法林, 2号塔	東, 比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 329	純土宗	法林	4	Q	30	119(4)	-	15(8)	東	2号塔, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 330	純土宗	法林	4	-	13	116(4)	-	11(8)	東, 比叡, 法林, 2号塔	東, 比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 331	純土宗	法林	4	Y	12	-	17(4)	東	工堀ノ子, 比叡, 法林, 2号塔	工堀ノ子, 比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 332	純土宗	法林	4	J	12	-	11(8)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 333	純土宗	法林	4	N	11	-	11(8)	東	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 334	純土宗	法林	4	N	11(12)	114(8)	-	15(8)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 335	土御坊	法	4	P	12	128(8)	-	17(4)	西, 比叡, 法林	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 336	土御坊	法	4	M	11	127(4)	-	16(8)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 337	土御坊	法	4	R	32	124(8)	-	17(1)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 338	土御坊	法	4	R	32	123(8)	15(2)	4(8)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 339	土御坊	法	4	5	12	113(8)	10(8)	3(7)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 340	土御坊	法	4	Q	11	-	15(4)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 341	土御坊	法	4	N	12	-	17(8)	12(7)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 342	土御坊	法	4	R	32	-	15(8)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	
第84回 343	土御坊	法	4	N	11	-	11(8)	11(7)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 344	土御坊	法	4	M	11	-	15(8)	15(3)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 345	土御坊	法	4	Q	11	-	12(4)	12(4)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 346	土御坊	法	4	東上	-	11(12)	11(17)	2(3)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 347	土御坊	法	4	西上	-	-	-	16(7)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 348	土御坊	法	4	R	12	-	17(1)	17(1)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林
第84回 349	土御坊	法	5	西中	-	-	4(8)	13(3)	東	比叡, 法林, 2号塔	比叡, 法林	比叡, 法林	比叡, 法林

第4章 調査の結果

種類番号	種別	名称	区	基本属性		測量(7/9)		測量(7/9)		用途	備考
				区	種別	形状	面積(平方メートル)	用途(種別)	面積(平方メートル)		
第6区画 350	不図	色付不図	4	R	H	19	23	0.8	298	赤シート	
第6区画 351	芝居	芝居不図	5	L	12	37	20	0.9	422	赤シート	
第6区画 352	芝居	芝居不図	4	L	12	20	21	1.0	383	芝居石	
第6区画 353	芝居	加工済木造芝居	5	N	12	22	25	1	542	芝居石	
第6区画 354	芝居	加工済木造芝居	4	N	12	16	19	0.6	138	芝居石	
第6区画 355	芝居	打撃石	4	R	H	23	18	0.3	105	黒石	
第6区画 356	芝居	打撃石	5	SX	5	25	16	0.5	173	芝居石	
第6区画 357	芝居	打撃石	4	N	12	19	12	0.4	171	黒石	
第6区画 358	芝居	打撃石	4	R	11	26	16	0.4	167	黒石	
第6区画 359	芝居	打撃石	4	N	11	37	23	0.9	428	赤シート	
第6区画 360	芝居	芝居	4	-	-	23	16	0.5	135	黒石	
第6区画 361	芝居	芝居	4	R	10	21	17	0.45	139	黒石	
第6区画 362	芝居	芝居	4	R	11	33	20	0.6	266	赤シート	
第6区画 363	芝居	芝居	5	赤土	-	27	17	0.6	235	赤シート	
第6区画 364	芝居	芝居	4	5	10	12	16	0.4	177	黒石	
第6区画 365	芝居	打撃石	5	赤土	-	21	19	0.4	137	黒石	
第6区画 366	芝居	芝居	4	O	10	16	14	0.4	172	赤シート	
第6区画 367	芝居	芝居	4	1	11	17	13	0.3	149	赤シート	
第6区画 368	芝居	芝居	4	N	12	20	14	0.4	167	赤シート	
第6区画 369	芝居	芝居	5	SX	9	20	18	0.2	139	黒石	
第6区画 370	芝居	芝居	5	赤土	-	14	13	0.2	129	黒石	
第6区画 371	芝居	芝居	5	赤土	-	15	14	0.3	135	黒石	
第6区画 372	芝居	芝居	5	赤土	-	16	13	0.2	134	黒石	
第6区画 373	芝居	芝居	4	R	11	15	15	0.3	141	黒石	
第6区画 374	芝居	芝居	5	赤土	-	14	14	0.3	133	赤シート	
第6区画 375	芝居	芝居	4	1	13	19	14	0.6	164	赤シート	
第6区画 376	芝居	芝居	5	赤土	-	16	12	0.3	142	黒石	
第6区画 377	芝居	芝居	5	赤土	-	19	15	0.3	138	赤シート	
第6区画 378	芝居	芝居	5	赤土	-	18	17	0.3	137	赤シート	
第6区画 379	芝居	芝居	4	O	10	19	14	0.2	138	黒石	
第6区画 380	芝居	芝居	4	Q	11	16	17	0.3	130	黒石	
第6区画 381	芝居	芝居	4	Q	11	31	25	0.3	176	赤シート	
第6区画 382	芝居	芝居	5	-	-	26	18	0.4	181	赤シート	

JIS化学式	物質名	種別	用途	化学組成			濃度(%)		検定(目的)	色 質		備 考
				区	種別	番号	比重(高子)	比重(低子)		検出(高子)	検出(低子)	
第87回 343	石炭	石炭	4	K	13	2.0	1.5	0.4	0.05			チカート
第87回 344	石炭	石炭	4	K	13	2.0	1.5	0.1	0.50			黒曜石
第87回 345	石炭	戸用石炭	5	黒土		2.6	1.8	0.4	1.55			鉄山砂
第87回 346	石炭	石炭	5	黒土		2.1	1.7	0.4	1.80			黒曜石
第87回 347	石炭	石炭	5	SX	6	2.5	1.5	0.3	0.80			黒曜石
第87回 348	石炭	石炭	4	P	12	2.6	1.5	0.3	0.65			鉄山砂
第87回 349	石炭	石炭	5	黒土		2.3	1.5	0.3	0.59			黒曜石
第87回 350	石炭	石炭	5	黒土		2.3	1.5	0.3	0.27			チカート
第87回 351	石炭	戸用石炭	5	黒土		2.0	1.5	0.3	0.39			チカート
第87回 352	石炭	石炭	4	N	15	2.4	1.3	0.4	0.80			戸用石炭
第87回 353	石炭	戸用石炭	5	黒土		1.0	1.1	0.2	0.15			黒曜石
第87回 354	石炭	石炭	4	N	11	3.2	2.5	0.45	3.95			チカート
第87回 355	石炭	石炭	5	黒土		2.3	1.5	0.4	0.70			チカート
第87回 356	石炭	石炭	4	M	12	2.0	1.7	0.5	0.86			チカート
第87回 357	石炭	石炭	4	S	46	2.1	1.8	0.4	1.20			チカート
第87回 358	石炭	石炭	4	M	12	2.8	1.7	0.7	2.00			鉄山砂
第87回 359	石炭	石炭	4	J		2.2	1.8	0.5	1.50			鉄山砂
第87回 400	石炭	石炭	4	—	—	3.5	1.8	0.5	2.61			鉄山砂
第87回 401	石炭	石炭	4	J	14	2.3	1.7	0.6	2.28			チカート
第87回 402	石炭	黒石炭	4	J	14	1.7	1.3	0.4	0.25			黒曜石
第87回 403	石炭	二酸化二矽	4	Q	11	2.0	1.3	0.5	1.81			黒曜石
第87回 404	石炭	石炭	4	N	11	3.5	2.4	0.7	13.56			鉄山砂
第87回 405	石炭	スクレイパー	4	S	53	3.2	3.1	1.3	16.71			鉄山砂
第87回 406	石炭	スクレイパー	4	R	13	4.1	3.3	0.7	7.81			鉄山砂
第87回 407	石炭	スクレイパー	5	黒土		3.0	5.3	1.6	14.23			黒曜石
第87回 408	石炭	スクレイパー	4	1	13	4.6	4.5	2.3	161.10			鉄山砂
第87回 409	石炭	二酸化二矽	4	—	—	2.5	1.4	1.0	3.18			黒曜石
第87回 410	石炭	二酸化二矽	4	H	12	2.4	2.8	0.6	3.26			黒曜石
第87回 411	石炭	二酸化二矽	4	S	50	2.8	2.5	1.0	3.21			チカート
第87回 412	石炭	二酸化二矽	4	S	50	2.8	2.5	1.0	3.21			黒曜石
第87回 413	石炭	二酸化二矽	4	R	10	2.2	1.9	0.5	1.54			黒曜石
第87回 414	石炭	二酸化二矽	4	H	12	2.0	3.4	0.6	3.11			チカート
第87回 415	石炭	伊勢川砂	4	N	11	4.2	2.6	0.6	2.72			黒曜石

社会番号	番号	種別	種目	基本状況		出席状況		出席率		出席者数	出席率	備考
				性別	学年	出席者数	欠席者数	出席者数	欠席者数			
第01節 416	20	普通	特別支援学級	4	男	29	40	2	14.62	1	14.62	子ノート
第01節 417	小6	特別支援学級	特別支援学級	4	男	12	29	13	0.6	2.67	7.94	
第01節 418	20	普通	特別支援学級	5	男	39	21	37	0.8	3.69	10.83	
第01節 419	20	普通	特別支援学級	4	男	14	4.6	5.5	7.6	33.00	54.21	特別支援学級
第01節 420	20	普通	普通	4	男	13	21	1.8	7.5	5.67	10.83	
第01節 421	20	普通	普通	4	男	10	29	3.6	7.1	11.66	10.83	
第01節 422	20	普通	普通	4	男	11	2.4	1.8	2.9	13.65	10.83	
第01節 423	20	普通	普通	4	男	10	3.5	4.6	2.8	34.81	10.83	
第01節 424	20	普通	普通	4	男	11	4.1	5.2	2.7	69.00	10.83	
第01節 425	20	普通	特別支援学級	4	男	30	8.0	5.6	7.8	111.49	10.83	
第01節 427	20	普通	特別支援学級	4	男	10	10.8	7.1	2.6	29.00	10.83	
第01節 428	20	普通	特別支援学級	4	男	11	17.6	7.8	3.1	21.00	10.83	
第01節 429	20	普通	特別支援学級	4	男	10	11.3	8.1	7.9	169.00	10.83	
第01節 430	20	普通	特別支援学級	4	男	11	10.4	5.0	7.9	177.40	10.83	
第01節 431	20	普通	特別支援学級	4	男	11	1.8	5.3	2.2	156.40	10.83	
第01節 432	20	普通	特別支援学級	4	男	11	10.2	5.0	7.6	69.70	10.83	
第01節 433	20	普通	特別支援学級	4	男	11	14.8	5.2	7.6	141.30	10.83	
第01節 434	20	普通	特別支援学級	4	男	8	9.3	4.7	2.9	124.40	10.83	
第01節 435	20	普通	特別支援学級	4	男	29	9.7	5.7	2.7	144.40	10.83	
第01節 436	20	普通	特別支援学級	4	男	11	14.4	7.0	2.5	281.00	10.83	
第01節 437	20	普通	特別支援学級	4	男	11	11.3	6.1	2.6	186.40	10.83	
第01節 438	20	普通	特別支援学級	5	男女	11	1.3	6.1	2.1	150.20	10.83	
第01節 439	小6	特別支援学級(小6特別)	特別支援学級	5	男女	17	3	6.4	7.4	102.40	10.83	
第01節 440	20	普通	特別支援学級	5	男女	10.3	6.1	3.1	127.10	10.83		
第01節 441	20	普通	特別支援学級	4	男	11	10.5	5.7	3.3	205.00	10.83	
第01節 442	20	普通	特別支援学級	5	男女	11	1.8	7.2	2.5	214.20	10.83	
第01節 443	20	普通	特別支援学級	5	男女	6.2	4.3	0.5	18.00	10.83		
第01節 444	20	普通	特別支援学級	5	男女	11	7.6	4.8	0.8	61.20	10.83	
第01節 445	20	普通	特別支援学級	4	男	11	2.0	5.7	0.7	44.37	10.83	
第01節 446	20	普通	普通	5	男女	11	0.8	0.8	0.95			
第01節 447	20	普通	普通	4	男女	11	1.6	0.7	0.5	0.10		
第01節 448	20	普通	普通	4	男女	11	3.2	1.8	0.7	4.5		

小題番号	番号	種別	種名	基本形式			遊具(遊具)			遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)
				区	種別	遊具	遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)					
第101回	489	遊具	女子台	4	-	-	2.7	3.4	3.5					
第101回	490	遊具	女子台	5	-	-	3.6	2	0.3	3.5				女子台の増設 遊具の一部の
第101回	491	遊具	鉄棒 鉄棒付	4	0	3	2.6	2.3	3.2	2.1				
第101回	492	遊具	滑り台	4			2.6	2.3	3.6	3.1				
第101回	493	遊具	遊具付	3	-	-	7.9	4.7	7.4	10.6				

表4-1-1 遊具の種類、設置数、平均年齢、平均の遊具利用時間

小題番号	番号	種別	種名	基本形式			遊具(遊具)			遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)
				区	種別	遊具	遊具(遊具)	遊具(遊具)	遊具(遊具)						
第101回	494	遊具	遊具付	6	5	1	11.8	9.7	4.2	10.7					
第101回	495	遊具	遊具付	6	5	4	4.2	-	2.3	高層型					
第101回	496	遊具	遊具付	6	5	4	5.7	4.3	1.7	38.6					
第101回	497	遊具	遊具付	6	5	3	4.3	3.9	1.0	30.56					
第101回	498	遊具	遊具付	6	5	5	11.3	13.3	5.6	130.65	1.2				
第101回	499	遊具	遊具付	6	5	6	13.2	5.3	2.2	181.20	9.0				
第101回	500	遊具	遊具付	6	5	6	7.4	2.8	1.8	40.02	高層型				
第101回	501	遊具	遊具付	6	5	2	9.8	2.6	3.7	0.5	1.36	高層型			
第101回	502	遊具	遊具付	6	5	3	-	-	13.9	高					
第101回	503	遊具	遊具付	6	5	3	-	0.3	-	0.3					
第101回	504	遊具	遊具付	6	5	4	-	0.6	12.4	高					
第101回	505	遊具	遊具付	6	5	0	-	-	17.6	高					
第101回	506	遊具	遊具付	6	5	1	-	-	16.0	高					
第101回	507	遊具	遊具付	6	5	1	-	-	13.1	高					
第101回	508	遊具	遊具付	6	5	1	-	12.3	12.3	高					
第101回	509	遊具	遊具付	6	5	1	-	14.2	15.5	高					
第101回	510	遊具	遊具付	6	5	1	-	-	19.0	高					
第101回	511	遊具	遊具付	6	5	1	-	14.4	14.0	高					
第101回	512	遊具	遊具付	6	5	1	11.8	4.2	5.6	高					
第101回	513	遊具	遊具付	6	5	1	11.8	-	14.3	高					
第101回	514	遊具	遊具付	6	5	1	11.8	-	14.6	高					
第101回	515	遊具	遊具付	6	5	1	11.2	-	14.9	高					

料番号	番号	種別	名称	基本情報		所属		調査		結果		備考
				種別	番号	品名	数量	品名	数量	品名	数量	
第11-20	476	代紙	紙	50	1	—	45	(47)	紙	—	—	品名
第11-20	477	紙	紙	50	1	—	(63)	(2,8)	紙	—	—	品名
第11-20	478	紙	紙	50	1	5.6	2.8	7.4	29(3)	—	—	品名
第11-20	479	紙	紙	50	1	0.3	3.4	2.9	25(4)	—	—	品名
第11-20	480	紙	紙	50	1	3.8	3.5	2.9	27(9)	—	—	品名
第11-20	481	紙	紙	50	1	11.3	4.2	1.9	98(4)	—	—	品名
第11-20	482	紙	紙	50	1	13.7	6.5	2.1	25(6)	—	—	品名
第11-20	483	紙	紙	50	1	15.6	7.2	7.9	20(1)	—	—	品名
第11-20	484	紙	紙	50	1	4.2	7.5	2.8	12(3)	—	—	品名
第11-20	485	紙	紙	50	1	6.0	6.5	7.4	19(3)	—	—	品名
第11-20	486	紙	紙	50	2	10.0	7.8	2.5	25(2)	—	—	品名
第11-20	487	紙	紙	50	4	—	—	(45)	—	—	—	品名
第11-20	488	紙	紙	50	78	—	(40)	(1,0)	—	—	—	品名
第11-20	489	紙	紙	50	74	4.3	4.4	0.3	8(3)	—	—	品名
第11-20	490	紙	紙	50	96	(7.8)	(9.5)	(3,8)	—	—	—	品名
第11-20	491	紙	紙	50	1.2	—	—	(7,0)	—	—	—	品名
第11-20	492	紙	紙	50	96	—	(3,8)	(1,0)	—	—	—	品名
第11-20	493	紙	紙	50	94	(17.4)	—	(7,7)	—	—	—	品名

注()は括弧内、機械仕上、手組、手組の3段階に分ける。

料番号	番号	種別	名称	基本情報		所属		調査		結果		備考
				種別	番号	品名	数量	品名	数量	品名	数量	
第11-20	494	紙	紙	50	1	—	(3,2)	—	—	—	—	品名
第11-20	495	紙	紙	50	3	—	(6,4)	—	—	—	—	品名
第11-20	496	紙	紙	50	3	—	(3,3)	—	—	—	—	品名
第11-20	497	紙	紙	50	5	—	(3,2)	—	—	—	—	品名
第11-20	498	紙	紙	50	—	—	(2,0)	—	—	—	—	品名
第11-20	499	紙	紙	50	2	—	(3,5)	—	—	—	—	品名
第11-20	500	紙	紙	50	3	(1,3)	—	(3,3)	—	—	—	品名
第11-20	501	紙	紙	50	5	—	(4,0)	—	—	—	—	品名
第11-20	502	紙	紙	50	2	—	(3,8)	—	—	—	—	品名

測号 測点	種別	種別	点二地況			流量 (mm)			流速 (cm/s)	水深 (cm)	水温 (℃)		水深 (cm)	流速 (cm/s)	備考
			区	種別	番号	広径 (mm)	深径 (mm)	深径 (mm)			平均	最大			
第110区 533	区画2号	畑	5	C	4	-	(7.2)	(1.7)							
第110区 534	区画2号	畑	5	区二		(11.0)	3.9	4.8							
第110区 535	区画2号	区画2号	5	K	3	5.1	2.3	3.2	30.32						
第110区 536	区画2号	区画2号	5	L	9	2.7	1.9	0.4	1.15						
第110区 537	区画2号	区画2号	5	6	2	1.3	1.9	1.0	3.17						
第110区 538	区画2号	区画2号	5	B	-	4.6	6.1	1.5	24.10						
第110区 539	区画2号	区画2号	5	区二		2.0	1.2	0.4	0.75						
第110区 540	区画2号	区画2号	5	I	1	2.0	1.6	0.3	0.81						
第110区 541	区画2号	区画2号	5	G	3	2.3	1.5	0.6	1.81						
第110区 542	区画2号	区画2号	5	E	2	2.7	1.5	0.5	1.97						
第110区 543	区画2号	区画2号	5	G	4	3.7	2.9	0.6	3.17						
第110区 544	区画2号	区画2号	5	F	2	2.4	2.1	1.0	2.80						
第110区 545	区画2号	区画2号	5	I	2	1.0	1.9	0.3	0.11						
第110区 546	区画2号	区画2号	5	D	3	1.0	1.3	0.2	0.12						
第110区 547	区画2号	区画2号	5	H	1	1.4	1.0	0.4	0.41						
第110区 548	区画2号	区画2号	5	-	-	1.3	1.3	0.3	0.20						
第110区 549	区画2号	区画2号	5	-	-	1.7	1.2	0.4	0.56						
第110区 550	区画2号	区画2号	5	C	4	2.0	1.9	0.4	0.73						
第110区 551	区画2号	区画2号	5	L	4	2.2	1.9	0.7	1.66						
第110区 552	区画2号	区画2号	5	G	4	1.6	1.5	0.4	0.69						
第110区 553	区画2号	区画2号	5	N	2	2.8	2.0	0.4	1.20						
第110区 554	区画2号	区画2号	5	L	9	1.4	1.6	0.4	1.64						
第110区 555	区画2号	区画2号	5	G	2	1.2	1.1	0.3	0.39						
第110区 556	区画2号	区画2号	5	M	6	1.7	1.3	0.3	0.31						
第110区 557	区画2号	区画2号	5	K	4	1.7	1.2	0.3	0.43						
第110区 558	区画2号	区画2号	5	C	3	2.0	1.4	0.1	1.10						
第110区 559	区画2号	区画2号	5	N	6	3.0	2.1	0.1	2.77						
第110区 560	区画2号	区画2号	5	6	6	2.7	1.9	0.1	2.91						
第110区 561	区画2号	区画2号	5	区二		4.5	2.6	0.0	9.96						
第110区 562	区画2号	区画2号	5	区二		5.6	4.9	1.3	10.54						
第110区 563	区画2号	区画2号	5	F	4	6.2	5.2	2.0	14.31						
第110区 564	区画2号	区画2号	5	-	-	6.2	5.2	2.0	14.31						
第110区 565	区画2号	区画2号	5	I	4.5	3.7	3.8	1.7	13.87						

地号等	番号	地目	用途	地土状況			位置(m)			面積(㎡)	用途(区分)	課税		備考
				区	種別	階層	口幅(北)	口幅(南)	奥行(北)			内積	外積	
第111区	545	宅地	二重土庫付	6	J	4	4.5	6.7	1.9	32.07				
第111区	546	宅地	二重土庫付	6	I	4	5.0	6.4	3.5	60.90	準1高			
第111区	547	宅地	4階付	6	F	7	2.3	3.5	1.1	6.03	準1高			
第111区	548	宅地	2階付	6	B	3	6.6	7.0	1.4	81.60	準1高			
第111区	549	宅地	2階付	6	H	3	1.9	1.5	2.1	5.58	準1高			
第111区	570	宅地	2階付	6	H	2	3.1	2.3	2.0	24.00	準1高			
第111区	571	宅地	2階付	6	B	2	5.5	7.0	1.0	30.00	傾斜地付			
第111区	572	宅地	2階付	6	C	2	0.6	0.3	5.3	29.200	7+ト			
第105区	573	宅地	2階付	6	F	3	1.6	3.4	2.0	7.06	準1高			
第112区	574	宅地	2階付	6	L	9	2.0	2.0	1.9	9.00	準1高			
第105区	575	宅地	2階付	6	I	9	4.4	4.3	3.5	76.63	傾斜地付			
第112区	576	宅地	2階付	6	C	3	1.9	2.9	2.4	12.49	準1高			
第105区	577	宅地	2階付	6	E	4	4.1	6.4	2.7	61.69	準1高			
第112区	579	宅地	2階付付	6	E	4	6.5	5.0	1.1	76.60	傾斜地付			
第112区	580	宅地	1階付	6	D	2	8.4	6.3	2.1	130.00	準1高			
第112区	581	宅地	1階付	6	K	5	13.9	8.4	2.2	276.00	準1高			
第112区	582	宅地	2階付	6	D	2	7.4	7.0	3.2	187.20	2階付			
第112区	583	宅地	1階付	6	E	6	6.6	6.9	1.2	84.52	傾斜			
第112区	584	宅地	2階付	6	北土		8.1	4.4	1.6	77.06	傾斜			
第112区	585	宅地	1階付	6	北土		8.2	4.4	2.0	68.24	傾斜			
第112区	586	宅地	2階付	6	C	7	4.6	2.2	0.9	6.44	傾斜			
第112区	587	宅地	1階付付	6	-	-	3.2	2.3	0.9	0.84	傾斜			
第112区	588	宅地	2階付	6	L	4	2.9	2.2	0.6	5.10	準1高			
第112区	589	宅地	2階付	6	M	6	5.4	5.5	2.2	50.8	傾斜			
第112区	590	宅地	2階付	6	J	4	8.7	4.4	5.0	274.8	傾斜			片側2階付、片側通し道
第112区	591	宅地	2階付	6	D	4	8.7	6.9	5.7	477.9				
第112区	592	宅地	2階付付	6	C	6	2.4	2.2	1.2	10.2				準1高
第112区	594	宅地	2階付	6	L	0	2.3	1.8	1.5	6.8				片側2階付、片側通し道
第112区	595	宅地	1階付	6	C	2	0.9	1.7	0.4	5.0				
第112区	596	宅地	2階付	6	C	8	2.7	1.4	0.5	3.2				
第112区	597	準1高	1階付	6	J	8	6.3	1.2	0.6	9.2				片側2階付

第5章 自然科学分析

塔平遺跡4区・5区から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塔平遺跡4区および5区の発掘調査では、弥生時代後期の住居跡が検出されており、住居内からは建築部材と考えられる炭化材が出土している。

本報告では、当時の木材利用に関する情報を得ることを目的として、炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、弥生時代後期の住居跡(S I 12、S I 65、S I 66、S I 71)から出土した、建築部材と考えられる炭化材4点である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の判断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

区	遺構	時期	層位	整理No.	樹種
4区	S I 12	弥生後期	埋土2層	492	ツブラジイ
5区	S I 65	弥生後期	埋土1層	912	モッコク
5区	S I 66	弥生後期	埋土1層	820	コナラ属アカガシ亜属
5区	S I 71	弥生後期	埋土2層	1281	コナラ属アカガシ亜属

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は広葉樹3分類群(コナラ属アカガシ亜属・ツブラジイ・モッコク)に同定された。各分類群の主な解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、道管壁の厚さは中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複放射組織とがある。

・ツブラジイ(*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと同複放射組織とがある。

・モッコク(*Ternstroemia gymnanthera* (Wright et Arn.) Bedd.) ツバキ科モッコク属

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2-3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-100細胞高。

4. 考察

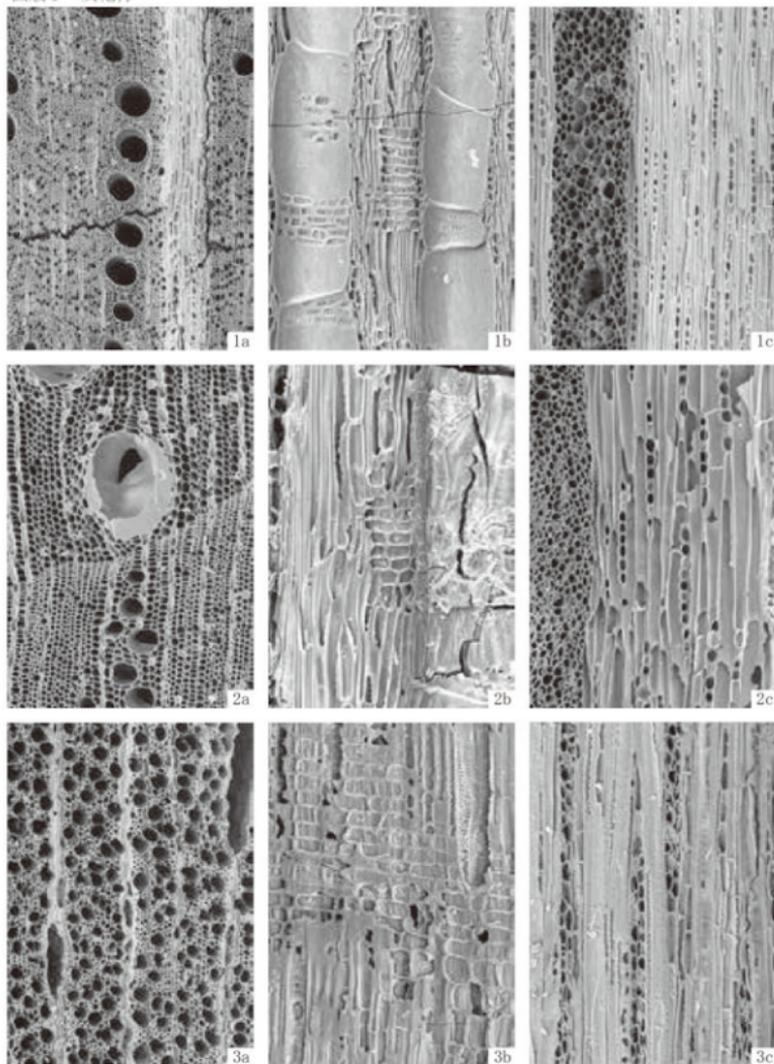
弥生時代後期の住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材は、S I 12 がツブラジイ、S I 65 がモッコク、S I 66 と S I 71 がアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属とツブラジイは、高木となる常緑広葉樹で、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる種を含む。モッコクは、暖温帯性常緑広葉樹林から二次林に生育する常緑中高木である。木材は、いずれも比較的硬重で強度が高いことから、建築部材として適材であり、強度の高い木材を選択・利用していた可能性がある。

本遺跡では、1区・3区の弥生時代後期とされる住居跡から出土した炭化材に常緑広葉樹のアカガシ亜属、シャシヤンボ、常緑または落葉広葉樹のアワブキ属が確認されている。これらの結果から、弥生時代後期の建築部材には、アカガシ亜属を中心に多様な広葉樹材が利用されていたことが推定される。また、弥生時代後期の遺跡周辺は、こうした多様な木材が入手できる環境であったことが推定される。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化材



1. コナラ属アカガシ亜属 (S171; No.1281)
 2. ツブラジイ (S112; No.492)
 3. モッコク (S165; No.912)
- a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

第6章 総括

塔平遺跡の調査4区～6区は九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）の建設工事に伴って発掘調査を行い、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古代、近世以降の遺構・遺物を確認した。

調査4区・5区と調査6区は距離的にかなり離れており、遺構・遺物の内容も異なる部分が多い。したがって、本章第1節で調査4区・5区について、第2節で調査6区について各時代の調査成果を、簡単にではあるが総括としてまとめた。

なお、九州横断自動車道延岡線建設工事に伴い発掘調査を行った調査1区・3区については、既に報告しており（水上編2013）、調査2区については次年度以降に報告される予定である。

第1節 調査4区・5区

旧石器時代

旧石器時代のもとの推定される台形様石器が1点出土している。隣接する調査1区・3区においては、三稜尖頭器2点とナイフ形石器1点が出土している（水上編2013）。また、細石器・スクレイパー・剥片・礫器が、かつて塔平遺跡で表面採集されたと報告されている（野田・濱田編1999）。今回の調査区内で遺構は検出されず、遺物はいずれも古代～縄文時代の遺物包含層から出土したものである。当該期の生活域が周辺に存在した可能性が推測されるが、詳細については、今後の周辺での発掘調査事例を待って検討する必要がある。

縄文時代早期

調査区西側で竪穴7基、集石4基を検出した。調査1区・3区において、竪穴1基、集石4基が調査区東側を中心に検出されている（水上編2013）。

検出した竪穴の焼土は厚く堆積しており、焼土面を明瞭に確認することができた。SK29・33・34やSK27・32のように重複している竪穴も多いことから、同じ竪穴を何度も使用し、かつ同じ場所で何度も作り変えて使用していたものと考えられる。遺構内から出土した遺物は、貝殻痕文をもつ少量の土器片と磨石類であった。これまでの調査事例も参考にして、縄文時代早期の遺構と考えている。

集石遺構は赤く焼けた拳大の円礫や角礫で構成されているが、周辺で炭化物は検出されていない。また、いずれの集石遺構も土坑を伴うものではなかった。本調査区で検出した集石遺構から、遺構の所属時期を特定する遺物の出土はなかった。しかし、調査3区で検出された集石遺構と状況が類似していることから、縄文時代早期の遺構と推測している。

縄文時代後期後半から晩期

調査4区で竪穴建物14軒、埋設土器遺構2基を検出した。調査1区・3区において、竪穴建物13軒、埋設土器遺構4基を検出しており、当該期は塔平遺跡において集落が形成された時期と考えられる。

竪穴建物はいずれも円形もしくは楕円形を呈する。床面で柱穴を検出できるものと検出できなかったものがある。第4章で繰り返し述べているが、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて竪穴建物を検出している。したがって、5区で竪穴建物を検出することができなかったのは、そもそも竪穴建物が深く掘り下げて構築されなかったうえに、5区全域が削平の影響を受けていることによるものと思われる。よって、竪穴建物の数はもっと多かったものと推測している。なお、整理作業の過程で誤認の可能性があるものは本報告からは外している。

遺構内から出土した遺物はそれほど多くはなく、包含層出土遺物として、グリッド名と層位名を付けて取り上げ

た遺物の方が多い。これも前述の理由によるものである。出土した土器群は、黒色磨研土器様式の古閑式もしくは黒川式のものほとんどであった。遺構検出面より上層から出土した土器も黒色磨研土器様式のもの非常に多い。前述のとおり検出状況があまり良好とはいえないため、幅をもたせて、縄文時代後期後半から晩期にかけての集落跡と考えたい。

なお、本遺跡出土の当該期土器の特徴として、組織痕土器の出土が上げられる。組織痕土器は、「縄文時代晩期の九州地方にみられる特徴的な土器」（渡辺 2006）であり、「黒川式では「組織痕土器」と呼ばれる編み布の圧痕が付いた土器がみられる」（宮地 2009）との指摘もされている。調査1区・3区では9点の組織痕土器が報告されており、調査4区・5区からも5点の組織痕土器が出土した。渡辺氏は、熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器を検討するなかで（渡辺 2006）、①「型自体に由来すると考えられている網代の圧痕」、②「型離れ材に由来すると考えられている編みの圧痕」、③「型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕」の3種に分類している。本遺跡報告の計14点の組織痕土器は、①～③に該当する組織痕土器であった。これらの土器については、九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）、九州横断自動車道延岡線の工事に伴う一連の調査報告が揃った段階で再検討したいと考えている。

弥生時代後期

調査4区・5区では竪穴建物33軒、土坑1基を検出した。調査1区・3区においては、竪穴建物27軒を検出している（水上編 2013）。竪穴建物の重複は激しく、調査4区の3箇所ですべて3軒以上の重複関係がみられた。竪穴建物内からは当該期に位置づけられる土器が多く出土しているが、重複が激しいため先後関係の認識も推測される。また調査時の混乱もある。特に、調査4区のS11と重複する竪穴建物群、S12と重複する竪穴建物群、S114と重複する竪穴建物群には、その不安がある。

竪穴建物内からの出土遺物は可能な限り、出土位置の三次元情報を記録し取り上げたが、本報告書にはドットマップを掲載することができていない。しかも、職員の異動に伴い年度ごとに整理担当者が代わっている関係で、遺物の選別を行った者と執筆者が異なる。そのため、検討に不十分どころが多々あることは、第4章でも述べたとおりである。

本項では、調査4区・5区の遺構から出土した当該期の土器群の変遷について検討を行った。複数の竪穴建物からは一括資料と考えられる土器群が出土している。検討を行うに際して、前段の理由から、①重複する他遺構との認識の可能性が低い竪穴建物出土資料とすること、②器種構成にあまり偏りがなく、通時的に認められる器種が出土した竪穴建物出土資料とすること、を前提条件とし検討することとした。本来、重複する遺構から出土した遺物は、時期差を考慮するうえで欠かせないものであるが、ここでは認識の可能性を考慮し、敢えて可能な限り外すこととしている。

検討に際しては、熊本県内における当該期の既存の土器編年案（高谷編 1987、古庄 1989、木崎編 1993・1996、亀田編 2001、宮崎編 2010）を参照した。とりわけ、器種分類と編年案については、塔平遺跡の南西に位置する二子塚遺跡の研究結果（島津ほか編 1992）、編年案については原田範昭氏（原田 1999）及び中里伸明氏（中里編 2009）による研究成果を主に参考としている。

調査4区・5区の土器群の変遷に関する検討結果をまとめたものが第123図になる。

まず、二子塚遺跡の器種分類を参考に、上記の前提条件に基づいて抽出した竪穴建物出土資料を分類した。S18から出土した57～61・63は糞B1に相当、64は甕A?に相当、62は高環Aに相当、65は高環Gに相当するものと捉えた。S14から出土した177～180は糞B1に相当、181は甕A2に相当するものと捉えた。S165から出土した213～215は糞B1に相当、219～222は甕A?に相当、220は甕C1に相当、218は鉢A?に相当、217は鉢C2に相当、216は鉢C5に相当、223は高環Aに相当、224は高環Cに相当、225は高環D

に相当するものと捉えた。S I 71 から出土した 233～236 は甕 B1 に相当、238 は甕 C4 に相当、239 は甕 C7 に相当、237 は鉢 B? に相当、240 は壺 A1 に相当、241 は高環 C に相当、242 は高環 C? に相当するものと捉えた。S I 19 から出土した 89 は甕 B1 に相当、92 は壺 A4 に相当、90 は鉢 B に相当、91 は鉢?、93 は高環 G に相当するものと捉えた。S I 13 から出土した 160・161 は甕 B1 に相当、163 は壺 A4 に相当、162 は鉢? に相当するものと捉えた。

次に、分類した各器種の時期的な組列について、検討を行った。原田氏によれば、甕、壺、高環の3器種は「比較的变化過程の捉え易い」（原田 1999）ものという。そこで、これまでの先学同様に、まずは甕の変異を軸に変遷を考え、次いで壺、高環の順に検討することとした。

甕は「口縁部の長大化、体部の長胴化、脚台部の高脚化、ハケ目調整の簡略化などの方向性をもつ」（原田 1999）とされている。塔平遺跡調査4区・5区出土資料でいえば、S I 8の口縁部が短い甕 B1 (59)、胴部最大径が胴部上位にある甕 B1 (57)、脚台部だけが脚内面の天井部に砂の付着がみられる甕 B1 (60) から、胴部最大径が上位から中位の S I 4の甕 B1 (177～179)、S I 65の甕 B1 (213・214)、S I 71の甕 B1 (233～236) へと変化し、口縁部が直線的に開く S I 19の甕 B1 (89)、S I 13 (S I 70)の体部のハケ目調整が一部省略されタタキの痕跡が認められる甕 B1 (160) や脚台部が高脚化した甕 B1 (161) へと大きく変化して行くものと考えられる。

壺は、単純口縁の S I 65の壺 A (219)、S I 71の壺 A (240) と複合口縁の S I 4の壺 A2 (181)、S I 19の壺 A4 (92)、S I 13の壺 A4 (163)、また底部から胴部しか残存していなかったため口縁部形態の解らない資料が出土している (64・221・222)。複合口縁の壺は「狩尾遺跡群の例で、時間の推移にともない口縁端部が大きくなり、複合口縁の幅を広げるといった変化が指摘され」（原田 1999）という。また、口縁端部に施される刻みも「強い刻み」から「弱々し」（木崎編 1993）いものに変化するという。よって、S I 19の壺 A4 (92) と S I 13の壺 A4 (163) が検討対象となるが、口縁部に大きな変化は認められなかった。壺からは、大きな時間差があるとは言いきれないだろう。

高環は「口縁部内器面の突起が消失した」ものを「後期最古段階のものと考え、甕形土器や壺形土器にもみられる口縁部の長大化により」（原田 1999）形態変化を捉えるとされている。塔平遺跡調査4区・5区出土資料でいえば、同一器種により明確な形態変化が認められる資料は少なく、S I 65の高環 C (224) から S I 71の高環 C (241) へ、S I 65の高環 D (225) から S I 19の高環 D (93) への変化が見えなくもない。しかし、S I 71の高環 C (241) は S I 65との遺構間接合が認められた資料であり、口縁部の変化は小さくなく、組列ありきの変化とも考えられる。したがって、高環だけで大きな時間差を捉えるのは難しいと思われる。

したがって、甕の形態変化を軸に考えた、S I 8→S I 4→S I 65・71→S I 19・13 (S I 70) という変遷は、壺や高環の変遷と照らして順序を変えるような齟齬のあるものではないと思われる。

以上、紙幅の関係で極めて粗雑な検討となってしまった。今回、重弧文土器の検討、S I 12から出土した多量の土器群の検討、調査1区・3区出土土器群との検討、遺構の変遷について検討することができなかった。今後、調査1区～6区までの報告が出揃った段階で、改めて検討すべき課題であると考えている。

古代

調査4区・5区では竪穴建物1軒、掘立柱建物2棟を検出した。調査1区・3区においては、竪穴建物3軒、掘立柱建物6棟を検出している（水上編 2013）。竪穴建物は建物西側にカマドを有するものであり、平面形態は方形を呈し、長軸4m程の規模であった。カマドの位置が異なるが、平面形態や規模は調査1区・3区の竪穴建物と類似している。

計4軒の竪穴建物から出土した遺物は極めて限られており、特に当該期の時期比定の手掛かりとして最も用いら

れる土師器の坏を欠いている。そのため、ここでは、S13から出土した土師器の長胴甕(262)や調査3区のS175から出土した土師器の鉢(356)から考えてみたい。参考としたのは、中里伸明氏による熊本市戸坂遺跡出土土師器の研究結果である(中里編2009)。中里氏は、戸坂遺跡の報告の中で、供膳具の編年観と遺構の先後関係から、供伴する土師器の長胴甕の組列を試みている。結果、①長胴甕は厚手タイプのものから薄手タイプのものへと変化すること、②内面調整のケズリの方向に変化が認められること、③口縁部の開き具合や方向に変化があることを明らかにしている。塔平遺跡竪穴建物出土の土師器の長胴甕や鉢は、胴部の器壁も薄く、口縁部がやや斜め上方に向かって開くものである。したがって、中里氏の研究結果に照らすと、9世紀初頭から中葉までの時期に収まるものと考えられる。

熊本県では、竪穴建物から掘立柱建物に「9世紀前半のうちには移行が完了していた」(網田1997)と考えられており、本遺跡の竪穴建物の時期として、概ね齟齬のないものと思われる。また、包含層出土の長胴甕も9世紀初頭から中葉までの時期の所産と考えられるものである。

掘立柱建物は計8棟検出しているが、竪穴建物以上にその時期比定が難しかった。当該期の竪穴建物との重複関係はなく、出土遺物がほとんどみられないことがその要因である。前述のとおり、本遺跡で確認されたカマドを有する竪穴建物は規模が4m程あり、網田龍生氏により「炊事施設(釜屋)」(網田1997)と考えられる小型竪穴に比べ若干大きいものである。しかし、竪穴建物と掘立柱建物が重複して検出することはなく、同時期に集落を構成していた可能性も推測できる。調査区内から出土する土師器や須恵器は9世紀初頭から中葉までの時期の所産と考えられる。調査1区・3区においても竪穴建物と掘立柱建物には重複関係は認められなかった。

したがって、塔平遺跡は、①竪穴建物に居住していた集落から掘立柱建物へ居住する集落へと移行した2時期以上に区分できる集落(第124図)、もしくは、②やや大きい竪穴建物を炊事施設として利用し、掘立柱建物に居住するという建物構成がなされる集落(第124図)、のどちらかに近い集落景観を復元できるのではないかと推測している。なお、多くの掘立柱建物は同じ軸線上に並んでいる。竪穴建物はカマドの向きを軸と考えると、掘立柱建物と同じ軸線上か、約90度東か西に振れた軸線上に位置している。よって、何らかの規制が働いていた可能性は指摘できるのではないだろうか。

以上、遺構の検出状況と出土した遺物の様相から考えると、塔平遺跡の調査4区・5区には、主に縄文時代後期後半から晩期前半にかけての集落跡、弥生時代後期の集落跡、古代の集落跡が展開するものと考えられる。遺跡周辺の田畑では現在でも耕作が続けられており、地表下に多くの遺構・遺物が残存しているものと思われる。とりわけ、塔平遺跡全体の弥生時代後期の集落跡と古代の集落跡の様相については、今後の周辺での調査事例とこれまでの調査事例を参考に、改めて検討したいと考えている。

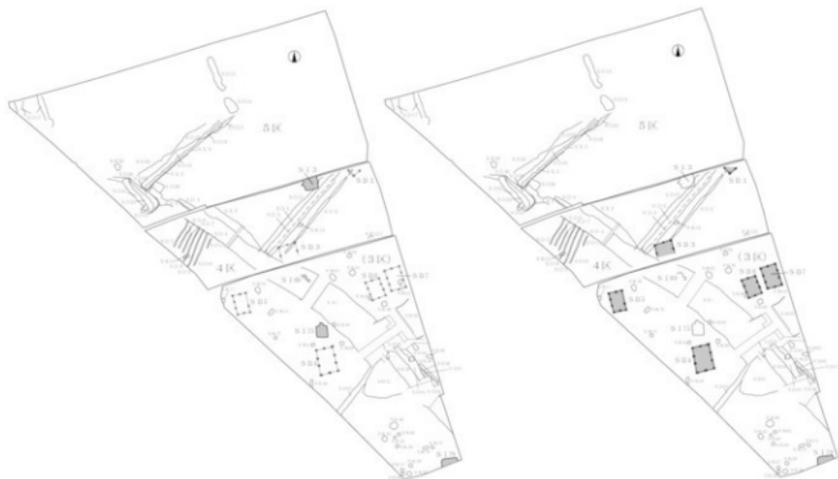
【引用・参考文献】

- 網田龍生編 1993 『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会
 網田龍生編 1999 『池辺寺跡Ⅱ』熊本市教育委員会
 池田朋生編 2001 『石の本遺跡群Ⅲ』熊本県文化財調査報告第194集 熊本県教育委員会
 金田一精・原田範昭編 2006 『江津湖遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会
 亀田 学編 2001 『梅ノ木遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第199集 熊本県教育委員会
 木崎康弘編 1993 『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告第131集 熊本県教育委員会
 木崎康弘編 1996 『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告第159集 熊本県教育委員会
 高津義昭ほか編 1992 『二子塚』熊本県文化財調査報告第117集 熊本県教育委員会
 高谷一生編 1987 『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集 熊本県教育委員会



第123図 ヤマト土器変遷案

① 竪穴建物から掘立柱建物に移行する集落



② 竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落



第124図 古代の遺構変遷案

0 (1:200) 4000

- 中里伸明編 2009 『戸坂遺跡Ⅱ』熊本市教育委員会
- 中里伸明編 2012 『上ノ郷遺跡Ⅰ』熊本市教育委員会
- 中村幸弘編 2002 『石の本遺跡群Ⅴ』熊本県文化財調査報告第205集 熊本県教育委員会
- 野田恒親・濱田彰久編 1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第184集 熊本県教育委員会
- 林田和人・山下宗親編 2004 『扇田遺跡』熊本市教育委員会
- 松本健郎編 1980 『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財調査報告第48集 熊本県教育委員会
- 古森政次編 1994 『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第144集 熊本県教育委員会
- 水上公誠ほか編 2013 『塔平遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第285集 熊本県教育委員会
- 宮崎敬土編 2010 『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告第205集 熊本県教育委員会
- 網田龍生 1994 「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会
- 網田龍生 1994 「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土師の基礎研究』X 日本中世土師研究会
- 網田龍生 1997 「肥後における壑穴住居の終焉」『肥後考古』第10号 肥後考古学会
- 網田龍生 2001 「肥後における須恵器生産の終焉」『中世土師研究論集』中世土師研究会
- 網田龍生 2003 「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究』Ⅳ 龍田考古会
- 網田龍生 2012 「肥後地域の様相」『第61回埋蔵文化財研究集会 集落から見た7世紀』
- 石橋新次 1983 「中九州における古式土師器」『古文化談叢』12
- 泉拓良・山崎純男 1989 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 乙益重隆 1986 「第二節 弥生時代 免田式土器について」『免田町史』第1巻
- 河森一浩 1998 「免田式土器の再検討」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 清田純一 1998 「縄文後・晩期土器考」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 島津義昭 1989 「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 新東兎一 1989 「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 新東兎一 2008 「早期前九州貝殻文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 鈴木道之助 1991 『図録 石器入門事典 縄文』柏書房
- 西健一郎 1987 「重弧文長頸壺」『弥生文化の研究』4 雄山閣
- 野田拓治 1982 「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
- 原田範昭 1999 「中九州における弥生時代後期土器編年」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古会
- 福田匡朗 2012 「白川流域における古墳時代初頭前後の土器編年」『熊本古墳研究』第5号
- 古庄浩明 1989 「中九州における古式土師器の成立」『國學院大學考古学資料館紀要』第5輯
- 帆足俊文 2003 「熊本県の集石遺構とが穴」『九州縄文時代の集石遺構とが穴』九州縄文研究会
- 宮地聡一郎 2008 「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 宮地聡一郎 2008 「凸帯文系土器（九州地方）」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 渡辺誠 2006 「熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器について」『名古屋大学博物館報告』No.22

第2節 調査6区

6区では旧石器時代、縄文時代、古代～中世、近世～近代の遺構、遺物を確認した。各時代の調査成果についてまとめる。

(1) 調査の成果

旧石器時代

4区の台形様石器に加え、6区においても旧石器時代の三稜尖頭器1点の出土を確認した。後者は旧石器相当層位よりも上層からの出土であったため、出土したK5グリッド周辺の掘り下げ及び調査区内に数カ所設定したトレンチ調査を進めるも、石器ブロック等は確認できなかった。唯一成果として挙げられる内容は、塔平遺跡調査1区・3区の資料に加え、旧石器時代遺物資料の点在範囲の広がりを確認することができたことである。また、これまで周知されてきた塔平遺跡での表面採集記録を裏付ける資料となった。

縄文時代

縄文時代早期においては、基本層6a層上面で土坑2基、集石1基を検出した。国土交通省が実施主体の工事区間で調査を行った塔平遺跡1・3区で確認された、配置、遺物に特徴のある遺構、また昭和47年度に調査された、本調査区からほど近い北東に位置する「櫛島遺跡」にみる竪穴、集石群のような遺構の検出も期待したが、上記の3基の遺構の検出で終わった。

土坑に関しては竪穴としては小さいS K 36、6層ブロックを主体とした埋土をもつS K 38と、特徴に差はあるものの、比較するその他の遺構が無く、不明なままである。1つ言えることは、削平の影響は拭えないものの塔平遺跡1区・3区と櫛島遺跡に挟まれた当調査区は、縄文早期の資料が希薄になることである。早期集落の分立を窺わせるものである。

縄文時代後・晩期は6基の竪穴建物跡、土坑、ピット、遺物を検出した。後世の削平の影響を受けてはいるものの、土器や石器（特に石鏃や石斧）が多く出土したことから、塔平遺跡全体の縄文時代後・晩期における集落規模の大きさを示す結果であろう。

古代～中世

3棟の掘立柱建物跡、土坑、ピットを検出した。遺構内から取り上げた遺物資料に乏しく、時期の特定は難しいものの、検出前までの掘り下げの過程で出土したものの、攪乱などから取り上げたもの、古代や中世に関する資料が得られたために「古代～中世」と記すこととした。これまでの塔平遺跡の調査で検出した掘立柱建物跡と同じく、大小差はあるものの、桁、梁の規格構造や方位の意識の仕方などが似ていることが特徴として挙げられる。須恵器の溶着境は蓋の形状から9世紀頃のものと考えられる。近くの生産遺跡としては御船町大字高木字善助山にある古代、中世期の「善助山窯跡」があるが、未発見の窯跡が近くに存在する可能性もある。櫛島系系と思われる中世須恵器片の出土は、その流通範囲（有明海沿岸地域）を反映しているものである。

近世～近代

近世から近代に至るものとして検出した8条の溝は、それぞれの配置関係からそのほとんどが区画溝として利用されていたと考えられる。この溝と、古代～中世のものと考えられる掘立柱建物3棟、敵状遺構及びS D 8との配置関係から、おそらくは古代～中世から近代に至るまで、土地形状、土地利用にあまり差がなかったと思われる。8条全てでは無いにせよ、古代～中世期と同じ方向軸をもった溝の初期段階が存在し、その後土地利用を同じくす

る近世時に踏襲され、大きく掘り返しを受けた結果、初期段階のものは滅失したのではないかと考察する。表土層や溝内から出土した陶磁器類には17世紀前半から18世紀中頃のものが含まれており、おおよそこの時期による溝の掘り返し等が行われたと考えられる。また、図示はしてはいないが溝内において比較的多くの瓦の出土があった。細片や比較的新しいものがほとんどであるが、調査区から南西に位置する益城町大字小池字土山ではかつて、加藤・細川時代において御用瓦である「土山瓦」を造っていた背景もあり、現在においても瓦屋が数軒存在する。近世から現代に至る瓦生産地の特徴を示すものである。

(2) 今後の課題

旧石器時代においては資料の点在こそ確認できている塔平遺跡だが、未だ石器ブロックや炭化物集中部などの遺構は検出されていない。調査範囲外にその痕跡が確認される可能性が高くなったと言える。資料に関しては、細石刃の可能性のある剥片など、「可能性」に留めざるを得ないものが存在するが、今後の周辺調査において塔平遺跡での資料成果が重要となってくるため、大辻遺跡（益城町）、葉山遺跡群（熊本市）のように周辺遺跡での調査資料との比較検討など、情報収集を続けていくことが責務となる。

縄文時代に関しては塔平遺跡の早期、後・晩期の生活範囲の広がりを窺わせる成果が得られ、集落の形成時期を裏付ける根拠としてはさらに十分な資料が加わったと言える。後・晩期は小池台地より北西へ緩やかに傾斜する広範囲において大集落を形成していた可能性がある。

古代から中世では、遺構、それに伴う遺物資料が得られず、不明瞭なままの成果と言わざるをえない。しかし、古代は9世紀から10世紀時のものと考えられる竪穴建物跡や掘立柱建物跡、遺物が調査1・3・4・5区より検出されているが、中世の遺物はごく少量で遺構にあっては皆無に近い。比べて6区は遺構こそ不明確であるが、中世須恵器の存在などが明らかになった。このことから、塔平遺跡の北西寄りには中世の遺構が確認される可能性が高いのではないかと考えられる。掘立柱建物跡周囲に検出、不明遺構として取り上げた樹痕跡については、「生垣」の可能性を示唆するに留めたが、同様の報告や関連資料などから再検討したい。

近世以降では耕作地としての利用が明白であり、その区画溝が多く検出されるのはこれまでと変わらない。しかし、今回の調査で古代～中世期の溝を踏襲して利用する可能性が確認されたことから、これまでの調査で確認された溝内からの遺物や検出遺構時期などの再検証が必要であろう。

平成24年度に調査2区（整理作業中）の調査が行われた。本報告にまとめる成果と、課題を活かした作業と報告ができるよう研鑽と助力をしたい。また、各時代の遺構、遺物ともに今回の調査資料に加え、今後の周辺での調査事例の増加を待ち、改めて検討する機会を得たい。

【引用・参考文献】

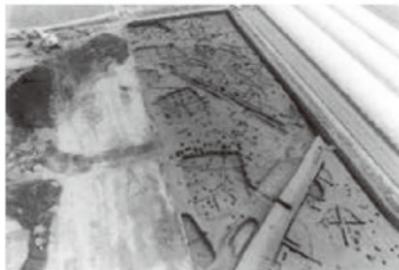
- 堤英介・上高原聡編 2010『小柳遺跡』益城町文化財調査報告第21集 益城町教育委員会
 堤英介編 2013『大辻遺跡』益城町文化財調査報告第22集 益城町教育委員会
 橋口剛土編 2010『秋只山下遺跡』御船町文化財調査報告第1集 御船町教育委員会
 橋口剛土編 2012『辺田見中道遺跡』御船町文化財調査報告第2集 御船町教育委員会
 橋口剛土編 2013『辺田見中道遺跡2』御船町文化財調査報告第3集 御船町教育委員会
 芝康次郎・小畑弘己編 2007『阿蘇における旧石器文化の研究』熊本大学文学部考古学研究室研究報告第2集
 熊本大学文学部考古学研究室
 島津義昭ほか編 1992『二子塚』熊本県文化財調査報告第117集 熊本県教育委員会
 野田恒視・濱田彰久編 1999『古関北遺跡』熊本県文化財調査報告第184集 熊本県教育委員会
 野田恒視・濱田彰久編 1999『古関北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告第175集 熊本県教育委員会

- 坂井田端志郎ほか編 2010 『山下遺跡』熊本県文化財調査報告第260集 熊本県教育委員会
麻生優・加藤晋平・藤本強編 『日本の旧石器文化3 遺跡と遺物(下)』
麻生優・加藤晋平・藤本強編 『日本の旧石器文化5 旧石器文化の研究法』
高谷和生・江本直編 1983 『曲野遺跡I』熊本県文化財調査報告第61集 熊本県教育委員会
松本健郎・野田拓治ほか編 1983 『上の原遺跡I』熊本県文化財調査報告第58集 熊本県教育委員会
江本直編 1986 『熊本県旧石器時代調査報告書』熊本県文化財調査報告第81集 熊本県教育委員会
宮坂孝宏編 1994 『白鳥平B遺跡』熊本県文化財調査報告第142集 熊本県教育委員会
古森政次編 1999 『潮山・クノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第179集 熊本県教育委員会
稲葉一文・橋口剛士ほか編 2010 『瀬田池ノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第252集 熊本県教育委員会
小林達雄・小川忠博 1989 『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』
小林達雄・小川忠博 1989 『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』
渡辺誠 1991 『組織痕土器研究の諸問題』『交流の考古学』三島格会長古稀記念号
緒方勉・高木正文編 1975 『久保遺跡—観音堂・柳島遺跡—』熊本県文化財調査報告第18集 熊本県教育委員会
隈昭志編 1980 『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告第47集 熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編 1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第184集 熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編 1999 『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告第175集 熊本県教育委員会
出合宏光 2000 『九州南部における平安時代の土器・陶磁器』『中近世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会
美濃口雅朗 1997 『榊番城窯跡の中世須恵器(1)』『肥後考古第10号』
美濃口雅朗 2007 『榊番城(熊本県)』『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 補遺編』
大宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編一』
加藤唐九郎編 『原色陶器大辞典』
矢部良明ほか編 『角川 日本陶磁大辞典』
荒尾市 2012 『荒尾市史 通史編』
益城町 1990 『益城町史 通史編』
益城町 1990 『益城町史 資料・民俗編』
文化庁編 2010 『発掘調査のてびき』
水上公誠ほか編 2013 『塔平遺跡1』熊本県文化財調査報告第285集 熊本県教育委員会

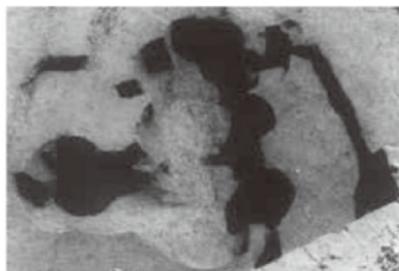
写真図版



4区3層完掘状況



4区4層完掘状況



5区S K 27完掘状況



5区S K 29完掘状況



5区S K 33完掘状況



5区S K 34完掘状況



5区S K 35完掘状況



5区S K 124完掘状況



4区S Y 1 检出状况



4区S Y 2 检出状况



5区S Y 3 检出状况



5区S Y 4 检出状况



4区S I 24 完掘状况



4区S I 25 完掘状况



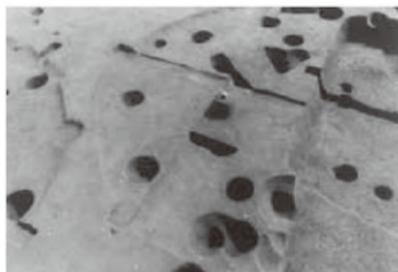
4区S I 32 遗物出土状况



4区S I 34 完掘状况



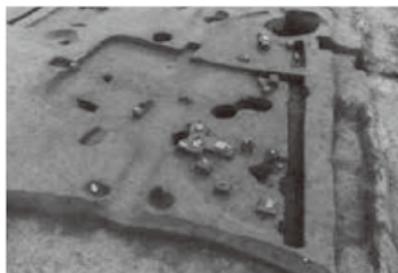
4区S1 40・52完掘状況



4区S1 43完掘状況



4区S1 44完掘状況



4区S1 45完掘状況



4区S1 47完掘状況



4区S1 1完掘状況



4区S1 9遺物出土状況



4区S1 15完掘状況



4区 S I 8完掘状况



4区 S I 16・28完掘状况



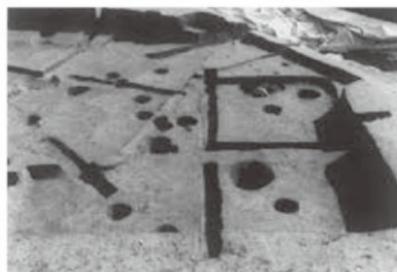
4区 S I 2完掘状况



4区 S I 7完掘状况



4区 S I 18完掘状况



4区 S I 19完掘状况



4区 S I 20完掘状况



4区 S I 38完掘状况



4区 S I 5 完掘状况



4区 S I 10 完掘状况



4区 S I 6 完掘状况



4区 S I 12 遺物出土状况



5区 S I 70 (4区 S I 13) 遺物出土状况



4区 S I 14 遺物出土状况



5区 S I 65 遺物出土状况



5区 S I 65 完掘状况



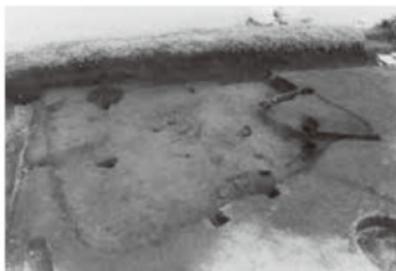
5区S I 66 遗物出土状况



5区S I 66 完掘状况



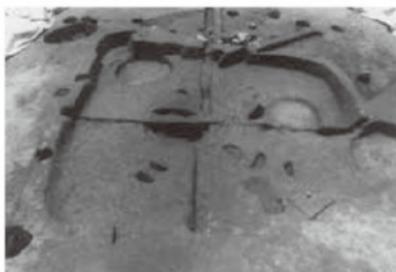
5区S I 71 遗物出土状况



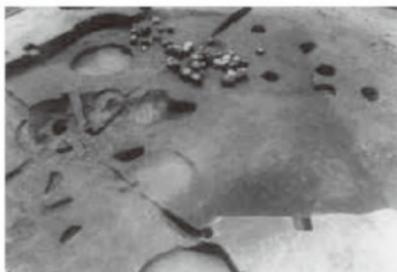
5区S I 71 完掘状况



5区S I 72 遗物出土状况



5区S I 72 完掘状况



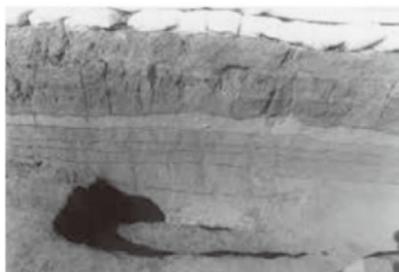
5区S I 73 遗物出土状况



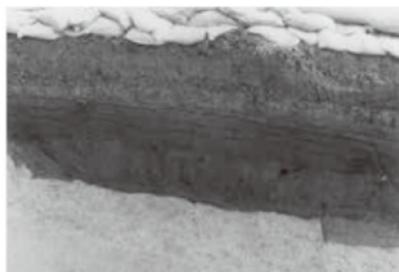
5区S I 73 完掘状况



6区土層断面 A-A'



6区土層断面 B-B'



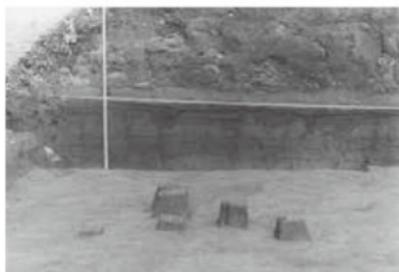
6区土層断面 C-C'



6区5層下 三稜尖頭器出土状況



6区5層下 石核出土状況



6区6a~5層遺物出土層位確認状況



6区5層下 スクレイパー出土状況



6区5層下 石核出土状況



6区SY1土层断面状况



6区SY1检出状况



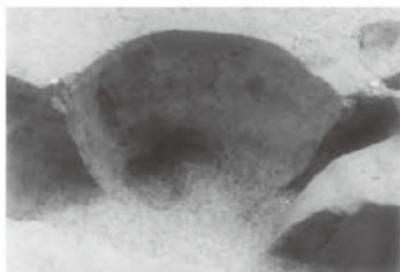
6区SK36土层断面状况



6区SK36完掘状况



6区SK38土层断面状况



6区SK38完掘状况



6区S11·2·3完掘状况1 (南西→)



6区S11·2·3完掘状况2 (西→)



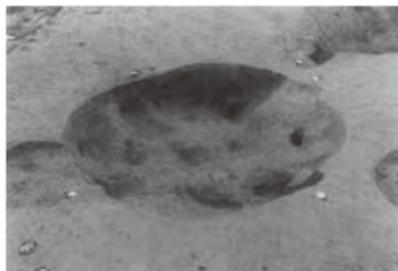
6区S I 4·5·6完掘状况



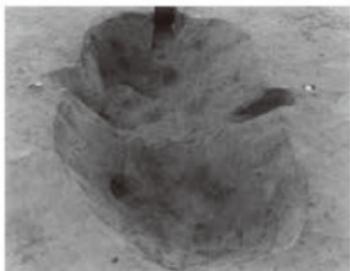
6区S K 8完掘状况



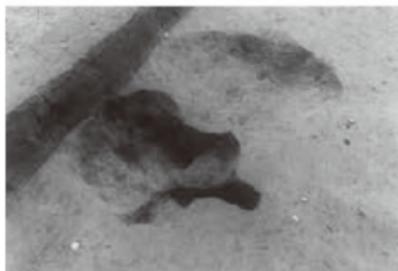
6区S K 13完掘状况



6区S K 15完掘状况



6区S K 16完掘状况



6区S K 17·18完掘状况



6区S K 19完掘状况



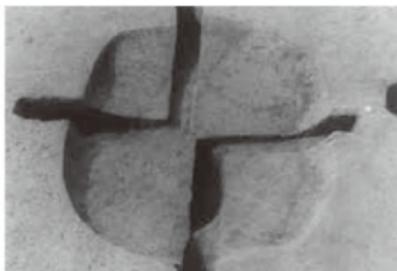
6区S K 20完掘状况



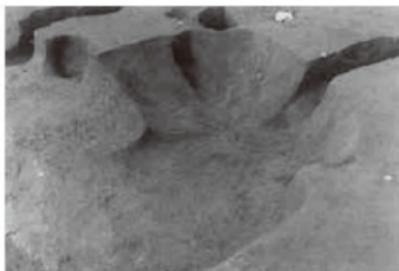
6区 S K 21·22·23 完掘状况



6区 S K 24 完掘状况



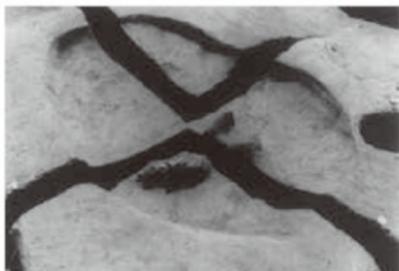
6区 S K 26 完掘状况



6区 S K 27 完掘状况



6区 S K 28 土层断面状况



6区 S K 29 炭化物检出状况



6区 S K 29 完掘状况



6区 S K 33 完掘状况



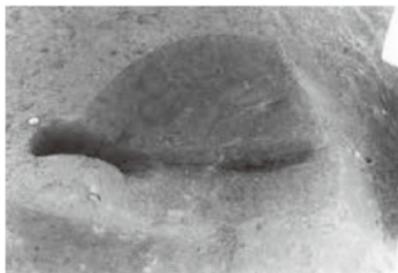
6区S K 34 遺物出土状況



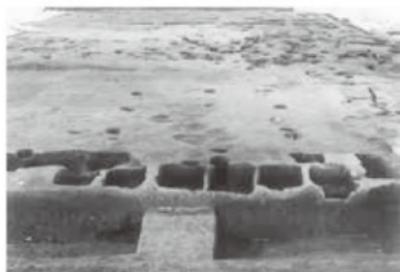
6区S K 34 完掘状況



6区S K 35 完掘状況



6区S K 37 完掘状況



6区S B 1 完掘状況



6区S B 2 完掘状況



6区S B 3 ピット半掘状況



6区掘立柱建物跡配置状況(東→)



6区S K 1完掘状况



6区S K 2完掘状况



6区S K 7完掘状况



6区S K 25完掘状况



6区S D 8完掘状况



6区畝状遺構完掘状况



6区S D 1完掘状况



6区S D 2完掘状况



6区SD3完掘状况



6区SD4・5・6完掘状况



6区SD7完掘状况



6区SD9完掘状况



6区完掘状况1 (南→)



6区完掘状况2 (南→)



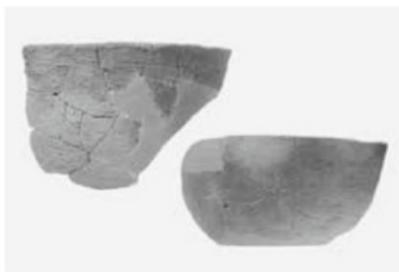
6区完掘状况3 (南東→)



6区完掘状况4 (北西→)



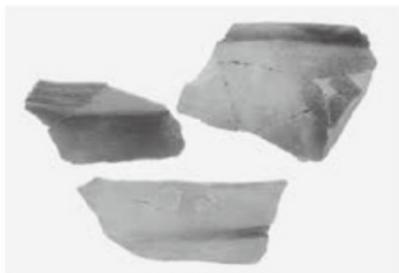
4区 S I 25 出土土器



4区 S I 25 出土土器



4区 S K 22 埋設土器



4区 S X 4 出土土器



4・5区出土 縄文土器（早期）



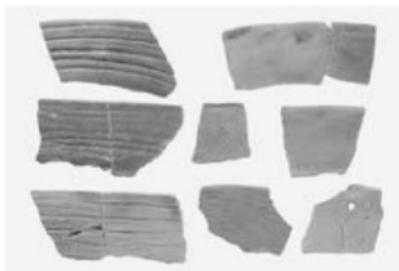
4区出土 縄文土器 方形浅鉢(外)



4区出土 縄文土器 方形浅鉢(内)



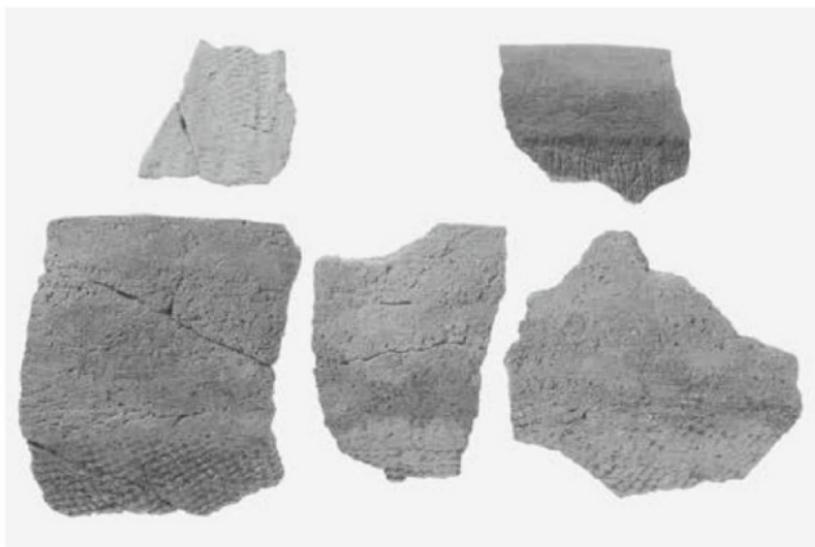
4・5区出土 縄文土器 浅鉢



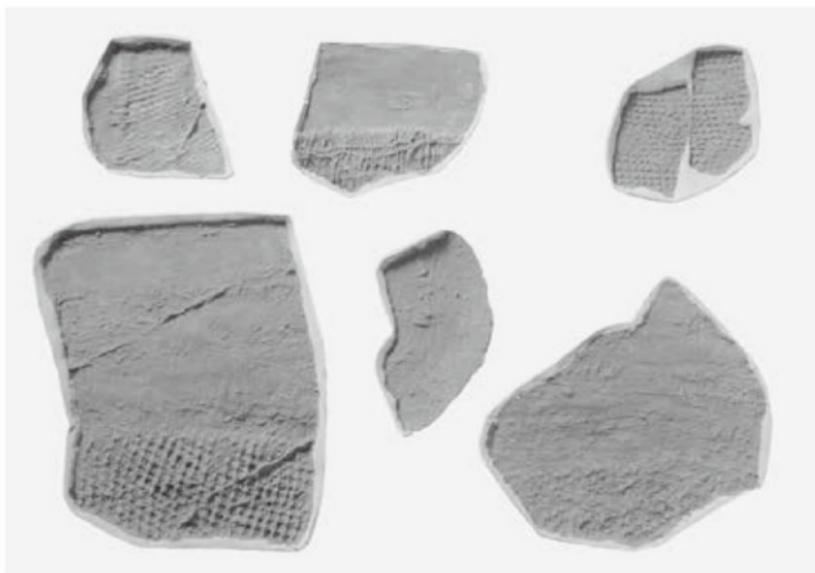
4・5区出土 縄文土器 深鉢



4・5区出土 縄文土器 深鉢



4・5区出土 縄文土器 組織痕



4・5・6区出土 縄文土器 組織痕モデリング



4区S115出土土器



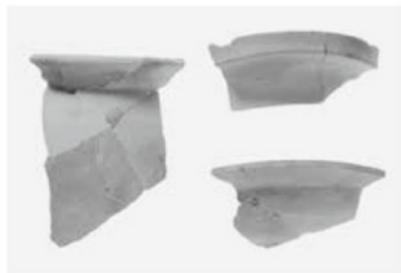
4区S118出土土器



4区S118出土土器



4区S118出土土器



4区S119出土土器



4区S I 19出土土器



4区S I 10出土土器



4区S I 16出土土器



4区S I 16出土土器



4区S I 12出土土器 甕



4区S 1 12出土土器 鉢



4区S 1 12出土土器 甕



4区S112出土土器 甗



4区S112出土土器 高环



4区S 1 12 出土土器



4区S 1 12 出土土器



4区S 1 14 出土土器



4区S 1 14 出土土器



4・5区S 1 13・70 出土土器



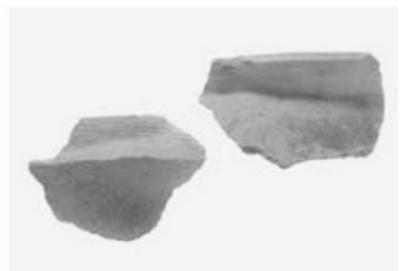
4·5区S I 37 出土土器



4·5区S I 37 出土土器



4·5区S I 37 出土土器



4区S I 4 出土土器



4区S I 4 出土土器



5区S165出土器



5区S165出土器



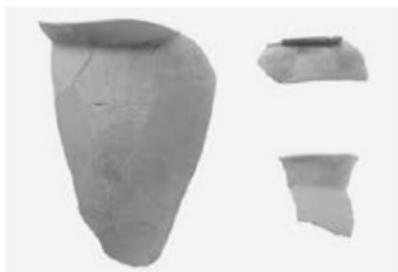
5区S165出土器



5区S165出土器



5区S165出土器



5区S171出土器



5区S171出土器



5区S171出土器



5区S171出土土器



5区S172・73出土土器



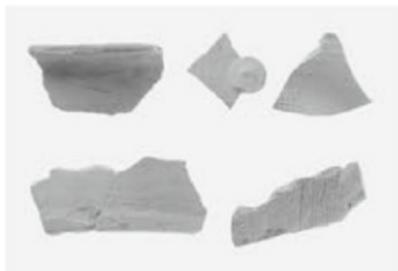
5区S I 72 出土土器



5区S I 72・73 出土土器



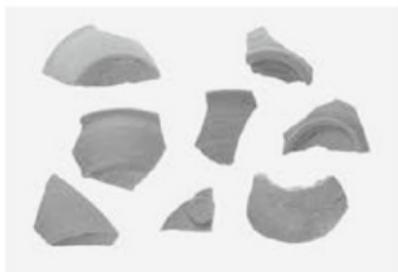
5区S K 24 出土土器



4・5区P i t 出土土器



4・5区出土土器



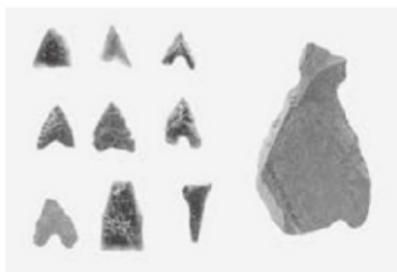
4・5区出土 須恵器



4区出土 土器器 把手



4区出土 須恵器 (溶着)



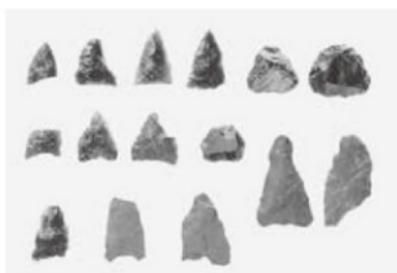
4・5区S1出土石器 石鏃など



4・5区SD・Pit出土石器 石鏃



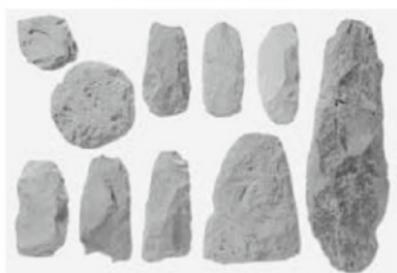
4・5区遺構外出土石器 異形石器など



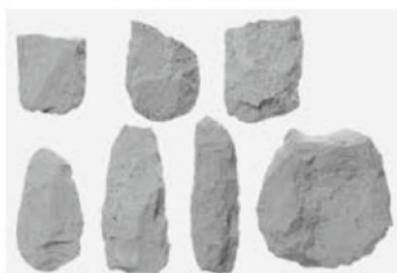
4・5区出土石器 石鏃1



4・5区出土石器 石鏃2



4区S1出土石器 打製石斧



4・5区S1出土石器 打製石斧



4区S1出土石器 磨製石斧



4・5区S1出土石器 磨製石斧



4・5区SD・Pit出土石器 石斧



4・5区出土石器 打製石斧1



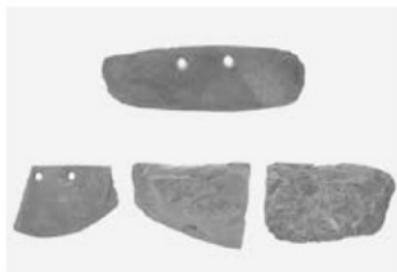
4・5区出土石器 打製石斧2



4・5区出土石器 磨製石斧



4・5区出土石器 スクレイパー



4・5区出土石器 石庖丁



4・5区出土 玉類



4区出土 耳環



6区S11·4·5出土石器 磨·敲石、砥石



6区S16出土石器 石斧



6区SK34出土 縄文土器 深鉢



6区SB2-P4出土 黑色土器 椀



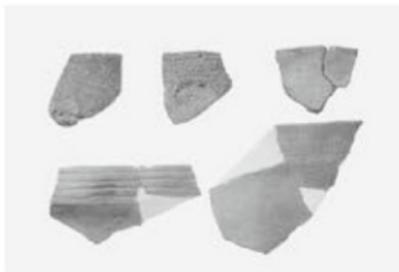
6区SX4出土 土師器 环



6区敛状遺構出土 中世須恵器 捏鉢



6区出土 縄文土器 阿高式



6区出土 縄文土器 深鉢



6区出土 縄文土器 浅鉢



6区出土 縄文土器 組織痕



6区SD1出土 土師器 把手



6区出土 須恵器 椀



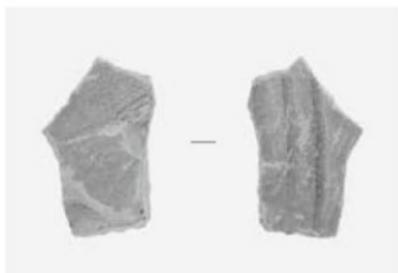
6区SD9出土 須恵器 (溶着)



6区SD9出土 須恵器 (溶着)



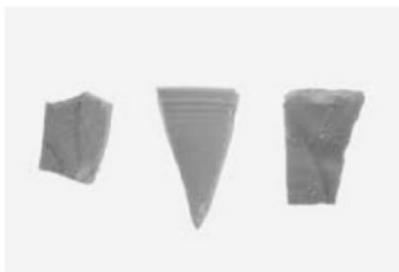
6区SD4・7出土 須恵器



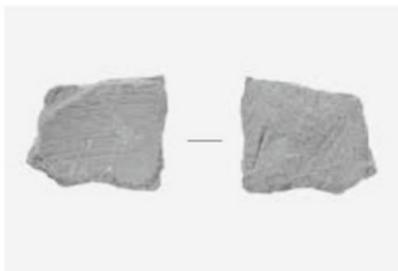
6区出土 青磁 碗



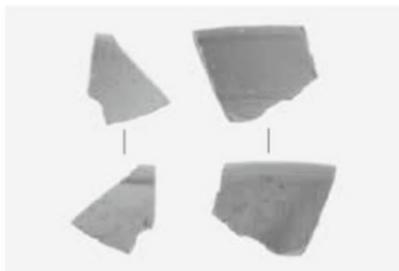
6区SD1出土 青磁 碗



6区出土 青磁 碗



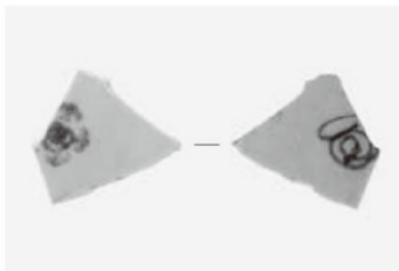
6区SD9出土 中世須惠器 钵



6区出土 白磁



6区SD1・9出土 陶器 皿



6区SD1出土 染付 皿



6区SD1出土 染付 皿



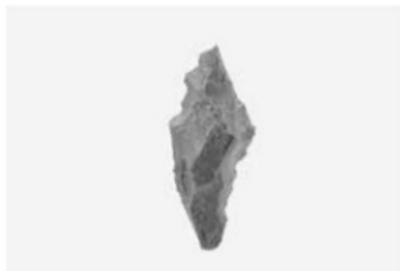
6区SD1出土 染付 碗



6区出土 染付 碗 (筒形)



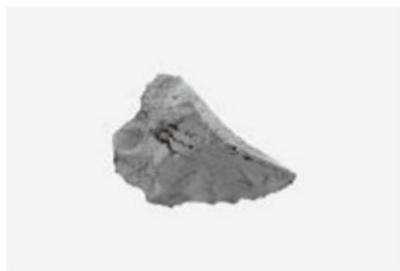
6区SD1出土 陶器 碗



6区5層下出土石器 三稜尖頭器



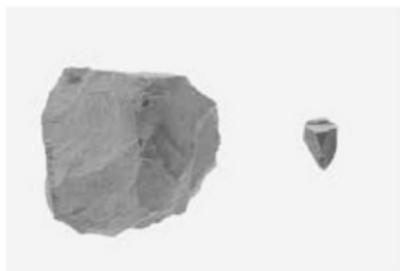
6区出土 使用痕をもつ剥片



6区5層下出土石器 スクレイバー



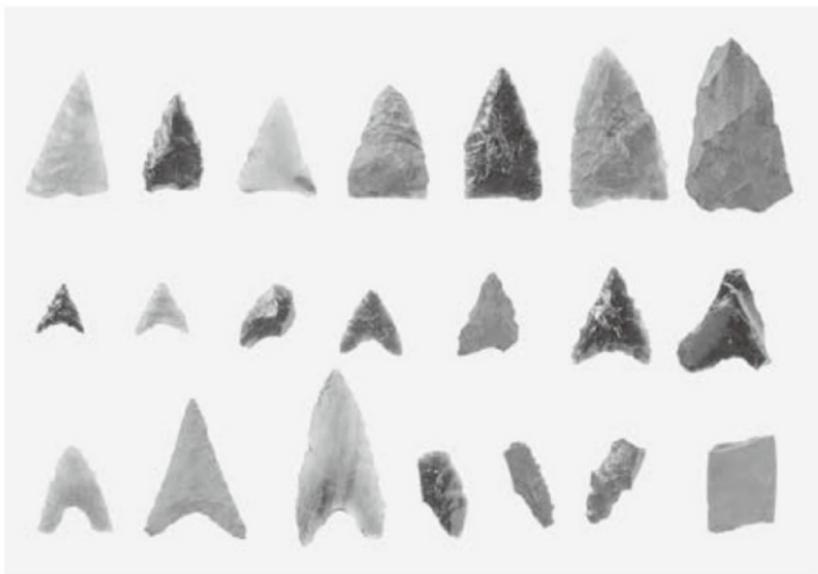
6区5層出土石器



6区6a層出土 石核



6区5層下出土 石核



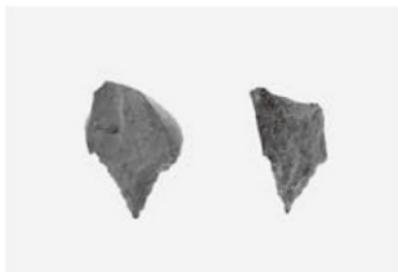
6区出土石器 石镞



6区出土石器 石斧



6区SD1出土石器 打製石斧



6区5層出土石器 石錘



6区出土石器 石匙



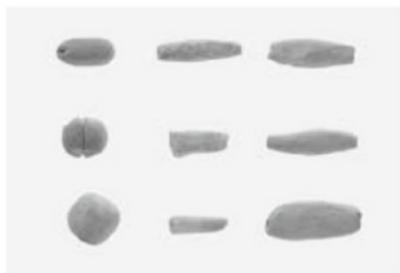
6区SD1出土石器 砥石



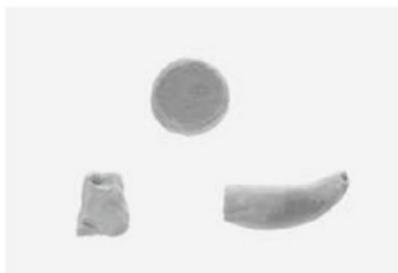
6区SD2出土 碓



6区出土 碓石



4・5・6区出土 土錘 (写真のみ)



6区出土 土製品 (写真のみ)



4·5·6区出土铁器 铁镞·刀子·棒状铁器



3区出土铁器 袋状铁斧（表）



3区出土铁器 袋状铁斧（背）

あとがき

塔平遺跡2の発掘調査報告書が完成しました。

発掘調査から整理報告書作成にあたって、たいへん多くの方々にご指導、ご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

今回の調査区におきましても、埋蔵文化財の調査、整理をとおして、多くの感動、発見がありました。このような素晴らしい遺跡を調査させていただいたことを本当に光栄に思いました。

調査から数年を経て、この調査の成果の一部をようやく報告書にすることができました。本報告書が、歴史を探るための基礎資料として埋蔵文化財に対する理解と保護のために、地域で活用されれば幸いです。

最後に本文中で触れることができなかった実際の作業に携われた方々の名前を記して、感謝の意を表したいと思います。

発掘調査

石永光恵	井手春代	上村久子	緒方範子	長船信一	押方富江	神谷守	神山一
河北ツユ子	川元恵子	桑波恵介	古林喜久江	境百合子	佐々木謙吉	椎葉仁美	庄司修三
田島弘子	津崎次博	寺本眞富	永井健一	中村保	西坂宗一郎	西坂知祐	橋本恭代
長谷川亜紀	東孟伸	平尾直孝	福島志津夫	福島ヨシ子	福永美鈴	藤原英敏	堀部和憲
本田チヅ子	本田睦男	前田日出男	松井昭子	松岡洋	松下まち子	松本鐵郎	宮本美樹
村上シナ子	村上親敏	森上涉	森川恵津子	守永美紀子	森永ミドリ	山下民生	山下ルミ
山本遵	吉住妙子	吉住徹明	和田洋一	渡邊由佳利			

整理報告書作成

上田佳奈子	大川好美	小原有子	金川希	河津洋伶	木村美和子	木村ゆり子
中島ひろみ	仲原加代子	中村公光子	西坂和美	蓮池千恵	村田百合子	山内洋子

(以上、敬称略・五十音順)

報告書抄録								
ふりがな	とうのひらいせき							
書名	塔平遺跡2							
副書名	九州縦貫自動車道嘉島JCT(仮称)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第302集							
編著者名	佐藤哲朗、坂井田端志郎、穴上公誠、坂井田亜耶							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号 TEL096-383-1111 (代)							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘 期間	調査面積 ㎡	発掘 原因
		市町村	遺跡 番号					
塔平遺跡	熊本県 上益城郡 益城町 大字小池	443	045	32° 75' 13"	130° 79' 72"	20081027 ～ 20090521	4区 1,095㎡	記録 保存 調査
	大字小池 字老平			32° 75' 15"	130° 79' 70"	20090422 ～ 20090827	5区 2,925㎡	
	大字島田 字小遠原			32° 75' 27"	130° 79' 27"	20100428 ～ 20100930	6区 4,150㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記 事項
塔平遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代		竪穴建物跡 竪立柱建物跡 土坑 伊穴 小穴 溝状遺構		旧石器 縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 瓦 鉄器 石器		
要約	<p>塔平遺跡の当該調査区は九州縦貫自動車道嘉島JCT(仮称)建設工事に伴い記録保存を目的として発掘調査された遺跡である。当該調査区における主な成果を挙げる。</p> <p>旧石器時代は台形様石器、三稜尖頭器が各1点出土した。縄文時代は早期の加穴、集石を検出した。後・晩期は竪穴建物跡が20軒、埋設土器遺構1基などを検出し、弥生期においても後期の竪穴建物跡を33軒検出するとともに多量の上器資料の出土など、塔平1で集落の形成時期と考察した根拠をさらに裏付ける資料を得る結果となった。古代は竪穴建物跡1軒、竪立柱建物跡5棟を検出し、竪立柱建物への移行期とされる9世紀初頭から9世紀中葉のものと考えられる。</p>							

2014年3月31日 印刷

2014年3月31日 発行

熊本県文化財調査報告第302集

塔平遺跡2

－九州縦貫自動車道嘉島JCT（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

著作権所有 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

発行者 熊本県教育委員会

印刷者 熊本市中央区上水前寺2丁目16番16号

シモダ印刷株式会社 熊本支店

発行者 : 熊本県教育委員会
所属 : 教育総務局文化課
発行年度 : 平成25年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 302 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 塔平遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日